岩 波 文 庫

33-311-1

碧巖錄

岩 波 書 店

解　説

入矢義高

『碧巌録』という書物の成り立ちと、その性格についての書誌的な説明は、また別に提供される「解題」に譲って、ここでは、今回の新しい読みと注による改訂版を編むに当たって、どのような点に意を用いたかということを中心にして述べてみたい。

ひとくちで言えば、『碧巌録』は禅の教科書である。そして、このような教本が作られることになったわけは、それの需要者が増大したからであった。すでに唐代の中ごろから、主として南方の各地に成立した禅の教団は、それぞれに多くの修行者を擁して独自の教線を張り、しかも相互の交流と拮抗も極めて活潑となっていった。なかには常時千人をも超える修行者を擁した大教団もあり、どれもみなその地の有力な庇護者による経済的な支援をも得ていた。

次の五代の争乱期を経て宋代になると、禅への関心は官僚を中心とした一般の知識人にも広まって、みずから「居士（こじ）」と称する在俗の信奉者も増えるようになった。このような受容者の増大が、禅の実践者たると否とを問わず、このような「教科書」形式のモデルを必要とすることとなったわけである。

『碧巌録』の原本である『雪竇頌古』の著者・雪竇重顕(九八〇－一〇五二)は、たぐい稀な説法の練達者であった。長年にわたる綿密な修行もさりながら、おそらく独学で身につけたと思われるその文学的素養は、当時の禅者の群を抜いて豊潤であり、彼が多くの有力な官僚や学者たちから篤い信奉を得たのも、一つにはそのためであったろうと思われる。晩年の彼の門下には千五百人の修行者が集まったという。

『雪竇頌古』百則は、唐代の主要な禅師の言行百条を選んで、その一つ一つに詩の形式を用いて加えた賛である。範とすべき古人の言行を、禅では「古則」という。それは古人それぞれの全人格が投入された体験の軌跡である。後世の修行者は、それをまず律義に追体験することが求められる。しかし同時に、その実践を通じて、自らの体得を確認(自内証)するに至らねばならない。「自らの」とは、教師を一義的に既存の完成者として据えるのではなくて、時には自らを軸として価値転換をも行い得ることである。ではなぜ、雪竇はそこに「頌」という詩の形式を応用したのであろうか。

古人が開示した悟境は各人各様であって、決して或る一定の究極の消息に帰一できるものではない。それぞれの悟境は、それぞれにその人ならではの独自な個性に裏打ちされて表明されたものばかりである。しかもその表白のしかたは、明示的であることを嫌って暗示的であることが多く、しばしば屈折した隠喩を含ませた表現を借りる。言詮を超えた消息を、沈黙によっ

てでなく、ほかならぬ言語によって表明しようとすれば、けっきょくはこのような詩的シンボリズムを用いるほかはあるまい。すでに中唐のころから、禅の問答さえも、いきなり詩の句で応酬されることが多くなったし、あるいは寒山などの詩人の句が好んで利用されたりもした。一方また、詩の巧みな「詩僧」と呼ばれる禅僧たちの作品が、一般の詩壇で新たな脚光を浴びるようになったり、「詩禅一致」的な詩観が芽生えはじめたりするほどであった。唐末の代表的な詩人鄭谷（ていこく）の詩に、

詩無僧字格還卑　（詩に僧の字無きは格還（かえ）って卑（ひく）し）

というのは、禅僧が登場しない詩は卑俗な格調に流れ易いというのであって、この時期における詩と禅の、一見奇妙とも思われるほどの習合ぶりを窺うに足る。

雪竇の「頌古」は、もちろんこれだけで独立した文学作品を形成しているのではなく、「古則」を支えとし、または相手に取った、いわば模範解答的な彼の提案なのであるが、しかしわれわれはそれらをすべて正解として受け取る必要はない。のみならず、彼の「頌古」には、内容と修辞の両面から見て、ともに成功しているものと、そうでないものとがあって、心ある読者はそこを見分けることができるはずである。その語りくちにしても、濃密に詩的潤色を施したものや、むしろ散文的なほどに明晰で断乎たる調子のものなど、さまざまなスタイルを使い分けているから、読者のがわとしても、そこを味わい分けるだけの文学的感性をためされるこ

とになる。

第二則に圜悟が付けた「評唱」に、雪竇の頌の末句「揀択と明白と君自ら看よ」を踏まえて、百丈の「一切の語言と山河大地を、一一転じて自己に帰す」という発言を引いた上で、こう言う、

雪竇は凡是そ一拈一掇するに、末後に到っては須ず自己に帰す。

雪竇は古則をひねくってさまざまに吟味してはいるが、最後は必ず彼自身に回帰させているのだ、という見かたである。これは当たっている。雪竇は決して公式的な模範答案を提出しているのではなく、彼みずからの「自己」の見地で古則を裁断して見せているのである。従って読者のがわも、みずからの「自己に帰して」雪竇の頌を読むことが要請されることになるはずである。

この頌と本則には、ほとんど一句ごとに著語という寸評が付けられている。圜悟克勤(一〇六三―一一三五)が付けたものである。著語というものは、本来は本人の独自な見識を凝縮した形で表明するものであって、しばしば本題の内容にまで斬り込んで鋭い批判を突きつけ、時には本題の趣旨を逆転させようとさえする。雪竇みずからも本則のなかで時々それを試みている。いわば教科書スタイルから匂い出しかねない教条性を自ら破って見せ、また同時に、受講

生たちが陥りがちな受け身の姿勢を砕き去るのである。しかし圜悟の加えた著語には、読まれる通り、順逆・緩急にムラが多く、なかには単なる揚げ足とりか冷やかしだけに終わっていることの明らかな例も、すこぶる多い。もちろん啓発される面もあって、しばしば視点の転換を誘われることは有益ではあるが、総じて言えば、〈正〉に対してすぐ〈反〉を持ち出すという図式の多用は、すこぶる読む者の感興を殺ぐ。初めからこの著語は飛ばして、まず本則と頌の本文だけをじっくり読むという方法を取ることもあってよい。そのあとで、おもむろに著語に立ち返れば、また新たな示唆に恵まれることもあり得よう。

最後に、やはり圜悟による「評唱」が掲げられる。雪竇によって敷かれた路線に則りながら、本則と頌について、さらに詳しく立ち入った講釈を提供する。もし本則と頌を教科書の本体とするなら、これはそれのための「指導参考資料」的なものに相当する。とは言っても、その解説するところに依って本文を理解すればよいということには必ずしもならない。はっきり言って、出来不出来のムラが相当なものだからである。読者は自らの見識によって適宜に斟酌しながら読むことが必要である。例えば、この「評唱」の解説内容が、前掲の本則と頌の著語にいうところと整合しない場合が極めて多いが、それを強いて整合させながら読むべきか、または最初から気にしないで読むことにするか。また、いささか衒学的な冗舌も少なくないが、それも本人が楽しみながらのおしゃべりだから、こちらも楽しみながら付き合うことにするか、または飛ばして相手にせぬことにするか。ここは読者の自主的な選択に任せればよい。

圜悟はすべてを語り尽くそうとしているわけではない。言詮の及ばぬ消息を言葉で語ることの怖ろしさを、彼は十分に心得ていたはずである。しかしまた、そこを巧みに回避するだけで事は済むものではないことも、彼はやはりわきまえていたはずである。この痛切なディレンマは、われわれも彼とともに共有するものである。「ここを解ろうと思うなら、あと三十年参究せよ」などと突き放すことで事を済ませるのでない限り、われわれはこのディレンマに自ら苦しみ続けることになるだろう。そして、まさにそのことこそが一番大切なことではなかろうか。

解題

溝口雄三

『碧巌録』は、北宋初期の雪竇重顕(九八〇―一〇五二)の編著である『雪竇頌古』中の本則と頌に対し、北宋晩期の圜悟克勤(一〇六三―一一三五)が垂示・著語および評唱を附したものである。

『雪竇頌古』というのは、雪竇が『伝灯録』や『雲門広録』『趙州録』などの禅録の中から、古則とか公案とよばれる古人の問答百則を、彼の見識によってえらびだし、それに韻文のコメントをつけたもので、前者がつまり本則、後者が頌である。本書で各則ごとに【本則】【頌】としてそれぞれあげてあるのがそれである。【本則】のすぐあとに「挙す(提示する)」とあるのは、たとえば第一則でいえば、「梁の武帝、達磨大師に問う」以下の問答を「提示する」ということである。

一方、各則の冒頭の垂示は、圜悟が雪竇の提示した本則と頌の内容をふまえながら、あらかじめ彼一流の問題提起を試みたもので、語句の密度の濃さに、彼のとぎすまされた精神といったものが感じとられる。ただしこの垂示は全則にあるというわけではない。

本則と頌のあとにつけられた『評唱』はそれぞれに対する圜悟の解説また論評であり、垂示とはちがい、時にはくどいと思われるほどに懇切である。

これに対し、本則と頌の句間に挿入された〔　〕内の圜悟の著語つまり短評は、時には句意にそって句意を衍義し、時にはかくれた句意をひきだし、あるいは第三の句意を開示しようと試みるなど、雪竇の世界に圜悟がぶつかろうとするそのところに、調和と反調和の機妙と緊張がかもしだされているかにみえる。

もっとも、以上のような圜悟の介入のために『雪竇頌古』の世界が攪乱されたとの感なしとしないが、さいわい入矢義高先生らの口語訳と注つきの『雪竇頌古』(筑摩書房、一九八一年)があるので、あわせてお読みになることをおすすめしておきたい。

雪竇重顕は、字が隠之、俗姓は李氏で、四川省の遂州(潼川府遂寧県)の生まれである。二十歳代のはじめに出家し、各地で修行を重ね、四十歳をすぎてから浙江省の雪竇山に住みつくようになり、これにより雪竇和尚と呼ばれるようになった。彼には『洞庭語録』『雪竇開堂録』『瀑泉集』『祖英集』『頌古集』『拈古集』『雪竇後録』の七集があり、このうちの『頌古集』(『雪竇顕和尚明覚大師頌古集』)がつまりここにいう『雪竇頌古』で、これにより彼の名は高められた。

圜悟克勤は、字が無著、俗姓は駱氏で、雪竇と同じく四川省の人で、成都の近くの崇寧(彭県崇寧)の生まれである。生家は世々儒を業としていたが、若くして出家し、やがて禅門に入

った。彼が『雪竇頌古』の評唱を試みたのは、関友無党の後序（下巻巻末所収）によると、四十歳代のはじめ成都の昭覚寺の住持をしていた頃にはじまり、さらに政和（一一一一―一一一七）から宣和（一一一九―一一二五）年間にかけて澧州（湖南省澧県）の夾山霊泉院、潭州（湖南省長沙府）の道林寺などの住持をしていた間、二度、三度と弟子を前に講義がなされた。なお碧巌の二字は夾山霊泉院の一室に掲げられた扁額中の文字に因んだものである。

垂示の語は圜悟の手になるものと思われるが、著語と評唱は複数次にわたって複数の弟子たちの手で筆記されたものによると考えられる。評唱に錯簡がみられ、著語の中に重複がみられたり、あるいは「便ち打つ」という圜悟の動作かと推定される句が混入したりしているのはそのせいであろう。

『碧巌録』が初めて刊行された年月は定かではない。圜悟門下の高弟大慧宗杲（一〇八九―一一六三）が、一門の門弟らが圜悟の評唱や著語にとらわれて自己の主体的判断を喪失している風潮を非とし、刊本を集めて薪で燃やしたという伝聞があるが、真偽のほどは不明である。

確かなのは元の大徳四年（一三〇〇）に、張煒、字は明遠がこれに「宗門第一書」の名を冠して出版したという事実で、これがつまり張本とよばれる現在の流布本である。この張本は、蜀本すなわち成都での講義録をもとに刊行されたものとみなされるが、その蜀本は現存せず、わが国の岐陽方秀（一三六一―一四三四）の『碧巌録不二鈔』と大智実統の『碧巌録種電鈔』に福本とともに引用されているのみである。福本とは、『不二鈔』の福本凡例によれば、蜀本によ

って校勘しつつ福州(福建省福州府)で刊行されたものだが、これも現存しない。蜀本、福本とも今は『不二鈔』『種電鈔』によってうかがうほかなく、本書もこれを参照した。

張本以前のものとしてわが国に現存する抄本に通称「一夜本」がある。加賀大乗寺所蔵の『仏果碧巌破関撃節』(鈴木大拙校訂により岩波書店より一九四二年に刊行)がそれで、宋に留学した道元禅師が一夜で抄写したと言い伝えられたところからその名がついたもので、これも参照した。

本書は、朝比奈宗源氏の旧文庫版が伝統訓みに従っていたのに対し、唐・宋の口語の語意に即して内容を語学的に正確に明らかにしようとつとめたものである。今後、『碧巌録』の解読に裨益することができれば幸甚と思う。

凡　例

一、本書の底本には、元の大徳四年（一三〇〇）に張煒（字は明遠）が刊行した、いわゆる張本を祖本とする通行本で最も普及したとされる瑞龍寺版（宮内庁書陵部蔵）を用いた。

一、底本は本則および頌の部分を一格下げ、著語をやや小字にするのみで一巻一〇則を連続させているが、読みやすくするために一則ごとに改頁とし、【本則】【頌】〔評唱〕を明示し、著語は〔　〕で囲んだ。各則の標題は大智実統『種電鈔』（一七三九刊）によった。

一、垂示・本則・頌の部分はそれぞれ一つの段落とし、評唱は適当な段落に分けた。

一、上段に新字体による原文（ただし必要に応じて旧字体も使う）を、下段に現代仮名づかいによる訓読文を配し、原文には句読点および中黒点を施し、訓読文においては引用文は「　」で括り、簡単な説明や補足は（　）で補うなどして見やすくした。また、底本で二行割注の箇所は〈　〉で括った。

一、原文の脇には校異の所在を示す＊と注番号を、訓読文の難解な漢字や旧来の読みくせには振りがなを付けた。校異および注は段落ごとにまとめた。

一、校異については岐陽方秀『不二鈔』（一六五〇刊）により参考程度にとどめ、諸本との異同は

特に必要な場合に限って注の中で言及することとした。

一、注はこれまで誤読されてきた俗語・口語の語義や語法についての説明を詳しくし、固有名詞(人名・地名)や仏教語などの説明は簡略にした。

一、訓読文はそれを読むだけで意味が取れるように工夫を加え、特に口語の語彙には原語に即して思いきった訓みをつけた。ただし、誤解のおそれのない場合は伝統的な訓みを尊重した。そもそも文語の漢文の読解のために編み出された訓読法には限界があり、特に本書のように口語を多用する文を訓み下すには無理がある。そこで、可能な限りの調和を図り、訓読しただけでは理解しにくいところは注で補うようにした。なお、本書で示した訓みは私どもの解釈による試案であり、また全体にわたって統一した訓みを定めることは避け、それぞれの文脈を勘案して定めた。

目次

巻第二

巻　第　三

仏果圜悟禅師碧巌録

(上)

（普照序）

[一]至聖命脈、列祖大機、換[二]骨霊方、頤神妙術。其惟雪竇禅師、具[三]超宗越格正眼、提[四]掇正令、不露風規、秉[五]烹仏煆祖鉗鎚、頌[六]出衲僧向上巴鼻。[七]銀山鉄壁、孰敢鑽研。[八]蚊咬鉄牛、難為下口。不逢[一〇]大匠、焉悉玄微。粤[九]有仏果老人、住碧巌日、学者迷而請[一一]益、老人愍以垂慈、剔抉淵源、剖析[一二]底理。[一三]当陽直指、豈立見知。百則[一四]公案、従頭一串穿来、一[一五]隊老漢、次[一六]第揔将按過。須知趙[一七]璧本無瑕纇、相如謾誑秦王。至道実乎無言、宗師垂慈救弊。儻如是見、方知徹底[一八]老婆。其或泥句沈言、未免[一九]滅仏種族。[二〇]普照幸親師席、

（普照の序）

至聖の命脈、列祖の大機は、換骨の霊方、頤神の妙術なり。其れ惟だ雪竇禅師は超宗越格の正眼を具して、正令を提掇し、風規を露さず、烹仏煆祖の鉗鎚を秉って、衲僧向上の巴鼻を頌出す。銀山鉄壁、孰か敢て鑽研せん。蚊の鉄牛を咬むがごとく、下口し難為し。大匠に逢わずんば、焉んぞ玄微を悉かにせん。粤に仏果老人有り、碧巌に住する日、学者迷いて請益するに、老人愍んで以て慈を垂れ、淵源を剔抉し、底理を剖析す。当陽に直指し、豈に見知を立てんや。百則の公案、頭より一串に穿来き、一隊の老漢を次第と揔将て按過す。須らく知るべし、趙璧は本と瑕纇無く、相如の秦王を謾誑けるを。至道は実に言無く、宗師は慈を垂れ弊を救う。儻し是の如く見れば、方めて徹底老婆なることを知らん。其れ或は句に泥み言に沈まば、未だ免

得聞未聞。道友集成簡編、鄙拙叙其本末。時[二二]建炎戊申暮春晦日、参学嗣祖[二三]比丘普照謹序。

れず、仏種族を滅すことを。普照、幸に師の席に親しみ、未聞を聞くことを得たり。道友集めて簡編を成し、鄙拙其の本末を叙す。時に建炎戊申暮春晦日、参学嗣祖の比丘普照謹んで序す。

一 仏や諸祖師の教伝。二 道家の方術を、禅家の修行になぞらえる。「換骨」は凡骨を仙骨に化する仙術。二祖慧可(四八七—五九三)につき、『伝灯録』三に「覚頭痛如刺、其師欲治之、空中有声曰、此乃換骨、非常痛也」と。「頤神」は精神を養う長生の術。慧可が百七歳の長寿を保ったことをいうか。三 仏法の宗格(規定や形式)を超越した。四 仏法を提示しているが、その本筋を露呈していない。五 仏や祖師を煮たり焼いたりする(ほどに厳しい)鍛冶用のかなばさみとかなづち。禅の修行者を鍛錬する道具の喩え。六 「衲僧」は衲衣(ぼろ布を綴りあわせた衣)を着た修行僧、つまり禅僧のこと。「向上」は「うえ」の意。禅僧が一段うえへ踏み出すための手がかり。七 取り付く島もない堅固さの喩え。八 「蚊子上鉄牛、無你下觜処」(『祖堂集』一六・潙山霊佑章)と。九 圜悟克勤のこと。仏果は北宋徽宗からの勅賜号。一〇 澧州(湖南省北部)の夾山霊泉禅院の方丈の名。一一 学者(修行者)が教示を請うこと。一二 究極の理。奥旨。一三 まっこうから明々白々端的に指示する。一四 もとは公府の案牘(判決公文)のこと。転じて仏祖の機縁因縁を録したもの。一五 本録に登場する禅僧たち。一六 「捴」は、ひきいる。「将」は動詞の後に付き、動作の現実化を表す助詞。「按」は、訊問する。「過」は動作の経過を示す助詞。一七 秦の昭王が趙の宝玉「和氏の璧」を強要したとき、使者に立った藺相如が璧に瑕ありと偽って取り戻した故事(『史記』藺相如列伝)。一八 老婆が孫に対してするような親身の心遣い。老婆心切。一九 仏法の伝統を根絶やしにする。二〇 圜悟の法嗣(弟子)、中巌普照。二二 一一二八年三月三〇日。二三 出家得度して具足戒を受けた男子の修行者。

（方回序）

自[一]四十二章経入中国、始知有仏。自[二]達磨至[三]六祖伝衣[四]、始有言句。曰[五]本来無一物[六]為南宗、曰[七]時時勤払拭[八]為北宗。於是有禅宗頌古[九]行世。其徒有翻[一〇]案法、呵仏罵祖[一一]、無所不為。間有深得吾詩家活法者。然所謂第一義[一二]、焉用言句。雪竇・圜悟、老婆心切。大[一三]慧已一炬丙之矣。嵎[一四]中張煒明遠、燃死灰復板行、亦所謂老婆心切者歟。大徳四年庚子四月初八日癸丑、紫陽[一五]山[一六]方回万里序。

（方回(ほうかい)の序）

『四十二章経』中国に入りて自(よ)り、始めて仏有るを知る。達磨自(よ)り六祖の伝衣(でんえ)に至って、始めて言句有り。「本来無一物(ほんらいむいちもつ)」と曰(い)うを南宗と為(な)し、「時時に勤めて払拭(ほっしき)せよ」と曰うを北宗と為す。是(ここ)に於て、禅宗の頌古(じゅこ)世に行わるる有り。其の徒に翻案の法有り、仏を呵(しか)り祖を罵(ののし)り、為(な)さざる所無し。間(ま)ま深く吾が詩家の活法を得る者有り。然れども所謂(いわゆる)第一義は、焉(いずく)んぞ言句(ごんく)を用いん。雪竇(せっちょう)・圜悟(えんご)、老婆心切なり。大慧(だいえ)已に一炬もて之を丙(や)けり。嵎中(ぐうちゅう)の張煒(ちょうい)(字は)明遠(めいえん)、死灰(しかい)を燃(もや)して復た板行するは、亦た所謂老婆心切なる者か。大徳四年庚子（一三〇〇年）四月初八日癸丑、紫陽山の方回(字は)万里序す。

一　後漢の明帝の時代（一世紀後半）の迦葉摩騰(かしょうまとう)と竺法蘭(じくほうらん)とによる漢訳仏典のはじめとされる。しかし史実とは見なし難い。　二　禅宗の始祖、菩提達磨(ぼだいだるま)（?—五三〇?）。達摩とも。　三　慧能(えのう)（六三八—七一三）。中国禅宗の第六祖。　四　伝法の証として金襴の袈裟が伝えられたこと。　五　慧能の偈の一句。　六

慧能を祖とする派。頓悟主義を唱え、主に江南に行われた。七 神秀(六〇六?―七〇六)の偈の一句。八 神秀を祖とする派。漸悟主義の立場に立ち、主に北部に行われた。九 古則(古人が示した仏法把握の規範となる言動)について頌偈によって見解を示したもの。一〇 判決を覆す。ここは定論を覆す。一一 仏祖をしのぐ勢いを示すこと。一二 ことばによっては捉えられない究極の真理。聖諦。一三 名は宗杲(一〇八九―一一六三)。圜悟の法嗣。一四 地名。未詳。一五 安徽省歙県に在り。一六 字は万里、号は虚谷、紫陽山人。安徽省歙県の人。

（周馳序）

碧巌集者、圜悟大師之所述也。其大弟子大慧禅師、乃焚棄其書。世間種種法、皆忌執著。[一]釈子所帰敬莫如仏、猶有時而罵之。蓋有我而無彼、由我而不由彼也。[二]舎己徇物、必至於失己。夫心与道一、道与万物一、充満太虚。何適而非道。第常人観之、能見其所見、而不見其所不見。求之於人、而人語之、如[三]東坡日喩之説、往復推測、愈遠愈失。自吾夫子体道、[四]猶欲無言。而況仏氏為出世間法、而可文字言語而求之哉。雖然亦有不可廃者。智者少而愚者多、已学者少未学者多。大蔵経五千餘巻、尽為未来世設。苟可以忘言、[五]釈迦老子便当閉

（周馳の序）

『碧巌集』は圜悟大師の述べし所なり。其の大弟子の大慧禅師、乃ち其の書を焚棄つ。世間種種の法は皆な執著することを忌む。釈子の帰敬する所は仏に如くは莫きも、猶お時に之を罵る有り。蓋し我有って彼無く、我に由って彼に由らざればなり。己を舎てて物に徇えば、必ず己を失うに至る。夫れ心は道と一に、道は万物と一にして、太虚に充満す。何に適くとしてか道に非ざらん。第だ常人の之を観るに、能く其の見る所を見るも、其の見ざる所を見ず。之を人に求むれば人之を語るも、東坡の日喩の説の如くにして、往復推測すればいよいよ遠くいよいよ失す。吾が夫子（孔子）道を体してより、猶お言無からんと欲す。而るを況んや仏氏は出世間の法為り、文字言語に之を求むべけんや。然りと雖も、亦た廃つべからざる者有り。智者は少く愚者は多く、已学の者は少く未学の者は多ければ

口。何至如是[六]叨叨。天下之理、固有不離尋常之中、而超出於尋常之表。雖若易知、而実未易知者。不求之於人、則終身不可得。古者名世之人、[七]非千人之英、則万人之傑也。[八]太阿之剣、天下之利剣也。登山則戮虎豹、入水則剸蛟龍。人之知之、尽於是已。然古人有善用之者、[九]乗城而戦、順風而揮之、三軍為之大敗、流血赭乎千里。是豈可以一己之所能、而尽疑之哉。自吾聞有是書、求之甚至。嵎中張氏、始更刻木、来謀於予。遂賛而成之、且為題其首。大徳九年歳乙巳三月吉日、[一〇]玉岑休休居士・[一一]聊城[一二]周馳、書於[一三]銭唐観橋寓舎。

なり。大蔵経五千餘巻、尽く未来世の為に設く。苟し以て言を忘るべくんば、釈迦老子は便ち当に口を閉ずべし。何ぞ是の如く叨叨たるに至らん。天下の理固に尋常の中を離れずして、而も尋常の表に超出することあり。知り易きが若しと雖も、実に未だ知り易からざるなり。之を人に求めざれば、則ち身を終るまで得べからず。古者、世に名あるの人は、千人の英に非ざれば、則ち万人の傑なり。太阿の剣は天下の利剣なり。山に登れば則ち虎豹を戮り、水に入れば則ち蛟龍を剸る。人の之を知ること是に尽くるのみ。然れども古の人に善く之を用いる者有り、城に乗じて戦うに、風に順いて之を揮えば、三軍之が為に大敗して、流血千里を赭す。是れ豈に一己の所能を以て、尽く之を疑うべけんや。吾是の書有るを聞いてより、之を求むること甚だ至れり。嵎中の張氏(張煒)始めて更に木に刻し、来たりて予に謀る。遂に賛して之を成さしめ、且つ為に其の首に題す。大徳九年歳乙巳(一三〇五年)三月吉

日、玉岑の休休居士・聊城の周馳、銭唐観橋の寓舎に書す。

一 仏弟子たる僧侶が帰依し尊敬するもの。 二 本来の自己を見ようとせず、外界の事象にひきずられる。 三 蘇軾（一〇三六―一一〇一）。その「日喩」に「生而眇者不識日、問之有目者。或告之曰、日之状如銅盤。扣盤而得其声。他日聞鐘、以為日也。或告之曰、日之光如燭。捫燭而得其形。他日揣籥、以為日也。日之与鐘籥亦遠矣、而眇者不知其異、以其未嘗見而求之人也……」と。他人の言説を聞くばかりでは自得しえないこと。 四『論語』陽貨に「子曰、予欲無言」と。 五 釈尊。「老子」は敬称。 六 くどくどとしゃべるさま。 七 千人にひとりか万人にひとりというほどにすぐれた人物。「千人曰英、倍英曰賢、万人曰傑、万傑曰聖」（『白虎通』聖人に引く「別名記」）。 八 伝説上の名剣。 九『越絶書』外伝記・宝剣に「引太阿之剣、登城而麾之、三軍破敗、士卒迷惑、流血千里」と。 一〇 周馳の別号。 一一 山東省聊城県。 一二 字は景遠、号は如是翁。元の人。 一三 浙江省杭県の銭塘。

（三教老人序）

或問、碧巌集之[一]成毀孰是乎。曰、皆是也。[二]齴齲来東、単伝心印、不立文字、固也。而[三]血脈帰空諸論、果誰為之哉。古謂不在文字、不離文字者、真知言已。使人人於[四]巻簾・聞板・竪指・触脚之際、了却大事。文字何有哉。[五]拈花微笑以来、[六]門竿倒却之後、才渉言句。非文字無以伝。是又不可廃者也。嘗謂祖教之書、謂之公案者、倡於唐而盛於宋。其来尚矣。二字乃世間法中[七]吏牘語、其用有三。

（三教老人の序）

或ひと問う、『碧巌集』の成と毀と孰れか是なるや、と。曰く、皆な是なり。齴齲東に来たり、心印を単伝して、文字を立てざることは固なり。而れども『血脈』『帰空』の諸論、果して誰か之を為るや。古に「文字に在らず、文字を離れず」と謂うは、真に知言なる已。人人をして、簾を巻き板を聞き、指を竪て脚を触くの際に大事を了却せしむ。文字何ぞ有らんや。拈花微笑より以来、門竿倒却の後、才めて言句に渉る。文字に非ずんば、以て伝うること無し。是れ又た廃すべからざる者なり。嘗て祖教の書を謂いて、之を「公案」と謂うは、唐に倡まり宋に盛んなり。其の来たるや尚し。二字は乃ち世間法中の吏牘の語にして、其の用三有り。

一 圜悟の編成と大慧の焼毀と。 二 齴は露出した歯、齲は虫歯。達磨を指す。 三『血脈論』は、達磨所述と伝承されてきた「少林三論」の一。『帰空』は未詳。 四「巻簾」は長慶慧稜（八五四―九三

二)が、長い苦修ののち、簾を巻き上げたときに忽然大悟したこと。「聞板」は、未詳。「竪指」は、第一九則を参照。「触脚」は、玄沙師備(八三五―九〇八)が、石に突き指してハタと気がついたこと。五 釈尊が霊鷲山で花を拈んで示したところ、摩訶迦葉だけがその意味を理解してほほえんだ。そこで法が伝えられたという伝説的な故事。六 第一祖の迦葉が第二祖の阿難に対して「門前の刹竿を倒却せよ」と言った故事。第一五則・頌の評唱を参照。七 役人の間で用いる手紙の文体。

面壁功成、行脚事了、[一]定盤之星難明、[二]野狐之趣易堕。具眼為之勘辨、一呵一喝、要見実詣、如老吏拠獄讞罪、[三]底裏悉見、[四]情款不遺、一也。其次、則[五]嶺南初来、[六]西江未吸。[七]亡羊之岐易泣、[八]指海之針必南。悲心為之接引、一棒一痕、要令証悟、如廷尉執[九]法平反、出人於死、二也。又其次、則[一〇]犯稼憂深、[一一]繫驢事重。[一二]学弈之志須専、[一三]染糸之色易悲。大善知識為之[一四]付嘱、俾之[一五]心死蒲団、一動一参、如官府頒示条令、令人読律知法、悪念

面壁の功成り行脚の事了るも、定盤の星は明らめ難く、野狐の趣には堕し易し。具眼之が為に勘辨し、一呵一喝して、実詣を見んと要すること、老吏の獄に拠って罪を讞り、底裏悉く見て、情款遺さざるが如くなる、一なり。其の次は則ち嶺南より初めて来たり、西江未だ吸わず。亡羊の岐には泣き易きも、指海の針は必ず南す。悲心もて之が為に接引し、一棒一痕して、証悟せしめんと要すること、廷尉の法を執り平反して、人を死より出だすが如くなる、二なり。又た其の次は則ち犯稼の憂深く繫驢の事重し。学弈の志すら須らく専なるべきに、染糸の色悲しみ易し。大善知識之が為に付嘱し、之をして心、蒲団に死して、一動一参せし

才生、旋即寝滅、三也。

むること、官府の条令を頒ち示して、人をして律を読んで法を知り、悪念才かに生ずるや、旋即に寝滅めしむるが如くなる、三なり。

一 竿秤りの目盛りの星印、事の基準。 二 似て非なる邪禅、野狐禅。 三 事の実相のすみずみ。 四 犯人の白状に含まれた情実。 五 五嶺の南方、広東・広西両省の地。六祖は嶺南の人。 六 龐居士(?—八〇八)の参問「不与万法為侶者、是甚麼人」に対して、馬祖道一(七〇九—七八八)は「待汝一口吸尽西江水、即向汝道(君が西江の水を一口で飲み切ったら、それを言うてやろう)」と答えた。 七 「亡羊」は『列子』説符に見える寓話で、岐路の喩え。楊子は岐路を前にすると進むべき方途に迷って泣いたという(『淮南子』説林)。 八 正しく教え導いてくれるものがある。 九 裁判をやりなおし、罪を軽くする。無実の罪をはらす。 一〇 縦欲、放逸。『仏遺教経』に「汝等比丘、已能住戒、当制五根勿令放逸入於五欲。譬如牧牛之人執杖視之、不令縦逸犯人苗稼」と。 一一 驢馬をつなぎとめる。ここは経典の言句にとらわれて身動きできぬこと。 一二 『孟子』告子上「今夫弈之為数、小数也、不専心致志則不得也」による。つまらぬ囲碁の術でさえこれに専心せねば上達できないということ。 一三 墨子は白い糸を見ると、それが黄にも黒にも染められることを悲しんで泣いたという(『淮南子』説林)。 一四 懇々と申し含める。 一五 ひたすら坐禅に参ずる。長慶慧稜が簾を巻き上げる際に忽然大悟できたのは七個の蒲団を坐破した功徳による、とされる。

具方冊作案底、陳機境為格令、与世間所謂、金科玉条・清明対越諸書、初何以異。祖師所以立為公案、留示

方冊を具えて案底と作し、機境を陳べ格令と為すは、世間の所謂、金科玉条・清明対越の諸書と、初めより何を以てか異ならん。祖師の立てて公案と為し、叢林

叢林者、意或取此。奈何末法以来、求妙心於瘡紙[四]、付正法於口談、点尽[五]鬼神、猶不離簿。傍人門戸[六]、任喚作郎。剣[七]去矣而舟猶刻、兎逸矣而株不[八]移、満肚葛藤、能問千転、其於生死大事、初無干渉。鐘[九]鳴漏尽、将焉用之。烏乎、羚[一〇]羊掛角、未可以形迹求。而善学[一一]下恵者、豈歩[一二]亦歩、趨亦趨哉。知此則二老[一三]之心皆是矣。

に留示する所以は、意或は此に取る。奈何せん末法以来、妙心を瘡紙に求め、正法を口談に付し、鬼神を点尽して、猶お簿を離れず。人の門戸に傍り、喚んで郎と作すに任す。剣去って舟に猶お刻み、兎逸げて株移らざるがごとく、満肚の葛藤もて能く問うこと千転すれども、其の生死の大事に於ては、初めより干渉無し。鐘鳴り漏尽くれば将た焉んぞ之を用いん。烏乎羚羊角を掛く、未だ形迹を以て求むべからず。而して善く下恵を学ぶ者は、豈に歩まば亦た歩み、趨らば亦た趨らんや。此れを知るときは則ち二老の心皆な是なり。

一 祖師の語録を編集して公案集とする。 二 悟りの機縁や境涯を述べ、それを依るべき法令、条例とする。 三 世俗の法規。「金科玉条」は立派な法律・条文のこと。揚雄(前五八—一八)の「劇秦美新」(『文選』四八所収)に見える。「清明対越」は公正な判例記録の意。 四 「瘡」はかさぶた、できもの。「瘡紙」はここでは経典のこと。 五 点は記名すること、簿は点鬼簿(過去帳)。鬼籍に入った祖師たちを列挙し尽して、どこまでもその言迹に依附する。 六 他人の権威に依りかかって、自分もえらいさま面をする。 七 舟から川に剣を落とした人が、舟ばたに目じるしをつけておいたという故事(『呂氏春秋』察今)。前記の「末法以来」の求法の硬直性の喩え。 八 「守株待兎」(『韓非子』五蠹)のこと。機に応じた対処ができない固陋さの喩え。 九 時を知らせるかねが鳴り、漏刻(水時計)の水が尽きる。

年老いて余命のないことの喩え。　一〇　羚羊は角を木の枝に掛けて、脚を浮かして眠り、足跡を残さないということから、痕跡をとどめぬ働きの喩え。　一一「聖之和者也」(『孟子』万章下)とされる聖人、柳下恵。物事に柔かく順応しつつ、自分の信ずる道を行った。　一二『荘子』田子方に「夫子歩亦歩、夫子趨亦趨」と。人の言行をそのままなぞることをいう。　一三　圜悟と大慧。

圜悟顧子念孫之心多、故重拈[一]雪竇頌。大慧救焚拯溺之心多、故立毀碧巌集。釈氏説一大蔵経、末後乃謂、不曾説一字。豈欺我哉。圜悟之心、釈氏説経之心也。大慧之心、釈氏諱説之心也。禹稷[二]顔子、易地皆然。推之輓之、主於車行而已。爾来二百餘年、嵎中張明遠、復鋟[三]梓以寿其伝。豈祖教回春乎、抑世故有数[四]乎。然是書之行、所関甚重。若見[五]水即海、認[六]指作月、不特大慧憂之、而圜悟又将為[七]之去粘解縛矣。昔人写照[八]之詩曰、分明紙上張[九]公子、尽力高声喚不譍。

圜悟は子を顧み孫を念うの心多し、故に重ねて雪竇の頌を拈ず。大慧は焚を救い溺を拯うの心多し、故に立ちどころに『碧巌集』を毀る。釈氏は一大蔵経を説いて、末後に乃ち謂く、「曾て一字を説かず」と。豈に我を欺かんや。圜悟の心は釈氏経を説くの心なり。大慧の心は釈氏説くを諱むの心なり。禹・稷・顔子、地を易うれば皆な然らん。之を推すも之を輓くも、車行を主るのみ。爾来二百餘年、嵎中の張明遠、復た梓に鋟りて以て其の伝を寿す。豈に祖教回春するや、抑世故に数有るや。然れども是の書の行わるるは、関わる所甚だ重し。若し水を見て海と即し、指を認めて月と作さば、特り大慧之を憂うるのみにあらず、圜悟も又た将に之が為に粘を去り縛を解かん。昔人写照の詩

欲観此書、先参此語。大徳甲辰四月望、[10]三教老人書。

に曰く、「分明なり紙上の張公子、力を尽して高声に喚べども譍えず」と。此の書を観んと欲せば、先ず此の語に参ぜよ。大徳甲辰(一三〇四年)四月望(十五日)、三教老人書す。

一 とりあげる。評唱する。二 禹・稷・顔子の事迹は異なるが、立場をかえれば皆同じことをした(『孟子』離婁下)。禹は、古代三帝の一人で、治水に功をおさめた。稷は、堯舜につかえて民に農業を教えた。顔子は、孔子の門人顔回。三 梓は版木、書物として印刷する。四 定まった時勢の成りゆき。五 妄想にとらわれて真実が見えない。『楞厳経』二に一漚を全潮とおもいこむという喩えがある。六 言句にとらわれること。『楞伽経』や『円覚経』にブッダの説法を以て月を示す指に喩えるのによる。七 字句への執着を解き放つ。八 張煒の肖像画に賛した詩か。九 張煒。一〇 如如居士顔丙。京都建仁寺の両足院に、その『如如居士三教大全語録』二巻(洪武一九年・一三八六刊)が現存する。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第一

師住[一]澧州夾山霊泉禅院評唱雪竇顕和尚[二]頌古語要

第一則　武帝問達磨

[三]垂示云、[四]隔山見煙、早知是火、隔牆見角、便知是牛。[五]挙一明三、[六]目機銖両、[七]是衲僧家尋常茶飯。至於[八]截断衆流、[九]東涌西没、逆順縦横、与奪自在。[一〇]正当恁麼時、[一一]且道、[一二]是什麼人行履処。[一三]看取雪竇[一四]葛藤。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第一

師、澧州夾山霊泉禅院に住して、雪竇顕和尚の頌古を評唱する語要

第一則　武帝、達磨に問う

垂示に云く、山を隔てて煙を見て、早に是れ火なることを知り、牆を隔てて角を見て、便ち是れ牛なることを知る。挙一明三、目機銖両は、是れ衲僧家の尋常茶飯。衆流を截断するに至っては、東涌西没、逆順縦横、与奪自在なり。正当恁麼の時、且く道え、是れ什麼人の行履の処ぞ。雪竇の葛藤を看取よ。

一 湖南省石門県東南の夾山の霊泉院、別名夾山寺。 二 方回序(注九)に既出。 三 本則を提示する小序。 四 『大般涅槃経』一七に「如遠見烟、名為見火、実不見火。雖不見火、亦非虚妄。……如人遥見籬間牛角、便言見牛。雖不見牛、亦非虚妄」と。第二四則・本則の評唱にも。 五 一を挙げれば直ちに三を了解する。明敏の喩え。 六 「目機」は目で重さを量る。「銖・両」は小さな重量単位。一目

で何たるかを見抜く。七「衲僧」は禅僧。「家」は人をさす名詞につく接尾語。八 あらゆる知見を截ち切る。雲門三句の一。第一四則・本則の評唱を参照。九 東に西に出没自在。一〇 ちょうどこのようなとき。「恁麼」は文語の「如此」に当る。一一 発問の語句の前におかれる常套語。さて、さあ、と相手に答えを促す気分。一二「什麼」は「何」に同じ。「甚」「甚麼」とも。一三「取」は能動的な語気の接尾語。一四 からみまといつくものの喩え。禅では言語表現、または言語そのものの意に用いる。

一【本則】挙。梁武帝、問達磨大師、〔説這不喞溜漢。〕如何是聖諦第一義。〔是甚繋驢橛。〕磨云、廓然無聖。〔将謂多少奇特、箭過新羅、可煞明白。〕帝曰、対朕者誰。〔満面慚惶、強惺惺。果然摸索不著。〕磨云、不識。〔咄。再来不直半文銭。〕帝不契。〔可惜許。却較些子。〕達磨遂渡江至魏。〔這野狐精、不免一場懡㦬。従西過東、従東過西。〕帝後挙問志公。〔貧児思旧債、傍人有眼。〕志公云、

【本則】挙す。梁の武帝、達磨大師に問う、〔説も這の不喞溜漢め。〕「如何なるか是れ聖諦第一義」。〔是れ甚と繋驢橛ぞ。〕磨云く、「廓然無聖」。〔多少の奇特と将謂いしに、箭、新羅を過ぐること、可煞だ明白。〕帝曰く、「朕に対する者は誰ぞ」。〔満面慚惶なるを強いて惺惺。果然して摸索不著。〕磨云く、「識らず」。〔咄。再来するも半文銭に直らず。〕帝契わず。〔可惜許。却って些子く較えり。〕達磨遂に江を渡って魏に至る。〔這の野狐精、一場の懡㦬を免れず。西より東に過り、東より西に過る。〕帝、後に挙して志公に問う。〔貧児旧債を思う、傍人眼有り。〕志公云く、「陛

陛下還[22]識此人否。〔和志公趕出国始得。好[23]与三十棒。達磨来也。〕帝云、不識。〔却[24]是武帝承当[25]得達磨公案[26]。〕志公云、此是観[27]音大士、伝仏[28]心印。〔胡乱指注。臂膊不向外曲。〕帝悔、遂遣使去請。〔果然把不住[29]。向[30]道不唧𠺕。〕志公云、莫[31]道陛下発使去取、〔東[32]家人死、西家人助哀。也好一時趕出国。〕闔[33]国人去、佗亦不回。〔志公也好与三十棒。不知脚跟下放大光明。〕

下還た此の人を識る否」。〔志公も和に、国を趕い出して始めて得し。好し三十棒を与えん。達磨来たる。〕帝云く、「識らず」。〔却是って武帝は達磨の公案を承当得たり。〕志公云く、「此れは是れ観音大士、仏心印を伝う」。〔胡乱に指注す。臂膊は外に向って曲らず。〕帝悔いて、遂に使いを遣わし去きて請ぜんとす。〔果然して、把不住。向に道う「不唧𠺕」と。〕志公云く、「陛下、使いを発し去きて取えしめんとするは莫道、〔東家の人死して、西家の人哀を助く。也た好し一時に国を趕い出さんに。〕闔国の人去くも、佗は亦た回らず」。〔志公にも也た好し三十棒を与えん。知らず脚跟下に大光明を放つを。〕

＊箭過新羅　蜀本に無し。　＊＊満面慚惶　蜀本に無し。

一 垂示・著語・評唱・頌などに対し、それらの本拠となる古則、公案のこと。 二 本則を提示する語。 三 梁の初代皇帝 蕭衍(四六四—五四九)。 四 「説」は衍字の疑いもある。 五 仏法の根本義。 六 この「甚」は疑問詞でなく感嘆詞。 七 驢馬をつなぎとめる杭。言句にとらわれる者を永久に縛りつけて身動きさせぬものの喩え。 八 からりとした虚空のように「聖」も何も無い。「聖」性をも払い去

った開豁な世界。九（そうではないものをそうと）思いこんでいた、という意。「将為」とも。一〇 ここでは「多」の方に力点がある。強調の語気。一一「新羅」は地の果てというイメージ。とりつきようもないところへ飛んで行ってしまった。あとのまつりだ。一二 はなはだ。「煞」は「殺」の異体字。一三「不著」は動詞の後に付き、動作がその対象に到達しないことを示す。一四 叱咤の声。こら。一五 同じことを二度する。「無聖」「不識」の答えのくり返しを指す。一六「許」は語尾辞。惜しいことよ。一七 もう一息のところだったのに。「較些子」には、まあそこそこまでいっている（九分通りまでは）と、もう一息だ（まだ不完全）との二つの用法がある。一八 化け狐。似非禅僧の貶称。一九「不免」は必然の意。きっと〜となる。「一場」は一幕。「懡㦬」は慚愧・恥辱。赤恥をかくのがおちだ。二〇 宝誌（四一八または四二五―五一四）。神異と奇行の僧として知られた。二一 貧乏人が古い借金（武帝が達磨に去られたこと）を思い患っているということが第三者にはちゃんとわかる。二二「還た〜否」で、いったい〜か、という疑問を表す構文。「還〜也無（也未）」とも。二三「好」は、〜してよい、〜してやろう、の意。三十たたきにしてやるがよい。二四 転接の語。ここは、意外だということを表す。二五 理解してしかと受けとめる。「得」は動詞の後に付き、その動作の可能・獲得を示す。二六 普照序（注一四）に既出。二七 このころ『観音経』にもとづいて、観音がさまざまに姿を変えて人々を導くという信仰があった。二八 仏法の根本精神。悟りの核心。仏の悟りを印に喩えた語で、「仏印」「心印」とも。二九「不住」は動詞の後に付き、動作の確実性・安定性・定着がえられないことを示す。三〇「向」は先に、以前。「道」は言う。漢代以来の口語。三一「莫道a、b」、aは言うまでもなく、bも。三二 東隣の家の不幸に西隣の人が悔みを述べる。三三 国じゅうすべて。

【評唱】達磨遥観此土有大乗根器、遂泛海得得而来、単伝心印、開示迷

【評唱】達磨遥かに此土に大乗の根器有るを観て、遂に海を泛って得得と来たり、心印を単伝して迷塗に開

塗。不立文字、直指人心、見性成仏。若恁麼見得、四便有自由分。不随一切語言転、五脱体現成。便能於六後頭、与武帝対譚、并七二祖安心処、自然見得、八無計較情塵、一刀截断、九洒洒落落。何必更分是分非、辨得辨失。雖然恁麼、能有幾人。

一 大乗の教えを受容できる力量の人物。 二 てくてく。「特特」とも。長い道のりをはるばる行くことの形容（擬態副詞）。 三 三界六道に迷える者に教えを説いた。 四 自在にふるまう主体性。 五 まるごと目の前に現れる。 六 あと、うしろ。「頭」は場所や時、一塊の物などを示す接尾語。 七 禅宗第二祖の慧可（四八七—五九三）が達磨との問答によって「安心」を得たこと。 八 思料、分別。 九 せいせいさっぱりする。

示す。不立文字、直指人心、見性成仏と。若し恁麼に見得せば、便ち自由の分有らん。一切語言に随っても転されず、脱体に現成せん。便ち能く後頭の武帝との対譚、并に二祖安心の処に於て、自然に見得して、計較情塵無く、一刀に截断して、洒洒落落たらん。何ぞ必ずしも更に是を分かち非を分かち、得を辨じ失を辨ぜん。恁麼なりと雖然も、能く幾人か有る。

武帝嘗*披袈裟、自講放光般若経。一感得天花乱墜、地変黄金。二辨道奉仏、誥詔天下、起寺度僧、依教修行。人謂之仏心天子。

＊嘗　蜀本は「常」。

武帝嘗て袈裟を披いて、自ら『放光般若経』を講ず。天花乱墜し、地黄金と変ずることを感得す。道を辦じ仏を奉じ、天下に詔して、寺を起て僧を度し、教に依って修行せしむ。人之を仏心天子と謂う。

一「感」は感応。「得」は以下にその結果を示す結果補語。＝仏道を実践する。

達磨初見武帝、帝問、朕起寺度僧、有何功徳。磨云、無功徳。早是悪水驀頭澆。若透得這箇無功徳話、許你親見達磨。且道、起寺度僧、為什麼都無功徳。此意在什麼処。

達磨初めて武帝に見えしとき、帝問う、「朕、寺を起て僧を度す、何の功徳か有る」。磨云く、「功徳無し」と。早是くも悪水驀頭に澆ぐ。若し這箇の「功徳無し」の話を透得せば、你に許む親しく達磨に見ゆることを。且く道え、寺を起て僧を度す、為什麼にか都く功徳無き。此の意什麼処にか在る。

一ざんぶりとまっこうから汚水を浴びせた。＝突き抜ける。

帝与婁約法師・傅大士・昭明太子、持論真俗二諦。拠教中説、真諦以明非有、俗諦以明非無。真俗不二、即是聖諦第一義。此是教家極妙窮玄処。帝便拈此極則処問達磨、如何是聖諦第一義。磨云、廓然無聖。天下衲僧跳不出。達磨与他一刀截断。如今人多少錯会、却去弄精魂瞠眼睛云、廓然無聖。且喜没交渉。

帝、婁約法師・傅大士・昭明太子と真俗の二諦を持論す。教中の説に拠れば、真諦は以て非有を明し、俗諦は以て非無を明すと。真俗不二、即ち是れ聖諦第一義なり。此れは是れ教家の極妙窮玄の処。帝便ち此の極則の処を拈じて達磨に問う、「如何なるか是れ聖諦第一義」と。磨云く、「廓然無聖」と。天下の衲僧跳け出せず。達磨は他の与に一刀に截断す。如今の人多少に錯って会し、却って去きて精魂を弄し、眼睛を瞠りて云く、「廓然無聖」と。且喜たくも没交渉。

一 梁の慧約。二 傅翕（四九七―五六九）。三 武帝の長子、蕭統（五〇一―五三一）。四 論客として主張を立てる、議論する。五 第一義的な真理である真諦と世俗的な真理である俗諦。六 僧肇の「不真空論」に「此経直辯真諦以明非有、俗諦以明非無」と。七 第四四則・本則の評唱に「真俗無二、是聖諦第一義」と。八 教相家。経論を重視する立場の人たち。九「聖諦第一義」に纏いつかれてぬけだせない。一〇 動詞の上の「去」は意図的にその動作に向かう気分を示す。「弄精魂」は、キツネ憑きをやらかす。ここは、ものに憑かれたように。一一 お見事なスカタンだ。「且喜」は、めでたいことに（皮肉の語気）。

[一]五祖先師嘗説、只這廓然無聖、若人透得、[二]帰家穩坐。[三]一等是打葛藤、[四]不妨与他打破漆桶、[五][六]達磨就中奇特。所以道、参得一句透、千句万句一時透。自然坐得断、[七]把得定。古人道、[八]粉骨砕身未足酬、一句了然超百億。

五祖先師嘗て説く、「只だ這の廓然無聖、若し人透得せば、帰家穏坐せん。一等く是れ葛藤を打し、不妨に他の与に漆桶を打破するに、達磨は就中奇特たり」と。所以に道う、「一句参得し透れば、千句万句一時に透る」と。自然に坐得断し、把得定す。古人道く、「粉骨砕身するも未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億に超る」と。

一 圜悟の師、五祖法演（?―一一〇四）。二 わが家に帰って落ち着く。いわゆる「返本還源」。三「一等〜就中〜」は、同じく〜であるうちで、とくに〜。四 言句を弄する。「打」はさまざまな行為、動作に関して汎用する動詞。五「なかなかの〜だ」「たいした〜ぶりだ」と讃えた言い方。六 真黒になった漆桶。ここは、無明の故の暗黒。七 どっかと坐りこみ、しかとつかみとる。「坐断」

は古くは挫断(ねじりきる)が本義だが、宋代には「どっかと坐りこんで動きを封ずる」意にのみ用いる。「断」は強辞。八 永嘉玄覚(六七五―七一三)述とされる『証道歌』の句。身骨をバラバラにして感謝してもまだ足りない、解脱の一句こそは百億のことばにまさる。

達磨[一]劈頭与他一拶[二]、多少漏逗[三]了也。帝不省、却以人我[四]見故、再問、対朕者誰。達磨慈悲忒[五]煞、又向道、不識。[六]直得武帝眼目定[七]動、不知落処*。是何言説。到這裏、有事無事、拈来即不堪。

達磨劈頭に他に一拶を与うるも、多少漏逗し了れり。帝省らず、却って人我の見を以ての故に、再び問う、「朕に対する者は誰ぞ」と。達磨、慈悲忒煞し、又た向って道う、「識らず」と。直得に武帝は眼目を定動して、落処を知らず。是れ何なる言説ぞ。這裏に到れば、事有るも事無きも、拈じ来たるに即ち堪えず。

＊落処　福本に無し。

一 いきなり、真っ向から。劈面。二 「拶」は問答などで相手に一撃を与えること。三 ボロを出す。四 自他に執着する分別見。五 はなはだ。「忒」は強調の副詞。六 前事が後事の結果をひき起すことを示す。～という始末にさえなった。「直」は強め。七 「定」は「動」と語頭子音をそろえるためだけのもので、意味は無い。

[一]端和尚有頌云[二]、一箭尋常落一鵰、更加一箭已[三]相饒。直帰[四]少室峰前坐、梁主休言更去招。復[五]云、誰欲招。

端和尚に頌有り、云く、「一箭、尋常は一鵰を落す、更に一箭を加うるは已に相饒す。直に少室峰前に帰って坐せり、梁主言うことを休めよ、更に去きて招かん

とは」と。復た云く、「誰か招かんと欲す」と。

一 五祖法演の師、白雲守端（一〇二五—七二）。二『白雲端禅師広録』四「武帝問達磨聖諦第一義」。三（慈悲ゆえの）お負けのサービスだ。達磨の懇切な応対ぶりをいう。四 河南省登封県の西北、嵩山の名峰。五『白雲広録』によれば、白雲自身の評語と見られる。

帝不契、遂潜出国。這老漢只得懡㦬、渡江*至魏。時魏[一]孝明帝当位。乃北人種族、姓拓跋氏、後来方[二]名中国。達磨至彼、亦不出見。直過[三]少林、面壁九年、[四]接得[五]二祖。彼方号為壁観婆羅門。

帝契わず、（達磨は）遂に潜かに国を出づ。這の老漢只だ懡㦬を得て、（長）江を渡り魏に至る。時に魏の孝明帝、位に当る。乃ち北人の種族にして、姓は拓跋氏、後来に方に中国を名のる。達磨彼に至るも、亦た出で見えず。直に少林に過り、面壁九年、二祖を接し得たり。彼方には号して「壁観婆羅門」と為う。

＊至魏　この下に福本は「後来有伝、折蘆而渡江、恐未詳賛嘆之言也」の一七字有り。

一 北魏第八代の皇帝（五一〇—五二八、在位五一五—五二八）。二 太和二〇年（四九六）、漢化政策のひとつとして「元氏」に改姓する詔が出された。三 少室山の北麓、五乳峰下の少林寺。四 修行者を（弟子とし）指導した。「接」は、迎える、うけとめる。五 中国禅宗の第二祖、慧可（四八七—五九三）。四〇歳の時、達磨に弟子入りしたと伝えられる。

梁武帝後問志公、公云、陛下還識此人否。帝曰、不識。且道、与達磨

梁の武帝、後に志公に問うに、公云く、「陛下還た此の人を識る否」。帝曰く、「識らず」と。且く道え、

道底、是同是別。似則也似、是則不是。人多錯会道、前来達磨是答他[一]禅、後来武帝是対他志公、乃相識之識。且得没交渉。当時志公恁麼問、且道、[二]作麼生祇対。何不一棒打殺[三]、免見搭[四]糊。武帝却供[五]他款、道不識。志公見[六]機而作、便云、此是観音大士、伝仏心印。帝[七]悔、遂遣使去取。好不啣嚁。当時等他道此是観音大士、伝仏心印、亦好擯他出国、猶較些子。

達磨の道う底と、是れ同じか是れ別か、似たることは則ち也た似たるも、是なるかといえば則ち是ならず。人多く錯り会して道う、「前来の達磨（の『識らず』と言う）は、是れ他の禅を答う、後来の武帝は是れ他の志公に対う、乃ち相識の識なり」と。且得没交渉。当時志公恁麼に問わば、且く道え、作麼生か祇対えん。何ぞ一棒に打殺して、搭糊さるることを免れざる。武帝却って他の款を供して「識らず」と道う。志公、機を見て作して便ち云く、「此れは是れ観音大士、仏心印を伝う」と。帝悔いて遂に使を遣わし去きて取かしめんとす。好に不啣嚁なり。当時他の「此れは是れ観音大士、仏心印を伝う」と道うを等ちて、亦た好し他を擯けて国より出さば、猶お些子く較わん。

一「他」には名詞に軽く加わる冠詞的用法や他動詞の下に軽くつく用法がある。ここは前者。二「如何」と同じ。古くは「作勿生」「作物生」「作没生」なども。三「殺」は動詞の後に付き、その動作の甚しいことを示す。四「糊塗」に同じ、曖昧模糊の意。ここはごまかす。五「供款」は白状する、泥を吐く。六『周易』繋辞下伝の句。ここは、その機を逃さずに、すかさず。七 ～したらその

ときへまた多少はましだったのに。

人伝、志公天監十三年化去、達磨普通元年方来[一]。自隔七年。何故却道、同時相見。此必是謬伝。拠伝中所載[二]、如今不論這事、只要知他大綱。且道、達磨是観音、志公是観音、阿那箇[三]是端的底[四]観音。既是観音、為什麼却有両箇。何止両箇、成群作隊。

人は伝う、「志公は天監十三年(五一四)に化し去り、達磨は普通元年(五二〇)に方めて来たる。自ずから七年を隔つ。何故ぞ却って道う、『同時に相見す』と。此れ必ず是れ謬伝ならん」と。伝中に載する所に拠り、如今は這の事を論ぜず、只だ他の大綱を知らんと要するのみ。且く道え、達磨が是れ観音か、志公が是れ観音か、阿那箇か是れ端的底観音なる。既に是れ観音なれば、為什麼にか却って両箇有る。何ぞ止両箇のみならん、群を成し隊を作す。

一『伝灯録』三などでは普通八年とする。　二『宝林伝』などに見える。　三「阿」は接頭語、「那箇」は疑問代名詞、どちら。　四 そのものずばりの。

時後魏光統律師[一]・菩提流支三蔵[二]、与師論議。師斥相指心[三]。而偏局之量[四]、自不堪任[五]、競起害心、数加毒薬。至第六度、化縁已畢[六]、伝法得人[七]、遂不復救、端居而逝。葬於熊耳山定林寺。

時に後魏(北魏)の光統律師・菩提流支三蔵、師と論議す。師、相を斥け心を指す。而るに偏局の量にして自もと任に堪えざれば、競って害心を起し、数しば毒薬を加う。第六度に至り、(達磨は)化縁已に畢り、伝法に人を得たれば、遂に復た(自身を)救わず、端居し

後魏宋雲奉使、於葱嶺[9]、遇師手携[10]隻履而往。武帝追憶、自撰碑文云、嗟夫見之不見、逢之不逢、□□□□[11]。今之古之、怨之恨之。復讃云、心有也曠劫而滞凡夫、心無也刹那而登妙覚。且道、達磨即今在什麼処。蹉過[12]也不知。

て逝す。熊耳山の定林寺に葬る。後魏の宋雲、使を奉じてゆくに、葱嶺に於て、師の、隻履を手携えて往くに遇う。武帝追憶して、自ら碑文を撰して云く、「嗟夫之を見て見ず、之に逢いて逢わず、今も古も、之を怨み之を恨む」と。復た讃して云く、「心有なれば曠劫に凡夫に滞り、心無なれば刹那に妙覚に登る」と。且く道え、達磨は即今什麼処にか在る。蹉過するも也た知らず。

一 慧光(四六八—五三七)。四分律宗の開祖。二 ボーディルチ(?—五二七)。北インド出身の僧。無著・世親系の大乗仏教を伝えた。なお、達磨毒殺の主謀者を菩提流支三蔵と光統律師であるとする説(『歴代法宝記』『宝林伝』『伝灯録』など)は史実ではなく、当時の禅と教宗の拮抗を象徴的に表現した虚構。三 外面的な特徴。四 偏狭な量見。五 達磨の「心」の提起に対応しきれなかったこと。六 教化の因縁。七 河南省盧氏県の南。八 敦煌の人。北魏の孝明帝(在位五一五—五二八)の時、西域諸国を巡訪した。ただし、達磨と出会ったというのは伝説。九 パミール高原。一〇 履物の片方。一一 四字分空格。「遇之不遇」とするテクストもある。一二 「当面蹉過」(第二則・本則の評唱)のこと。すぐ目の前ですれちがっても気づかない。悟りの機縁を外すこと。

【頌】聖諦廓然、〔箭過新羅。咦[1]。〕何当[2]辨[3]的。〔過也[4]。有什麼難辨。〕対

【頌】聖諦廓然、〔箭新羅に過ぐ。咦。〕何当にか的を辨ぜん。〔過ぎされり。什麼の辨じ難きことか有ら

朕者誰、〔再来不直半文銭。又恁麼去也。〕還云不識。〔三个四个中也。*咄。〕因茲暗渡江、〔穿人鼻孔不得、却被別人穿。蒼天蒼天。好不大丈夫。〕豈免生荊棘。〔脚跟下已深数丈。〕闔国人追不再来、〔両重公案。用追作麼。在什麼処。大丈夫志気何在。〕千古万古空相憶。〔換手搥胸、望空啓告。〕休相憶、〔道什麼。向鬼窟裏作活計。〕清風匝地有何極。〔果然、大小雪竇向草裏輥。〕師顧視左右云、這裏還有祖師麼。〔你待番款那。猶作這去就。〕自云、有。〔塌薩阿労。〕喚来与老僧洗脚。〔更与三十棒趕出、也未為分外。作這去就、猶較些子。〕

ん」〕一朕に対する者は誰ぞ」、〔再来するも半文銭にも直らず。又た恁麼になし去れり。〕還た云う「識らず」と。〔三个四个中れり。咄。〕茲に因り暗に江を渡る、〔人の鼻孔を穿つことを得ず、却って別人に穿たる。蒼天蒼天。好とも大丈夫ならず。〕豈に荊棘を生ずることを免れんや。〔脚跟下已に深きこと数丈。〕闔国の人追うも再来せず、〔両重の公案。追うことを用て作麼かせん。什麼処にか在る。大丈夫の志気何にか在る。〕千古万古空しく相憶う。〔手を換えて胸を搥ち、空を望いで啓告う。〕相憶うことを休めよ、〔什麼を道うぞ。鬼窟裏に向いて活計を作す。〕清風地に匝く何の極まることか有る。〔果然して、大小の雪竇も草裏を輥る。〕師左右を顧視して云く、「這裏に還た祖師有りや」。〔你　款を番さんと待するや。猶お這の去就を作す。〕自ら(答えて)云く、「有り。〔塌薩阿労。〕喚び来たりて老僧の与に脚を洗わしめん」。〔更に三十棒を与えて趕い出すとも、也た未だ分外ならず。這の

去就を作すも、猶お些子く較えり。」

＊中也咄　福本は「咄中也」。

一 驚きあやしむことば。 二 いつの日に。また「いつかは〜したいものだ」という願望を表すこともある。 三 仏法の核心をわきまえる。 四 あとの祭りだ。 五 「穿人鼻孔」は、人の鼻づらに綱を通す。人を意のままにひきまわすこと。 六 もとは天に向って嘆く語だが、禅語録では落胆や慨嘆を表す。 七 「好」は甚だの意。なんとも男がすたれた。 八 「生荊棘」は戦争などで国土が荒廃すること（『老子』三〇章「師之所処、荊棘生焉」）。ここは、（達磨のおかげで）イバラが茂ることになってしまった。 九 「用〜作麼」は、〜をしてどうなるというのか。つまらぬことはやめよ、という含み。 一〇 かんどころはどこか。「落在什麼処」に同じ。 一一 千年万年、永久に。 一二 左右の手で交互に胸を叩く。 一三 幽鬼の住家で暮しを立てている。「向」は「於」「在」に同じ。「裏」は、中の意。 一四 やむことなく涼風は大地を吹きわたっているものを。 一五 〜ともあろう偉大な人が。「大小大」と強めることもある。 一六 「待」は「要」と同じく「〜しようとする」の意。「番」は「翻」と意通。 一七 「塌薩」は、しょぼくれて冴えないさま。げんなり、くたくた。「阿」は接頭語。 一八 まだもう一息だ。

〔評唱〕　且らく雪竇の此の公案を頌するに拠らば、一に善く太阿の剣を舞わすが似くに相似たり。虚空中に盤礴して、自然に鋒鋩を犯さず。若是這般る手段無くんば、拈著むや纔や便ち鋒に傷つき手を犯すを見ん。若是具眼の者ならば、他の一拈一掇、一褒一貶するを看

〔評唱〕　且拠雪竇頌此公案、一似善舞太阿剣相似。向虚空中盤礴、自然不犯鋒鋩。若是無這般手段、纔拈著、便見傷鋒犯手。若是具眼者、看他一拈一掇、一褒一貶、只用四句、揩定

一則公案。大凡頌古只是繞路説禪、
拈古大綱拠款結案而已。

一「(一)似~相似」は「(全く)~と同様だ」という同等比較の構文。「(一)如~相似」とも。二 伝説上の名剣。三 力を満ちあふれさせる。ここは、剣を自在に操るさま。四「纔~便~」で「~するやいなや~」。五 刃先に触れて手を傷つける。六「拈掇」は、手に取っていじくる。古則公案を提起すること。七 手本となるように決着をつける。八 要するに~にすぎない。九 古則をとりあげて評語を加えること。

るや、只だ四句を用いるのみにて一則の公案を指定るものなり。大凡そ頌古は只だ是れ繞路して禅を説き、拈古は大綱　款　に拠って案を結すのみ。

雪竇与他一拶、劈頭便道、聖諦廓然、何当辨的。雪竇於佗初句下、著這一句、不妨奇特。且道、畢竟作麼生辨的。直饒鉄眼銅睛、也摸索不著。到這裏、以情識卜度得麼。所以雲門道、如撃石火、似閃電光。這箇些子、不落心機意識情想。等你開口、堪作什麼。計較生時、鷂子過新羅。

雪竇、他に一拶を与えて劈頭に便ち道く、「聖諦廓然、何当にか的を辨ぜん」と。雪竇佗の初句の下に於て這の一句を著くるは、不妨に奇特なり。且く道え、畢竟作麼生か的を辨ぜん。直饒鉄眼銅睛なるも、也た摸索不著。這裏に到っては、情識を以て卜度りて得しきや。所以に雲門道く、「撃石火の如く、閃電光に似たり」と。這箇の些子は、心機意識情想に落ちず。你が口を開くを等つも、什麼を作すにか堪えん。計較生ずる時、鷂子新羅に過ぐ。

一 たとい〜とも。「饒」「仮饒」とも。二 すぐれた眼力の喩え。三 心のはたらき。四 〜してよいのか。五 雲門文偃(八六四―九四九)。ただし、以下の語は雲門の語ではないらしい。六 文字通りには「このわずかなこと」。微妙な勘どころ。七 心のはたらきである認識や想像ではとらえられない。八 お前が何か言おうとしても、何の役にも立たぬ。九「箭過新羅」と同意。

雪竇道、你天下衲僧、何当辨的。対朕者誰、著箇還云不識。此是雪竇忒[一]煞老婆、重重為[二]人処。且道、廓然[三]与不識、是一般両般。若是了底人分上、不言而諭。若是未了底人、決定[四]打作両橛。諸[五]方尋常皆道、雪竇重拈一偏。殊不知、四句頌尽公案了。

雪竇道く、「你天下の衲僧、何当にか的を辨ぜん」と。「朕に対する者は誰ぞ」(と武帝の問う)には、箇の「還た云う『識らず』と」と著く。此れは是れ雪竇忒だ老婆にして重重為人の処なり。且く道え、「廓然」と「識らず」と是れ一般か両般か。若是了底人の分上ならば、言わずして諭らん。若是未了底人ならば、決定や両橛と打作さん。諸方尋常皆な道う、「雪竇重ねて拈ずること一偏す」と。殊に知らず、四句にて公案を頌し尽し了れるを。

一 懇切丁寧なこと。老婆心切。二 人の為にする。教化のための手だてを弄する。三 持ち前、資格(を具えている)。四「廓然」と「不識」とに二分してしまう。「両橛」は、二つの部分。五 世間では。

後為慈悲之故、頌出事跡。因茲暗

後に慈悲の為の故に、事跡を頌出す。「茲に因り暗

渡江、豈免生荊棘。達磨本来茲土、与人解粘去縛、抽釘抜楔、剗除荊棘。因何却道、生荊棘。非止当時、諸人即今脚跟下、已深数丈。闔国人追不再来、千古万古空相憶、可煞不丈夫。且道、達磨在什麽処。若見達磨、便見雪竇末後為人処。

一　最後、ぎりぎりの。

雪竇恐怕人逐情見、所以撥転関捩子、出自己見解云、休相憶、清風匝地有何極。既休相憶、你脚跟下事、又作麼生。雪竇道、即今箇裏匝地清風、天上天下有何所極。雪竇拈千古万古之事抛向面前。非止雪竇当時有何極、你諸人分上亦有何極。

に江を渡る、豈に荊棘を生ずることを免れんや」と。達磨本と茲土に来たるや、人の与に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を抜き、荊棘を剗除らんとす。何に因ってか却って道う、「荊棘を生ず」と。止だ当時のみに非ず、諸人即今脚跟下、已に深きこと数丈なり。「闔国の人追うも再来せず、千古万古空しく相憶う」とは、可煞だ丈夫ならず。且く道え、達磨什麽処にか在る。若し達磨を見れば、便ち雪竇末後為人の処を見ん。

雪竇は人の情見を逐わんことを恐怕る、所以に関捩子を撥転して自己の見解を出して云く、「相憶うことを休めよ、清風地に匝く、何の極まることか有る」と。既に相憶うことを休むれば、你が脚跟下の事は又た作麼生。雪竇道く、「即今箇裏に地に匝き清風あり、天上天下、何の極まる所か有る」と。雪竇千古万古の事を拈じて、面前に抛向ぐ。止だ雪竇当時何の極まることか有るというのみに非ず、你諸人の分上も、亦た何

の極まることか有る。

一 局面をからりと変える。「関捩子」は、戸の開閉の便のためにとりつけた「とまら」とそれをうける「とぼそ」。二 本来の自己自身のあり方。三 ここ。「箇中」「此中」「這裏」に同じ。四「向」は動詞の後に付き、動作の方向、場所を示す。五 君たち自身も無辺際の清風を起こしているはずだ。

他又怕人執在這裏、再著方便高声云、這裏還有祖師麼。自云、有。雪竇到這裏、不妨為人赤心片片。又自云、喚来与老僧洗脚、太煞減人威光。当時也好与本分手脚。且道、雪竇意在什麼処。到這裏、喚作驢則是、喚作馬則是、喚作祖師則是。如何名邈。往往喚作雪竇使祖師去也、且喜没交涉。且道、畢竟作麼生。只許老胡知、不許老胡会。

他又た人の這裏に執在れんことを怕れ、再び方便を著けて高声に云く、「這裏に還た祖師有りや」。自ら云く、「有り」と。雪竇這裏に到って、不妨に人の為に赤心片片たり。又た自ら云く、「喚び来たりて老僧の与に脚を洗わしめん」とは、太煞だ人の威光を減ず。当時也た好し本分の手脚を与えんに。且く道え、雪竇の意什麼処にか在る。這裏に到っては、喚んで「驢」と作すも則ち是、喚んで「馬」と作すも則ち是、喚んで「祖師」と作すも則ち是なり。如何に名邈せん。往往、喚んで「雪竇、祖師を使い去く」と作すは、且喜たくも没交渉。且く道え、畢竟作麼生。只だ老胡の知るを許むるも、老胡の会するを許めず。

一「在」は動詞の後に付き、動作が起こる場所を示す。二 まごころを砕くこと。三 ひどく達磨の

権威をおとしめたものだ。四 しかしそれも彼が本領を発揮して然るべきところだったのだ。五 名をつけ姿を描く。六 しばしば。日本語の「往往」よりは頻度が高い。七「老胡」は、達磨を指す。「知」は心得ていること、「会」はさらにその上の了悟。達磨が仏法を「知」っていたとは認めるが、「会」していたとまでは言わせぬぞ。

第二則　趙州至道無難

垂示云、乾坤窄、日月星辰一時黑。直饒棒如雨点、喝似雷奔、也未当得向上宗乗中事。設使三世諸仏、只可自知。歴代祖師、全提不起。一大蔵教、詮注不及。明眼衲僧、自救不了。到這裏、作麼生請益。道箇仏字、拖泥帯水。道箇禅字、満面慚惶。久参上士、不待言之。後学初機、直須究取。

第二則　趙州至道無難

垂示に云く、乾坤窄まり、日月星辰一時に黒し。直饒棒は雨の如く点り、喝は雷の似く奔るも、也た未だ向上宗乗中の事に当得せず。設使三世の諸仏も、只だ自知すべし。歴代の祖師も、全提し起ず。一大蔵教も、詮注し及ばず。明眼の衲僧も、自らを救い了れず。這裏に到って作麼生か請益せん。箇の仏の字を道えば、拖泥帯水。箇の禅の字を道えば、満面の慚惶。久参の上士は、之を言うを待たず。後学初機は、直だ須らく究取むべし。

一 いっときに、一斉に。以上の二句は『雲門広録』巻中から採ったもの。宇宙の秩序が失われた時、仏法はいかなる有効性をもち得るかという問題提起。 二 ぴたりと核心に当る。契悟する。 三 仏法をすら超出した究極の禅の核心。「向上」は「上に向かう」ではなく「～の上(の)」。 四 過去・現在・未来の全ての仏でさえも、いかにすべきか自分では分っていても、それを説くすべはない。 五 「提」は理法を指し示す。「不起」は、そうする能力がなくてできないことを示す。 六 ことばで解説する。 七 教示を願う。 八 「箇」は一箇の略。「仏」ということばを口にする。 九 泥水にまみれ

へとへとになる　ここに、「仏」に手足を取られて自由がきかないこと。　一〇　修行に年季を積んだ。
二　修行の初心者。　三「直」は強辞。

【本則】挙。趙州示衆云、〔這老漢作什麼。莫打這葛藤。〕至道無難、〔非難非易。〕唯嫌揀択。〔眼前是什麼。三祖猶在。〕纔有語言、是揀択、是明白。〔両頭三面。少売弄。魚行水濁、鳥飛落毛。〕老僧不在明白裏。〔賊身已露。這老漢向什麼処去。〕是汝還護惜也無。〔敗也。也有一箇半箇。〕時有僧問、既不在明白裏、護惜箇什麼。〔也好与一拶。舌拄上齶。〕州云、我亦不知。〔拶殺這老漢、倒退三千。〕僧云、和尚既不知、為什麼却道、不在明白裏。〔看、走向什麼処去。逐教上樹去。〕州云、

【本則】挙す。趙州、衆に示して云く、〔這の老漢什麼をか作す。這の葛藤を打すること莫れ。〕「至道難きこと無し、〔難に非ず易に非ず。〕唯だ揀択を嫌う、と。〔眼前是れ什麼ぞ。三祖猶お在り。〕纔に語言有れば、是れ揀択、是れ明白。〔両頭三面。売弄す少れ。魚行げば水濁り、鳥飛べば毛落つ。〕老僧は明白の裏に在らず。〔賊身已に露る。這の老漢什麼処に向ってか去く。〕是れ汝還た護惜する也無」。〔敗れたり。也た一箇半箇有り。〕時に僧有り、問う、「既に明白の裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん」。〔也た好し一拶を与うるに。舌を上齶に拄く。〕州云く、「我も亦た知らず」。〔這の老漢を拶殺めんとせしに、倒退三千。〕僧云く、「和尚既に知らずんば、為什麼にか却って明白の裏に在らずと道う」。〔看よ、什麼処に向ってか走り

一四問事即得、礼拝了退。〔一五頼有這一著。這老賊。〕

去く。逐って樹に上り去かしめん。〕州云く、「事を問うは即ち得し、礼拝し了らば退け」。〔頼いに這の一著有り。這の老賊。〕

一 趙州従諗(七七八―八九七)。二 あれこれ言句を弄するな。三 僧璨『信心銘』の句。「揀択」は比較選択の分別。第五七・五八・五九則にも見える。四 僧璨(?―六〇六)。中国禅宗の第三祖。「猶在」は、まだ生きている。めったなことを言うではないという含み。五 しかし至道という至上命題を立てたとたん、それ自体が一つの揀択の分別となり「明白」な定言の固着となる。ここでは『信心銘』の「明白」も新たな命題の定立として否定される。六 正体(ほんね)を明かさぬ変幻ぶり。『信心銘』の定言を逆にひねり返したところを揶揄する。七 言句を弄すれば、それだけ不純物が生ずる。八 主格に立つ「是」は、次の名詞を強く提示する。九 後生大事にする(その「明白」を)。一〇 したたかな奴が一人か半人はいるものだ。次に出てくる僧を暗示。一一 舌を固定するさま。ここは、一本とられてことばがつまる。一二 三千里後退。趙州の見事な逃げっぷり。一三 さあ、こんどはどこへ逃げこむかな。木の上まで追いつめるぞ。一四 その質問は上出来だ。一五 この手を使うとは、趙州なかなかうまい。「一著」は碁の喩え。

【評唱】*趙州和尚、尋常挙此話頭、只是唯嫌揀択。此是三祖信心銘云、至道無難、唯嫌揀択。但莫憎愛、洞然明白。纔有是非、是揀択、是明白。

【評唱】 趙州和尚、尋常此の話頭を挙す、只だ是れ「唯だ揀択を嫌う」と。此れは是れ三祖の『信心銘』に云く、「至道難きこと無し、唯だ揀択を嫌う。但だ憎愛莫ければ、洞然として明白」と。纔かに是非有れ

纔恁麼会、蹉過了也[二]、鉸釘膠粘[三]、堪作何用。州云、是揀択、是明白。如今参禅問道、不在揀択中、便坐在[四]明白裏。老僧不在明白裏、汝等還護惜也無。汝諸人既不在明白裏、且道、趙州在什麼処。為什麼却教人護惜。

は、是れ揀択、是れ明白。恁麼に会するや纔や、蹉過い了れり。鉸釘膠粘せば、何の用を作すにか堪えん。州云く、「是れ揀択、是れ明白」と。如今の参禅問道、揀択の中に在らざれば、便ち明白の裏に坐在す。「老僧は明白の裏に在らず、汝等還た護惜する也無」とは、汝諸人既に明白の裏に在らずんば、且く道え、趙州は什麼処にか在る。為什麼にか却って人をして護惜せしむ。

＊趙州〜何用(六六字)　福本は「至道無難、唯嫌揀択。但莫憎愛、洞然明白。纔恁麼会、蹉過了也。釘々膠粘、堪作何用」(五三字)。趙州常挙此語。此是三祖信心銘。至道無難、唯嫌揀択。

一 本則の原文は「語言」。こう改めるのは疑問。二 すれちがってしまうことになる。三 ハンダづけやニカワづけ。ある観念に執われること。四「坐在」は安住する、定着する。収まりかえること。

[一]五祖先師常説道[二]、垂[三]手来似過你、你作麼生会。且道、作麼生是垂手処。[四]識取鉤頭意、莫認定盤星。

五祖先師常に説道く、「垂手し来たりて你に似過す、你作麼生か会す」と。且く道え、作麼生か是れ垂手の処。鉤頭の意を識取せよ、定盤星に認むること莫れ。

一 五祖法演(?—一一〇四)。圜悟の師。二 言う。「道」は意味のない接尾語。三「垂手」は手をさしのべて教える。「来」は動作が対象へ向かうことを示す助詞。「似」は示す。「過」は動作の時間・

空間上の経過を示す助詞。四「鉤頭」は釣針の先。ここは、ポイントのところ。「定盤星」は竿秤りの目盛り。

這僧出来、也不妨奇特。捉趙州空処、便去拶佗、既不在明白裏、護惜箇什麼。趙州更不行棒行喝、只道、我亦不知。若不是這老漢、被佗拶著、往往忘前失後。頼是這老漢、有転身自在処、所以如此答他。如今禅和子、問著也道、我亦不知不会。争奈同途不同轍。這僧有奇特処、方始会問、和尚既不知、為什麼却道、不在明白裏。更好一拶。若是別人、往往分疎不下。趙州是作家、只向他道、問事即得、礼拝了退。這僧依旧無奈這老漢何、只得飲気呑声。

這の僧出で来たるは也た不妨に奇特たり。趙州の空処を捉えて、便ち去きて佗を拶す、「既に明白の裏に在らずんば箇の什麼をか護惜せん」と。趙州更に棒を行じ喝を行ずということをせず、只だ道う、「我も亦た知らず」と。若し是れ這の老漢にあらずんば、佗に拶著せられて、往往忘前失後せん。頼是に這の老漢、転身自在の処有り、所以に此の如く他に答う。如今の禅和子、問著るれば也た道う、「我も亦た知らず会せず」と。争奈せん途を同じくするも轍を同じくせず。這の僧奇特たる処有って、方始めて会く問う、「和尚既に知らずんば、為什麼にか却って道う『明白の裏に在らず』と」と。更に好し一拶せんに。若是別人ならば、往往分疎不下ならん。趙州は是れ作家なれば、只だ他に向って道う、「事を問うは即ち得し、礼拝し了らば退け」と。這の僧依旧も這の老漢を奈何ともする

こと無く、只だ気を飲み声を呑むを得るのみ。

此是大手*宗師、不与你論玄論妙、論機論境、一向以本分事接人。所以道、相罵饒你接觜、相唾饒你潑水。殊不知這老漢、平生不以棒喝接人、只以平常言語、只是天下人不奈何。蓋為他平生無許多計較、所以横拈倒用、逆行順行、得大自在。如今人不理会得、只管道、趙州不答話、不為人説。殊不知、当面蹉過。

此れは是れ大手の宗師なれば、你と玄を論じ妙を論じ、機を論じ境を論ずということなく、一向に本分事を以て人を接す。所以に道う、「相罵るには你に饒す觜を接げ、相唾するには你に饒す水を潑げ」と。殊に知らず、這の老漢は、平生棒喝を以て人を接せず、只だ平常の言語を以てするのみなるに、只だ是れ天下の人奈何ともせず。蓋し他が平生許多の計較無きが為に、所以に横拈倒用、逆行順行、大自在を得たるなり。如今の人理会し得ず、只管道う、「趙州は答話えず、人の為に説かず」と。殊に知らず、当面に蹉過えるを。

一 グサリと刺す。切り込む、追及する。 二 「更」は否定の意味を強める。決して、まったく。 三 禅坊主。 四 行く道は同じでも行き方が違う。 五 話の間に挿んだ著語的なコメント。 六 受け答えしきれぬ。「分疎」は釈明。「不下」は動作がスムーズにいかない意を示す。 七 練達した禅匠、やり手。 八 これまで通り、相変らず、依然として。 九 「無奈〜何」で、〜をどうしようもない。 一〇 やむなく。〜するほかない。 一一 無念の思いを抑える。

*大手　福本は「大胆」。

一「玄妙」が発現したところが「機境」。二 自己の本来性に根ざした在り方。三 罵るならいくらでも畳みかけてよい。唾を吐きかけるなら水までぶっかけても構わぬ。四 絶対相対、迷悟凡聖などについてのくだくだしい分別判断。五 横にしたり倒さにしたり。六 趙州の真機が正面にあるものを、あたらすれちがって見過ごす。

【頌】至道無難、〔三重公案。満口含霜、道什麼。〕言端語端。〔魚行水濁。七花八裂。搽胡也。〕一有多種、〔分開好。只一般有什麼了期。〕二無両般。〔何堪四五六七。打葛藤作什麼。〕天際日上月下、〔覷面相呈。頭上漫漫、脚下漫漫。切忌昂頭低頭。〕檻前山深水寒。〔一死更不再活。還覚寒毛卓竪麼。〕髑髏識尽喜何立、〔棺木裏瞠眼。盧行者是它同参。〕枯木龍吟銷未乾。〔咄。枯木再生花、達磨遊東土。〕難難。〔邪法難扶。倒一説。這裏是什麼所在、説難説

【頌】至道難きこと無し、〔三重の公案。満口に霜を含みて、什麼をか道わん。〕言端語端。〔魚行けば水濁る。七花八裂。搽胡なり。〕一に多種有り、〔分開せば好し。只だ一般にして什麼の了期か有らん。〕二に両般無し。〔何ぞ堪えん四五六七。葛藤を打して什麼か作ん。〕天際に日上り月下り、〔覷面に相呈す。頭上漫漫、脚下漫漫。切に忌む、頭を昂げ頭を低るることを。〕檻の前に山深く水寒し。〔一たび死すれば更に再びは活きず。還た寒毛の卓竪つことを覚ゆるや。〕髑髏識尽きて喜何ぞ立らん、〔棺木の裏に眼を瞠く。盧行者は是れ它の同参。〕枯木龍吟して銷ゆるも未だ乾かず。〔咄。枯木再び花を生じ、達磨東土に遊ぶ。〕難し難し。〔邪法は扶え難し。倒一説。這裏、是れ什麼

易。〕揀択明白、君自看。〔瞎。〕[一八]将謂[一九]由別人、頼値自看。[二〇]不干山僧***事。〕

の所在にしてか、難と説い易と説う。〕揀択と明白と、君自ら看よ。〔瞎。別人に由すと将謂いしに、頼に自ら看るに値う。山僧が事に干らず。〕

＊有什麼了期　福本は「打葛藤作什麼」。＊＊打葛藤作什麼　福本は「有什麼了期」。＊＊＊山僧事　福本はこの後に雪竇の語として「還有不難底麼」の六字有り。

一 僧璨・趙州・雪竇の三人がからみ合った公案だ。二 霜が口いっぱいでものが言えない。三 一言一句のはしばしが、みなそれ(至道)を開示している。四 支離滅裂。ことばのかけらの散乱。五 第一則・本則の評唱の「搽糊」と同じ。とらえどころのないもやもや。六 一つの理にもさまざまな面があるが、その多様さの一つ一つが別ものではない。七 分けてみるのがよい。八 けりのつく時。九 〜どころではない。〜は問題外。一〇 満天地が大道の現成。「漫漫」は涯なくひろがるさま。一一 きょろきょろしていてはならぬ。一二 一切の知覚も感情も消えた中、喜怒愛憎は生じようもない。一三 六祖慧能(六三八―七一三)。俗姓盧氏。一四 龍の形をした枯木が風に吠えるのを喩え、そこに枯木のしたたかな生機を見て取る。一五 邪法は支えきれない、いずれは自ら倒れる。無難だの難だのという捏ねまわしを邪法ときめつける。一六 無難をただ難と反転しただけだ。第一五則を参照。一七 「所在」は、ところ。ここをどこと心得て、難の易のとほざくか。一八 自ら看よ、と人に転嫁するとは、お前(雪竇)は目が見えないのか。一九 自ら看よと他人まかせにしたのかと思ったら、有難やご自分で看て下さるのか。お手並を拝見するとしよう。二〇 わしのあずかり知らぬことよ。「山僧」は圜悟の謙遜の自称。

〔評唱〕雪竇知侘落処、所以如此頌

〔評唱〕雪竇は侘の落処を知る、所以に此の如く「至

至道無難、便随後道、言端語端、挙一隅、不以三隅反。雪竇道、一有多種、二無両般、似三隅反一。你且道、什麼処是言端語端処。為什麼一却有多種、二却無両般。若不具眼、向什麼処摸索。若透得這両句、所以古人道、打成一片依旧見、山是山、水是水、長是長、短是短、天是天、地是地。有時喚天作地、有時喚地作天、有時喚山不是山、喚水不是水。畢竟*怎生得平穏去。風来樹動、浪起船高。春生夏長、秋収冬蔵。一種平懐、泯然自尽。則此四句頌、頓絶了也。

*怎生　福本は「作麼生」。

道難きこと無し」を頌し、便ち随後に「言端語端」と道うは、一隅を挙ぐるも三隅を以て反えず。雪竇の「一に多種有り、二に両般無し」と道うは、三隅もて一に反うるに似たり。你且く道え、什麼処か是れ言端語端の処。為什麼にか一に却って多種有り、二に却って両般無き。若し眼を具せずんば、什麼処に向いて摸索せん。若し這の両句を透得せば、所以に古人の道う、「打成一片すれば依旧に見ゆ、山は是れ山、水は是れ水、長は是れ長、短は是れ短、天は是れ天、地は是れ地」なり。(しかるに)有る時は天を喚んで地と作し、有る時は地を喚んで天と作し、有る時は山を喚んで是れ山にあらずとし、水を喚んで是れ水にあらずとす。畢竟怎生にか平穏にし去くことを得ん。風来たれば樹動き、浪起れば船高し。春は生じ夏は長じ、秋は収め冬は蔵す。一種平懐なれば、泯然として自ら尽く。則ち此の四句の頌もて頓絶し了れり。

一 つまり、ただここに落着する究極のポイント。 二 すぐにおっかぶせて、間をおかずに。 三 「一隅をあげて教示すれば三隅をあげて返答する」(『論語』述而)というほどの周到さではない。 四 この「所以」は衍字であろう。一夜本にはない。 五 一切を一如と見て取る。 六 この二句(「山是山、水是水」)は黄檗の『宛陵録』や、玄沙・雲門の語録にも見える。 七 当たり前のありようの確かさ。 八 『史記』太史公自序、『淮南子』本経などに見える。 九 『信心銘』の句。一様に平安無事となれば、すべてあとかたもなくなる。 一〇 (以上でこの四句の趣旨は)ぴたりと尽きている。

雪竇有餘才、所以分開[一]結裹、算来也只是[二]頭上*安頭。道至道無難、言端語端、一有多種、二無両般、雖無許多事、天際日上時月便下、檻前山深時水便寒。到這裏、言也端語也端、[三]頭頭是道、物物全真。豈不是[四]心境俱忘、打成一片処。雪竇頭上太[五]孤峻生、末後也**漏[六]逗不少。若[七]参得透、[八]見得徹、自然如醍醐上味相似。若是[九]情解未忘、便見七花八裂、決定不能会如此説話。

雪竇は餘才有り、所以に分開し結裹するも、算来に也た只だ是れ頭上に頭を安くのみ。「至道難きこと無し、言端語端、一に多種有り、二に両般無し」と道うは、許多の事無しと雖も、天際に日上る時は月便ち下り、檻の前に山深き時は水便ち寒し。這裏に到っては、言も也た端、語も也た端、頭頭是れ道、物物全て真なり。豈に是れ心境倶に忘じて、打成一片の処にあらずや。雪竇頭上は太だ孤峻生も、末後は也た漏逗少なからず。若し参得透し見得徹せば、自然に醍醐上味の如くに相似ん。若是情解未だ忘ぜずんば、便ち見ん七花八裂して、決定ずや此の如き説話を会する能わざらんことを。

＊安頭　蜀本に無し。　＊＊漏逗　福本は「料掉」。
一 口をしっかりと結んで包む。ここは、締めくくって収束した。二 余計な説明を加える。三 ひとつひとつ、どれもこれも。四 主体も客体も消えてしまう。五 鋭くそそり立つさま。超越的な風格。「太～生」で、はなはだ～だ。「生」は語助。六 破綻をあらわす。ボロが出る。七 参究して突きぬける。「得」は結果補語。八 底の底まで見抜く。「得」は程度補語。九 思弁的な理解。

髑髏識尽喜何立、枯木龍吟銷未乾、只這便是交加処。這＊僧恁麼問、趙州恁麼答。州云、至道無難、唯嫌揀択。纔有語言、是揀択、是明白。老僧不在明白裏、是汝還護惜也無。時有僧便問、既不在明白裏、又護惜箇什麼。州云、我亦不知。僧云、和尚既不知、為什麼却道、不在明白裏。州云、問事即得、礼拝了退。

此是古人問道底公案。雪竇拽来、二一串穿却、用頌至道無難、唯嫌揀択。如今人不会古人意、只管咬言嚼句。

「髑髏識尽きて喜何ぞ立らん、枯木龍吟して銷ゆるも未だ乾かず」とは、只だ這れ便ち是れ交加の処。這の僧恁麼に問い、趙州恁麼に答う。州云く、「至道難きこと無し、唯だ揀択を嫌う。纔に語言有れば、是れ揀択、是れ明白。老僧は明白の裏に在らず、是れ汝還た護惜する也無」と。時に僧有り、便ち問う、「既に明白の裏に在らずんば、又た箇の什麼をか護惜せん」。州云く、「我も亦た知らず」。僧云く、「和尚既に知らずんば、為什麼にか却って道う、『明白の裏に在らず』と」。州云く、「事を問うは即ち得し、礼拝し了らば退け」と。

此れは是れ古人、道を問う底公案。雪竇拽き来たり、

有甚了期。若是通方作者、始能辨得這般説話。

＊ 這僧〜了退〔九四字〕 衍文か。
一 ごちゃまぜ。入りくんで弁別できない状態。 二 入りくんだところをズブリと刺し貫いた。 三 方便に通じた練達の禅匠。 四 正体・真実を見て取る。ぴたりと見分ける、ものにする。

不見僧問香厳、如何是道。厳云、枯木裏龍吟。僧云、如何是道中人。厳云、髑髏裏眼睛。僧後問石霜、如何是枯木裏龍吟。霜云、猶帯喜在。如何是髑髏裏眼睛。霜云、猶帯識在。
　僧又問曹山、如何是枯木裏龍吟。山云、血脈不断。如何是髑髏裏眼睛。山云、乾不尽。什麼人得聞。山云、尽大地未有一箇不聞。僧云、未審龍吟是何章句。山云、不知是何章句、

一串に穿却して、用て「至道難きこと無し、唯だ揀択を嫌う」を頌す。如今の人古人の意を会せず、只管言を咬み句を嚼む。甚の了期か有らん。若是通方の作者ならば、始めて能く這般る説話を辨得せん。

　見ずや、僧香厳に問う、「如何なるか是れ道」。厳云く、「枯木の裏の龍吟」。僧云く、「如何なるか是れ道中の人」。厳云く、「髑髏の裏の眼睛」と。僧、後に石霜に問う、「如何なるか是れ枯木の裏の龍吟」。霜云く、「猶お喜を帯ぶる在」。「如何なるか是れ髑髏の裏の眼睛」。霜云く、「猶お識を帯ぶる在」と。
　僧、又た曹山に問う、「如何なるか是れ枯木の裏の龍吟」。山云く、「血脈断たず」。「如何なるか是れ髑髏の裏の眼睛」。山云く、「乾き尽らず」。「什麼人か聞くことを得る」。山云く、「尽大地未だ一箇も聞かざるも

一〇聞者皆喪。

復有頌云、枯木龍吟真見道、髑髏無識眼初明。喜識尽時消息尽、当人那辨一一濁中清。雪竇可謂大有手脚。一時与你交加頌出。然雖一二如是、都無両般。

の有らず」。僧云く、「未審、龍吟とは是れ何の章句ぞ」。山云く、「是れ何の章句なるかを知らざれども、聞く者は皆な喪す」と。

復た頌有り云く、「枯木龍吟真に道を見る、髑髏識無くして眼初めて明らかなり。喜識尽くる時消息尽く、当人那ぞ辨ぜん濁中の清」と。雪竇は大いに手脚有り、と謂うべし。一時に你が与に交加して頌出す。是の如くなりと然雖も、都て両般無し。

一 相手の注意を喚起する語。 二『伝灯録』一七・曹山本寂章に見える。 三 香厳智閑(?—八九八)。 四 石霜慶諸(八〇七—八八八)。 五 句末の「在」は、強い断定の語気を表す。 六 曹山本寂(八四〇—九〇一)。 七 その枯木には血が通っている。なんとしたたかな、見事な生機だ。 八 そのドクロは枯れ切っておらぬ。まだ生き身のギロリとした目玉をむいておるぞ。 九 いったい、そもそも。疑問を提示する語。 一〇 真理に直面すると生命を失う。 一一 自らの「清」を自覚することさえない完璧な「清」。 一二「雖然」「雖」と同じ。

雪竇末後有為人処、更道、難難。只這難難、也須一三透過始得。何故。百一四丈道、一切語言、山河大地、一一転帰自己。雪竇凡是一拈一掇、到末後、

雪竇末後に為人の処有って、更に道う、「難し難し」と。只だ這の「難し難し」、也た須らく透過して始めて得し。何故ぞ。百丈道く、「一切の語言と山河大地を一一転じて自己に帰す」と。雪竇は凡是そ一拈

須帰自己。且道、什麼処是雪竇為人処。揀択明白、君自看、既是打葛藤頌了、因何却道、君自看。[四]好彩、教你自看。且道、[五]意落在什麼処。莫道諸人理会不得、設使山僧、到這裏、[六]也只是理会不得。

一摂するに、末後に到っては須ず自己に帰す。且く道え、什麼処か是れ雪竇の人の為にする処。「揀択と明白と君自ら看よ」とは、既に是れ葛藤を打して頌し了れるに、何に因ってか却って道う、「君自ら看よ」と。好彩なり、你をして自ら看しむ。且く道え、意什麼処にか落在す。諸人理会し得ざるは莫道、設使山僧なるとも、這裏に到っては、也た只是に理会し得ず。

一「須～始得」で、すべからく～でなくてはならぬ、(そうであってこそ)始めてよろしい。～でなければならない。「須」は「須是」「須得」「直須」とも。　二「難」関を突きぬける。　三 百丈懐海(七四九―八一四)。『伝灯録』六・百丈懐海章には「読経看教、語言皆須宛転帰就自己」と。　四「彩」は賭博での当り目。(自ら看よ、と指名されて君は)ついているのだ。　五 どこに帰着するか。　六 ひとえに、ひたすら。強調の副詞。

第三則　馬大師不安

垂示云、一機一境、一言一句、且図有箇入処、好肉上剜瘡、成窠成窟。大用現前、不存軌則、且図知有向上事、蓋天蓋地、又摸索不著。恁麼也得、不恁麼也得、太廉纖生。恁麼也不得、不恁麼也不得、太孤危生。不渉二途、如何即是。請試挙看。

第三則　馬大師不安

垂示に云く、一機一境、一言一句に且く箇の入処有らんと図れば、好肉上に瘡を剜り、窠を成し窟を成す。大用現前して、軌則を存せず、且く向上の事有るを知らんと図れば、蓋天蓋地、又た摸索不著。恁麼も也た得し、不恁麼も也た得し、太だ廉纖生。恁麼も也た得からず、不恁麼も也た得からず、太だ孤危生。二途に渉らず、如何すれば即ち是ならん。請う試みに挙し看ん。

一 ひとつひとつのはたらき、動作。 二 悟入への手がかり。 三 せずもがなの余計なことをする喩え。 四 (仏法の)大いなるはたらきの展開には、きまったパターンは無い。 五 仏向上事。仏を踏み超えた消息。「向上宗乗中事」(第二則の垂示)に同じ。 六 繊細微妙。 七 ひとり高くそそり立つ意。「危」は峻嶮なこと。 八 「試〜看」で「ひとつ〜してみよう」という意思表示。また、「ためしに〜してみなさい」という丁寧な勧誘を表す。

【本則】挙。馬大師不安。〔這漢漏逗不少。帯累別人去也。〕院主問、

【本則】挙す。馬大師安らかならず。〔這の漢漏逗少なからず。別人を帯累にし去る。〕院主問う、「和尚、

和尚、近日尊候如何。[四]〔四百四病、一時発。[五]三日後不送亡僧、是好手。[六]仁義道中。〕大師云、[七]日面仏、月面仏。〔[八]可煞新鮮、[九]養子之縁。〕

一 馬祖道一（七〇九―七八八）。二 病気になった。三 寺の執事、事務長。四 ごきげんいかがですか。五（馬大師が）三日経っても死なずにいたら、立派だ。六 世俗のしきたりどおりだ。ここは、院主が世間通用の挨拶をしたことをいう。七「日面仏」は千八百歳の長寿の仏、「月面仏」は一日一夜の短命の仏（『仏名経』七）。『荘子』逍遥遊の「朝菌」と「大椿」の例のように、ここも寿命の長短の両極をあげて、生死の超脱を示した、と見られる。八 なんともあざやか。九「養子」は子を生むこと。ここの「子」は弟子。この親なればこその対応ぶり。

【評唱】馬大師不安。院主問、和尚、近日尊候如何。大師云、日面仏、月面仏。祖師若不以本分事相見、如何得此道光輝。此箇公案、若知落処、便独歩丹霄。若不知落処、往往枯木巌前差路去在。若是本分人、到這裏、須是有駆耕夫之牛、奪飢人之食底手

近日尊候如何」。〔四百四病、一時に発す。三日の後に亡僧を送らずんば是れ好手。仁義道中。〕大師云く、「日面仏、月面仏」。〔可煞だ新鮮なり、養子の縁。〕

【評唱】馬大師安らかならず。院主問う、「和尚、近日尊候如何」。大師云く、「日面仏、月面仏」と。祖師若し本分事を以て相見せずんば、如何ぞ此の道の光輝くを得ん。此箇の公案、若し落処を知らば、便ち丹霄を独歩せん。若し落処を知らずんば、往往枯木巌前に路を差え去く在。若是本分の人ならば、這裏に到って、須是らく耕夫の牛を駆り、飢人の食を奪う底の手脚有

脚、方見馬大師為人処。

って、方めて馬大師の為人の処を見るべし。

一 正法を伝持した人びと。二「此」に同じ。三「丹霄」は夕焼け空。並ぶもののない超脱のさま。四 道もない深山に踏み迷う。同安常察の『十玄談』正位前に「枯木巌前差路多、行人到此尽蹉跎……」(『伝灯録』二九)と。五「須是a方b」で、aしてこそはじめてb。六 相手をどん底まで突き落とす徹底非情の導き方。『臨済録』示衆にも「照用同時、駈耕夫之牛、奪飢人之食……」(岩波文庫四五頁)と。

如今多有人道、馬大師接院主。且喜没交渉。如今衆中[一]多錯会瞠眼云、在這裏、左眼是日面、右眼是月面。有什麼交渉。驢年[二]未夢見在。只管蹉過古人事。只如[三]馬大師如此道、意在什麼処。有底云、点[四]平胃散一盞来。有什麼巴鼻[五]。到這裏、作麼生得平穏去。所以道、向上[六]一路、千聖不伝。学者労形、如猿捉影。

如今多く人有って道う、「馬大師は院主を接す」と。且喜たくも没交渉。如今衆中多く錯り会し眼を瞠って云く、「這裏に在っては、左眼は是れ日面、右眼は是れ月面」と。什麼の交渉か有らん。驢年にわたり未だ夢にも見ざる在。只管古人の事に蹉過す。只如えば馬大師此の如く道うは、意什麼処にか在る。有る底は云う、「平胃散一盞を点じ来たれ」と。什麼の巴鼻か有らん。這裏に到って作麼生か平穏になし去くを得ん。所以に道う、「向上の一路は千聖すら伝えず。学ぶ者の形を労すること、猿の影を捉えんとするが如し」と。

一 修行僧たち。二 長いだけで無内容な年月。三 たとえば〜は。ところで〜は。改めて主題を提示する時の言い出し。「祇如」とも。「且如」より語気が強い。四「点」は点薬、薬を調合し服用する。

散」は柺杖の類。「蓋」は量詞。 [五] 手がかり、とらえどころ。 [六] 「向上一路」は、仏の上へ踏み出る道。「如猿捉影」は、実体の無いものを追う喩え。盤山宝積（馬祖の法嗣）の上堂の語（『伝灯録』七）。

只這日面仏、月面仏、極是難見。雪竇到此、亦是難頌。却為他見得透、用尽平生工夫、指注他。諸人要見雪竇麼。看取下文。

【頌】日面仏、月面仏。〔[一]開口見胆。如両面鏡相照、於中無影像。〕[二]五帝三皇是何物。〔[三]太高生。[四]莫謾他好。可貴可賤。〕[五]二十年来曾苦辛、〔自是[六]你落草。不干山僧事。[七]啞子喫苦瓜。〕為君幾下蒼龍窟。〔何消恁麼。莫錯用心好。也莫道無奇特。〕[八]屈。〔[九]愁殺人。愁人莫向愁人說。〕[一〇]堪述。〔[一一]向阿誰說。[一二]説与愁人愁殺人。〕明眼衲

只だ這の「日面仏、月面仏」、極めて是れ見難し。雪竇此に到って、亦た是れ頌し難し。却って他、見得透せるが為に、平生の工夫を用い尽して他を指注す。諸人雪竇を見んと要するや。下文を看取よ。

【頌】日面仏、月面仏。〔口を開き胆を見す。両面の鏡の相照して、中に影像無きが如し。〕五帝三皇、是れ何物ぞ。〔太だ高生。他を謾ること莫くんば好し。貴ぶべし、賤しむべし。〕二十年来曾て苦辛し、〔自是より你落草す。山僧が事に干らず。啞子苦瓜を喫う。〕君が為に幾か蒼龍の窟に下る。〔何ぞ恁麼なるを消いん。錯って心を用いること莫くんば好し。也た「奇特無し」と道うこと莫れ。〕屈。〔人を愁殺す。愁人は愁人に向って説うこと莫れ。〕述ぶるに堪えんや。〔阿誰

僧莫軽忽。〔更須子細。咄。倒退三千。〕

に向ってか説わん。愁人に説与わば人を愁殺す。〕明眼の衲僧も軽忽にすること莫れ。〔更に須らく子細にすべし。咄。倒退三千。〕

一 胸中をさらけ出す。「開口見心」とも。雪竇が馬祖の語をそのまま頌したことをいう。二 中国古代の伝説上の五人の天子と三人の皇帝。三 なんとご立派な。四 「莫〜好」で、〜しない方がいい。婉曲な禁止。五 二十年間苦労したおかげで、三皇五帝を何とも思わぬ心境となった。六 もとは落ちぶれて乞食になったり、山賊に身を落とすこと。転じて、低い次元に転落すること。また、敢えてそこへ下り立つ意にも用いる。七 苦しい思いをしながらそれを口に出せないことを揶揄する。八 身に覚えがないのに、ひどい仕打ちにあった。冤罪を被った。「冤屈」とも。九 ひどく憂えさせる。「殺」は動詞の後に付いて意味を強める。一〇 この無念さは口にも言えぬ。反語。一一 だれ。「阿」は人称代名詞に付く接頭語。一二 〜に言う。「与」は動作が相手のために行われることを示す。

〔評唱〕神宗在位時、自謂此頌諷国。所以不肯人蔵。雪竇先拈云、日面仏、月面仏。一拈了却云、五帝三皇是何物。且道、他意作麼生。適来已説了、也直下注佗。所以道、垂鉤四海、只釣獰龍。只此一句已了。

〔評唱〕神宗在位の時、自ら謂えり、此の頌は国を諷す、と。所以に肯て蔵に入れず。雪竇先ず拈じて云く、「日面仏、月面仏」と。一拈し了るや却って云う、「五帝三皇是れ何物ぞ」と。且く道え、他の意作麼生。適来已に説き了り、也た直下に佗に注す。所以に道う、「鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る」と。只だ此の一句もて已了る。

一 北宋の第六代皇帝（一〇四八－八五、在位一〇六七－八五）。二 大蔵経に編入すること。三 そのあとで。四 さきほど、いましがた。五 梁山縁観（北宋の人）の上堂の語（『会元』一四。ただし「只」を「祇」に作る）。

後面雪竇自頌他平生所以用心参尋、二十年来曾苦辛、為君幾下蒼龍窟。似箇什麼。一似人入蒼龍窟裏取珠相似。後来打破漆桶、将謂多少奇特、元来只消得箇五帝三皇是何物。且道、雪竇語落在什麼処。須是自家退歩看、方始見得他落処。

豈不見、興陽剖侍者、答遠録公問。娑竭出海乾坤震、覿面相呈事若何。剖云、金翅鳥王当宇宙、箇中誰是出頭人。遠云、忽遇出頭、又作麼生。剖云、似鶻捉鳩君不信、髑髏前験始

一 まっ黒な漆桶のような迷いの闇を突きぬけた。二 ～するだけのこと。

後面に雪竇は自ら他の平生に心を用いて参尋する所以を頌す、「二十年来曾て苦辛し、君が為に幾か蒼龍の窟に下る」と。箇の什麼にか似たる。一に人の蒼龍の窟裏に入って珠を取るが似くに相似たり。後来に漆桶を打破したれば、多少奇特たらんと将謂いしに、元来只だ箇の「五帝三皇是れ何物ぞ」というを消得るのみ。且く道え、雪竇の語は什麼処にか落在す。須是らく自家ら退歩して看て、方始めて他の落処を見得せん。

豈に見ずや、興陽の剖侍者、遠録公の問うに答うるを。「娑竭海を出でて乾坤震う、覿面に相呈する事若何」。剖云く、「金翅鳥王宇宙に当る、箇中誰か是れ出頭する人」と。遠云く、「忽し出頭するに遇わば、又た作麼生」。剖云く、「鶻、鳩を捉うるに似たるも君信

知真。遠云、恁麼則屈節当胸、退身三歩。剖云、須弥座下烏亀子、莫待重遭点額回。所以三皇五帝亦是何物。

ぜず、髑髏前に験して始めて真を知らん」。遠云く、「恁麼ならば則ち節を屈して胸に当て、退身三歩せん」。剖云く、「須弥座下の烏亀子、重ねて点額に遭うを待ちて回ること莫れ」と。所以て三皇五帝亦た是れ何物ぞ、というなり。

一 興陽清剖(北宋中期頃の人)。「侍者」は、住持の給仕・補佐をする役。二 浮山法遠(九九一―一〇六七)。吏務に精通していたので遠録公とよばれた。以下の問答は『会元』一四・興陽清剖章に見える。三 娑伽羅(Sāgara)。護法の善神、八大龍王の一。ここは馬祖になぞらえる。四 迦楼羅(garuda)の意訳。仏法を護持する八大神将の一、龍を食う。ここは雪竇になぞらえる。五「ここ」の意。「此中」「箇裏」「這裏」に同じ。六 ドクロ(死)を眼前にして。七 自分の意見をひっこめ、胸に手を当て(拱手し頭を下げ)て三歩身を退く。八「烏亀子」は亀をいう罵語。須弥座(説法するための座)の下でうずくまっているだけのウスノロ。九 龍となれずに額に傷をつけて引き下がる。転じて、登龍門で落第すること。

人多不見雪竇意、只管道諷国。若恁麼会、只是情見。此乃禅月題公子行云、錦衣鮮華手擎鶻、閑行気貌多軽忽。稼穡艱難総不知、五帝三皇是何物。雪竇道、屈、堪述。明眼衲僧

人多く雪竇の意を見ず、只管「国を諷す」と道う。若し恁麼に会せば、只だ是れ情見なり。此れは乃ち禅月の公子行と題するに云く、「錦衣鮮華にして手に鶻を擎ぐ、閑行の気貌に軽忽多し。稼穡の艱難総て知らず、五帝三皇是れ何物ぞ」と。雪竇道く、「屈。述ぶ

莫軽忽。多少人[4]向蒼龍窟裏作活計。
直饒是頂門具眼、[5]肘後有符明眼衲僧、
照破四天下、到這裏、也莫軽忽。須
是子細始得。

るに堪えんや。明眼の衲僧も軽忽にすること莫れ」と。
多少の人、蒼龍の窟裏に向いて活計を作す。直饒是れ
頂門に眼を具し、肘後に符有る明眼の衲僧にして四天
下を照破するも、這裏に到れば也た軽忽にすること莫
れ。須是らく子細にして始めて得し。

一 禅月大師、貫休(八三二―九一二)。二『禅月集』一には「少年行」と題するが、『唐詩紀事』七五は「公子行」としてこの詩を引く。三 遊行三昧に奢った顔つき、思いあがった驕慢な態度。四 まかりまちがえば命も失いかねない難関に首を突っこんで暮しを立てる。五 護身符を脇の下につける。

第四則　徳山挟複子

垂示云、青天白日、不可更指東劃西。時節因縁、亦須応病与薬。且道、放行好、把定好。試挙看。

一 青空に太陽が輝く。晴れ晴れとして心にくもりのないさま。二 東を指さしたり西をさしたり。お茶を濁す。三 ある決定的な時点、契機。四 機にかなった対応をする。五 自らの工夫にまかせる。ほうっておく。六 規範に従わせる。規制する。「把住」とも。

【本則】挙。徳山到潙山。〔担板漢。野狐精。〕挟複子於法堂上、〔不妨令人疑著、納敗欠。〕従東過西、従西過東、〔可煞有禅作什麼。〕顧視云、無無、便出。〔好与三十棒。可煞気衝天。真獅子児、善獅子吼。〕雪竇著語云、勘破了也。〔錯、果然、

第四則　徳山複子を挟む

垂示に云く、青天白日、更に東を指し西を劃すべからず。時節因縁、亦た須らく病に応じて薬を与うべし。且らく道え、放行するが好きか、把定するが好きか。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。徳山、潙山に到る。〔担板漢。野狐精。〕複子を挟んで法堂上を、〔不妨に人を疑著しむ、敗欠に納る。〕東より西に過り、西より東に過り、〔可煞だ禅有るも什麼か作ん。〕顧視して「無、無」と云って便ち出づ。〔好し三十棒を与えん。可煞だ気天を衝く。真の獅子児善く獅子吼す。〕雪竇著語して云く、「勘破し了れり」。〔錯えり、果然して、点。〕徳山、

点。〕徳山至門首[11]却云、也不得草草[12]。〔放[13]去収来。頭上太高生、末後太低生。知過必改、能有幾人。〕便具威儀、再入相見。〔依前作這去就。已是第[14]二重敗欠。嶮[15]。〕潙山坐次、〔冷眼看這老漢。捋虎鬚、也須是這般人始得。〕徳山提起坐具[16]云、和尚。〔改[17]頭換面、無風起浪。〕潙山擬[18]取払子。〔須是那漢始得。運[19]籌帷幄之中。不妨坐[20]断天下人舌頭。〕徳山便喝、払袖而出。〔野狐精見解。這一喝、也有権[21]、也有実、也有照、也有用。一等是拏[22]雲攫霧者、就中奇特。〕雪竇著語云、勘破了也。〔錯、果然、点。〕徳山背[23]却法堂、著草鞋便行。〔風[24]光可愛、公案未円。贏[25]得項上笠、失却脚下鞋。已是喪[26]身失命了也。〕

門首に至り、却って云く、「也た草草にするは得からず」と。〔放去し収来す。頭上は太だ高生、末後は太だ低生。過を知って必ず改むるは能く幾人か有らん。〕便ち威儀を具え、再び入って相見す。〔依前として這の去就を作す。已に是れ第二重の敗欠。嶮うし。〕潙山坐りおる次、〔冷眼に這の老漢を看る。虎鬚を捋くは也た須是らく這般る人にして始めて得し。〕徳山、坐具を提起して云く、「和尚」。〔頭を改め面を換え、風無きに浪を起す。〕潙山払子を取らんと擬す。〔須是らく那の漢にして始めて得し。籌を帷幄の中に運す。不妨に天下の人の舌頭を坐断す。〕徳山便ち喝して、袖を払って出づ。〔野狐精の見解。這の一喝也た権有り也た実有り、也た照有り也た用有り。一等じく是れ雲を拏り霧を攫む者のうち、就中奇特たり。〕雪竇著語して云く、「勘破し了れり」。〔錯えり、果然して、点。〕徳山法堂に背却けて、草鞋を著けて便ち行く。〔風光愛すべきも、公案未だ円かならず。項上の笠を

潙山至晩問首座、[二七]適来新到在什麼処。〔[二八]東辺落節、西辺抜本。[二九]眼観東南、意在西北。〕首座云、[三〇]当時背却法堂、著草鞋出去也。〔霊亀曳尾。好与三十棒。這般漢脳後、合喫多少。〕潙山云、此子、已後[三一]向孤峰頂上[三二]盤結草庵、呵仏罵祖去在。〔[三三]賊過後張弓。[三四]天下衲僧跳不出。〕雪竇著語云、[三五]雪上加霜。〔錯、果然、点。〕

贏ち得て、脚下の鞋を失却う。已是に喪身失命し了れり。〕潙山、晩に至って首座に問う、「適来の新到、什麼処にか在る」。〔東辺に落節し、西辺に抜本す。眼東南を観て、意西北に在り。〕首座云く、「当時、法堂に背却け、草鞋を著けて出で去れり」。〔霊亀尾を曳く。好し三十棒を与えん。這般る漢は脳後に多少喫す合し〕。潙山云く、「此の子、已後孤峰頂上に向いて草庵を盤結え、仏を呵り祖を罵り去らん在」。〔賊過ぎし後に弓を張る。天下の衲僧跳け出せず。〕雪竇著語して云く、「雪の上に霜を加う」。〔錯えり、果然して、点。〕

一 徳山宣鑑(七八二―八六五)。 二 潙山霊祐(七七一―八五三)。ここは、その寺を指す。 三 肩に板を担いでいて型通りにしか動けぬ偏頗者。 四 旅装も解かず、いきなり登場する様子。「複子」は携帯用のバッグ。 五 演法の堂。禅院で最も大切な建物。 六 よくも悪くも、ただものではなさそうだと思わせる。 七 自ら失敗を招く。 八 相手の静に対し、敢えて動を示して、ゆさぶりをかけるしぐさ。 九 見抜いたぞ。「破」は動詞の後に付き、その動作が見事に成し遂げられたことをいう。「看破」「識破」「照破」「踏破」など。 一〇 難解。まず「錯えり」と否定し、「果然して」と納得した上で「点(そこだ)」と指し示している、か。 一一 三門の前。 一二 大ざっぱなやり方、いい加減な行動や措置。 一三 「去」「来」は、動作の心理的方向を示す。 一四 重ね重ねの。二度の。 一五 「険」に通

ずる。危い危い。一六 礼拝用の敷物。一七 従前とは全くちがった人間に再生すること。一八「擬〜」は、〜しようとする。文語の「欲」に当る。「擬欲」とも。一九 漢の高祖が張良を評した語「運籌策帷帳之中、決勝於千里之外」による。二〇 口を塞いで何も言わせない。「坐断」は、どっかと坐り込む。「舌頭」の「頭」は名詞に付く接尾語。二一「権・実」は権教(方便の教え)と実教(真実究極の教え)。「照・用」は、師家が修行者に対してその見地や境涯を見抜き、その見抜いたところから働きかけること。二二 すぐれた手腕家の喩え。二三「却」は動詞の後に付いて意味を強める。「失却」「換却」「没却」「燎却」「坐却」など。二四「風光」は見た目の様子。「公案」は、ここでは潙山に対する徳山のしかけ。それはまだ決着していない。二五 せいぜい笠はものにしたが肝腎のわらじをなくしてしまった。高い理念だけで、実践が伴わない。「贏得」は、かちえたものはせいぜいこれだけ、の意。なお、「項上笠」を玉峰刊本は「項上頭」とし、また「頂上笠」とするテクストもある。二六 ここは、悟りの機縁を踏み外す。もうおしまいだ。二七 禅堂の指導者。二八「落節」はへまをやる、「抜本」は元手をする意、か。二九 徳山のことを問うかのようなことばとは裏腹に、実は首座を試している。三〇 なんという生臭い自己顕示ぶりよ。『荘子』秋水に「神亀」が泥の中に「曳尾」する話がある。三一 独自の道を誇らかに歩む。三二 蛇がとぐろを巻く様子。三三 手おくれもいいところ。三四 こんなことでは天下中の修行僧の誰一人として徳山のしかけたワナから脱け出せない。三五 余計なデコレーション。無意味な色付け。

【評唱】夾山下三箇点字、諸人還会麼。有時将一茎草作丈六金身用、有時将丈六金身作一茎草用。

【評唱】夾山は三箇の「点」の字を下す、諸人還た会すや。有る時は一茎の草を将て丈六の金身の用を作し、有る時は丈六の金身を将て一茎の草の用を作す。

一 圜悟克勤（一〇六三—一一三五）の自称。 二 仏像。一丈六尺の黄金仏。

徳山本是講僧、在西蜀講金剛経。因教中道、金剛喩定後得智中、千劫学仏威儀、万劫学仏細行、然後成仏。他南方魔子、便説即心是仏。遂発憤、担疏鈔行脚、直往南方、破這魔子輩。看他恁麼発憤、也是箇猛利底漢。

徳山は本と是れ講僧、西蜀に在って『金剛経』を講ず。因に教中に道う、「金剛喩定後得智の中に、千劫にわたり仏の威儀を学び、万劫にわたり仏の細行を学び、然る後に成仏す」と。他の南方の魔子は便ち「即心是仏」と説く。遂に発憤して、疏鈔を担いて行脚し、直に南方に往きて、這の魔子の輩を破らんとす。看よ他恁麼に発憤するは也た是れ箇の猛利底漢なり。

一 蜀は今の四川省。 二 『金剛般若波羅蜜経』一巻。 三 金剛定、金剛三昧。一切の煩悩を断じ尽した、菩薩の最高位の禅定の名。 四 悟りを開いた後の智。現象界の差別相を悟る智慧。 五 『会元』七には、徳山の語として、「出家児千劫学仏威儀、万劫学仏細行、不得成仏。南方魔子敢言直指人心、見性成仏、我当摟其窟穴、滅其種類、以報仏恩」と。 六 江南の馬祖系の禅。「即心是仏」を説いたことで知られる。 七 経論の注釈書。『会要』『会元』では「青龍疏鈔」、すなわち唐玄宗の勅命による青龍寺の道氤の『御注金剛般若波羅蜜経宣演』六巻。

初到澧州。路上見一婆子売油糍、遂放下疏鈔、且買点心喫。婆云、所載者是什麼。徳山云、金剛経疏鈔。婆云、我有一問、你若答得、布施油

初め澧州に到る。路上に一婆子の油糍を売るを見て、遂に疏鈔を放下して、且く点心を買って喫わんとす。婆云く、「載する所の者は是れ什麼ぞ」。徳山云く、「『金剛経』の疏鈔なり」。婆云く、「我に一問有り、

糍作点心。若答不得、別処買去。徳山云、但問。婆云、金剛経云、過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得。上座[四]欲点那箇心[五]。山無語。婆遂指令去参龍潭[六]。

你若し答え得ば、油糍を布施して点心と作さん。若し答え得ずんば、別処に買いに去け」。徳山云く、「但だ問え」。婆云く、「『金剛経』に云く、『過去心も得べからず、現在心も得べからず、未来心も得べからず』と。上座は那箇の心をか点ぜんと欲す」。山、無語。婆、遂に指して龍潭に去き参ぜしむ。

一 湖南省澧県。二 米や黍の粉で造った揚げ餅。三 軽い食事、おやつ。四 位の高い僧の称。五 自分のどのような「心」を「点」ようとするのか。そんな手にとってみるような「心」がいったいあるのか。「点心」にかける。六 龍潭崇信。天皇道悟(七四八―八〇七)の法嗣。

纔跨門便問、久嚮[一]龍潭、及乎到来、潭又不見、龍又不現。龍潭和尚、於屏風後引身云、子親到龍潭。師乃設礼而退。至夜間入室[二]、侍立更深。潭云、何不下去。山遂珍重[三]、掲簾而出。見外面黒却回云、門外黒。潭遂点紙燭、度与山。山方接、潭便吹滅。山豁然大悟、便礼拝。潭云、子見箇什

門を跨ぐや纔や便ち問う、「久しく龍潭を嚮う、到来するに及ぶも、潭も又た見えず、龍も又た現れず」と。龍潭和尚、屏風の後に身を引して云く、「子親ら龍潭に到れり」と。師乃ち礼を設けて退く。夜間に至って入室し、侍立して更深けぬ。潭云く、「何ぞ下がり去らざる」と。山、遂に珍重して簾を掲げて出づ。外面の黒きを見て、却回りて云く、「門外黒し」と。潭、遂に紙燭を点して山に度与す。山の方に接らんと

麼便礼拝。山云、[四]某甲自今後、更不疑著天下老和尚舌頭。
　至来日、潭上堂云、可中[五]有箇漢、牙如剣樹、[六]口似血盆、一棒打不回頭、他時異日、向孤峰頂上、立吾道去在。山遂取疏鈔、於法堂前、将火炬挙起云、[七]窮諸玄辯、若一毫置於太虚。[八]竭世枢機、似一滴投於巨壑。遂焼之。

するや潭便ち吹滅す。山、豁然として大悟し、便ち礼拝す。潭云く、「子箇の什麼を見てか便ち礼拝する」。山云く、「某甲今より後、更して天下の老和尚の舌頭に疑著されず」と。
　来日に至って、潭、上堂して云く、「可中箇の漢にして牙は剣樹の如く、口は血盆に似、一棒もて打ちすえるとも回頭もせざるもの有らば、他時異日、孤峰頂上に向いて、吾が道を立て去せん在」と。山、遂に疏鈔を取って、法堂の前にて、火炬を挙起げて云く、「諸の玄辯を窮むるも、一毫を太虚に置くが若く、世の枢機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たり」と。遂に之を焼く。

一「嚮」は、慕う、の意。二 単独で師の室に入り、個人指導を受けること。三 別れの挨拶。四 自称の人称代名詞。五 もしも。仮定を表す。六 口をまっ赤に開いたさま。上の句とともに魔神のイメージ。七 深奥の理(真諦)を窮めた幽玄なことばを述べる。八 世間の真実(世諦)を説き明かしたことばを述べる。

後聞潙山盛化、[一]直造潙山、便作家[二]

後に潙山の化を盛んにするを聞いて、直に潙山に造

相見。包亦不解、直上法堂、従東過西、従西過東、顧視云、無無、便出。且道、意作麼生。莫是顚麼。人多錯会、用作建立。直是無交渉。看他恁麼不妨奇特。所以道、出群須是英霊漢、敵勝還他獅子児。選仏若無如是眼、仮饒千載又奚為。到這裏、須是通方作者、方始見得。何故。仏法無許多事。那裏著得情見来。是他心機、那裏有如許多阿労。所以玄沙道、直似秋潭月影、静夜鐘声、随扣撃以無虧、触波瀾而不散、猶是生死岸頭事。到這裏、亦無得失是非、亦無奇特玄妙。既無奇特玄妙、作麼生会。他従東過西、従西過東。且道、意作麼生。

って、便ち作家相見す。包も亦た解かず、直に法堂に上って、東より西に過り、西より東に過りて、顧視して「無、無」と云って便ち出づ。且く道え、意作麼生。是れ顚なら莫や。人多く錯って会して、用て建立すと作す。直に是れ交渉無し。看よ他恁麼に不妨に奇特たるを。所以に道う、「群を出づるには須是らく英霊の漢なるべし。勝れるに敵するには他に獅子児を還せ。選仏に若し是の如き眼無くんば、仮饒千載なるも又た奚為せん」と。這裏に到らば、須是らく通方の作者にして、方始めて見得せん。何故ぞ。仏法に許多の事無し。那裏にか情見を著し得来たらん。是れ他の心機の那裏にか如許多の阿労有らん。所以に玄沙道く、「直い秋潭の月影、静夜の鐘声の、扣撃に随って以て虧くること無く、波瀾に触れて散ぜざるに似たるも、猶お是れ生死岸頭の事」と。這裏に到って、亦た得失是非無く、亦た奇特玄妙無し。既に奇特玄妙無きを作麼生か会せん。他東より西に過り、西より東に過る。且く

道え、意作麽生。

一 教化。 二 達人どうしがまみえる。 三 癲、癲狂、顛狂。 四「無」によってある立場をうち立てる。 五 南堂道興(一〇六五—一一三五)の頌。 六 獅子児の本領を発揮させよ。 七 すぐれた修行者を仏として選び取ること。 八 仏法には特別変った子細は無い。「仏法無多子」(第一則・本則の評唱)に同じ。 九 こんなに多くの、たくさんの。 一〇 玄沙師備(八三五—九〇八)の上堂の語。 一一「直饒」に同じ。 一二 生死煩悩の現世、此岸。

潙山老漢、也不管他。若不是潙山、也被他折挫一上。看他潙山、老作家相見、只管坐観成敗。若不深辨来風、争能如此。雪竇著語云、勘破了也。一似鉄橛相似。衆中謂之著語。雖然在両辺、却不住在両辺。作麽生会他道勘破了也。什麽処是勘破処。且道、勘破徳山、勘破潙山。

潙山老漢、也た他に管わず。若し是れ潙山にあらずんば、也た他に折挫一上せられん。看よ他の潙山、老作家の相見の只管坐ながら成敗を観るのみなるを。若し深く来風を辨ぜずんば、争か能く此の如くならん。雪竇著語して云く、「勘破し了れり」と。一に鉄橛の似くに相似たり。衆中には之を著語と謂う。両辺に在りと雖然も却って両辺に住在らず。作麽生か他の「勘破し了れり」と道うを会せん。什麽処か是れ勘破の処。且く道え、徳山を勘破したるか、潙山を勘破したるか。

一「一上」は一回。「一下」「一場」とも。 二 相手からの問いかけ。「来鋒」とも。 三 禅林の僧たち。
四 潙山と徳山と両方について「見破った」と言っていること。

徳山遂出到門首、却*要抜本、自云、也不得草草。要与潙山掀出五臓心肝、法戦一場、再具威儀、却回相見。潙山坐次、徳山提起坐具云、和尚。潙山擬取払子。徳山便喝、払袖而出。可煞奇特。衆中多道、潙山怕他。有甚交渉。潙山亦不忙。所以道、智過於禽獲得禽、智過於獣獲得獣、智過於人獲得人。参得這般禅、尽大地、森羅万象、天堂地獄、草芥人畜、一時作一喝来、他亦不管。掀倒禅床、喝散大衆、他亦不顧。如天之高、似地之厚。潙山若無坐断天下人舌頭底手脚、時験他也大難。若不是他一千五百人善知識、到這裏、也分疎不下。潙山是運籌帷幄、決勝千里。徳山背却法堂、著草鞋便出去。且道、他意

徳山遂に出でて門首に到り、却って抜本せんと要して、自ら云く、「也た草草にするは得からず」と。潙山と五臓心肝を掀出して、法戦一場せんと要し、再び威儀を具え却回りて相見す。潙山坐りおる次、徳山坐具を提起げて云く、「和尚」と。潙山払子を取らんと擬す。徳山便ち喝し、袖を払って出づ。可煞だ奇特たり。衆中多く道う、「潙山他を怕る」と。甚の交渉か有らん。潙山亦た忙てず。所以に道う、「智、禽に過ぎて禽を獲得し、智、獣に過ぎて獣を獲得し、智、人に過ぎて人を獲得す」と。這般る禅に参得せば、尽大地、森羅万象、天堂地獄、草芥人畜、一時に一喝を作し来たるも、他は亦た管わず。禅床を掀倒し、大衆を喝散すとも他は亦た顧みず。天の高きが如く、地の厚きに似たり。潙山に若し天下の人の舌頭を坐断する底の手脚無かりせば、時に他を験すこと也た大いに難からん。若し是れ他の一千五百人の善知識にあらずんば、這裏に到っては、也た分疎不下。潙山は是れ籌を帷幄

作麼生。你道、徳山是勝是負。潙山恁麼、是勝是負。雪竇著語云、勘破了也。是他下[五]工夫、見透古人[六]聱訛極則処、方能恁麼。不妨奇特。

に運し、勝ちを千里に決するものなり。徳山は法堂に背却けて、草鞋を著けて便ち出で去る。且く道え、他の意作麼生。你道え、徳山是れ勝ちたるか是れ負けたるか。潙山恁麼なるは、是れ勝ちたるか是れ負けたるか。雪竇著語して云く、「勘破し了れり」と。是れ他が工夫を下み、古人の聱訛極則の処を見透して、方めて能く恁麼なるなり。不妨に奇特たり。

＊却要抜本自　福本に無し。

一 かかげて示す。開示する。ここは、全身全霊を尽す。二 仏法の問答をたたかわす。三 坐禅椅子をひっくり返し、修行者たちに向って「解散」と叫ぶ。四 一千五百人の修行者を育成するほどの大宗匠。五 年季を積んで修行する。六 「聱訛」は文章表現の入りくんで難解なところ。「極則」は真理の究極。

＊訥堂云、雪竇著両箇勘破、＊＊作三段判、方顕此公案。似傍人断二人相似。後来這老漢、緩緩地至晩、方問首座、適来新到、在什麼処。首座云、当時背却法堂、著草鞋出去也。潙山云、

訥堂云く、「雪竇は両箇の勘破を著け、三段の判を作して、方めて此の公案を顕す。傍人の二人を断くが似くに相似たり」と。後来に這の老漢、緩緩地に晩に至って方めて首座に問う、「適来の新到、什麼処にか在る」。首座云く、「当時、法堂に背却け、草鞋を著

此子、已後向孤峰頂上盤結草庵、呵仏罵祖去在。且道、他意旨如何。潙山老漢不是好[三]心、徳山後来呵仏罵祖、[四]打風打雨、依旧不出他窠窟、被這老漢見透平生伎倆。到這裏、喚作潙山与他受記[五]得麼、喚作沢広蔵山[六]、理能[七]伏豹得麼。若恁麼、且喜没交渉。雪竇知此公案落処、敢与他断、更道雪上加霜。又重拈起来、教人見。若見得去、許你与潙山・徳山・雪竇同参[八]。[九]若也不見、切忌妄生情解。

けて出で去れり」。潙山云く、「此の子、已後孤峰頂上に向いて草庵を盤結え、仏を呵り祖を罵り去らん在」と。且く道え、他の意旨如何。潙山老漢、是れ好心にあらず。徳山は後来に仏を呵り祖を罵り、風を打かせ雨を打らすも、依旧として他の窠窟を出でずして、這の老漢に平生の伎倆を見透かる。這裏に到れば、喚んで潙山は他に受記を与うと作して得しきや、喚んで沢広くして山を蔵し、理能く豹を伏すと作して得しきや。若し恁麼ならば、且喜たくも没交渉。雪竇は此の公案の落処を知って、敢て他の与に断じて更に道う、「雪の上に霜を加う」と。又た重ねて拈起し来たりて人に見せしむ。若し見得し去らば、你を潙山・徳山・雪竇と同参なりと許めん。若也見ずんば、切に忌む、妄に情解を生ずることを。

＊訥堂　福本は「師」。　＊＊作三段判　福本は「分作両段判」。

一 圜悟の自称。 二 原告と被告。ここは潙山と徳山。 三 善意、好意。 四 ここの「打」は自然現象に用いる動詞。「打雷」など。 五 将来成仏できるという証明、認可。「授記」とも。 六 器量の大き

いこと。『荘子』大宗師の「蔵舟於壑、蔵山於沢」による。七「理」は「狸」に通ずる。ただしこの故事は未詳。八 修行仲間、同学。九 もし。「也」は助詞。「若是」に同じ。

【頌】一勘破、〔言猶在耳。過。〕二勘破。〔両重公案。〕雪上加霜曾嶮堕。〔三段不同。在什麼処。〕飛騎将軍入虜庭、〔嶮。敗軍之将、無労再斬、喪身失命。〕再得完全能機箇。〔死中得活。〕急走過、〔傍若無人。三十六策、尽你神通、堪作何用。〕不放過。〔理能伏豹、穿却鼻孔。〕孤峰頂上草裏坐。〔果然。穿過鼻孔、也未為奇特。為什麼却在草裏坐。〕咄。〔会麼。両刃相傷。両両三三旧路行、唱拍相随。便打。〕

【頌】一たび勘破し、〔言猶お耳に在り。過ぎされり。〕二たび勘破す。〔両重の公案。〕雪の上に霜を加え曾て嶮堕す。〔三段同じからず。什麼処にか在る。〕飛騎将軍虜庭に入る、〔嶮うし。敗軍の将は再び斬るを労すること無く、喪身失命。〕再び完全し得るは能く幾箇ぞ。〔死中に活を得たり。〕急て走過らんとするも、〔傍若無人。三十六策、你が神通を尽すも、何の用を作すにか堪えん。〕放過せず。〔理能く豹を伏し、鼻孔を穿却す。〕孤峰頂上草裏に坐す。〔果然して。鼻孔を穿過するも、也た未だ奇特たりと為ず。為什麼に却って草裏に坐す。〕咄。〔会すや。両刃相傷つく。両両三三旧路を行き、唱拍相随う。便ち打つ。〕

一 とうにわかっている。二「嶮」は「険」に同じ。危うく堕ちるところだった。徳山が潙山にしてやられかけたことをいう。三 漢の李広。匈奴に畏れられ、飛将軍と呼ばれた。ここは徳山になぞらえる。四 匈奴の領域。ここは、潙山の法堂になぞらえる。五 あらゆる兵法の術。六 逃がさぬぞ。

七　鼻孔にわっぱを通す。自由を奪う。八　超絶の境に至りながら、そこに尻をすえてしまったことを「草むらにアグラをかいた」と評する。九　相打ちだ。一〇　徳山たち三人が連れだっていつもの道を歩くことよ。一一　一方が唱えば一方が拍子をとる。この三人のお調子のいい夫唱婦随ぶりよ。

〔評唱〕雪竇頌一百則公案、一則則焚香拈出、所以大行於世。他更会文章、透得公案。盤礴得熟、方可下筆。何故如此。龍蛇易辨、衲子難瞞。雪竇参透這公案、於節角聱訛処、著三句語、撮来頌出。

〔評唱〕雪竇は一百則の公案を頌するに、一則則に香を焚いて拈出す、所以に大いに世に行わる。他、更に文章を会し、公案を透得す。盤礴して熟するを得て、方めて筆を下すべし。何故此の如くなる。龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞り難し。雪竇這の公案を参透し、節角聱訛の処に三句の語を著けて、撮げ来たって頌出す。

一　十分に自分のものにする。二　ここでは達道の禅僧をいう。三　難解に入りくんだところや、ごつごつと骨張ったところ。

雪上加霜、幾乎嶮堕。只如徳山似什麼。一似李広天性善射。天子封為飛騎将軍。深入虜庭、被単于生獲。広時傷病。置広両馬間、絡而盛臥。広遂詐死、睨其傍、有一胡児騎善馬。広騰身上馬、推堕胡児、奪其弓矢、

雪の上に霜を加え、幾ど嶮堕す。只だ徳山の如きは、什麼にか似たる。一に李広の天性射を善するに似たり。天子封じて飛騎将軍と為す。深く虜庭に入り、単于に生獲らる。広、時に傷つき病む。広を両馬の間に置いて、絡めて盛せ臥せしむ。広、遂に死せる詐をし、其の傍を睨るに、一の胡児の善馬に騎る有り。広、

鞭馬南馳、彎弓射退追騎、以故得脱。這漢有這般手段、死中得活。雪竇引在頌中、用比徳山再入相見、依旧被*他跳得出去。

身を騰せて馬に上り、胡児を推堕し、其の弓矢を奪って、馬に鞭うち南に馳せ、弓を彎いて追騎を射て退け、以故て脱するを得たり。這の漢這般る手段有って、死中に活を得たり。雪竇、頌の中に引在き、用て徳山の再び入って相見し、依旧に跳得出で去るに比う。

＊被他　福本に無し。これに従う。

一　匈奴の兵士。

看他古人、見到説到、行到用到、不妨英霊。有殺人不眨眼底手脚、方可立地成仏。有立地成仏底人、自然殺人不眨眼、方有自由自在分。如今人有底問著、頭上一似衲僧気概、軽軽拶著、便腰做段、股做截、七支八離、渾無些子相続処。所以古人道、相続也大難。看他徳山・潙山如此。豈是滅滅挈挈底見解、再得完全能幾箇。急走過、徳山喝便出去、一似李

看よ他の古人の見到り説き到り、行い到り用い到ること、不妨に英霊たることを。人を殺すに眨眼もせざる底の手脚有って、方めて立地に成仏すべし。立地に成仏する底の人の自然と人を殺して眨眼もせざる有りて、方めて自由自在の分有らん。如今の人の有る底は問著れば、頭上は一に衲僧の気概あるに似たるも、軽く拶著めば、便ち腰は段け、股は截たれて、七支八離にして、渾く些子も相続る処無し。所以に古人道く、「相続するは也た大いに難し」と。看よ他の徳山・潙山此の如くなるを。豈に是れ滅滅挈挈底見解ならんや、

広被捉後設計、一箭射殺一箇番将[四]、得出虜庭相似。雪竇頌到此、大[五]有工夫。

「再び完全し得るは能く幾箇ぞ」なり。「急て走過らんとす」とは、徳山喝して便ち出で去ること、一に李広が捉れて後、計を設けて一箭もて一箇の番将を射殺して、虜庭を出づるを得たるが似くに相似たり。雪竇頌して此に到るは大いに工夫有り。

一「段」も「截」も部分の意。足や腰がバラバラ。二 洞山良价(八〇七―八六九)。三 ちぐはぐ、ばらばら。四 蕃将。匈奴の大将。五 なかなか手のこんだ批評ぶりだ。

徳山背却法堂、著草鞋出去。道得[六]便宜、殊不知、這老漢依旧不放他出頭在。雪竇道、不放過。潙山至晩間問首座、適来新到在什麼処。首座云、当時背却法堂、著草鞋出去也。潙山云、此子、他日向孤峰頂上盤結草庵、呵仏罵祖去在。幾[二]曾是放過来。不妨奇特。到這裏、雪竇為什麼道、孤峰[三]頂上草裏坐。又下一喝。且道、落在什麼処。更参三十年。

「徳山法堂に背却けて、草鞋を著けて出で去る」とは、便宜を得たりと道うも、殊に知らず、這の老漢は、依旧として他の出頭を放さざることを。(そこを)雪竇は「放過せず」と道う。潙山晩間に至って首座に問う、「適来の新到、什麼処にか在る」。首座云く、「当時法堂に背却けて、草鞋を著けて出で去れり」。潙山云く、「此の子、他日、孤峰頂上に向いて草庵を盤結え、仏を呵り祖を罵り去らん在」と。幾ぞ曾て是れ放過し来たらんや。不妨に奇特たり。這裏に到って、雪竇為什麼に「孤峰頂上の草裏に坐す」と道い、又た一喝

を下せる。且（しばら）く道（い）え、什麼処にか落在す。更に参ぜよ三十年。

＊道得便宜　福本は「道他得便宜」。

一　徳山は味を占めた(してやった)というところだろうが。二「幾曾」は文語の「何曾」と同じ。いったい〜したことがあったろうか。〜するはずがない。決して徳山のしたいままにさせっこない。三　意図はどこにあるのか。かんどころはどこか。

第五則　雪峰尽大地

垂示云、大凡扶竪宗教、須是英霊底漢、有殺人不眨眼底手脚、方可立地成仏。所以照用同時、巻舒斉唱、理事不二、権実並行。放過一著、建立第二義門。直下截断葛藤、後学初機、難為湊泊。昨日恁麼、事不獲已、今日又恁麼、罪過弥天。若是明眼漢、一点謾他不得。其或未然、虎口裏横身、不免喪身失命。試挙看。

第五則　雪峰尽大地

垂示に云く、大凡そ宗教を扶竪すには、須是らく英霊底漢にして人を殺すに眨眼もせざる底の手脚あって、方めて立地に成仏すべし。所以て照用同時、巻舒斉しく唱え、理事不二、権実並び行わる。一著を放過するは、第二義門を建立す。直下と葛藤を截断せば、後学初機は、湊泊を為し難し。昨日恁麼なるは事已むを獲ざるも、今日も又た恁麼なるは、罪過天に弥つ。若是明眼の漢ならば、一点も他を謾るを得ず。其れ或は未だ然らざるも、虎口の裏に身を横たうれば、喪身失命を免れず。試みに挙し看ん。

一 根本の教え。 二 「照」は機(相手の出方)をうつし見る心の働き、「用」はその機に応ずる身の働き。 三 「巻」は巻き収める、「舒」は展べ広げる。収斂と展開、語と黙、与と奪、活と殺などの喩え。 四 理法と事象とは本来ひとつ。 五 権教(方便の教え)と実教(真実究極の教え)。 六 緩い一手を打つ。 七 第一義門(言語・思惟を超えた究極の世界)の対。方便。 八 かんどころ・つぼをつ

かまえにくい。九「〜不得」は、動詞の後に付き、〜すること、〜であることが不能なことを示す。

【本則】挙。雪峰[一]示衆云、〔一盲引衆盲[二]、不為分外。〕尽大地撮来、如粟米粒大。〔是什麼手段。山僧従来不弄鬼眼睛[三]。〕抛向[四]面前、〔只恐抛不下[五]。有什麼伎倆。〕漆桶[六]不会。〔倚勢欺人。自領出去[七]。莫謾大衆[八]好。〕打鼓普請[九]看。〔瞎。打鼓為三軍[一〇]。〕

【本則】挙す。雪峰、衆に示して云く、〔一盲、衆盲を引くも、分外と為ず。〕「尽大地撮み来れば、粟米粒の大きさなり。〔是れ什麼たる手段ぞ。山僧は従来鬼眼睛を弄せず。〕面前に抛向すも、〔只だ恐らくは抛り下せず。什麼の伎倆か有らん。〕漆桶にして会せざらん。〔勢に倚って人を欺く。自ら領して出で去れ。大衆を謾ること莫くんば好し。〕鼓を打って普請し看よ」と。〔瞎。鼓を打つは三軍の為なり。〕

一 雪峰義存(八二二—九〇八)。二 似非指導者を謗る語。三 妖怪の目つき、たぶらかし。四「向」は動詞の後に付き、動作の方向を示す。五「不下」は、行為が完遂できないことを示す。六 うるしを容れる桶。全体が黒々として見分けがつかない。何ひとつ見て取れない。七 自分で自分をしょっぴいて出て行け。八 修行僧たち。九「普請」は禅院の共同労務。太鼓を合図に作業にかりだす。一〇 太鼓は大軍出動の時にこそ打たれるもの。こんな盲どものために打つものではない(『雲門広録』下の用例に基づく)。

〔評唱〕長慶[一]問雲門[二]、雪峰与麼道[三]、

〔評唱〕長慶、雲門に問う、「雪峰与麼に道うは還た

還有[四]出頭不得処麼。門云、有。慶云、作麼生。門云、不可総作野狐精見解。[五]雲峰云、匹上不足、匹下有餘。我更与你打葛藤。拈拄杖云、還見雪峰麼。咄。王令稍厳、不許攙[六]奪行市。[七]大潙喆云、我更与你諸人、土上[八]加泥。拈拄杖云、看看、雪峰向諸人面前放屙。咄。為什麼屎臭也不知。

出頭し得ざる処有りや」。門云く、「有り」。慶云く、「作麼生」。門云く、「総て野狐精の見解を作すべからず」。雪峰云く、「上に匹ぶれば足らず、下に匹ぶれば餘り有り。我更に你が与に葛藤を打せん」と。拄杖を拈じて云く、「還た雪峰を見るや。咄。王令稍か厳しく、行市を攙奪することを許さず」と。大潙の喆云く、「我更に你諸人の与に、土の上に泥を加えん」と。拄杖を拈じて云く、「看よ看よ、雪峰は諸人の面前に放屙せり。咄。為什麼に屎臭に也知かざる」と。

一 長慶慧稜(八五四―九三二)。 二 雲門文偃(八六四―九四九)。 三 そのように、このように。「恁麼」と同じ。 四 超出し切れていない。 五 雲峰文悦(九九八―一〇六二)。 六 市価を独占的に操作する。雪峰の語を僭断とする見方。 七 大潙慕喆(?―一〇九五)。 八 泥の上塗りで穢れたものをさらに穢す。

雪峰示衆[一]云、尽大地撮来、如粟米粒大。古人接物利生[二]、有奇特処。只是不妨辛懃。三上投子、九[三]到洞山、置漆桶木杓、到処作飯頭[四]、也只為透

雪峰、衆に示して云く、「尽大地撮み来れば、粟米粒如の大きさなり」と。古人接物利生するに、奇特たる処有り。只だ是れ不妨に辛懃なり。三たび投子に上り、九たび洞山に到り、漆桶木杓を置いて、到る処に

脱[五]此事。及至洞山作飯頭、一日洞山問雪峰、作什麼。峰云、淘米。山云、淘沙去米、淘米去沙。峰云、沙米一斉去。山云、大衆喫箇什麼。峰便覆盆。山云、子縁在徳山。指令見之。纔到便問、従上宗乗中事、学人還有分也無。徳山打一棒云、道什麼。因此有省。

後在鼇[六]山阻雪、謂巌頭[七]云、我当時在徳山棒下、如桶底脱相似。巌頭喝云、你不[八]見道、従[九]門入者、不是家珍[一〇]。須是自己胸中流出、蓋天蓋地、方有少分相応。雪峰忽然大悟、礼拝云、[一一]師兄、今日始是鼇山成道。

飯頭と作るは、也た只だ此の事を透脱せんが為なり。洞山に至って飯頭と作るに及んで、一日洞山、雪峰に問う、「什麼をか作す」。峰云く、「米を淘ぐ」。山云く、「沙を淘いで米を去るか、米を淘いで沙を去るか」。峰云く、「沙も米も一斉に去る」。山云く、「大衆は箇の什麼をか喫う」。峰便ち盆を覆す。山云く、「子が縁は徳山に在り」と。指して之に見えしむ。到るや纔や便ち問う、「従上の宗乗中の事につき、学人還た分有り也無」と。徳山打つこと一棒して云く、「什麼を道うぞ」と。此れに因って省有り。

後に鼇山に在いて雪に阻てらる。巌頭に謂って云く、「我当時徳山の棒下に在って、桶底の脱するが如くに相似たり」と。巌頭喝して云く、「你見道ずや、『門より入る者は、是れ家珍にあらず』といえるを。須是らく自己の胸中より流出し、天を蓋い地を蓋って、方めて少分の相応有るべし」と。雪峰忽然と大悟し、礼拝して云く、「師兄、今日始めて是れ鼇山にて道を成

ず」と。

一 衆生を済度する。 二 舒州（安徽省）投子山の大同（八一九—九一四）。 三 瑞州（江西省）洞山の良价（八〇七—八六九）。 四 食事の準備をする役。上文にいう「漆桶木杓」は、その役目がらの道具。ただし飯桶をわざと漆桶と言い換えたところに含みがある。 五 この「向上」の事。 六 澧州（湖南省）鼇山鎮。「鼇」は「鼈」の俗字。『祖堂集』七・巌頭章では「鵝山」とする。 七 巌頭全奯（八二八—八八七）。 八 古人の語をとりあげるときなどの常套句。〜というのを知っているはずだ。「不聞道」「不信道」とも。 九 家の外から仕入れたものは家宝（自己本来のもの）ではない。 一〇 少しは深奥の消息と通じ合えるだろう。 一一 あに弟子。

如今人只管道、古人特地[一]做作、教後人依規矩。若恁麼、正是謗他古人。謂之[二]出仏身血。古人*不似如今人苟且。豈[三]以一言半句、以当平生。若扶竪宗教、[四]続仏寿命、所以吐一言半句、自然坐断天下人舌頭。無你著意路作情解、渉道理処。看他此箇示衆、蓋為他曾見作家来、所以有作家鉗鎚。凡出一言半句、不是心機意識思量鬼窟裏作活計。直是超群抜萃、坐断古今、

如今（いま）の人只管（ひとえ）に道（い）う、「古人は特地（ことさら）に做作（ささ）して、後人をして規矩に依らしむ」と。若し恁麼（いんも）ならば、正（まさ）に是れ他（か）の古人を謗（そし）るなり。之を出仏身血と謂（い）う。古人は如今（いま）の人の苟且（なおざり）なるに似ず。豈に一言半句を以て、以て平生（へいぜい）に当てんや。宗教を扶竪（おこ）し仏の寿命を続（つな）ぐが若（ごと）くなる、所以（ゆえ）に一言半句を吐きて、自然（じねん）に天下の人の舌頭を坐断す。你が意路を著（つ）け、情解（じょうげ）を作（な）し、道理に渉る処無し。看よ他（かれ）の此箇（こ）の示衆（じしゅ）、蓋（けだ）し他（かれ）は曾て作（さっ）家（け）に見（まみ）え来たるが為に、所以（ゆえ）に作家の鉗鎚（けんつい）有り。凡そ一言半句を出だすも、是れ心機・意識・思量の鬼窟裏

不容擬議[五]。他家用処、尽是如此。

一日示衆云、南山有[一]一条[二]鼈[三]鼻蛇。汝等諸人、切須好看取。時稜道者[四]出衆云、恁麼則今日堂中、大有人[五]喪身失命去在[六]。又云、尽大地是沙門一隻眼。汝等諸人、向什麼処屙。又云、望州亭[七]与汝相見了也、烏石嶺[八]与汝相見了也、僧堂前与汝相見了也[九]。時保福[一〇]問鵝湖、僧堂前即且置、如何是望州亭・烏石嶺相見処。鵝湖驟歩帰方丈。他常挙這般語示衆。

＊不似如今人苟且　蜀本に無し。

一 みえすいたことをする。おもわせぶりをやる。二 仏の身体を傷つけて血を出す。五逆罪の一。転じて、一切の価値観を払い去って、仏法をさえ超え出ること。三 究極の一句をつかんだと速断して、すぐさまそれを己れの日常修行の証しとしてしまう。四 仏法を永遠のものにする。五 ためらう。口ごもる。

に活計を作さず。直に超群抜萃にして古今を坐断し、擬議を容れず。他家の用処は尽く是れ此の如し。

一日衆に示して云く、「南山に一条の鼈鼻蛇有り。汝等諸人、切に須らく好く看取るべし」と。時に稜道者衆より出でて云く、「恁麼ならば則ち今日堂中にて大いに人の喪身失命し去る有らん在」と。(雪峰)又た云く、「尽大地は是れ沙門の一隻眼なり。汝等諸人、什麼処に向いて屙するや」。又た云く、「望州亭にて汝と相見し了れり、烏石嶺にて汝と相見し了れり、僧堂の前にて汝と相見し了れり」と。時に保福、鵝湖に問う、「僧堂の前は即ち且く置く、如何なるか是れ望州亭・烏石嶺にて相見せし処」と。鵝湖驟歩りて方丈に

帰る。他は常に這般る語を挙して衆に示す。

一 福州(福建省)雪峰山の一峰。以下、第二二則を参照。 二「条」は細長いものを数えるときの量詞。 三 鼻の平たい毒蛇。雪峰禅の峻烈さを喩える。 四 長慶慧稜(八五四―九三二)。 五「私は見事にそれに噛まれて死んでみせます」という自薦。 六 一つの眼。真実を見抜く眼。本来そなわった真眼。 七 雪峰山中の亭。 八 烏石山とも。福州侯官県の西南隅に在る。 九 保福従展(?―九二八)。 一〇 鵝湖智孚。

只如道、尽大地撮来如粟米粒大、這箇時節、且道、以情識卜度得麼。須是打破羅籠、得失是非、一時放下、洒洒落落、自然透得他圏繢、方見他用処。且道、雪峰意在什麼処。人多作情解道、心是万法之主、尽大地一時在我手裏。且喜没交渉。到這裏、須是箇真実漢、聊聞挙著、徹骨徹髄見得透、且不落情思意想。若是箇本色行脚衲子、見他恁麼、已是郎当為人了也。看他雪竇頌云。

只だ「尽大地撮み来れば粟米粒如の大きさなり」と道うが如きは、這箇の時節、且く道え、情識を以て卜度り得しきや。須是らく羅籠を打破し、得失是非を一時に放下して、洒洒落落とし、自然に他の圏繢を透得いてこそ、方めて他の用処を見るべし。且く道え、雪峰の意什麼処にか在る。人多く情解を作して道う、「心は是れ万法の主、尽大地一時に我が手の裏に在り」と。且喜たくも没交渉。這裏に到らば、須是らく箇の真実の漢にして、聊か挙著するを聞くや、徹骨徹髄まで見得透してこそ、且に情思意想に落ちざるべし。若是箇の本色行脚の衲子ならば、他の恁麼なるは已是

に郎当に人に為えしものなるを見ん。看よ他の雪竇の頌に云うを。

一 鳥を捕えるあみやかご。煩悩や妄想の喩え。 二 人をからめ取るしかけ。からくり。 三 働きよう。発揮された力量。 四 粉飾を絶って生地まる出しの、ほんものの。 五 (人の為に)身を零落れさせる。

【頌】 [一]牛頭没、〔[*][二]閃電相似。 蹉過了也。〕 馬頭回。〔[**][三]如撃石火。〕 [四]曹渓鏡裏絶塵埃。〔打破鏡来、与你相見。須是打破始得。〕 [五]打鼓看来君不見、〔刺破你眼睛。 [***][六]莫軽易好。 漆桶有什麼難見処。〕 [七]百花春至為誰開。〔法不相饒、一場狼藉。 [八]葛藤窟裏出頭来。〕

【頌】 牛頭没れ、〔閃電に相似たり。蹉過い了れり。〕 馬頭回る。〔撃石火の如し。〕 曹渓の鏡裏塵埃を絶す。〔鏡を打破し来たらば、你と相見えん。須是らく打破して始めて得し。〕 鼓を打ち看来たるも君見ず、〔你の眼睛を刺破す。軽易ずること莫くんば好し。漆桶什麼の見難き処か有らん。〕 百花春至って誰が為にか開く。〔法相饒さず、一場の狼藉を。葛藤窟裏より出頭し来たれ。〕

* 閃電相似　福本に無し。 ** 如撃石火　福本には更に「如閃電光」の四字有り。 *** 莫軽易好　福本は「莫軽末後学」。

一 雪峰の峻烈な機用の畏ろしさを地獄の鬼(牛頭・馬頭)の動きように喩える。第四九則の垂示にもこの喩えを用いる。 二 目にもとまらぬ消え失せかた。 三 あっと言う間の現出。 四 曹渓は六祖慧能(六三八—七一三)のこと。その「菩提本無樹、明鏡亦非台。本来無一物、何処有塵埃」という偈を

ふまえる。その六祖の明鏡にも比すべき雪峰の澄みきった心眼をいう。五「普請」は単なる肉体労働ではなく、心身を一丸とした開眼の作業であるのに、君は自らの眼を開くことができぬ。六 甘く見てもらいますまい。七 上文「君不見」の「君」を雪峰その人に反転して、「百花らんまんのこの春の風光が(こちらの鏡にはありありと映っているのに)君の目には見えぬのか」という含み。八 ことばの陥穽から脱け出して自己を呈示してみよ。

〔評唱〕 雪竇自然見他古人、只消去[一]
[二]他命脈上一劄、与他頌出、牛頭没、馬頭回。且道、説箇什麼。見得透底、如早朝喫粥、斎時喫飯相似、只是尋常。雪竇慈悲、[三]当頭一鎚撃砕、一句截断、只是不妨[四]孤峻。如撃石火、似閃電光、不露鋒鋩、[五]無你湊泊処。且道、向[六]意根下摸索、得麼。此両句、一時道尽了也。

〔評唱〕 雪竇は自然に他の古人の只だ他の命脈上を一劄するを消うるのみなるを見て、他の与に「牛頭没れ馬頭回る」と頌出す。且く道え、箇の什麼をか説ける。見得透する底は、早朝に粥を喫い、斎時に飯を喫うが如くに相似て、只だ是れ尋常なり。雪竇の慈悲なる、当頭に一鎚もて撃砕き、一句もて截断するは、只だ是れ不妨に孤峻なり。撃石火の如く、閃電光に似て、鋒鋩を露さず、你が湊泊する処無し。且く道え、意根下に向いて摸索すること得しきや。此の両句、一時に道い尽し了れり。

一「去」は場所を示す助字。二 仏祖の息の根をグサリと刺し貫く。三 まっこうから。四 機鋒峻烈。五 とりつくしまもない。六 六根の一。意識、分別識。

雪竇第三句、却通一線道、略露些風規、早是落草。第四句、直下更是落草。若向言上生言、句上生句、意上生意、作解作会、不唯帯累老僧、亦乃辜負雪竇。古人句雖如此、意不如此、終不作道理繋縛人。曹渓鏡裏絶塵埃、多少人道、静心便是鏡。且喜没交渉。只管作計較道理、有什麼了期。這箇是本分説話、山僧不敢不依本分。牛頭没、馬頭回、雪竇分明説了也、自是人不見。所以雪竇如此郎当頌道、打鼓看来君不見。痴人還見麼。更向你道、百花春至為誰開。可謂豁開戸牖、与你一時八字打開了也。及乎春来、幽谷野澗、乃至無人処、百花競発。你且道、更為誰開。

雪竇第三句に、却って一線道を通して、略些の風規を露すも、早是に落草す。第四句は直下に更是に落草す。若し言上に向いて言を生じ、句上に句を生じ、意上に意を生じ、解を作し会を作さば、唯だ老僧を帯累するのみならず、亦乃た雪竇に辜負けり。古人は句は此の如しと雖も、意は此の如くならず、終に道理を作して人を繋縛せず。「曹渓の鏡裏塵埃を絶す」というに、多少の人は道う、「静心便ち是れ鏡」と。且喜たくも没交渉。只管に計較道理を作さば、什麼の了期か有らん。這箇は是れ本分の説話、山僧敢て本分に依らざるにあらず。「牛頭没れ、馬頭回る」と、雪竇分明と説き了れるも、自是より人見らず。所以に雪竇此の如く郎当に頌して道う、「鼓を打ち看来たるも君見ず」と。痴人、還た見るや。更に你に向って道う、「百花春至って誰が為にか開く」と。戸牖を豁開いて、你が与に一時に八字に打開し了れりと謂うべし。春の来たるに及んで、幽谷野澗、乃至人無き処にも百花競

いて発(ひら)く。你且(しばら)く道(い)え、更(さら)に誰(た)が為にか開く。

＊第三句　福本は「第二句」。　＊＊第四句直下更是落草　福本は「你」。　＊＊＊有什麼了期〜馬頭回〔二六字〕　福本に無し。

一 ヒントを一つ与える。 二 本筋、まっとうなところ。 三 ここは低次の立場に下り立ったことをいう。 四 断じて理屈をつけてやって人を縛るようなことはしない。 五 第一義での問題提起。 六 いっときに、いっせいに。 七 扉を八の字に開けはなつ。あけっぴろげでさらけ出す。

第六則　雲門十五日

【本則】挙。雲門垂語云、十五日已前、不問汝。〔半河南、半河北。這裏不収旧暦日。〕十五日已後、道将一句来。〔不免従朝至暮。切忌道著、来日是十六。日月如流。〕自代云、日日是好日。〔収。鰕跳不出斗。誰家無明月清風。還知麼、海神知貴不知価。〕

第六則　雲門十五日

【本則】挙す。雲門垂語して云く、「十五日已前は汝に問わず、〔半は河南、半は河北。這裏には旧き暦日を収らず。〕十五日已後、一句を道い将ち来たれ」。〔免れず朝より暮に至ることを。切に忌む来日は是れ十六(日)と道著うことを。日月流るるが如し。〕自ら代って云く、「日日是れ好日」。〔収めたり。鰕は斗を跳び出でず。誰家にか明月清風無からん。還た知るや、海神は貴きことを知りて価を知らざるを。〕

＊道著　福本に無し。　＊＊如　福本は「易」。　＊＊＊還知〜知価〔一〇字〕　福本に無し。

一 雲門文偃(八六四―九四九)。 二 垂示。問題を提起する。 三 夏安居の最終期日である七月十五日のことか。 四 どっちつかず。 五 決して〜するな。 六 断言する。言いとめる。 七 毎日がめでたい。日常性のマンネリズムを突き破る感動。 八 そら受けとった、「日日好日」という暦を。 九 (雲門も)やはり自らのパターンから脱け出せない。 一〇 万人に具わる清浄法身の喩え。(蘇東坡の「赤壁賦」に詠ずるそれは身外のもの。) 一一 龍神は、珊瑚の貴重なことは知っていても、その価値を知らない。人も自分にある仏性の値打ちを知らない、という喩え。含曦(元和・太和年間の長寿寺の僧)の「酬盧

仝見訪不遇題壁」と題する詩の句（『玉川子集』一）。

〔評唱〕雲門初参睦州[一]。州旋機電転[二]、直是難湊泊[三]。尋常接人、纔跨門、便搊住云、道道。擬議不来、便推出云、秦時𨍏轢鑽[四]。雲門凡去見、至第三回、纔敲門、州云、誰。門云、文偃。纔開門、便跳入。州搊住云、道道。門擬議、便被推出。門一足在門閫内、被州急合門、拶折雲門脚。門忍痛作声、忽然大悟。後来語脈接人、一摸[五]脱出睦州。後於陳操尚書[六]宅住三年。

〔評唱〕雲門は初め睦州に参ず。州は旋機電転して、直是に湊泊し難し。尋常人を接するに、門を跨ぐや纔や便ち搊住えて曰く、「道え道え」と。擬議し来たらざれば、便ち推し出して云く、「秦時の𨍏轢鑽」と。雲門凡そ去きて見ゆるに、第三回に至り、門を敲くや纔や、州云く、「誰ぞ」。門云く、「文偃」と。門を開くや纔や便ち跳び入る。州搊住えて云く、「道え道え」。門擬議し、便ち推し出さる。門の一足門閫の内に在り、州に急に門を合られて、雲門の脚拶折らる。門痛みを忍え声を作げ、忽然と大悟す。後来語脈もて人を接するに、一摸より睦州を脱出す。後に陳操尚書宅に住すること三年なり。

一　睦州道蹤（道明）（七八〇?—八七七?）。　二　教導のしかたが瞬発的で融通無礙。　三　かんどころ・つぼをつかまえにくい。　四　阿房宮の建造に使われたという大ドリル。鈍重で今は役に立たない。「鑠落鑽」とも。　五　睦州のパターンを模倣した。「一摸脱出」は同じ型から打ちぬくこと。「依模脱出」（第七則・本則の著語）とも。　六　睦州門下の居士。

睦州指往雪峰処去。至彼出衆便問、如何是仏。峰云、莫寐語。雲門便礼拝。一住三年。雪峰一日問、子見処如何。門云、某甲見処、与従上諸聖、不移易一糸毫許。

一「許」は、〜ばかり、〜ほど。

霊樹二十年、不請首座、常云、我首座生也。又云、我首座牧牛也。復云、我首座行脚也。忽一日令撞鐘、三門前接首座。衆皆訝之。雲門果至。便請入首座寮解包。霊樹人号曰知聖禅師。過去未来事皆預知。

一 霊樹如敏(?—九二〇)。二 禅院で衆僧の首位にある者。三 修行する。煩悩をコントロールすることを牛を飼い馴らすことに喩える。『十牛図』を参照。四 禅院の正門。

一日広主劉王、将興兵、躬入院、請師決臧否。霊樹已先知、怡然坐化。

睦州指して雪峰の処に去かしむ。彼に至って衆より出でて便ち問う、「如何なるか是れ仏」。峰云く、「寐語をいう莫れ」と。雲門便ち礼拝す。一住三年。雪峰一日問う、「子が見処如何」。門云く、「某甲が見処は従上の諸聖と一糸毫許も移易らず」と。

霊樹は二十年、首座を請かず、常に云く、「我が首座生まれたり」。又た云く、「我が首座牧牛せり」。復た云く、「我が首座行脚せり」と。忽として一日鐘を撞かしめて、三門の前に首座を接えんとす。衆皆な之を訝る。雲門果して至る。便ち請きて首座寮に入れ包を解かしむ。霊樹は人号して知聖禅師と曰う。過去未来の事を皆な預め知る。

一日広主劉王将に兵を興さんとし、躬ら院に入り、師に請いて臧否を決せんとす。霊樹已に先に知り、怡

広主怒曰、和尚何時得疾。侍者対曰、師不曾有疾。適封一合子、令俟王来呈之。広主開合、得一帖子、云、人天眼目、堂中首座。広主悟旨、遂寝兵。請雲門、出世住霊樹。後来方住雲門。

然として坐化す。広主怒って曰く、「和尚何時か疾を得たる」。侍者対えて曰く、「師曾て疾有らず。適に一つの合子を封じて、王の来たるを俟って之を呈せしむ」と。広主合を開いて一の帖子を得るに云く、「人天の眼目、堂中の首座」と。広主、旨を悟って遂に兵を寝む。雲門を請き、出世して霊樹に住せしむ。後来に方めて雲門に住す。

一　五代十国のひとつである南漢の事実上の建国者、劉隠(八七四―九一一)。この時、広州に割拠。以下の話は『伝灯録』一一・霊樹章に見える。　二　人間界・天上界の指導者。　三　禅院の住職となること。

師開堂説法、有鞠常侍致問、霊樹果子熟也未。門云、什麼年中、得信道生。復引劉王昔為売香客等因縁。劉王後諡霊樹為知聖禅師。霊樹生生不失通、雲門凡三生為王、所以失通。一日劉王詔師、入内過夏。共数人尊宿、皆受内人問訊説法。唯師一人不

師の開堂説法に、鞠常侍(なるもの)有りて問を致す、「霊樹の果子は熟せる也未」。門云く、「什麼の年中にか生なりと道える信を得たる」。復た劉王、昔売香の客と為る等の因縁を引く。劉王、後に霊樹に諡して知聖禅師と為す。霊樹は生生して通を失わざるも、雲門は凡そ三生して王と為る、所以に通を失う。一日劉王、師に詔げて、内に入って夏を過さしむ。数人の尊

言、亦無人親近。有一直殿使、書一偈、貼在碧玉殿上云、大智修行始是禅、禅門宜黙不宜喧。万般巧説争如実、輸却雲門総不言。

宿と共に、皆な内人の問訊を受けて説法す。唯だ師一人言わず、亦た人の親近する無し。一の直殿使有って、一偈を書して、碧玉殿上に貼在して云く、「大智の修行始めて是れ禅、禅門は宜しく黙すべくして宜しく喧すべからず。万般の巧説争か実に如かん、雲門の総く言わざるに輸却たり」と。

一 新任の住職の最初の説法。二 霊樹の実が未熟のままだなどとは一体いつの年のニュースだ。三 香を売り歩く商人。四 夏安居。四月一五日より七月一五日まで九十日間の夏の修行。五 修行を積んだ僧に対する敬称。六 王宮親衛隊の指揮使(司令官)。七 劉王の宮殿の名。八「輸」は負ける。「却」は動詞の後に付き、意味を強める。

雲門尋常愛説三字禅、顧鑑咦。又説一字禅。僧問、殺父殺母、仏前懺悔。殺仏殺祖、向什麼処懺悔。門云、露。又問、如何是正法眼蔵。門云、普。直是不容擬議。到平鋪処、又却罵人。若下一句語、如鉄橛子相似。

雲門尋常愛んで三字の禅を説く、顧と鑑と咦と。又た一字の禅を説く。僧問う、「父を殺し母を殺さば仏前に懺悔す。仏を殺し祖を殺さば、什麼処にか懺悔せん」。門云く、「露」。又た問う、「如何なるか是れ正法眼蔵」。門云く、「普」。直是に擬議を容さず。平鋪の処に到っては、又た却って人を罵る。若し一句語を下せば、鉄の橛子の如くに相似たり。

一『人天眼目』二の雲門宗の項には「師毎見僧、以目顧之、即曰鑑、或曰咦。而録者曰顧鑑咦。後来徳山円明密禅師、刪去顧字、但曰鑑咦。故叢林目之曰抽顧」と。二『臨済録』示衆の「逢仏殺仏、逢祖殺祖、逢羅漢殺羅漢、逢父母殺父母、逢親眷殺親眷、始得解脱」(岩波文庫九七頁)に基づく。三 堂々たる露呈。四 仏法の眼目。五 涯もない遍在。六 なんの子細もない、普通のところ。

後出四哲。乃洞山初・智門寛・徳山密・香林遠、皆為大宗師。香林十八年為侍者。凡接他、只叫遠侍者。遠云、喏。門云、是什麼。如此十八年。一日方悟。門云、我今後更不叫汝。雲門尋常接人、多用睦州手段。只是難為湊泊、有抽釘抜楔底鉗鎚。*雪竇道、我愛韶陽新定機、一生与人抽釘抜楔。

後に四哲を出だす。乃ち洞山の初・智門の寛・徳山の密・香林の遠にして、皆な大宗師為り。香林は十八年、侍者と為る。凡そ他を接するに、只だ「遠侍者」と叫ぶ。遠云く、「喏」。門云く、「是れ什麼ぞ」と。此の如くすること十八年。一日方めて悟る。門云く、「我今より後更に汝を叫ばじ」。雲門尋常人を接するに、多く睦州の手段を用う。只だ是れ湊泊を為し難きも、釘を抽き楔を抜く底の鉗鎚有り。雪竇道く、「我は愛す韶陽新定の機、一生人の与に釘を抽き楔を抜く」と。

＊雪竇道〜抜楔(一八字)　福本は「豆(＝竇)道我愛雲門」。

一 洞山守初(九一〇—九九〇)、智門師寛(生卒不詳)、徳山縁密(生卒不詳)、香林澄遠(九〇八—九八七)。二 かしこまった応答の声。「ハハッ」という感じ。三 第六二則と第一〇〇則の本則の評唱に

も見える。四 雲門が用いた睦州の機略。「韶陽」は韶州(広東省韶州府曲江県)で、文偃が住した雲門山光泰禅院があったことから、雲門文偃の別称。「新定」は、睦州郡(浙江省建徳)の別名で、睦州道蹤(道明)を指す。ここでは、斬新で定識ある霊機、の意味を含ませている。

垂箇問頭[一]示衆云、十五日已前、不問汝。十五日已後、道将一句来。坐[二]断千差、不通凡聖[三]。自代云、日日是好日。十五日已前、這語已坐断千差。十五日已後、這語也坐断千差。是他不道明日是十六、後人只管随語生解。有什麼交渉。他雲門立箇宗風、須是有箇為人処。垂語了、却自代云、日日是好日。此語通貫古今、従前至後、一時坐断。

箇の問頭を垂れて衆に示して云く、「十五日已前は汝に問わず。十五日已後(につき)、一句を道い将ち来たれ」と。千差を坐断して凡聖を通さず。自ら代って云く、「日日是れ好日」と。「十五日已前」、這の語已に千差を坐断す。「十五日已後」、這の語也た千差を坐断す。是れ他「明日は是れ十六」と道わず、後人只管に語に随せて解を生す。什麼の交渉か有らん。他の雲門、箇の宗風を立つるは、須是しく箇の為人の処有り。垂語し了って、却って自ら代って云く、「日日是れ好日」と。此の語、古今を通貫して、従前至後、一時に坐断す。

一「頭」は名詞につく接尾語。二 相対的なものをすべて撥無する。三 凡人も聖人も通らせない。

山僧如此説話、也是随語生解。他殺不如自殺。纔作道理、堕坑落塹。

山僧の此の如き説話も、也た是れ語に随せて解を生す。他殺せんより自殺するに如かず。道理を作すや纔

雲門一句中、三句俱備。蓋是他家宗旨如此。垂一句語、須要帰宗。若不如此、只是杜撰。此事無許多論説。而未透者、却要如此。若透得、便見古人意旨。看取雪竇打葛藤。

や坑に堕ち塹に落つ。雲門の一句の中に、三句俱に備わる。蓋し是れ他家の宗旨此の如し。一句語を垂るるには須らく宗に帰す要し。若し此の如くならずんば、只だ是れ杜撰。此の事には許多の論説無し。而るに未透の者は、却って此の如くならんと要す。若し透得せば、便ち古人の意旨を見ん。雪竇の葛藤を打するを看取よ。

一 雲門宗の三句。雲門文偃の教化の手段を法嗣の徳山縁密が三句にまとめたもの。「函蓋乾坤、截断衆流、随波逐浪」。二 「家」は名詞につく接尾語。ここは雲門宗を指す。三 「須要」は、〜する必要がある、〜しなくてはならない。四 「此事」は仏法の大事。仏法のことにくだくだしい言挙げは不要。

【頌】去却一、〔七穿八穴。向什麽処去。放過一著。〕拈得七。〔拈不出。却不放過。〕上下四維無等匹。〔何似生。上是天、下是地、東南西北与四維、有什麽等匹。争奈拄杖在我手裏。〕徐行踏断流水声、〔莫問脚跟下。難為体究、打入葛藤窟裏去了也。〕

【頌】一を去却り、〔七穿八穴。什麽処にか去く。一著を放過す。〕七を拈得す。〔拈り出せず。却って放過せず。〕上下四維に等匹無し。〔何似生。上は是れ天、下は是れ地、東南西北と四維と、什麽の等匹か有らん。争奈せん拄杖は我が手の裏に在り。〕徐に行きて踏断す流水の声、〔脚跟下を問うこと莫れ。体究を為し難く、葛藤窟裏に打入し去り了ればなり。〕縦に観て写

縦観写[9]出飛禽跡。〔眼裏亦無此消息[10]。野狐精見解。依前只在旧窠窟裏。〕草茸茸、[11]〔脳後抜箭。是什麼消息。[12]堕在平実処。〕煙冪冪。〔未出這窠窟。[13]足下雲生。〕[14]空生巌畔花狼藉。〔在什麼処。不喞噌漢。勘破了也。〕[15]弾指堪悲[16]舜若多。〔四方八面尽法界。向舜若多鼻孔裏道将一句来。在什麼処。〕莫[17]動著。[18]〔前言何在。動著時如何。〕動著三十棒。〔自領出去。便打。〕

き出す飛禽の跡。〔眼の裏に亦た此の消息無し。野狐精の見解。依前として只だ旧き窠窟の裏に在り。〕草は茸茸、〔脳後に箭を抜け。是れ什麼たる消息ぞ。平実の処に堕在つ。〕煙は冪冪。〔未だ這の窠窟を出でず。足下に雲生ず。〕空生の巌畔花狼藉たり。〔什麼処にか在る。不喞噌漢め。勘破し了れり。〕弾指して悲しむに堪えたり舜若多。〔四方八面尽く法界。舜若多の鼻孔裏に一句を道い将ち来たれ。什麼処にか在る。〕動著くこと莫れ。〔前言何にか在る。動著く時如何。〕動著かば三十棒せん。〔自ら領して出で去れ。便ち打つ。〕

一 「一」は根源の唯一、「七」は現象の多様。一と七とを手玉にとって取りかえる。自在な価値転換ぶり。 二 (一を除いたら)どこもかしこも穴だらけ。 三 しかしその一手は見のがしてやるとしよう。 四 東南・東北・西南・西北。 五 どうだ。「生」は意味のない接尾語。 六 どっこい我が手中の杖が待ちかまえているぞ。 七 流れる水の上をゆったりと歩いて渡り切る。「日日好日」の人の、尋常でしかも超絶的な生きかたの喩え。 八 身をもって究明する。 九 鳥の飛んだ道をありありと空中に描き出す。痕跡を残さぬ消息をありのままにつかみとる見事さ。 一〇 様子、動静。 一一 頭の後にささった矢を抜いてやれ。 一二 ごもっとも至極のところに収まり返っている。 一三 神通力を現した(気で

いる)。一四「空生」は、須菩提(Subhūti)。洞窟の中で坐禅していると、諸天がそれをめでて空中から花を雨ふらせたという故事による。一五 指をはじいて鳴らす。ここは(須菩提の在りようを)残念がるしぐさ。一六 Śūnyatā。虚空の神。ここは雲門に当てつける。一七 須菩提に対する叱責。一八 さんざんことばを弄んでおきながら、今さら何を言う。

〔評唱〕雪竇頌古、偏能如此。当頭以金剛王宝剣揮一下了、然後略露些風規。雖然如此、畢竟無有二解。去却一、拈得七、人多作算数会道、去却一、是十五日已前事。雪竇驀頭下両句言語印破了、却露出教人見、去却一、拈得七。切忌向言句中作活計。何故。胡餅有什麼汁。人多落在意識中。須是向語句未生已前会取始得。大用現前、自然見得也。所以釈迦老子成道後、於摩竭提国三七日中、思惟如是事。諸法寂滅相、不可以言宣。我寧不説法、疾入於涅槃。到這裏、

〔評唱〕雪竇の頌古、偏に能く此の如し。当頭に金剛王宝剣を以て、揮うこと一下し了って、然る後略些の風規を露す。此の如しと雖然も、畢竟二解有ること無し。「一を去却り、七を拈得す」につき、人多く算数の会を作して道う、「一を去却るは、是れ十五日已前の事」と。雪竇は、驀頭から両句の言語を下し印破し了り、却って露出し、人をして見しむ、「一を去却り、七を拈得す」と。切に忌む言句の中に活計を作すことを。何故ぞ。胡餅に什麼の汁か有らん。人多く意識の中に落在す。須是らく語句未生已前に向いて、会取して始めて得し。大用現前して、自然に見得せん。所以に釈迦老子は成道の後、摩竭提国に於て、三七日中、是の如き事を思惟す。「諸法寂滅の相は言を以て

覓箇[五]開口処不得。以方便力故、為[六]五比丘説已、至[七]三百六十会、説[八]一代時教。只是方便、所以脱珍御服、著弊垢衣、不得已、而向第二義門中浅近之処、[一〇]誘引諸子。若教他[九]向上全提、尽大地無一箇半箇。

宣ぶべからず。我寧ろ説法せず、疾かに涅槃に人らん」と。這裏に到って、箇の口を覓むるに得ず。方便力あるを以ての故に、五比丘の為に説き已り、三百六十会に至って、一代時教を説く。只だ是れ方便なり、所以に珍御の服を脱ぎて弊垢の衣を著け、已むを得ずして第二義門の中の浅近の処に諸子を誘引く。若し他をして向上に全提せしめば、尽大地に一箇半箇も無けん。

一 一切のものを自在に断ち切る宝剣。 二 仏法の核心をつく。 三 「老子」は尊称。 四 この四句は『法華経』方便品の偈。 五 ことばによる表現法。 六 鹿野苑で最初の説法を受け、仏弟子となった五人の比丘。憍陳如・阿湿婆恃・跋提・摩訶男・十力迦葉(または婆沙波)。「以方便」から「比丘説」までも『法華経』方便品の偈。 七 釈迦一生の説法の数。 八 釈迦一代の説法のことば。 九 仏法の真機をまるごと提示する。 一〇 一人残らず喪身失命するだろう。

且道、作麼生是第一句。到這裏、雪竇露些意教人見。你但上不見有諸仏、下不見有衆生、外不見有山河大地、内不見有見聞覚知。如大死底人

且く道え、作麼生か是れ第一句。這裏に到って、雪竇些の意を露し、人をして見しむ。你ら但だ上に諸仏有ることを見ず、下に衆生有ることを見ず、外に山河大地有ることを見ず、内に見聞覚知有ることを見ざ

却活相似、長短好悪、打成一片、一一拈来、更無異見、然後応用、不失其宜、方見他道去却一、拈得七、上下四維無等匹。若於此句透得、直得上下四維無有等匹。森羅万象、草芥人畜、著著全彰自己家風。所以道、万象之中独露身、惟人自肯乃方親。昔年謬向途中覓、今日看来火裏氷。天上天下、惟我独尊、人多逐末、不求其本。先得本正、自然風行草偃、水到渠成。徐行踏断流水声。徐徐行動時、浩浩流水声、也応踏断。縦観写出飛禽跡。縦目一観、直饒是飛禽跡、亦如写出相似。到這裏、鑊湯炉炭吹教滅、剣樹刀山喝便摧、不為難事。

れ。大死底人の却って活きかえるが如くに相似て、長短好悪を打成一片にし、一一拈じ来たるに、更に異見無く、然る後応用其の宜しきを失わずして、方めて他の「一を去却り、七を拈得す。上下四維等匹無し」と道うを見ん。若し此の句に透得せば、直得に上下四維等匹有ること無し。森羅万象、草芥人畜、著著全て自己の家風を彰す。所以に道う、「万象の中独り身を露す、惟だ人自ら肯って乃ち方めて親し。昔年謬って途中に覓む、今日看来たれば火の裏の氷」と。天上天下、惟我独尊なるに、人多く末を逐いて、其の本を求めず。先に本正しきを得れば、自然と風行きて草偃し、水到りて渠成る。「徐に行きて踏断く流水の声」。徐徐と行動む時、浩浩たる流水の声も、也た応に踏断くべし。「縦に観て写き出す飛禽の跡」。目を縦にして一観すれば、直饒是れ飛禽の跡も、亦た写き出すが如くに相似たり。這裏に到らば、鑊湯炉炭も吹いて滅えしめ、剣樹刀山も喝して便ち摧くことも、難事と為さず。

一 (上句をうけて)～という結果にまでなる。二 (碁の)一手一手。ひとつひとつ。三 長慶慧稜(八五四―九三二)の偈頌。四 終着点に到りつくまでの道程。悟りに至るまでの現実の生き方。五 草が風になびき伏すような、自然の勢い。おのずからに衆生が教化されることの喩え(『論語』顔淵「君子之徳風、小人之徳草。草上之風、必偃」による)。「水到渠成」も同旨。六 水が豊かに流れるさま。七 同安常察の詩十首(十玄談)の第九・廻機(転位とも)の句。「鑊湯炉炭」は地獄の酷刑、釜ゆで、火焙り。「剣樹刀山」は剣や刀が突っ立つ地獄の山。

雪竇到此、慈悲之故、恐人坐在無[一]事界中、復道、草茸茸、煙冪冪。所以蓋覆却、直得草茸茸、煙冪冪。且道、是什麼人境界。喚作日日是好日、得麼。且喜没交渉。直得徐行踏断流水声也不是、縦観写出飛禽跡也不是、草茸茸也不是、煙冪冪也不是。直饒総不恁麼、正是空生巌畔花狼藉。也須是[二]転過那辺始得。豈[三]不見、須[四]菩提巌中宴[五]坐、諸[六]天雨花讃嘆。尊者曰、空中雨花讃嘆、復[七]是何人。天曰、我是[八]天帝釈。尊者曰、汝何讃嘆。天曰、

雪竇此に到って慈悲の故に、人の無事界中に坐在らんことを恐れて、復た道う、「草は茸茸、煙は冪冪」と。所以て蓋覆却せて、直得には草は茸茸、煙は冪冪たり。且く道え、是れ什麼人の境界ぞ。喚んで「日日是れ好日」と作すは得しきや。且喜たくも没交渉。直得は「徐に行きて踏断く流水の声」も也た不是、「縦に観て写き出す飛禽の跡」も也た不是、「草は茸茸」も也た不是、「煙は冪冪」も也た不是なり。直饒総く恁麼ならざるも、正是しく「空生の巌畔花狼藉たる」のみ。也た須是らく那辺を転過して始めて得し。豈に見ずや、須菩提巌中に宴坐するに、諸天花を雨らして讃嘆す。尊者曰く、「空中に花を雨らして讃嘆するは、

我重尊者善説般若波羅蜜多。尊者曰、我於般若、未嘗説一字。汝云何讃歎。天曰、尊者無説、我乃無聞。無説無聞、是真般若。又復動地雨花。

復た是れ何人ぞ」。天曰く、「我は是れ天帝釈」。尊者曰く、「汝何をか讃嘆す」。天曰く、「我、尊者の善く般若波羅蜜多を説くを重んず」。尊者曰く、「我は般若に於て未だ嘗て一字をも説かず。汝云何にか讃歎す」。天曰く、「尊者説くこと無く、我乃ち聞くこと無し。説くこと無く聞くこと無き、是れ真の般若なり」と、又復地を動して花を雨らす。

一「無事」の境涯に安住して腰をすえてしまう。「坐在無事閣(または甲)裏」ということが多い。「無事」は人為を排したありのままの悟りの境地。もと僧肇の『宝蔵論』に見え、臨済が強調した。二「転」は座標軸転換の意。「過」は動作の経過を示す。三 周知のごとく。四 以下、『明覚禅師後録』(『雪竇語録』二)に見える。五 燕坐。坐禅のこと。六 天の神たち。七「復」は疑問詞と結びついて「いったい〜」の意。ただし「天帝釈」を「梵天」とする。八 釈迦提桓因陀羅(Śakra devānāṃ indra)。帝釈天。忉利天の主で、須弥山の頂の善見城に居り、仏法を擁護し、阿修羅を征する。九 智慧(般若)の完成(波羅蜜多)。無上絶対の智慧。一〇『維摩経』弟子品に「夫説法者、無説無示。其聴法者、無聞無得」と。

雪竇亦曾有頌云、雨過雲凝暁半開、数峰如画碧崔嵬。空生不解巌中坐、惹得天花動地来。天帝既動地雨花。

雪竇亦た曾て頌有りて云く、「雨過ぎ雲凝って暁半ば開け、数峰画くが如く碧く崔嵬たり。空生は巌中に坐するを解くせざるに、天花地を動すを惹得し来た

到這裏、更蔵去那裏。雪竇又道、我[四]恐逃之逃不得、大方之外皆充塞。忙忙擾擾知何窮、八面清風惹衣[五]裓。直[六]得浄躶躶赤洒洒、都無纎毫過患、也未為極則。且畢竟如何即是。看取下文。云、弾指堪悲舜若多。梵語舜若多、此云虚空神。以虚空為体、無身覚触、得仏光照、方現得身。你若得似舜若多神時、雪竇[七]正好弾指悲[八]歎。又云、莫動著。動著時如何。白日青天、開眼瞌睡。

る」と。天帝既に地を動して花を雨らす。這裏に到って、更に那裏にか蔵れ去らん。雪竇又た道う、「我恐らくは之を逃るれども逃れ得じ、大方の外も皆な充塞す。忙忙擾擾して何ぞ窮るを知らん、八面の清風衣裓を惹く」と。直得い浄躶躶赤洒洒として、都く纎毫も過患無きも、也未だ極則と為さず。且、畢竟如何なれば即ち是からん。下文を看取よ。云く、「弾指して悲しむに堪えたり舜若多」と。梵語の舜若多を此には虚空神と云う。虚空を以て体と為し、身無くして触を覚す。仏光の照すを得て、方めて身を現得すなり。你若し舜若多神の似きを得ん時は、雪竇正好しく弾指して悲歎せん。又た云く、「動著くこと莫れ」と。動著く時如何。白日青天に眼を開いて瞌睡す。

一『祖英集』上に「道貴如愚」の題で収める。　二 高く険しいさま。　三 洞窟での坐禅がまともにはやれなかったのに(そこを彼は維摩からきびしく叱責された)。「解」は「能」の意。　四『祖英集』上の「送善暹首座」中の句。ただし、「大方之外」を「大方無外」、「忙忙」を「茫茫」、「何窮」を「何極」、「清風」を「香風」とする。　五 仏教語で僧衣のこと。寒山の詩にも見える。　六 むき出しの丸

はだか。きれいさっぱり。七 まさにそうするほかない。まさしくそれがふさわしい。八 堂々として手のつけられぬ「日日好日」の在りよう。雪竇の「三十棒」を反転する。

第七則　法眼答慧超

垂示云、声前一句、千聖不伝。未曾親観、如隔大千。設使向声前辨得、截断天下人舌頭、亦未是性懆漢。所以道、天不能蓋、地不能載、虚空不能容、日月不能照。無仏処独称尊、始較些子。其或未然、於一毫頭上透得、放大光明、七縦八横、於法自在自由、信手拈来、無有不是。且道、得箇什麼、如此奇特。復云、大衆会麼。従前汗馬無人識、只要重論蓋代功。即今事且致、雪竇公案、又作麼生。看取下文。

第七則　法眼、慧超に答う

垂示に云く、声前の一句は、千聖も伝えず。未だ曾て親しく覩ざれば、大千を隔つるが如し。設使声前に辨得して、天下の人の舌頭を截断するも、亦た未だ是れ性懆の漢にあらず。所以に道う、天も蓋う能わず、地も載する能わず、虚空も容るる能わず、日月も照す能わずと。仏無き処に独り尊と称して、始めて較うこと些子なり。其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に透得し、大光明を放って、七縦八横、法に於て自在自由にして、手に信せて拈じ来たるものに、不是あること無し。且く道え、箇の什麼を得てか、此の如く奇特たる。復た云く、大衆会すや。従前の汗馬人の識る無し、只だ重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。即今の事は且く致く、雪竇の公案、又た作麼生。下文を看取よ。

一 ことばが存在しない次元の消息。思慮分別を超えた世界の姿。　二 「大千」は三千大千世界、広大

無辺の世界。無限の遠くにあるのと同じだ。以上の四句は羅山道閑の語。大慧『正法眼蔵』上に見える。三 気短な男。四 真理の無限定なことをいう。五 もし以上のようでないとしたら（以下のようだ）。aでなければb、そのどちらかだ、という言いかた。六 極小のものにも具現している真理を見て取る。「頭」は接尾語。七 七通八達、縦横自在。八 雪峰慧空（一〇九六―一一五八）の『東山外集』の頌古に見える。「汗馬」は、馬に汗をしたたらせて疾駆し、戦場でてがらをたてること。ここは、難行苦行の喩え。九「且置」に同じ。

【本則】挙。僧問法眼[一]、〔*道什麼。[二]担枷過状。〕[三]慧超咨和尚、如何是仏。〔**道什麼。[四]眼睛突出。〕法眼云、汝是慧超。〔[五]依模脱出。[六]鉄餕餡。[七]就身打劫。〕

【本則】挙す。僧、法眼に問う、〔什麼を道うぞ。担枷過状せよ。〕「慧超、和尚に咨う、如何なるか是れ仏」。〔什麼を道うぞ。眼睛突出す。〕法眼云く、「汝は是れ慧超」。〔模に依って脱出す。鉄餕餡。身に就いて打劫す。〕

＊道什麼担枷過状　福本では「和尚」の下に在り。　＊＊道什麼　福本に無し。

一 法眼文益（八八五―九五八）。二 自ら首かせをつけ、自白書をさし出せ。三 帰宗策真（？―九七九）の本名。法眼の法嗣。四 堅い物を呑み下しかねて目を白黒させるさま。五「模」は型。「脱出」は型からぬき出すこと。判で押したような紋切型。ワンパターンだ。「一摸脱出」（第六則・本則の評唱）、「一模脱出」（第二〇則・本則の著語）に同じ。六 鉄で作った饅頭の酸っぱい餡こ。箸にも棒にも掛からぬしろもの。七 自分自身を身ぐるみ剝ぐ。

〔評唱〕法眼禅師、有啐啄同時底機、具啐啄同時底用、方能如此答話。所謂超声越色、得大自在、縦奪臨時、殺活在我。不妨奇特。然而此箇公案、諸方商量者多、作情解会者不少。不知古人凡垂示一言半句、如撃石火、似閃電光、直下撥開一条正路。後人只管去言句上、作解会道、慧超便是仏、所以法眼恁麼答。有者道、大似騎牛覓牛。有者道、問処便是。有什麼交渉。若恁麼会去、不惟辜負自己、亦乃深屈古人。若要見他全機、除非是一棒打不回頭底漢、牙如剣樹、口似血盆、向言外知帰、方有少分相応。若一一作情解、尽大地是滅胡種族底漢。只如超禅客於此悟去、也是他尋常管帯参究。所以一言之下、如桶底

〔評唱〕法眼禅師、啐啄同時底機有り、啐啄同時底用を具して、方めて能く此の如く答話う。所謂声を超え色を越えて、大自在を得、縦奪時に臨み、殺活我に在るなり。不妨に奇特たり。然れども此箇の公案は、諸方に商量する者多く、情解の会を作す者少なからず。知らず、古人凡そ一言半句を垂示するに、撃石火の如く、閃電光に似て、直下に一条の正路を撥開くことを。後人は只管に言句上に去いて、解会を作して道く、「慧超は便ち是れ仏、所以に法眼恁麼に答う」と。有る者は道う、「大いに牛に騎って牛を覓むるに似たり」と。有る者は道う、「問処便ち是」と。什麼の交渉か有らん。若し恁麼に会し去らば、惟だ自己に辜負くのみならず、亦乃た深く古人を屈せん。若し他の全機を見んと要せば、除非是一棒に打てども頭を回さざる底の漢の、牙は剣樹の如く、口は血盆に似て、言外に帰を知るものにして、方めて少分の相応有らん。若し一一情解を作さば、尽大地是れ胡種族を滅する底

脱相似。

の漢ならん。只如超禅客此に於て悟り去るは、也た是れ他が尋常管帯参究すればなり。所以に一言の下に桶底の脱するが如くに相似たり。

一 孵化の時、中の雛と外の母鶏とが相応じて殻を破る。師弟の心機投合の喩え。二 現象の世界を超脱する。三 臨機応変に、放ったり、取りこめたり。四 質問そのものがツボをおさえていた(から、あの答えが引き出せた)。五 不当におとしいれる。六 一体となって通じ合う。七 慧超。「禅客」は上堂の際に質問を専門とする食客のような僧。八 「去」は、その動作の完了を示す。九 身心にしかと保持する。

只如則[一]監院、在法眼会[二]中、也不曾[三]参請入室。一日法眼問云、則監院何不来入室。則云、和尚豈不知、某甲[四]於青林処、有箇入[五]頭。法眼云、汝試為我挙看。則云、某甲問、如何是仏。林云、[六]丙丁童子来[七]求火。法眼云、好語、恐你錯会。可更説看。則云、丙丁属火。以火求火。如某甲是仏、更去覓仏。法眼云、監院果然錯会了也。

只如えば則監院は、法眼の会中に在るも、也た曾て参請入室せず。一日法眼問うて云く、「則監院何ぞ来たり入室せざる」。則云く、「和尚豈に知らずや、某甲青林の処に於て、箇の入頭有り」。法眼云く、「汝試みに我が為に挙し看よ」。則云く、「某甲『如何なるか是れ仏』と問うに、林云く、『丙丁童子来たりて火を求む』と」。法眼云く、「好語なるも、恐らくは你錯って会せん。更に説き看るべし」。則云く、「丙丁は火に属す。火を以て火を求む。如えば某甲が是れ仏なるに更

則*[八]不憒便起[九]単渡江去。法眼云、此人若回可救、若不回救不得也。則到中路、自忖云、他是五百人[一〇]善知識、豈可賺我耶。遂回再参。法眼云、你但問我、我為你答。則便問、如何是仏。法眼云、丙丁童子来求火。則於言下大悟。如今有者只管瞠眼作解会。所謂[一一]彼既無瘡、勿傷之也。這般公案、久参者一挙便知落処。法眼下謂之[一二]箭鋒相拄。更不用五位君臣[一三]・四料簡[一四]、直論箭鋒相拄。是他家風如此。一句下便見、当陽[一五]便透。若向句下尋思[一六]、卒摸索不著。

に去きて仏を覓むるがごとし」。法眼云く、「監院果然して錯って会し了れり」と。則不憒りて、便ち単を起ちて江を渡り去る。法眼云く、「此の人若し回らば救うべきも、若し回らずんば救うことを得じ」と。則、中路に到って、自ら忖って云く、「他は是れ五百人の善知識、豈に我を賺すべけんや」と。遂に回って再び参ず。法眼云く、「你但だ我に問え、我は你が為に答えん」。則便ち問う、「如何なるか是れ仏」。法眼云く、「丙丁童子来たりて火を求む」と。則、言下に大悟す。如今有る者は只管に眼を瞠って解会を作す。所謂「彼既に瘡無し、之を傷ること勿れ」なり。這般る公案、久参の者は一挙すれば便ち落処を知る。法眼下に之を箭鋒相拄ると謂う。更に五位君臣・四料簡を用いず、直に箭鋒相拄ることを論ず。是れ他の家風此の如し。一句下に便ち見かにして、当陽に便ち透る。若し句下に向いて尋思せば、卒に摸索不著。

＊不憒　福本に無し。

一 法眼の法嗣、報恩玄則。「監院」は、寺院の事務を総監する役。二 会下。門下の総称。三 参禅する。朝参暮請。四 青峰義誠の誤。五 悟りの最初の体験を得ること。六 丙丁(ひのえ・ひのと)は五行で火に当ることから、火の義。童子はその神格化。七 もっと言ってみたらどうかね。「可」は婉曲な勧告。八「不分」「不忿」と同じ。はなはだ憤る。九「単」は坐禅の坐位。そこから立ち上る。寺を離れる。一〇 五百人の弟子をもつ師匠。一一『維摩経』弟子品に見える。一二 弓の名人二人が相対して射合えば、二本の矢は空中で正面衝突する。問答がぴたりと嚙み合う喩え。『列子』湯問の飛衛と紀昌の故事による。一三 曹洞宗の教説。第四三則・本則の評唱に詳しい。一四 臨済の教説。四料揀。『臨済録』示衆(岩波文庫三一頁)参照。一五 真正面から、明々白々に。一六 あれこれ思案考慮する。

法眼出世、有五百衆。是時仏法大興。時韶[一]国師、久依疎山[二]。自謂得旨、乃集疎山平生文字頂相[三]、領衆行脚。至法眼会下、他亦不去入室。只令参徒随衆入室。一日法眼陞座[四]。有僧問、如何是曹源[五]一滴水。法眼云、是曹源一滴水。其僧惘然而退。韶在衆聞之、忽然大悟。後出世、承嗣法眼。有頌呈云、通[六]玄峰頂、不是人間。心外無

法眼出世して、五百の衆有り。是の時仏法大いに興る。時に韶国師、久しく疎山に依る。自ら旨を得たりと謂い、乃ち疎山平生の文字と頂相とを集めて、衆を領いて行脚す。法眼の会下に至って、他亦た去きて入室せず。只だ参徒をして衆に随って入室せしむ。一日法眼陞座す。僧有り問う、「如何なるか是れ曹源の一滴水」。法眼云く、「是れ曹源の一滴水」。其の僧惘然として退く。韶、衆に在って之を聞き、忽然と大悟す。後に出世して法眼を承嗣ぐ。頌有り、呈して云く、

法、満目青山。法眼印云、只這一頌、可継吾宗。子後有王侯敬重。吾不如汝。看他古人、恁麼悟去、是什麼道理。不可只教山僧説。須是自己、二六時中、打辦精神。似恁麼与他承当、他日向十字街頭垂手為人、也不為難事。

「通玄峰頂、是れ人間にあらず。心外に法無く、満目青山」と。法眼印して云く、「只だ這の一頌、吾が宗を継ぐべし。子は後に王侯の敬重する有らん。吾は汝に如かず」と。看よ他の古人、恁麼に悟り去る、是れ什麼の道理ぞ。只だ山僧をして説かしむべからず。須是らく自己ら二六時中精神を打辦すべし。恁麼の似く他に承当せば、他日十字街頭に向いて垂手為人せんこと、也た難事と為ず。

一 天台徳韶(八九一—九七二)。 二 疎山匡仁(八三七—九〇九)。 三 肖像画。 四 説法のため座にのぼる。 五 六祖の法源より流出した正法の意。 六 天台山にある峰。自らが達した玄奥の悟境に喩える。 七 印可。悟得したことを証明する。 八 全霊をふるいたたせる。 九 このように。 一〇 彼(徳韶)をぴたりとうけとめる。「承当」はうけがう、己れの事とする。

所以僧問法眼、如何是仏。法眼云、汝是慧超。有甚相辜負処。不見雲門道、挙不顧、即差互。擬思量、何劫悟。雪竇後面頌得、不妨顕赫。試挙看。

所以に僧、法眼に問う、「如何なるか是れ仏」。法眼云く、「汝は是れ慧超」と。甚の相辜負く処か有らん。見ずや雲門道く、「挙するに顧みざれば、即ち差互す。思量せんと擬せば、何の劫にか悟らん」と。雪竇後面に頌し得て、不妨に顕赫なり。試みに挙し看ん。

一 雲門文偃(八六四—九四九)。この頌は『雲門広録』上に見える。 二 すれちがう。

【頌】 江国春風吹不起、〔尽大地那裏得這消息。文彩已彰。〕鷓鴣啼在深花裏。〔喃喃何用。又被風吹別調中。豈有恁麼事。〕三級浪高魚化龍、〔通這一路。莫謾大衆好。踏著龍頭。〕痴人猶戽夜塘水。〔扶籬摸壁、挨門傍戸衲僧、有什麼用処。守株待兎。〕

【頌】 江国の春風吹き起らず、〔尽大地那裏よりか這の消息を得たる。文彩已に彰らか。〕鷓鴣啼いて深花裏に在り。〔喃喃何ぞ用いん。又た風に別の調べの中に吹かる。豈に恁麼の事有らんや。〕三級の浪高くして魚は龍と化せるに、〔這の一路を通ず。大衆を謾くこと莫くんば好し。龍の頭を踏著めり。〕痴人猶お戽む夜塘の水。〔籬に扶り壁を摸り、門に挨り戸に傍う衲僧、什麼の用処か有らん。株を守りて兎を待つ。〕

一 江南の地。法眼が道場を開いた江寧府(いまの南京市)のあたり。 二 「文彩」はそれと見てとられるしるし。(吹き起こらぬどころか)ありありと消息は漏れ出ている。 三 (まだ吹き起こらぬ春の風に)すでにシャコ(キジ科の鳥の一種)は花の陰でひそやかに応えているではないか。 四 鳥のさえずりの形容。 五 高駢(?—八八七)の詩「風筝」(「風筝寄意」とも)の一句。ただし『全唐詩』五九八では「風吹」を「移将」に作る。 六 禹門三級の伝説。禹が禹門(一名龍門)の山峡を三段に鑿って黄河の洪水を導いたと伝えられる。魚がそこを登ると龍に化すという。 七 龍に化してしまったとも知らず、夜の堰き止めで魚を取ろうとして水を掻い出している愚か者よ。 八 垣や壁にもたれ、門や戸によりかかる。主体性なく、人に頼る者。 九 愚頑の喩え。『韓非子』五蠹の故事から。

〔評唱〕雪竇是作家、於古人難咬難嚼、難透難見、節角誵訛処、頌出教人見、不妨奇特。雪竇識得法眼関捩子、又知慧超落処、更恐後人向法眼言句下錯作解会、所以頌出、這僧如此問、法眼如是答、便是江国春風吹不起、鷓鴣啼在深花裏。此両句只是一句。且道、雪竇意在什麼処。江西江南、多作両般解会道、江国春風吹不起、用頌汝是慧超。只這箇消息、直饒江国春風、也吹不起。鷓鴣啼在深花裏、用頌諸方商量這話浩浩地、似鷓鴣啼在深花裏相似。有什麼交渉。殊不知、雪竇這両句、只是一句。要得無縫無罅、明明向汝道、言也端、語也端、蓋天蓋地。他問、如何是仏。法眼云、汝是慧超。雪竇道、江国春

〔評唱〕雪竇は是れ作家なれば、古人の咬み難く嚼み難き、透り難く見難き、節角誵訛の処を、頌出して人をして見しめ、不妨に奇特たり。雪竇、法眼の関捩子を識得し、又た慧超の落処を知る。更に後人の法眼の言句の下に向いて、錯って解会を作さんことを恐る、所以に頌出すらく、這の僧此の如く問い、法眼是の如く答うるは、便ち是れ「江国の春風吹き起らず、鷓鴣啼いて深花裏に在る」なりと。此の両句は只だ是れ一句なり。且く道え、雪竇の意什麼処にか在る。江西と江南と、多く両般の解会を作して道う、「『江国の春風吹き起らず』とは、用て『汝は是れ慧超』というを頌す。只だ這箇の消息なれば、直饒江国の春風なるも也た吹き起らず。『鷓鴣啼いて深花裏に在り』とは、用て諸方這の話を商量して浩浩地なること、鷓鴣の啼いて深花裏に在るが似くに相似たるを頌す」と。什麼の交渉か有らん。殊に知らず、雪竇の這の両句、只だ是れ一句なることを。縫無く罅無きことを得んと要せば、

風吹不起、鷓鴣啼在深花裏。向這裏薦得去、可以丹霄独歩。你若作情解、三生六十劫。

明明と汝に向って道う、「言も也た端、語も也た端、天を蓋い地を蓋う」と。他問う「如何なるか是れ仏」。法眼云く、「汝は是れ慧超」。雪竇道く、「江国の春風吹き起らず、鷓鴣啼いて深花裏に在り」と。這裏に向いて薦得し去らば、以て丹霄を独歩すべし。你若し情解を作さば、三生六十劫なり。

一　ごつごつと角張り、入り組んで見分け難いところ。「節角聱訛処」(第四則・頌の評唱)に同じ。　二　理解して自分のものとする。主体的に身につける。　三　(悟るまでに)利根でも三生、鈍根ならば六十劫かかる。「三生」は三回の生まれかわり、「劫」は極めて長い宇宙論的時間。

雪竇第三第四句、忒煞傷慈。為人一時説破、超禅師当下大悟処、如三級浪高魚化龍、痴人猶戽夜塘水。禹門三級浪、孟津即是龍門、禹帝鑿為三級。今三月三、桃花開時、天地所感、有魚透得龍門、頭上生角、昂鬃鬣尾、拏雲而去。跳不得者、点額而回。痴人向言下咬嚼、似戽夜塘之水

雪竇の第三第四の句、忒煞だ慈に傷めり。人の為に一時に説破すらく、超禅師の当下に大悟せし処は「三級の浪高くして魚の龍と化せる」が如くなるに、「痴人猶お戽む夜塘の水」と。禹門三級の浪、孟津は即ち是れ龍門なり。禹帝鑿って三級と為す。今三月三、桃花開く時、天地の感ずる所にして、魚有り龍門を透得すれば、頭上に角を生じ、鬃鬣たる尾を昂げ、雲を拏んで去き、跳び得ざる者は、点額して回る。痴人の言

求魚相似。殊不知、魚已化為龍也。端師翁有頌云、一文大光銭、買得箇油糍。喫向肚裏了、当下不聞飢。此頌極好、只是太拙。雪竇頌得極巧、不傷鋒犯手。旧時慶蔵主愛問人*、如何是三級浪高魚化龍。我也不必在。我且問你、化作龍去、即今在什麼処。

下に向いて咬嚼するは、夜塘の水を戽んで魚を求むるが似くに相似たり。殊に知らず、魚已に化して龍と為れるを。端師翁に頌有り云く、「一文の大光銭、箇の油糍を買い得たり。肚裏に喫向め了って、当下に飢を聞かず」と。此の頌極めて好し、只だ是れ太だ拙なり。雪竇頌し得て極めて巧なれば、鋒に傷つき手を犯すということをせず。旧時、慶蔵主愛んで人に問う、「如何なるか是れ三級の浪高くして魚は龍と化す」と。我は也た必ずしも在らず。我且く你に問わん、「化して龍と作り去る、即今什麼処にか在る」と。

*愛問人～我且問你(二二字)　蜀本は「愛問人、三級浪高魚化龍、也不必在、我且問你」(一八字)。福本は「問人如何是三級浪高魚化龍、我也不問你」(一七字)。

一 慈悲の過剰であることか。二 急所のところを言いとめる。説き尽す。三 山西省河津県の西、孟津、龍門ともいう。禹が鑿ったと伝える。四 伝説上の聖王。黄河の洪水を治めたといわれる。五 鬐・鬣はたてがみ。しなって立つ尾。六 (龍となれずに)岩に頭をうちつけて引き下がる。七 咬文嚼字。言句についてあれこれ解釈をする。八 白雲守端(一〇二五—七二)。圜悟の師・五祖法演の師。九 未詳。なお黄庭堅(一〇四五—一一〇五)の墨跡『華厳疏巻』(上海博物館蔵)にも「乞我一文大光銭」という句が見える。一〇 自ら鋒に手を出して傷つくようなことは

しない。 二 圜悟が大潙慕喆のもとに参じたときの同学。 三 （その点については）別に気にはしない。特に問題とはせぬ。現代語の「不在乎」に当る。

第八則　翠巌夏末示衆

垂示云、[一]会則途中受用、如龍得水、似虎靠山。不会則[二]世諦流布、[三]羝羊触藩、守株待兎。有時一句、如踞地獅子、有時一句、如金剛王宝剣、有時一句、坐断天下人舌頭、有時一句、[四]随波逐浪。若也途中受用、遇知音、別機宜、識休咎、相共証明。若也世諦流布、具一隻眼、可以坐断十方、壁立千仞。所以道、大用現前、不存軌則。有時将一茎草作丈六金身用、有時将丈六金身作一茎草用。且道、憑箇什麼道理。[五]還委悉麼。試挙看。

第八則　翠巌、夏末に衆に示す

垂示に云く、会すれば途中受用、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。会せざれば世諦流布、羝羊藩に触れ、株を守って兎を待つ。有る時の一句は踞地獅子の如く、有る時の一句は、金剛王宝剣の如く、有る時の一句は、天下の人の舌頭を坐断し、有る時の一句は、波に随い浪を逐う。若也途中受用ならば、知音に遇いて機宜を別ち休咎を識り、相共に証明せん。若也世諦流布ならば、一隻眼を具して、以て十方を坐断して、壁立千仞なるべし。所以に道う、大用現前して軌則を存せず。有る時は一茎の草を将て丈六の金身の用を作し、有る時は丈六の金身を将て一茎の草の用を作す、と。且く道え、箇の什麼の道理にか憑る。還た委悉すや。試みに挙し看ん。

一　馬祖の法嗣、帰宗智常の語（『宗門統要集』四）。「途中受用」は、悟りに至る道中で悟りの境地を

楽しむこと。なお、『祖堂集』一五には「遇人則途中授与、不遇人則世諦流布」(『伝灯録』七もほぼ同文)と。二 世俗の価値観に流される。「世諦」は世俗的な規範、相対的な道理。転じて世俗。第一義諦、真諦(究極的真理)に対していう。三 牡羊がまがきに角をひっかけ、身動きがとれない。進退きわまることの喩え(『周易』大壮)。四 雲門三句の一。在らしめられるままに自在に生きる生き方。随縁行。五 知る。明らめる。委知。

【本則】挙。翠巌夏末示衆云、一夏以来、為兄弟説話。〔開口焉知恁麼。〕看翠巌眉毛在麼。〔只贏得眼睛也落地、和鼻孔也失了。入地獄如箭射。〕保福云、作賊人心虚。〔灼然是賊識賊。〕長慶云、生也。〔舌頭落地*。将錯就錯。果然。〕雲門云、関。〔走在什麼処去。天下衲僧跳不出。敗也。〕

*地　福本は「也」。

【本則】挙す。翠巌、夏末に衆に示して云く、「一夏以来、兄弟の為に説話す。〔口を開くも焉ぞ恁麼なることを知らん。〕看よ、翠巌が眉毛在りや」。〔只だ贏ち得たり、眼睛も也た地に落ち、鼻孔和も也た失い了れるを。地獄に入ること箭を射るが如し。〕保福云く、「賊を作す人は心虚なり」。〔灼然に是れ賊、賊を識る。〕長慶云く、「生ぜり」。〔舌頭地に落つ。錯を将て錯を就す。果然して。〕雲門云く、「関」。〔什麼処に走在ち去る。天下の衲僧跳け出せず。敗れたり。〕

一 翠巌令参。二 夏安居の終わりの日。三 仏法を謗ると眉毛が落ちるといわれる。仏法は説話(言説)を超えたものであり、言説に頼れば仏法を謗ることになる。四 結局のところ〜だけが収穫とし

て残った。空しく〳〵という結末が得られただけだ。五 あっという間に地獄に墜ちる。六 保福従展(?—九二八)。翠巌とは兄弟弟子。七 盗人は実は内心びくびくなのだ。八 長慶慧稜(八五四—九三二)。翠巌とは兄弟弟子。九 今、眉毛が生え揃った。一〇 自分の過ちを強引に正当化する。(過ちを転化してそれ自体が意味をもつように生かしていく、という場合もある。) 一一 ピシャリ。門は閉められたぞ。「ここが通れるか」という含み。

〔評唱〕 古人有晨参暮請。翠巌至夏末、却恁麼示衆。然而不妨孤峻、不妨驚天動地。且道、一大蔵教五千四十八巻、不免説心説性、説頓説漸。還有這箇消息麼。一等是恁麼時節、翠巌就中奇特。看他恁麼道。且道、他意落在什麼処。古人垂一鉤、終不虚設、須是有箇道理為人。人多錯会道、白日青天、説無向当話、無事生事。夏末先自説過、先自点検、免得別人点検他。且喜没交渉。這般見解、謂之滅胡種族。歴代宗師出世、若不

〔評唱〕 古人に晨参暮請有り。翠巌夏末に至って、却って恁麼に衆に示す。然れども不妨に孤峻、不妨に天を驚かし地を動かす。且く道え、一大蔵教五千四十八巻は、心を説き性を説き、頓を説き漸を説くことを免れず。還た這箇の消息有りや。一等じく是れ恁麼の時節なるも、翠巌は就中奇特たり。看よ他の恁麼に道うを。且く道え、他の意什麼処にか落在す。古人一鉤を垂るるに、終に虚には設けず、須是ずや箇の道理もて人の為にするところ有り。人多く錯り会して道う、「白日青天、無向当の話を説いて、無事なるに事を生ず。夏末に先ず自ら過を説き、先ず自ら点検し、別人の他を点検せんことを免れ得るなり」と。且喜たくも

垂示於人、都無利益。図箇什麼。到這裏見得透、方知古人有駆耕夫之牛、奪飢人之食手段。如今人問著、便向言句下咬嚼、眉毛上作活計。看他屋裏人、自然知他行履処、千変万化、節角聱訛、著著有出身之路、便能如此与他酬唱。此語若無奇特、雲門・保福・長慶三人、啞啞地与他酬唱作什麼。

没交渉(まとはずれ)。這般(かか)る見解(けんげ)、之を胡種族を滅すと謂う。歴代の宗師世に出づるも、若し人に垂示せずんば、都(まった)く利益(りやく)無し。箇の什麼(なに)をか図らん。這裏(ここ)に到って見得透せば、方(はじ)めて古人に耕夫の牛を駆り、飢人の食(じき)を奪う手段有ることを知らん。如今(いま)の人は問著(と)わるれば、便ち言句下に向(お)いて咬嚼(こうしゃく)し、眉毛上に活計(くらし)を作(な)す。看よ他(か)の屋裏の人、自然に他(そ)の行履(あんり)の処の千変万化、節角聱訛のところに、著著(ひとつひとつ)出身の路有るを知り、便ち能く此の如く他(かれ)と酬唱するを。此の語若し奇特無くんば、雲門・保福・長慶の三人、啞啞地(そうそうじ)に他(かれ)と酬唱して什麼(なに)か作(せ)ん。

＊先自説過先自点検　福本は「先責己過」。

一 朝夕に参禅し請益する。朝参暮請。 二 悟道に歩を進めようというこの時。 三 あてどない。「向当」は落ちつき場所。 四 どうしようもない。手がかりがない。 五 言句にとらわれた理解をする。 六 言句にとらわれた(眉毛が落ちかねない)議論に明け暮れる。 七 ここは、同門の人。 八 翠巌のずしりとした生き方。 九 悟りの路。「出身」は一切の縛から超出すること。 一〇 口舌で音を立てるさま。ぺちゃくちゃ。

方解恁麼道。〕失銭遭罪。〔飲気呑声、雪竇也不少。和声便打。〕潦倒保福、〔同行道伴、猶作這去就。両箇三箇。〕抑揚難得。〔放行把住、誰是同生同死。莫謗他好。且喜没交渉。〕嘮嘮翠巌、〔這野狐精。合取口好。〕分明是賊。〔道著也不妨。捉敗了也。〕白圭無玷、〔還辨得麼。天下人不知価。〕誰辨真仮。〔多只是仮。山僧従来無眼。碧眼胡僧。〕長慶相諳、〔是精識精、須是他始得。未得一半在。〕眉毛生也。〔在什麼処。従頂門上至脚跟下、一茎草*也無。〕

方めて恁麼に道うことを解たり。〕銭を失い罪に遭う。〔気を飲み声を呑むこと、雪竇も也た少なからず。声和に便ち打つ。〕潦倒たる保福は、〔同行の道伴、猶お這の去就を作す。両箇三箇。〕抑揚得難し。〔放行あれば把住あり、誰か是れ同生同死ならん。他を謗ること莫くんば好し。且喜たくも没交渉。〕嘮嘮たる翠巌は、〔這の野狐精。口を合取せば好し。〕分明に是れ賊。〔道著するも也た妨げず。捉敗し了れり。〕白圭玷無し、〔還た辨得るや。天下の人、価を知らず。〕誰か真仮を辨ぜん。〔多くは只だ是れ仮。山僧従来眼無し。碧眼の胡僧。〕長慶相諳んじ、〔是れ精、精を識る、須是らく他にして始めて得し。未だ一半を得ざる在。〕眉毛生ぜり、と。〔什麼処にか在る。頂門上より脚跟下に至るまで一茎草也無し。〕

＊草　蜀本に無し。

一 誤った導き方で人を駄目にしてしまう。 二 千年の昔から並ぶものが無い。 三 千人万人の中には一人か半人の傑物が立派に存在する。 四 一節をさらに二分する。限定できぬものを限定する。 五

「関」という答えで締め括った。六 できる。七 金を失って罰せられる。身から出た錆の報いだ。八 老いぼれた様子。九 上げたのか下げたのか把えどころがない。一〇 饒舌のさま。（言わでものことを言った。）一一 ぴたりと言いとめた、こういう言い方もよろしい。一二（この賊）つかまえたぞ。一三 白く清らかな玉器。『詩経』大雅・抑の「白圭之玷、尚可磨也」による。一四 本人が妖怪だからこそ妖怪と見破ったのは、さすが彼なればこそだ。

【評唱】雪竇若不恁麼慈悲頌出令人見、争得名善知識。古人如此、一一皆是事不獲已。蓋為後学著他言句、転生情解、所以不見古人意旨。如今忽有箇出来、掀倒禅床、喝散大衆、怪他不得。雖然如此、也須実到這田地始得。

〔評唱〕雪竇若し恁麼に慈悲もて頌出して人に見せしめずんば、争か善知識と名づくることを得ん。古人此の如くなるは、一一皆な是れ事已むことを獲ざるなり。蓋し後学は他の言句に著いて、転た情解を生じ、所以に古人の意旨を見ざるが為なり。如今忽箇の出で来たりて、禅床を掀倒し、大衆を喝散するもの有らば、他を怪しむことを得じ。此の如くなりと雖然も、也た須らく実に這の田地に到って始めて得し。

一 もし。「忽若」「若忽」とも。二 第四則・本則の評唱に既出。三 状態、境地。

雪竇道、千古無対。他只道、看翠巌眉毛在麼。有什麼奇特処、便乃千古無対。須知古人吐一言半句出来、

雪竇道う、「千古に対無し」と。他は只だ道う、「看よ、翠巌が眉毛在りや」と。什麼の奇特たる処有ってか、便乃ち千古に対無き。須らく知るべし、古人一言

不是造次、須是有定乾坤底眼始得。雪竇著一言半句、如金剛王宝剣、如踞地獅子、如撃石火、似閃電光。若不是頂門具眼、争能見他古人落処。這箇示衆、直得千古無対、過於徳山棒・臨済喝。且道、雪竇為人意在什麼処。你且作麼生会、他道千古無対。

半句を吐き出し来たるも、是れ造次ならず、須是ずや乾坤を定むる底の眼有って始めて得し。雪竇の一言半句を著くるは、金剛王宝剣の如く、踞地獅子の如く、撃石火の如く、閃電光に似たり。若し是れ頂門に眼を具せずんば、争か能く他の古人の落処を見ん。這箇の示衆、直得に千古に対無く、徳山の棒・臨済の喝に過れり。且く道え、雪竇為人の意、什麼処にか在る。你且く作麼生か会せん、他の「千古に対無し」と道うことを。

一 すぐさま。「乃」は語助。 二 徳山宣鑑(七八二―八六五)は棒使いの禅匠として知られる。 三 臨済義玄(?―八六六)は弟子を指導するのによく大喝を与えた。

関字相酬、失銭遭罪、這箇意如何。直饒是具透関底眼、到這裏、也須子細始得。且道、是翠巌失銭遭罪、是雪竇失銭遭罪。你若透得、許你具眼。潦倒保福、抑揚難得、抑自己、揚古人。且道、保福

「関字もて相酬ゆるは、銭を失い罪に遭う」とは、這箇の意如何。直饒是れ透関底眼を具するも、這裏に到らば、也た須らく子細にして始めて得し。且く道え、是れ翠巌銭を失い罪に遭うか、是れ雪竇銭を失い罪に遭うか。你若し透得せば、你の眼を具せるを許めん。「潦倒たる保福は、抑

在什麼処是抑、什麼処是揚。嘮嘮翠巌、分明是賊、且道、他偸什麼来。雪竇却道是賊、切忌[一]随他語脈転却。到這裏、須是自有操持始得。白圭無玷、頌翠巌大似白圭相似、更無些瑕翳。誰辨真仮、可謂罕有人辨得。雪竇有大才、所以従頭至尾、一串穿却、末後却方道、長慶相諳、眉毛生也。且道、生也在什麼処。[二]急著眼看。

揚得難し」とは、自己を抑するか、古人を揚するか。且く道え、保福什麼処に在ってか是れ抑、什麼処にか是れ揚。「嘮嘮たる翠巌は、分明に是れ賊」と、且く道え、他什麼をか偸み来たる。雪竇却って道う「是れ賊」と。切に忌む他の語脈に随って転却することを。這裏に到って、須是らく自ら操持すところ有って始めて得し。「白圭玷無し」とは、翠巌の大いに白圭の似くに相似て、更に些も瑕翳無きを頌す。「誰か真仮を辨ぜん」とは、人の辨得するもの有ること罕なりと謂うべし。雪竇は大才有り、所以に頭より尾に至るまで、一串に穿却き、末後に却って方めて道う、「長慶相諳んじ、眉毛生ぜり(と言う)」と。且く道え、什麼処にか生ぜる。急ぎ眼を著けて看よ。

一 雪竇のことばにふりまわされる。 二 雪竇の「静而善応頌」(第一二則・頌の評唱に見える)の一句。すぐさま勘どころに心を集中してみなさい。「看」は勧誘を表す。

第九則　趙州東西南北

垂示云、[1]明鏡当台、妍醜自辨。[2]鏌鎁在手、[3]殺活臨時。[4]漢去胡来、胡来漢去。死中得活、活中得死。且道、到這裏、又作麼生。若無透関底眼[5]転身処、到這裏、灼然不奈何。且道、如何是透関底眼転身処。試挙看。

第九則　趙州の東西南北

垂示に云く、明鏡台に当りて、妍醜自ら辨ず。鏌鎁手に在りて、殺活時に臨む。漢去り胡来たり、胡来たり漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且く道え、這裏に到って又た作麼生。若し透関底の眼、転身の処無くんば、這裏に到って灼然に奈何ともならず。且く道え、如何なるか是れ透関底の眼、転身の処。試みに挙し看ん。

一 六祖の「明鏡亦非台」を逆手にとる。 二 伝説上の名剣の名。 三 殺すも活かすも思うまま。 四 雪峰の「我有一面古鏡、胡来胡現、漢来漢現」を応用した修辞。 五 迷から悟へ活路をきりひらいて転ずる機。

【本則】挙。僧問[1]趙州、如何是趙州。〔河北河南、総説不著。爛泥裏有刺。[2]不在河南、正在河北。〕州云、東門、西門、南門、北門。〔開也。相罵饒

【本則】挙す。僧、趙州に問う、「如何なるか是れ趙州」。〔河北といい河南というも、総て説き著れず。爛泥裏に刺有り。河南に在らず、正に河北に在り。〕州云く、「東門、西門、南門、北門」。〔開けり。相罵

你接觜、相唾饒你潑水。見成公案[三]、還見麼。便打。〕

一　趙州従諗（七七八—八九七）。また、ここでは地名（河北省西部の都市）にもかけている。　二　そこは河南ではなく河北なのだ。ぴたりとそこと決まっている。　三　裁かれるべきものとして目の前に呈示された案件。（どのように裁くかは各自に任された問題。）現成公案（第五一則の垂示）。

〔評唱〕大凡参禅問道、明究自己。切忌揀択言句。何故。不見趙州挙道、至道無難、唯嫌揀択。又不見雲門道、如今禅和子、三箇五箇、聚頭口喃喃地便道、這箇是上[一]才語句、那箇是就[二]身処打出語。不知古人方便門中、為初機後学[三]、未明心地、未見本性、不得已而立箇方便語句。如祖師西来、単伝心印、直指人心、見性成仏、那裏如此葛藤。須是斬断語言、格外見[四]諦[五]、透脱得去、可謂如龍得水、似虎靠山。

るときは你に饒す觜を接げ、相唾するときは你に饒す水を潑げ。見成公案、還た見るや。便ち打つ。〕

〔評唱〕大凡そ参禅問道は、自己を明究す。切に忌む言句に揀択ることを。何故ぞ。見ずや、趙州挙して道く、「至道難きこと無し、唯だ揀択を嫌う」と。又た見ずや、雲門道く、「如今の禅和子、三箇五箇と頭を聚めて口喃喃地して便ち道う、『這箇は是れ上才の語句、那箇は是れ身処に就いて打出する語』と」と。知らずや、古人は方便門の中に、初機後学の、未だ心地を明らめず、未だ本性を見ざるものの為に、已むを得ず箇の方便の語句を立てたるを。祖師西来、単伝心印、直指人心、見性成仏の如きは、那裏にか此の如く葛藤せん。須是らく語言を斬断り、格外に見諦して、透脱得し去れば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠る

に似たりと謂うべし。

一 才能の優れた人。 二 その人自身の体験から出たことば。 三 心を万法の根源とし、万物を生成する大地になぞらえる。心という地盤。 四 規範を超え出て真実相を見あかす。 五 超越し解脱する。「得去」は動詞の後に付き、動作の成就を示す。

久参先徳、有見而未透、透而未明。謂之請益。若是見得透請益、却要語句上周旋、無有凝滞。久参請益、与賊過梯、其実此事不在言句上。所以雲門道、此事若在言句上、三乗十二分教、豈是無言句、何須達磨西来。汾陽十八問中、此問謂之験主問、亦謂之探抜問。

久参の先徳にも、見て未だ透らず、透って未だ明らめざるところ有り。之を請益と謂う。若是見得透して請益せば、却って語句の上に周旋して、凝滞有ること無きを要す。久参の請益は、賊の与に梯を過すも、其の実、此の事は言句の上に在らず。所以に雲門道く、「此の事若し言句の上に在らば、三乗十二分教、豈に是れ言句無からんや、何ぞ達磨の西来を須いん」と。汾陽の十八問の中に、此の問、之を験主問と謂い、亦た之を探抜問と謂う。

一 教えを請うこと。 二 泥棒に梯子を掛けてやるようなもの。 三 この究極の大事。 四 「三乗」は声聞乗・縁覚乗・菩薩乗。「十二分教」は一切経を十二種類に分類したもの。一切の教学、経典。 五 汾陽善昭(九四七―一〇二四)が分類した十八種の問い。

這僧致箇問頭、也不妨奇特。若不

這の僧箇の問頭を致す、也た不妨に奇特たり。若し

是趙州、也難祇対他。這僧問、如何是趙州。趙州是本分作家、便向道、東門、西門、南門、北門。僧云、某甲不問這箇趙州。州云、你問那箇趙州。後人喚作無事禅、賺人不少。何故。他問趙州、州答云、東門、西門、南門、北門、所以只答他趙州。你若恁麼会、三家村裏漢、更是会仏法去。只這便是破滅仏法。如将魚目比況明珠、似則似、是則不是。山僧道、不在河南、正在河北。且道、是有事、是無事。也須是子細始得。

是れ趙州にあらずんば、也た他に祇対え難からん。這の僧問う、「如何なるか是れ趙州」と。趙州は是れ本分の作家なれば、便ち向って道う、「東門、西門、南門、北門」と。僧云く、「某甲這箇の趙州を問わず」。州云く、「你那箇の趙州をか問う」と。後人喚んで無事禅と作すは人を賺すこと少なからず。何故ぞ。他趙州を問うに、州答えて「東門、西門、南門、北門」と云うは、只だ他に趙州を答うる所以なり。你若し恁麼に会せば、三家村裏の漢も更に是れ仏法を会し去るなり。只だ這れ便ち仏法を破滅す。魚目を将て明珠に比況するが如く、似たることは則ち似たるも、是なることは則ち是ならず。山僧道う、「河南に在らず、正に河北に在り」と。且く道え、是れ有事か、是れ無事か。也た須是らく子細にして始めて得し。

一（趙州のこの答え方を）「無事」にあぐらをかいた禅と見る。　二　以上は「無事禅」と見ての誤った理解の例示。　三　僻村に住む男、仏教とは無縁の男。

遠録公云、末後一句、始到牢関。

遠録公云く、「末後の一句、始めて牢関に到る」と。

指南之旨、不在言詮。[四]十日一風、五日一雨、[五]安邦楽業、鼓腹謳歌、謂之太平時節、謂之無事。不是拍[六]盲便道無事。須是透過関捩子、出得荊棘林、浄躶躶、赤灑灑。依前似平常人、[七]由你有事也得、無事也得。七縦八横、終不執無定有。有般底人道、本来無[八]一星事、但[九]只遇茶喫茶、遇飯喫飯。此是大妄語、謂之未得謂得、未証謂証。元来不曾参得透、見人説心説性、説玄説妙、便道、[一〇]只是狂言、本来無事。可謂一盲引衆盲。殊不知、祖師未来時、那裏喚天作地、喚山作水来。為什麼祖師更西来。諸方陞堂入室、説箇什麼。尽是情識計較。若是情識*計較情尽、方見得透。若見得透、依旧天是天、地是地、山是山、水是水。

指南の旨は、言詮に在らず。十日一風、五日一雨、邦を安んじ業を楽しみ、腹を鼓して謳歌す。之を太平の時節と謂い、之を無事と謂う。是れ拍盲に便ち無事と道うにあらず。須是ずや関捩子を透過し、荊棘林を出得して、浄躶躶、赤灑灑たり。依前として平常の人に似たらば、你に由す、有事なるも也た得く、無事なるも也た得きを。七縦八横、終に無に執し有に定まるということをせず。有般底人は道う、「本来一星事も無し、但只茶に遇っては茶を喫し、飯に遇っては飯を喫す」と。此れは是れ大妄語、之を未だ得ざるに得たりと謂い、未だ証らざるに証れりと謂うと謂う。元来曾て参得透せざるに、人の心を説き性を説き、玄を説き妙を説くを見ては、便ち道う「只だ是れ狂言なり。本来無事なるを」と。一盲衆盲を引くと謂うべし。殊に知らず、祖師未だ来たらざる時、那裏にか天を喚んで地と作し、山を喚んで水と作し来たらん。為什麼にか祖師更に西来す。諸方陞堂入室して、箇の什麼をか説く。

尽く是れ情識の計較なり。若是情識計較の情尽くれば、方めて見得透せん。若し見得透せば、旧の依に天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水なり。

＊若是情識計較情尽　福本は「若得識情計較尽」。

一 浮山法遠(九九一—一〇六七)。二「正在河北」の一句を指す。三 堅牢な関門。悟りへの関所。四 気候が順調なこと。五風十雨。『論衡』是応の句。五 天下太平を楽しむ喩え。六 そこひ(外見は異状が無くて、眼球内に故障のある眼病)のこと。七 好きなままに任す。八 毛すじほどの事。「一星」は微細の意。九「但」と同じ。一〇 放言。言いたい放題。

[一]古人道、[二]心是根、法是塵、[三]両種猶如鏡上痕。到這箇田地、自然浄躶躶、赤灑灑。[四]若極則理論、也未是[五]安穏処在。到這裏、人多錯会、[六]打在無事界裏、仏也不礼、香也不焼。似則也似、争奈脱体不是。纔問著、却是極則相似。纔拶著、七花八裂、[七]坐在空腹高心処。及到[八]臈月三十日、換手搥胸、已是遅了也。這僧恁麼問、趙州恁麼

古人道く、「心は是れ根、法は是れ塵、両種猶お鏡上の痕の如し」と。這箇の田地に到らば、自然に浄躶躶赤灑灑たらん。若し極則に理論せば、也た未だ是れ安穏の処にあらざる在。這裏に到って、人多く錯り会して、無事界裏に打在して、仏も也た礼せず、香も也た焼かず。似たることは則ち也た似たるも、争奈せん脱体不是なり。問著うや纔や却って是れ極則に相似たり。拶著っこむや纔や七花八裂、空腹高心の処に坐在す。臈月三十日に到るに及んで、手を換えて胸を搥つ

答。且道、作麼生摸索。恁麼也不得、不恁麼也不得、畢竟如何。這些子[九]是難処、所以雪竇拈出来、当[一〇]面示人。

も、已に遅れ了れり。這の僧恁麼に問い、趙州恁麼に答う。且く道え、作麼生か摸索せん。恁麼も也た得からず、恁麼ならざるも也た得からず、畢竟如何。這の些子是れ難処なり、所以に雪竇拈出し来たりて、当面に人に示す。

一 永嘉玄覚(六七五―七一三)『証道歌』。二 心は六根の一つとしての知覚、主観。法は六塵の一つとしての対象、客観世界。三 心(知覚)も法(対象)も。四 極則のところを言挙げする。五 確実でゆるぎない。六「無事」という「安穏」な世界に収まりかえる。「打在」は尻を据える。「坐在」と同義。七 実質は空虚で観念だけは高邁。中味はないのに悟ったつもり。八 大晦日。転じて最後の日、命終の日。九 この微妙なところ。一〇 真正面から、ずばりと。

趙州一日坐次、侍者報云、大王来[一]也。趙州矍然云、大王万[二]福。侍者云、未到、和尚。州云、又道来也。参[三]到這裏、見到這裏、不妨奇特。南禅師拈云、侍者只知報客、不知身在[四]帝郷。趙州[五]入草求人、不覚渾[六]身泥水。這些子実処、諸人還知麼。看取雪竇頌。

趙州一日坐せし次、侍者報じて云く、「大王来たれり」。趙州矍然て云く、「大王万福」。侍者云く、「未だ到らず、和尚」。州云く、「又た道う、来たれり、と」と。這裏に参到し、這裏に見到せば、不妨に奇特たり。南禅師拈じて云く、「侍者は只だ客を報ずることを知って、身の帝郷に在ることを知らず。趙州は草に入って人を求め、渾身泥水なることを覚えず」と。這の些

子の実処、諸人還た知るや。雪竇の頌を看取よ。

一 趙王王鎔（八七三―九二一）であろう。「趙州真際禅師行状」（『趙州録』付載）参照。二 挨拶のことば。三 黄龍慧南（一〇〇二―六九）。四 人王ではなく法王の境域。五 凡俗の地に下り立って、法を受けいれることのできるしかるべき人を求める。六 全身どろまみれ。人の為にとせずもがなのことまでする喩え。

【頌】句裏呈機劈面来、〔響。魚行水濁。莫謗趙州好。〕爍迦羅眼絶纎埃。〔撒沙撒土、莫帯累趙州。撈天模地作什麼。〕東西南北門相対、〔開也。那裏有許多門。背却趙州城、向什麼処去。〕無限輪鎚撃不開。〔自是你輪鎚不到。開也*。〕

【頌】句の裏に機を呈して劈面から来たり、〔響けり。魚行けば水濁る。趙州を謗ること莫くんば好し。〕爍迦羅眼、纎埃を絶す。〔沙を撒き土を撒いて、趙州を帯累にすること莫れ。天を撈り地を模りて什麼か作せん。〕東西南北の門相対して、〔開きたり。那裏にか許多も門有らん。趙州城に背却けて什麼処に向ってか去く。〕限り無く鎚を輪すも撃ち開けられず。〔自是より你が鎚を輪すも到かざるなり。開きたり。〕

＊開也　蜀本に無し。

一 言句の中にずばり真機を呈示して。二 まっこうから。「劈口」「劈眼」「劈頭」も同じ。三 第二則・本則の著語を参照。四 ブッダの八十種好の一つ。白と黒との蓮華の花瓣のようにはっきりした眼。ただし、圜悟は「堅固眼・金剛眼」とする。五 六祖の「何処惹塵埃」を踏まえる。ブッダの眼

は塵ひとつ無く清らか。六 そんな仰々しい眼をもち出すことへの強い違和を示す。七 開いているのに、閉まっていると勘ちがいして引き返して。八 ハンマーを風車のようにふりまわす。

〔評唱〕 趙州臨機、一似金剛王宝剣。擬議即截却你頭、往往更当面換却你眼睛。這僧也敢捋虎鬚、致箇問頭、大似無事生事、争奈句中有機。他既呈機来、趙州也不辜負他問頭、所以亦呈機答。不是他特地如此、蓋為透底人自然合轍、一似安排来相似。

〔評唱〕 趙州は機に臨んで、一に金剛王宝剣に似たり。擬議せば即ち你が頭を截却し、往往に更に面と当って你の眼睛を換却えん。這の僧也た敢て虎鬚を捋き、箇の問頭を致すは、大いに無事に事を生ずるに似たるも、争奈せん句中に機有り。他既に機を呈し来たれば、趙州も也た他の問頭に辜負かず、所以に亦た機を呈して答う。是れ他特地に此の如くなるにあらず、蓋し透底る人にして自然に轍に合するが為に、一に安排し来たるが似くに相似たり。

一 前もって御膳立てされていたみたいだ。

不見有一外道、手握雀児、来問世尊云、且道、某甲手中雀児、是死耶、是活耶。世尊遂騎門閫云、你道、我出耶、入耶。〈一本云、世尊竪起拳頭云、開也、合也。〉外道無語、遂

見ずや一の外道有り、手に雀児を握り、来たりて世尊に問うて云く、「且く道え、某甲が手中の雀児、是れ死するか、是れ活くるか」と。世尊遂に門閫を騎いで云く、「你道え、我出づるか、入るか」と。〈一本に云く、「世尊拳頭を竪起てて云く、『開くや、合づる

礼拝。此話便似這公案。古人自是血[二]脈不断、所以道、問在答処、答在問処。

一 未詳。 二 精神が脈々と伝えられている。

雪竇如此見得透便道、句裏呈機劈面来。句裏有機、如帯[一]両意。又似問人、又似問境相似。趙州不移易一糸毫、便向他道、東門、西門、南門、北門。爍迦羅眼絶繊埃、此頌趙州人境倶奪、向句裏呈機与他答。此[*]謂之有機有境。纔転便照破他心胆。若不如此、難塞他問頭。爍迦羅眼者、是梵語、此[二]云堅固眼、亦云金剛眼。照見無碍、不唯千里明察秋毫、亦乃定邪決正、辨得失、別機宜、識休咎。雪竇云、東西南北門相対、無限輪鎚撃不開。既是無限輪鎚、何故撃不開。

や』と」と。〉外道無語、遂に礼拝す。此の話便ち這の公案に似たり。古人自是より血脈不断、所以に道う、「問は答処に在り、答は問処に在り」と。

雪竇此の如く見得透して便ち道う、「句の裏に機を呈して劈面から来たり」と。句の裏に機有り、両意を帯ぶるが如し。又た人を問うに似、又た境を問うが似くに相似たり。趙州一糸毫も移易えず、便ち他に向って道う、「東門、西門、南門、北門」と。「爍迦羅眼、繊埃を絶す」とは、此れは趙州の人境倶に奪って、句の裏に向いて機を呈して他の与に答うるを頌す。此れ之を「機有り境有り」と謂う。転ずるや纔や便ち他の心胆を照破す。若し此の如くならずんば、他の問頭を塞ぎ難からん。「爍迦羅眼」は、是れ梵語。此に堅固眼と云い、亦た金剛眼と云う。照見無碍、唯だ千里に秋毫を明察するのみにあらず、亦乃た邪を定め正を決し、得失を辨じ、機宜を別ち、休咎を識る。雪竇云く、

自是雪竇見処如此。你諸人又作麼生得此門開去。[三]請参詳看。

「東西南北の門相対して、限り無く鎚を輪(ふりまわ)すも撃ち開けられず」と。既(すで)是に限り無く鎚を輪すに、何故ぞ撃ち開けられざる。自是(もと)より雪竇の見処此の如し。你諸人又た作麼生(そもさん)か此の門の開き去るを得ん。請う参詳し看よ。

＊此謂之有機有境　福本は「此之謂有機変」。

一 (相手の含意を)そのままに受けとめて。　二 中国では。　三 よくよく考えてみなさい。

第一〇則　睦州問僧甚処

垂示云、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼。[一]若論戦也、箇箇立在[二]転処。所以道、若向上転去、直得釈迦・弥勒・文殊・普賢、千聖万聖、天下宗師、普皆飲気呑声。若向下転去、[三]醯雞蠛蠓*、[四]蠢動含霊、一一放大光明、一一[五]壁立万仞。[六]儻或[七]不上不下、又作麼生商量。[八]有条攀条、無条攀例。試挙看。

＊蠛蠓　福本は「蚊虻」。

一 巌頭の語。頌の評唱に見える。 二 向上か向下かに転ずる分岐点。 三 小さな虫の類。 四 うごめくもの、知覚をもつもの。あらゆる生き物。 五 断崖の高くそそり立つさま。ここは、主体確立のさま。 六 もし。「儻」「儻若」とも。 七 向上にも向下にも転じなければ。 八 「条」は法律の条文、「例」は判例。

【本則】挙。[一]睦州問僧、[二]近離甚処。

第一〇則　睦州、僧に甚処ぞと問う

垂示に云く、恁麼恁麼、恁麼ならず恁麼ならず。若し論戦せば、箇箇転処に立在たん。所以に道う、若し向上に転じ去らば、直得は、釈迦・弥勒・文殊・普賢、千聖万聖、天下の宗師も、普く皆な気を飲み声を呑まん。若し向下に転じ去らば、醯雞蠛蠓、蠢動含霊、一一大光明を放って、一一壁立万仞ならん。儻或不上不下ならば、又た作麼生か商量せん。条有れば条に攀り、条無ければ例に攀る。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。睦州、僧に問う、「近ごろ甚処を離れ

〔探竿影草。〕僧便喝。〔作家禅客、且莫詐明頭。也解恁麼去。〕州云、老僧被汝一喝。〔陥虎之機。猱人作麼。〕僧又喝。〔看取頭角。似則似、是則未是。只恐龍頭蛇尾。〕州云、三喝四喝後作麼生。〔逆水之波、未曾有一人出得頭。人那裏去。〕僧無語。〔果然摸索不著。〕州便打云、〔若使睦州尽令而行、尽大地草木、悉斬為三段。〕這掠虚頭漢。〔放過一著、落在第二。〕

しゃ」。〔探竿影草。〕僧便ち喝す。〔作家の禅客、且く明頭を詐うこと莫れ。也た恁麼にし去ることを解す。〕州云く、「老僧汝に一喝せらる」。〔陥虎の機。人を猱りて作麼。〕僧又た喝す。〔頭の角を看取よ。似たることは則ち似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。只だ恐らくは龍頭蛇尾ならん。〕州云く、「三喝四喝の後作麼生」。〔逆水の波、未だ曾て一人として出得頭すもの有らず。那裏にか入り去る。〕僧無語。〔果然して摸索不著。〕州便ち打って云く、〔若使睦州、令を尽して行ずれば、尽大地の草木悉く斬って三段と為さん。〕「這の掠虚頭の漢」。〔一著を放過すれば第二に落在つ。〕

一　睦州道蹤(道明とも)(七八〇?—八七七?)。二　どちらからおいでか。三　魚を獲るしかけ。問いかけて相手に探りを入れる喩え。四　やり手の禅僧だが、見て取ったつもりでいてはならぬぞ。しかしまあここまではやれておる。五　虎をも陥しいれる見事なわざだ。六　強い詰問の語気。七　情状酌量なしに法令を厳格に執行する。八　かいなで野郎。九　一手見のがしてやると、こちらが後手に廻ることになる。こんな相手はとことん叩きのめすべきだ。

〔評唱〕大凡扶竪宗教、須是有本分宗師眼目、有本分宗師作用。睦州機鋒、如閃電相似。愛勘[一]座主[二]。尋常出一言半句、似箇荊棘叢相似、著脚手[三]不得。他纔見僧来、便道、見成公案[四]、放你三十棒。又見僧云、上座[五]。僧回首、州云、担板漢[六]。又示衆云、未有箇入頭処[七]、須得箇入頭処。既得箇入頭処、不得辜負老僧。睦州為入多如此。

〔評唱〕大凡そ宗教を扶竪すには、須是らく本分宗師の眼目有り、本分宗師の作用有るべし。睦州の機鋒、閃電の如くに相似たり。愛んで座主を勘す。尋常一言半句を出だすに、箇の荊棘の叢の似くに相似て、脚も手も著かせ得ず。他は僧の来たるを見るや纔や便ち道う、「見成公案なるぞ、你に三十棒を放さん」と。又た僧を見て云く、「上座」。僧回首くや、州云く、「担板漢」。又た衆に示して云く、「未だ箇の入頭の処有らずんば、須らく箇の入頭の処を得べし。既に箇の入頭の処を得ば、老僧に辜負くこと不得れ」と。睦州の入の為にすること多く此の如し。

一 相手の見地を検証する。 二 経典を講義する僧。 三 手も足も出せない。 四 お前のその来かたがそのままで審判ものなのに、お前は分っていない。三十棒の罰を受けるべきところだぞ。 五 講経の経験の長い者の尊称。 六 板を背負った男。自分が作った枠内でしか動けない、ワンパターンの奴。 七 悟りに入る手がかり。

這僧也善雕琢、争奈龍頭蛇尾。当時若不是睦州、也被他惑乱一場。只

這の僧也た善く雕琢するも、争奈せん龍頭蛇尾なり。当時若し是れ睦州にあらずんば、也た他に惑乱さるる

如他問近離什麼処、僧便喝、且道、他意作麼生。這老漢也不忙、緩緩地向他道、老僧被汝一喝。似領他話在一辺、又似験他相似。斜身看他如何、這僧又喝。似則似、是則未是。被這老漢穿却鼻孔来也。遂問云、三喝四喝後作麼生。這僧果然無語。州便打云、這掠虚頭漢。験人端的処、下口便知音、可惜許、這僧無語、惹得睦州道掠虚頭漢。若是諸人、被睦州道三喝四喝後作麼生、合作麼生祇対、免得他道、掠虚頭漢。這裏若是識存亡、別休咎、脚踏実地漢、誰管三喝四喝後作麼生。只為這僧無語、被這老漢便拋款結案。聴取雪竇頌出。

こと一場ならん。只だ他「近ごろ什麼処を離れしや」と問い、僧便ち喝するが如きは、且く道え、他の意作麼生。這の老漢也忙ず、緩緩地に他に向って道う、「老僧、汝に一喝せらる」と。他の話を領めて一辺に在くに似、又た他を験するが似くに相似たり。身を斜にして他を如何と看るや、這の僧又た喝す。似たることは則ち似たるも、是なることは則ち未だ是ならず。這の老漢に鼻孔を穿却せられ来り。遂に問いて云く、「三喝四喝の後作麼生」と。這の僧果然して無語。州便ち打って云く、「這の掠虚頭の漢」と。人を験する端的の処、口を下せば便ち知音なるも、可惜許、這の僧無語、睦州に「掠虚頭の漢」と道わるるを惹き得たり。若是諸人ならば、睦州に「三喝四喝の後作麼生」と道われんに、合た作麼生か祇対えて、他に「掠虚頭の漢」と道わるることを免れ得ん。這裏に若是存亡を識り、休咎を別ち、脚実地を踏む漢ならば、誰か「三喝四喝の後作麼生」というに管わん。只だ這の僧無語

一 相手のことばを受けとめて自分の傍らに置く。頂戴しましたというしぐさ。二 肩すかし気味にあしらう。三 牛が鼻に綱を通されたみたいになった。第四則・頌の著語に既出。四 何か一言答えれば、力量ある相手と互いに認めあえたろうに。五 足が地についている男。空論をもてあそばず、事柄の本質をつかんでいる者。

【頌】 両喝与三喝、〔雷声浩大、雨点全無。自古至今、罕有人恁麼。〕[一]作者知機変。〔[二]若不是作家、争験得。只恐不恁麼。〕[三]若謂騎虎頭、〔[四]刃。瞎漢、虎頭如何騎。多少人恁麼会。也有人作這見解。〕二倶成瞎漢。〔[五]親言出親口。何止両箇。自領出去。〕誰瞎漢、〔教誰辨。頼有末後句。[六]泊乎賺殺人。〕拈来天下与人看。〔看即不無、覰著即瞎。[七]闍黎若著眼看、[八]則両手拍空。恁麼挙、且道、是第幾機。〕

の為に、這の老漢に便ち款に拠って案を結さる。雪竇の頌出するを聴取け。

【頌】 両喝と三喝と、〔雷声浩大なるも、雨点全く無し。古より今に至るまで、人の恁麼なる有ること罕なり。〕作者は機変を知る。〔若し是れ作家にあらずんば争か験し得ん。只だ恐らくは恁麼ならざらん。〕若し虎の頭に騎ると謂わば、〔刃。瞎漢、虎の頭に如何にして騎らん。多少の人恁麼に会す。也た人の這の見解を作すもの有り。〕二り倶に瞎漢と成らん。〔親言は親口より出づ。何ぞ止だ両箇のみならん。自ら領して出で去れ。〕誰か瞎漢なる。〔誰をして辨ぜしめん。頼に末後の句有り。泊乎ど人を賺殺す。〕拈じ来たりて天下に人の与に看せしむ。〔看れば即ち無きにあらず、

覰著れば即ち瞎す。闍黎若し眼を著けて看れば、則ち両手もて空を捂つ。恁麼に挙すは、且く道え、是れ第幾機ぞ。」

一 練達した禅匠をいう。「作家」に同じ。 二 機に応じて対応を変えること。 三 (僧が睦州を二度も喝したことで)虎の首をおさえたなどと考えるなら。『臨済録』行録「非但騎虎頭、亦解把虎尾」(岩波文庫一八四頁)による。 四 ここは警覚の発声。 五 この人ならではのことば。 六 あやうく騙されるところだった。 七 僧に対する二人称の尊称。そなた。ここは、雪竇を指す。 八 両手で虚空をうちわろうとするようなもの。むなしく徒労に終る。

〔評唱〕 雪竇不妨に人の為にする処有り、若し是れ作者にあらずんば、只だ是れ胡喝乱喝せん。所以に古人道く、「有る時の一喝は、一喝の用を作さず。有る時の一喝は、却って一喝の用を作す。有る時の一喝は、踞地獅子の如く、有る時の一喝は、金剛王宝剣の如し」と。興化道く、「我、你諸人を見るに、東の廊下にも也た喝し、西の廊下にも也た喝す。且く胡喝乱喝すること莫れ。直饒興化を喝し得て、三十三天に上せ、却に撲下来して、気息一点也無からしむとも、我が甦

〔評唱〕 雪竇不妨有為人処、若不是作者、只是胡喝乱喝。所以古人道、有時一喝、不作一喝用、有時一喝、却作一喝用。有時一喝、如踞地獅子、有時一喝、如金剛王宝剣。興化道、我見你諸人、東廊下也喝、西廊下也喝。且莫胡喝乱喝。直饒喝得興化、上三十三天、却撲下来、気息一点也無、待我甦醒起来、向汝道未在。何

故、興化未曾向紫羅帳裏撒真珠、与你諸人在。只管胡喝乱喝作什麼。臨済道、我聞、汝等総学我喝。我且問你、東堂有僧出、西堂有僧出、両箇斉下喝、那箇是賓、那箇是主。你若分賓主不得、已後不得学老僧。

醒り起来たるを待って、汝に向って『未在』と道わん。何故ぞ。興化は未だ曾て紫羅帳裏に向いて真珠を撒き、你諸人に与えざれば在。只管に胡喝乱喝して什麼か作ん」と。臨済道く、「我聞く、汝等総て我が喝を学ぶと。我且く你に問わん、東堂より僧の出づる有り、西堂より僧の出づる有りて、両箇斉って喝を下すとき、那箇か是れ賓、那箇か是れ主。你若し賓主を分ち得ずんば、已後老僧を学ぶこと不得れ」と。

一 むやみに喝を発する。「胡乱」は、みだりに、でたらめに。二 臨済義玄(?—八六七)。『臨済録』勘弁(岩波文庫一七一頁)参照。三 興化存奨(八三〇—八八八)。臨済の法嗣。四 須弥山上の最高位にある天界。五 お前はまだダメだ。「在」は断定的な語気を示す。六 (わたしの喝は)紫色のうすぎぬのとばりにつつまれた帝王の座所から真珠を撒き与えるというような、ありがたくもかたじけないものなのではない。七 『古尊宿語録』五に見える。『臨済録』上堂(岩波文庫二二頁)参照。

所以雪竇頌道、作者知機変。這僧雖被睦州収、他却有識機変処。且道、什麼処、是這僧識機変処。鹿門智禅師、点這僧云、識法者懼。厳頭道、

所以に雪竇頌して道く、「作者は機変を知る」と。這の僧、睦州に収めらると雖も、他却って機変を識る処有り。且く道え、什麼処か是れ這の僧の機変を識る処ぞ。鹿門の智禅師、這の僧を点して云く、「法を識

若論戦、也[三]箇箇立在転処。[四]黄龍心和尚道、窮[五]則変、変則通。這[六]箇些子、是祖師坐断天下人舌頭処。你若識機変挙著、便知落処。

＊是這僧識機変処　福本はこの句の下に更に「是謂騎虎頭」の五字有り。

一 未詳。二 巌頭全奯（八二八―八八七）。三 両人とも自在に立場を転換するだろう。四 黄龍祖心（一〇二五―一一〇〇）。五『周易』繋辞下伝の句。六 この微妙なところ。

有般漢云、管他道三喝四喝作什麼。只管喝[一]将去、説什麼三十二十喝、喝到弥勒仏下生、謂之騎虎頭。若恁麼知見、不識睦州則故是、[二]要見這僧太遠在。如人騎虎頭、須是手中有刀、兼有[三]転変始得。雪竇道、若恁麼二倶成瞎漢。雪竇似倚天長剣凜凜全威。若会得雪竇意、自然千処万処一時会、便見他雪竇後面頌、只是下注脚。又

る者は懼る」と。巌頭道く、「若し論戦せば、也た箇箇転処に立在たん」と。黄龍の心和尚道く、「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」と。這箇の些子は、是れ祖師が天下の人の舌頭を坐断する処なり。你若し機変を識りて挙著せば、便ち落処を知らん。

有般漢は云う、「他の三喝四喝と道いたるに管りて什麼か作ん。只管に喝し将ち去き、什麼の三十二十喝を説ぜん、喝して弥勒仏下生に到れば之を『虎の頭に騎る』と謂う」と。若し恁麼の知見ならば、睦州を識らざることは則ち故是、這の僧を見んと要すとも、太だ遠きこと在。人、虎の頭に騎るが如きは、須是ず手中に刀有り、兼ねて転変有って始めて得し。雪竇道く、「若し恁麼ならば、二り倶に瞎漢と成らん」と。雪竇は天に倚る長剣の凜凜として全威あるに似たり。若し

道、誰瞎漢。且道、是賓家瞎、是主家瞎。[四]莫是賓主一時瞎麼。拈来天下与人看。此是活処、雪竇一時頌了也。為什麼却道、拈来天下与人看。且道、作麼生看。開眼也著[五]、合眼也著。還有人免得麼。

雪竇の意を会得せば、自然に千処万処一時に会して、便ち他の雪竇の後面の頌は、只だ是れ注脚を下すのみなることを見らん。又た道く、「誰か瞎漢」と。且く道え、是れ賓家瞎なるか、是れ主家瞎なるか。是れ賓主一時に瞎なること莫きや。「拈じ来たりて天下に人の与に看せしむ」と。此れは是れ活処、雪竇一時に頌し了れり。為什麼にか却って道う、「拈じ来たりて天下に人の与に看せしむ」と。且く道え、作麼生か看ん。眼を開くも也た著り、眼を合るも也た著る。還た人か免れ得るもの有らんや。

一「将去」は動詞の後に付き、ここは持続の気分を示す。二「固是」に同じ。三 ここは、自由自在の動き。四 ～ではないのか。～のはずだ。五 ぴたりとそこにある。

仏果圜悟禅師碧巌録 巻第一

仏果圜悟禅師碧巌録 巻第一

夾[1]山無碍禅師降魔表[2]

慧[3]芳附刊

臣聞、三[4]乗路広、法[5]界無涯、智海晏清、十方安泰。時有魔軍競起、侵撓[6]心田、六[7]賊既強、心[8]王驚動。朝生百怪、暮起千邪、撼[9]惑真如、困労法[10]体。菩提道路、隔絶不通、破壊涅槃、傷残三[11]宝。無為珠玉、悉被偸[12]将、大[13]蔵法財、皆遭劫奪。塵[14]労翳日、欲火亘天、飄蕩法[15]城、焚焼聖境。臣乃見[16]如斯暴乱、恐仏法以難存、遂与六波羅蜜商量、同為剪滅。遺[17]性空為密使、聴探魔軍。見今屯[18]在五蘊山中、有八[19]万四千餘衆。既知体勢、計在刹那。遂点十[20]八[21]界雄兵、並立体[22]空為号。[23]人

夾山無碍禅師降魔の表

慧芳附刊

臣聞く、三乗の路広くして法界涯り無く、智海晏清にして十方安泰なり。時に魔軍の競い起つ有りて、心田を侵撓し、六賊既に強くして、心王驚動く。朝に百怪を生じ、暮に千邪を起し、真如を撼惑し、法体を困労む。菩提の道路、隔絶して通ぜず、涅槃を破壊し、三宝を傷残く。無為の珠玉、悉く偸将まれ、大蔵の法財、皆な劫奪わる。塵労日を翳い、欲火天に亘り、法城を飄蕩かし、聖境を焚焼す。臣乃ち斯の如き暴乱を見て、仏法の以て存し難からんことを恐れ、遂に六波羅蜜と商量りて同に剪滅せんとす。性空を遣して密使と為し、魔軍を聴探らしむ。見今五蘊山中に屯在まり、八万四千餘衆有り。既に体勢を知れば、計は刹那に在り。遂に十八界の雄兵を点び、並びに体空を立

人有無礙之力、箇箇懐勇健之能。直心為見性之功、一正去百邪之乱。擐堅固甲、執三昧鏘、智箭禅弓、光明慧剣、向大乗門中訓練、寂滅山内安営。三明嶺上開旗、八正路辺排布。遣大覚性為捉生之将、遊歴四方、捜求妄想之踪、抄截無明之蹟。復使慈悲王破三毒之寨、忍辱帥伐嗔怒之城、精進軍除傲慢之妖、喜捨士捉慳貪之賊。逡巡而魔軍大起、殺気衝天。臣乃部領摩訶一時斉入。当爾之時、眼不観色、耳不聴声、鼻不嗅香、舌不了味、身不受触、意不攀縁。一志向前、念念不退。倏忽而魔軍大敗、六賊全輸。殺戮無辺、掃除蕩尽。生擒妄想、活捉無明、領向涅槃場中、以慧剣斬為三段。煩悩林当時摧折、人

てて号と為す。人人無礙の力有り、箇箇勇健の能を懐く。直心は見性の功を為し、一正は百邪の乱を去る。堅固き甲を擐、三昧の鏘を執り、智箭禅弓、光明の慧剣もて、大乗門中に向いて訓練し、寂滅山内に安営す。三明嶺上に旗を開き、八正路辺に排布す。大覚の性を遣して、捉生の将と為し、四方に遊歴して、妄想の踪を捜求し、無明の蹟を抄截う。復た慈悲の王をして三毒の寨を破り、忍辱の帥をして嗔怒の城を伐ち、精進の軍をして傲慢の妖を除き、喜捨の士をして慳貪の賊を捉えしむ。逡巡に魔軍大起し、殺気天を衝く。臣乃ち摩訶を部領いて、一時に斉入す。爾の時に当って、眼は色を観ず、耳は声を聴かず、鼻は香を嗅がず、舌は味を了らず、身は触を受けず、意は縁に攀れず。一志向前みて、念念退かず。倏忽に魔軍大敗し、六賊全く輸ぶ。殺戮無辺、掃除蕩尽し、妄想を生擒え、無明を活捉り、涅槃場中に領きたて慧剣を以て斬って三段と為す。煩悩の林は当時に摧折け、人我の山は化し

我山化作微塵、痴愛網遭智火焚焼、邪見林被慧風吹竭。因茲三明再朗、[二四]四智重円、内外無瑕、廓然清浄。心王坐懽喜之殿、真如登解脱之楼、自性遊無碍之堂、[二五]三身踞法空之座。従茲法界寧静、[二六]永絶囂塵、共渡生死之河、斉到菩提之岸。魔軍既退、合具奏聞。

て微塵と作り、痴愛の網は智火に焚焼れ、邪見の林は慧風に吹竭さる。茲に因って三明再び朗かに、四智重ねて円かに、内外瑕無く、廓然として清浄なり。心王は懽喜の殿に坐し、真如は解脱の楼に登り、自性は無碍の堂に遊び、三身は法空の座に踞る。茲より法界寧静にして、永く囂塵を絶し、共に生死の河を渡り、斉しく菩提の岸に到る。魔軍既に退く、合に具に奏聞すべし。

一 圜悟の自号。夾山の霊泉院で評唱したことに因む。二 悪魔降伏の宣言書。これは「表」(上奏文)になぞらえた儀式的な文章。三 未詳。四 声聞・縁覚・菩薩の三つの境地に到るための三つの教え。「乗」は衆生を悟境に運ぶ乗り物。五 有為無為一切の世界。六 心を百穀(功徳)の生育する田に喩える。七 眼・耳・鼻・舌・身・意の六識。八 心を君主に見立てる。九 真理。一〇 宇宙万有の真相。一一 仏・法・僧。一二 「将」は動詞の後に付き、動作の現実化を示す。一三 大蔵経(一切経)中の教え。一四 煩悩のこと。一五 仏法を城に喩える。一六 菩薩が修める六種の行。布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧。一七 本性が空であること。一八 世界を構成している五つの要素。色(すべての物質要素)・受(外界から受ける印象や感覚)・想(外界の事物の心理的表象)・行(あらゆる心理作用)・識(心理作用を総合する精神活動)。一九 八万四千種の煩悩。二〇 点募。召集する。二一 六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)と六塵(色・声・香・味・触・法)と六識(眼識・耳識・鼻識・舌識・身

識・意識)。一切の存在を成り立たせ、それらの存在形態を規定する要素。三 本体としての空。
三 旗じるし、軍旗。三四 軍隊を駐めて宿営する。三五 宿命明(自他の過去を知る)・天眼明(自他の未来を知る)・漏尽明(現在の煩悩を断つ)。三六 正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八正道。三七 究極のさとりの本性。三八 降伏してきた旧敵兵を率いる将。ここは、煩悩の統御をいう。三九 略取、奪いとる。三〇 貪毒・瞋毒・痴毒の三つの煩悩。三一 ほんの短時間で。唐宋の俗語。三二 摩訶般若(大智慧)、または摩訶衍(大乗)、摩訶薩(菩薩)の略。三三 個人の主体としての自我が存在する、という誤った見解。人我見。三四 大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智の四つ。三五 法身(理法そのものを仏の本身と見たもの)・報身(真理の体現としての果報を具えた仏身)・応身(仏の化した人格身)。応身は化身とも。三六 世俗のけがれ。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第二

第一一則　黄檗酒糟漢

垂示云、仏祖大機、全帰掌握、人天命脈、悉受指呼。等閑一句一言、驚群動衆、一機一境、打鎖敲枷。接向上機、提向上事。且道、什麼人曾恁麼来。還有知落処麼。試挙看。

一 人間界・天上界に生きるもの。 二 あれこれの対応のしかた。第三則の垂示に既出。 三 くさりや首かせを叩いて、束縛されていることを気付かせる。 四 一段上へ踏み越える機根ある者を受け入れ、一段上へ突き抜けた消息を提示する。

【本則】挙。黄檗示衆云、〔打水碍盆。一口呑尽、天下衲僧跳不出。〕汝等諸人、尽是噇酒糟漢。恁麼行脚、

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第二

第一一則　黄檗酒糟の漢

垂示に云く、仏祖の大機、全て掌握に帰し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑き一句一言も群を驚かし衆を動かし、一機一境は鎖を打ち枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提す。且く道え、什麼人か曾て恁麼にし来たる。還た落処を知るもの有りや。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。黄檗、衆に示して云く、〔水を打むに盆に碍らる。一口に呑み尽せば、天下の衲僧跳け出せず。〕「汝等諸人、尽く是れ噇酒糟の漢なり。恁麼に行

〔四道著。五踏破草鞋、掀天揺地。〕何処有今日。〔用今日作什麼。不妨驚群動衆。〕還知大唐国裏無禅師麼。〔老僧不会。一口呑尽、也是雲居羅漢。〕時有僧出云、只如諸方匡徒領衆、又作麼生。〔也好与一拶。臨機不得不恁麼。〕檗云、不道無禅、只是無師。〔直得分疎不下、瓦解氷消。龍頭蛇尾漢。〕

＊掀天揺地　蜀本に無し。　＊＊一口呑尽　福本に無し。　＊＊＊也是雲居羅漢　蜀本に無し。

一 黄檗希運。二 盆(学人の器量)が小さくて水がこぼれてしまう。三 酒かすをたらふく食べて酔い心地の男。一知半解の仏法に自己満足している修行者。四 ずばり言い切った。五 わらじをすりきらすだけの行脚で。六 (大唐国の衲僧を)ガバッと一呑みにしようとは。七 雲居寺の羅漢像。自負高慢の男のことをいうか。八 弟子を教導している者。

【評唱】黄檗身長七尺、額有円珠、天性会禅。師昔遊天台。路逢一僧、

脚せば、〔道著す。草鞋を踏破して、天を掀げ地を揺がす。〕何処にか今日あらん。〔今日を用て什麼をか作す。不妨に群を驚かし衆を動かす。〕還た大唐国裏に禅師無きことを知るや」。〔老僧会せず。一口に呑み尽すは、也た是れ雲居の羅漢。〕時に僧あり出て云く、「只だ諸方の徒を匡し衆を領いるが如きは、又た作麼生」。〔也た好し一拶を与えん。機に臨んで恁麼ならざるを得ず。〕檗云く、「禅無しとは道わず、只だ是れ師無し」。〔直得に分疎不下して、瓦解氷消す。龍頭蛇尾の漢。〕

【評唱】黄檗は身の長七尺、額に円珠有り、天性禅を会す。師、昔天台に遊ぶ。路に一の僧に逢い、之と談

与之談笑、如故相識。熟視之、目光射人、頗有異相。乃偕行。属渓水暴漲、乃植杖捐笠而止。其僧率師同渡。師曰、請渡。彼即褰衣躡波、如履平地。回顧云、渡来、渡来。師咄云、這自了漢。吾早知捏怪、当斫汝脛。其僧歎曰、真大乗法器。言訖不見。

初到百丈、丈問云、巍巍堂堂従什麼処来。檗云、巍巍堂堂従嶺中来。丈云、来為何事。檗云、不為別事。百丈深器之。次日辞百丈。丈云、什麼処去。檗云、江西礼拝馬大師去。丈云、馬大師已遷化去也。*你道、黄

笑すること故より相識るものの如し。熟つら之を視るに、目光人を射て、頗る異相有り。乃ち偕に行く。渓水の暴漲るに属いて、乃ち杖を植て笠を捐て止る。其の僧、師を率いて同に渡らんとす。師曰く、「請う渡れ」と。彼即ち衣を褰げて波を躡むこと、平地を履むが如し。回顧りて云く、「渡り来たれ、渡り来たれ」。師咄りて云く、「這の自了漢。吾早く捏怪なることを知らば、当に汝が脛を斫るべきに」と。其の僧歎じて曰く、「真の大乗の法器なり」と。言い訖るや見えず。

初め百丈に到るや、丈問うて云く、「巍巍堂堂として什麼処より来たる」。檗云く、「巍巍堂堂として嶺中より来たる」。丈云く、「来たるは何事の為ぞ」。檗云く、「別事の為ならず」と。百丈深く之を器とす。次の日百丈を辞す。丈云く、「什麼処にか去く」。檗云く、「江西に馬大師を礼拝に去かん」。丈云く、「馬大

一 たまたま。 二 自分だけで悟りおおせたと思って収まっている男。 三 奇怪な術を操る。 四 法を伝えるに足る器量の人物。

檗恁麼問、是知来問、是不知来問。却云、某甲特地去礼拝、福縁浅薄、不及一見。未審平日有何言句。願聞挙示。丈遂挙再参馬祖因縁。祖見我来、便竪起払子。我問云、即此用、離此用。祖遂掛払子於禅床角、良久。祖却問我、汝已後鼓両片皮、如何為人。我取払子竪起。祖云、即此用、離此用。我将払子、掛禅床角。祖振威一喝。我当時直得三日耳聾。黄檗不覚悚然吐舌。丈云、子已後莫承嗣馬大師麼。檗云、不然。今日因師挙、得見馬大師大機大用。若承嗣馬師、他日已後、喪我児孫。丈云、如是、如是。見与師斉、減師半徳、智過於師、方堪伝授。子今見処、宛有超師之作。諸人且道、黄檗恁麼問、是知

師已に遷化し去れり」と。你道え、黄檗恁麼に問うは、是れ知りて来たり問うか、是れ知らずして来たり問うか。却って云く、「某甲特地去きて礼拝せんとせしも、福縁浅薄にして一見するに及ばず。未審、平日何なる言句か有る。願わくは挙示を聞かん」と。丈、遂に再び馬祖に参ずる因縁を挙す。「祖、我の来たるを見て、便ち払子を竪起つ。我問うて云く、『此の用に即するか、此の用を離るるか』と。祖、遂に払子を禅床の角に掛けて良久す。祖却って我に問う、『汝已後両片皮を鼓して、如何にか人の為にせん』。我払子を取って竪起つ。祖云く、『此の用に即するか、此の用を離るるか』と。我払子を禅床の角に掛く。祖、威を振って一喝す。我当時直得三日耳聾ず」と。黄檗覚わず悚然として舌を吐く。丈云く、「子已後馬大師を承嗣ぐこと莫しや」。檗云く、「然らず。今日師の挙するに因って、馬大師の大機大用を見るを得たり。若し馬師を承嗣がば、他日已後、我が児孫を喪わん」。丈云く、「如

而故問耶、是不知而問耶。須是親見他家父子行履処始得。

是、如是。見、師と斉しきは師の半徳を減ず、智、師に過ぎて方めて伝授さるるに堪う。子が今の見処、宛も超師の作有り」と。諸人且く道え、黄檗恁麼に問うは、是れ知りて故に問うか、是れ知らずして問うか。須是らく親しく他家父子行履の処を見て始めて得し。

＊伱道〜是不知来問(一六字)　蜀本に無し。　＊＊諸人〜是不知而問耶(二一字)　福本に無し。

一 百丈山(江西省奉新県)の懐海(七四九—八一四)。　二 いったい〜ですか。　三 払子として役立てるのか、役立てないのか。　四 しばらく無言のままでいる。　五 口をたたく。ぺちゃぺちゃしゃべる。　六 修行者を教導する。　七 「将」は目的語を動詞の前にもってくる時に用いる助詞。〜を。　八 おそれ入ったときの面もち。　九 「児孫」は子孫、後継者。宗門の伝統を絶えさせる。　一〇 『臨済録』行録には潙山の語として見える(岩波文庫一九八頁)。　一一 馬祖・百丈の師弟の言動。

黄檗一日、又問百丈、従上宗乗、如何指示。百丈良久。檗云、不可教後人断絶去。百丈云、将謂汝是箇人。遂乃起入方丈。

黄檗一日、又た百丈に問う、「従上の宗乗如何に指示せん」。百丈良久す。檗云く、「後人をして断絶し去らしむべからず」。百丈云く、「汝は是れ箇の人なりと将謂いしに」と。遂乃に起って方丈に入る。

一 お前はいっぱしの人物とばかり思っていたのに(実はそうではなかった)。　二 そのまま、そこで。

檗与裴相国為方外友。裴鎮宛陵、

檗、裴相国と方外の友為り。裴、宛陵に鎮たりしと

請師至郡[三]、以所解一編示師。師接置於座、略不披閲。良久乃云、会麼。裴云、不会。檗云、若[四]便恁麼会得、猶較些子。若也形於紙墨、何処更有吾宗。裴乃以頌賛云、自従大士伝心印、額有円珠七尺身。掛[五]錫十年棲蜀[六]水、浮盃[七]今日渡漳浜。八千龍象随高[八]歩、万里香花結勝因[九]。擬欲事師為弟子、不[一〇]知将法付何人。師亦無喜色云[*]、心如大海無辺際、口吐紅蓮[一一]養病身。自有一双無事手、不曾祇揖等閑人。

き、師を請いて郡に至らしめ、解く所の一編を以て師に示す。師接るや座に置いて、略も披閲せず。良久して乃ち云く、「会すや」。裴云く、「会せず」。檗云く、「若し便ち恁麼に会得せば、猶お些子く較えり。若也紙墨に形さば、何処にか更に吾が宗有らん」と。裴乃ち頌を以て賛して云く、「大士心印を伝えて自従り、額に円珠有り七尺の身。錫を掛けて十年蜀水に棲む、盃を浮かべて今日漳浜を渡る。八千の龍象高歩に随い、万里の香花勝因を結ぶ。師に事えて弟子と為らんと擬欲す、知らず法を将て何人にか付せん」と。師亦た喜色無くして云く、「心は大海の辺際無きが如く、口は紅蓮を吐いて病身を養う。自ずから一双の無事の手有り、曾て等閑の人に祇揖かず」と。

＊師亦無喜色云　福本は「檗云」。

一 裴休(七九七―八七〇)。中唐の政治家。 二 裴休は大中二年(八四八)に宛陵(安徽省東南部の都市、いまの寧国県)に観察使として赴任している(『伝心法要』裴休序)。 三 郡の役所。 四 もしおいそれと。 五 錫杖を壁に掛けて逗留する。 六 黄檗山の近くの川。 七 木杯に乗って水を渡った杯渡和尚

の故事（『梁高僧伝』一〇など）がある。「漳浜」は漳水。八 学徳すぐれた僧侶の喩え。九 すぐれた因縁。一〇 いったいどうなのか。一一 一言一句が紅蓮を咲かせるような説法をする。

檗住後、機鋒峭峻。臨済在会下、睦州為首座。問云、上座在此多時、何不去問話。済云、教某甲問什麼話即得。座云、何不去問如何是仏法的的大意。済便去問、三度被打出。済辞座曰、蒙首座令三番去問、被打出。恐因縁不在這裏、暫且下山。座云、子若去、須辞和尚去方可。首座預去白檗云、問話上座、甚不可得。和尚何不穿鑿教成一株樹去、与後人為陰涼。檗云、吾已知。済来辞。檗云、汝不得向別処去、直向高安灘頭見大愚去。済到大愚、遂挙前話。不知某甲過在什麼処。愚云、檗与麼老婆心切、為你徹困、更説什麼有過無過。

檗、住して後、機鋒峭峻なり。臨済、会下に在り、睦州首座為り。問うて云く、「上座此に在ること多時、何ぞ去きて問話せざる」。済云く、「某甲をして什麼の話を問わしむれば即ち得きや」。座云く、「何ぞ去きて如何なるか是れ仏法的的の大意と問わざる」。済便ち去きて問うも、三度打出さる。済、座を辞して曰く、「首座の三番去きて問わしむるを蒙するも、打出さる。恐らくは因縁這裏に在らず。暫且く山を下りん」。座云く、「子若し去かば、須らく和尚に辞し去きて方めて可し」と。首座預め去きて檗に白して云く、「問話の上座は、甚だ不可得ものなり。和尚何ぞ穿鑿して一株の樹と成し去きて、後人の与に陰涼と為さしめざる」。檗云く、「吾已に知れり」。済来たり辞す。檗云く、「汝別処に向って去くこと不得れ。直に高安灘頭に向いて、大愚に見えに去け」と。済、大愚

済忽然大悟云、黄檗仏法無多子[七]。大愚[八]搊住云、你適来又道有過、而今却道仏法無多子。済於大愚脇下搥三拳、愚拓開云、汝師黄檗、非干我事。

に到って、遂に前話を挙す、「知らず某甲が過什麼処にか在る」。愚云く、「檗与麼も老婆心切に、你が為に徹困なるに、更に什麼の過有りや過無しやとか説わん」。済、忽然と大悟して云く、「黄檗の仏法多子無し」。大愚搊住えて云く、「你適来は又た過有りやと道い、而今は却って仏法多子無しと道う」。済、大愚の脇下を搥くこと三拳するに、愚拓開して云く、「汝は黄檗を師とせよ。我が事に干るに非ず」と。

一 古則公案をとりあげての問答。以下、『臨済録』行録（岩波文庫一七九頁〜）を参照。二 仏法究極の奥義。三 打って追い出す。四 じっくりと鍛え上げる。五 江西省瑞州。六 帰宗智常の法嗣。七 特別にいりくんだ子細があるわけではない。端的である。八 胸ぐらをとらえる。

一日檗示衆云、牛頭融大師[一]、横説竪説、猶未知向上関捩子在。是時石頭[二]・馬祖[三]下禅和子、浩浩地説禅説道。他何故却与麼道。

一日檗、衆に示して云く、「牛頭の融大師は、横説竪説するも、猶お未だ向上の関捩子を知らざる在」と。是の時石頭・馬祖下の禅和子、浩浩地に禅を説き道を説く。他は何故に却って与麼に道う。

一 牛頭法融（五九四―六五七）。二 石頭希遷（七〇〇―七九〇）。三 馬祖道一（七〇九―七八八）。

所以示衆云、汝等諸人、尽是噇酒

所以に衆に示して云く、「汝等諸人、尽く是れ噇酒

糟漢。恁麼行脚、取笑於人。但見八百一千人処便去。不可只図熱鬧也。可中総似汝如此容易、何処更有今日事也。唐時愛罵人作噇酒糟漢。人多喚作黄檗罵人、具眼者自見佗落処。大意垂一鉤釣人問。衆中有不惜身命底禅和、便解恁麼出衆問佗道、只如諸方匡徒領衆、又作麼生。也好一拶。這老漢、果然分疎不下。便却漏逗云、不道無禅、只是無師。且道、意在什麼処。佗従上宗旨、有時擒、有時縦、有時殺、有時活、有時放、有時収、敢問諸人、作麼生是禅中師。山僧恁麼道、已是和頭没却了也。諸人鼻孔、在什麼処。良久云、穿却了也。

糟の漢なり。恁麼に行脚せば、笑を人に取らん。但だ八百(人)一千人の処を見て便ち去く。只だ熱鬧しきを図るべからず。可中総て汝が此の如く容易なるに似たらば、何処にか更に今日の事有らん」と。唐の時愛んで人を罵って、「噇酒糟の漢」と作す。人多く黄檗は人を罵ると喚作すも、具眼の者は自ら佗の落処を見ん。大意は一鉤を垂れて人の問を釣るにあり。衆中に身命を惜しまざる底の禅和有って、便ち解く恁麼に衆より出でて佗に問うて道う、「只だ諸方に徒を匡し衆を領いるが如きは、又た作麼生」と。也た好し一拶するに。這の老漢果然して分疎不下、便ち却って漏逗して云く、「禅無しとは道わず、只だ是れ師無し」と。且く道え、意什麼処にか在る。佗の従上の宗旨は、有る時は擒え、有る時は縦ち、有る時は殺し、有る時は活し、有る時は放め、有る時は収む。敢て諸人に問う、「作麼生か是れ禅中の師」。山僧恁麼に道うは、已是に頭 和に没却し了れり。諸人の鼻孔、什麼処にか在る。良久し

て云く、「穿却ち了れり」。

一 もし。唐宋の俗語。 二 ボロを出す。 三 (鼻づらに)穴をあけて(鼻綱をつけて)しまったぞ。

【頌】凜凜孤風不自誇、〔猶自不知有。也是雲居羅漢。〕端居寰海定龍蛇。〔也要別緇素。也要皂白分明。〕大中天子曾軽触、〔説什麼大中天子。任大也須従地起、更高争奈有天何。〕三度親遭弄爪牙。〔死蝦蟆。多口作什麼。未為奇特、猶是小機巧。若是大機大用現前、尽十方世界乃至山河大地、尽在黄檗処乞命。〕

【頌】凜凜たる孤風自ら誇らず、〔猶自有ることを知らず。也た是れ雲居の羅漢。〕寰海に端居して龍蛇を定む。〔也た緇素を別たんことを要す。也た皂白分明ならんことを要す。〕大中天子曾て軽触して、〔什麼の大中天子とか説く。任い大なるも也た須らく地より起るべく、更に高きも天有るを争奈何せん。〕三度親しく爪牙を弄するに遭う。〔死蝦蟆。多口して什麼をか作す。未だ奇特たりと為ず、猶お是れ小機巧なり。若是大機大用現前せば、尽十方世界乃至山河大地、尽く黄檗の処に命を乞わん。〕

一 対比を絶した孤高の姿。 二 究極のそれをわきまえていない。 三 天下に坐を構える。 四 すぐれた者と凡庸な者。 五 唐の宣宗(八一〇—八五九)。「大中」はその元号(八四七—八五九)。 六 黄檗にちょっかいを出して。 七 〜がどうだというのだ。 八 爪牙にかけられる。後出の大中天子が塩官の会中で黄檗に打たれた話をさす。 九 死んだカエル(罵語)。「蝦蟆」はカエルの総称。

〔評唱〕雪竇此一頌、一似黄檗真賛相似、人却不得作真賛会。他底句下、便有出身処。分明道、凛凛孤風不自誇。黄檗恁麼示衆、且不是争人負我、自逞自誇。若会這箇消息、一任七縦八横。有時孤峰頂独立、有時閙市裏横身。豈可僻守一隅。愈捨愈不歇、愈尋愈不見、愈担荷愈没溺。古人道、無翼飛天下、有名伝世間。尽情捨却仏法道理、玄妙奇特、一時放下、却較些子。自然触処現成。雪竇道、端居寰海定龍蛇。是龍是蛇、入門来便験取。謂之定龍蛇眼、擒虎兕機。雪竇又道、定龍蛇兮眼何正、擒虎兕兮機不全。

〔評唱〕雪竇の此の一頌、一に黄檗の真賛の似くに相似たるも、人却って真賛の会を作すこと不得れ。他底の句下に、便ち出身の処有り。分明と道う、「凛凛たる孤風自ら誇らず」と。黄檗恁麼に衆に示すは且は是れ人を争い我を負い、自ら逞しくし自ら誇るにはあらず。若し這箇の消息を会せば、一に七縦八横なるに任す。有る時は孤峰頂に独立し、有る時は閙市裏に身を横う。豈に僻に一隅を守るべけんや。いよいよ捨つればいよいよ歇まず、いよいよ尋ぬればいよいよ見えず、いよいよ担荷わばいよいよ没溺む。古人道く、「翼無くして天下に飛び、名有って世間に伝わる」と。情を尽して仏法の道理、玄妙奇特を捨却りて、一時に放下せば、却って些子く較えり。自然に触処に現成せん。雪竇道く、「寰海に端居して龍蛇を定む」と。是れ龍なるか是れ蛇なるか、門に入り来たるや、便ち験取す。之を龍蛇を定むるの眼、虎兕を擒うるの機と謂う。雪竇又た道く、「龍蛇を定むる眼何ぞ正しからん、虎兕

を擒うる機全からず」と。

＊眼擒虎兕機　蜀本に無し。

一 肖像画に入れる賛。 二 分別の束縛から超出する(第八則・本則の評唱に既出)。 三 人をおしのけ、自分をおし出す。 四 『管子』戒に「無翼而飛者、声也」、唐・高宗の「三蔵聖教序記」に「名、無翼而長飛」と。 五 思い切り。とことん。 六 いかにも仏法らしい意味づけ。仏法の規範化。 七 野牛に似た猛獣。 八 この二句『祖英集』上に見える。ただし「定」を「弁」に作る。

又た道う、「大中天子曾て軽触して、三度親しく爪牙を弄するに遭う」と。黄檗豈是に如今悪脚手なるのみならんや、従来も此の如し。大中天子のことは『続咸通伝』の中に載す。唐の憲宗に二子有り。一を穆宗と曰い、一を宣宗と曰う。宣宗は乃ち大中なり。年十三、少くして敏黠し。常に跏趺坐を愛す。穆宗在位の時、早の朝罷わるに因って、大中乃ち戯れに龍床に登って群臣に揖する勢を作す。大臣見て之を心風と謂い、乃ち穆宗に奏す。穆宗見て撫歎して曰く、「我が弟は乃ち吾が宗の英冑なり」と。穆宗、長慶四年(八二四)に晏駕す。三子有り、敬宗・文宗・武宗と曰

又道、大中天子曾軽触、三度親遭弄爪牙。黄檗豈是如今[一]悪脚手、従来如此。大中天子者、[二]続咸通伝中載。唐憲宗有二子、一曰穆宗、一曰宣宗。宣宗乃大中也。年十三、少而敏黠、常愛[三]跏趺坐。穆宗在位時、因早朝罷、大中乃戯登龍床、作揖群臣勢。大臣見而謂之心風、乃奏穆宗。穆宗見而[四]撫歎曰、我弟乃吾宗[五]英冑也。穆宗於長慶四年[六]晏駕。有三子、曰敬宗・文宗・武宗。敬宗継父位二年、内臣謀

易之。文宗継位一十四年、武宗即位。常喚大中作痴奴。一日武宗、恨大中昔日戯登父位、遂打殺致後苑中、以不潔灌而復甦。

遂潜遁在香厳閑和尚会下。後剃度為沙弥、未受具戒。後与志閑遊方到廬山。因志閑題瀑布詩云、穿雲透石不辞労、地遠方知出処高。閑吟此両句、佇思久之。欲釣他語脈看如何。大中続云、渓澗豈能留得住、終帰大海作波濤。閑方知不是尋常人、乃黙而識之。

一 辣腕、すごうで。 二 唐の学僧・道宣(五九六―六六七)の撰。 三 坐禅。 四 掌を打って讃嘆する。 五 すぐれた後継者。 六 崩御する。

う。敬宗は父の位を継いで二年、内臣謀って之を易う。文宗は位を継いで一十四年、武宗即位す。常に大中を喚んで痴奴と作す。一日武宗、大中の昔日戯れに父の位に登りしことを恨んで、遂に打殺して後苑の中に致く。不潔を灌げば復た甦る。

(大中)遂に潜かに遁れて香厳の閑和尚の会下に在り。後に剃度して沙弥と為るも、未だ具戒を受けず。後に志閑と遊方して廬山に到る。因に志閑の瀑布に題する詩に云く、「雲を穿ち石を透って労を辞せず、地遠くして方めて知る出処の高きことを」と。閑此の両句を吟じて、佇思すること久し。他の語脈を釣って如何なるかを看んと欲す。大中続けて云く、「渓澗豈に能く留得住んや、終に大海に帰して波濤と作る」と。閑方めて是れ尋常の人にあらざることを知る、乃ち黙して之を識るなり。

一 香厳智閑(?—八九八)。 二 剃髪得度。髪をそりおとして、僧尼となる。 三 出家したての男。 四 「志」は「智」の誤りか。 五 倦むことを知らず(滝の水は落ち続ける)。 六 『論語』述而の句。

後到塩官[一]会中、請大中作書記[二]。黄檗在彼作首座。檗一日礼仏次、大中見而問曰、不著仏求[三]、不著法求、不著衆求、礼拝当何所求。檗云、不著仏求、不著法求、不著衆求、常礼如是。大中云、用礼何為。檗便掌[四]。大中云、大麤生[五]。檗云、這裏[六]什麼所在、説麤説細。檗又掌。大中後継国位[七]、賜黄檗為麤行沙門。裴相国在朝、後奏賜断際禅師。雪竇知他血脈出処、便用得巧。如今還有弄爪牙底麼。便打。

後に塩官の会中に到って、大中を請いて書記と作す。黄檗彼に在って首座と作る。檗、一日仏を礼する次、大中見て問うて曰く、「仏に著いても求めず、法に著いても求めず、衆に著いても求めず、礼拝して当た何の求むる所ぞ」。檗云く、「仏に著いても求めず、法に著いても求めず、衆に著いても求めず、常に礼すること是の如し」。大中云く、「礼することを用て何か為ん」。檗便ち掌つ。大中云く、「大だ麤生」。檗云く、「這裏什麼の所在にしてか、麤と説い細と説う」と。檗又た掌つ。大中後に国位を継ぎ、黄檗に賜いて「麤行沙門」と為す。裴相国、朝に在り、後に奏して「断際禅師」と賜わる。雪竇他の血脈の出処を知って、便ち用い得て巧みなり。如今還た爪牙を弄する底有りや。便ち打つ。

一 塩官斉安(?—八四二)。 二 禅院で、首座に次ぐ職位。 三 『維摩経』不思議品の句。「著」は於に

同じ。仏法を「仏」「法」など既成観念で理会しようとはしない。四 平手打ちをくらわす。五「麤」は粗、「生」は語助。荒っぽすぎるぞ。『臨済録』勘弁(岩波文庫一五四頁)参照。六 ここをどこと心得て粗の細のとつべこべ言うか。七 皇帝の位。

第一二則　洞山麻三斤

垂示云、殺人刀、活人剣、乃上古之風規、亦今時之枢要。若論殺也、不傷一毫。若論活也、喪身失命。所以道、向上一路、千聖不伝。学者労形、如猿捉影。且道、既是不伝、為什麼却有許多葛藤公案。具眼者試説看。

【本則】挙。僧問洞山、如何是仏。〔鉄蒺藜。天下衲僧跳不出。〕山云、麻三斤。〔灼然破草鞋。指槐樹、罵柳樹。為秤鎚。*〕

一　師家が学人を指導する際の活殺自在の手さばき。以下四句は羅山和尚の語（大慧『正法眼蔵』上）。
二　盤山宝積の語（第三則・本則の評唱に既出）。

＊為秤鎚　蜀本には無し。衍字か。

第一二則　洞山の麻三斤

垂示に云く、殺人刀、活人剣は、乃ち上古の風規にして、亦た今時の枢要なり。若し殺を論ぜば、一毫も傷つけず。若し活を論ぜば、喪身失命す。所以に道う、「向上の一路は千聖すら伝えず。学ぶ者の形を労すること、猿の影を捉えんとするが如し」と。且く道え、既是に伝えずんば、為什麼にか却って許多の葛藤公案ある。具眼の者は、試みに説き看よ。

【本則】挙す。僧、洞山に問う、「如何なるか是れ仏」。〔鉄蒺藜。天下の衲僧跳け出せず。〕山云く、「麻三斤」。〔灼然に破草鞋。槐樹を指して柳樹を罵る。秤鎚と為す。〕

一 洞山守初（九一〇—九九〇）。二 鉄菱。撒布して敵の侵入を防ぐための菱の実形の武器。近寄りがたい難問だ。三 三斤の麻糸、僧衣一着分。入矢義高『自己と超越』（岩波書店）参照。四 弊履。無用のもの。この「草鞋」は麻製である。五 あてこすり。aを名指しながら実は狙いはb。

【評唱】這箇公案、多少人錯会。直是難咬嚼、無你下口処。何故。淡而無味。古人有多少答仏話。或云、殿裏底。或云、三十二相。或云、杖林山下竹筋鞭。及至洞山却道、麻三斤。不妨截断古人舌頭。人多作話会道、洞山是時在庫下秤麻。有僧問、所以如此答。有底道、洞山問東答西。有底道、你是仏、更去問仏、所以洞山遶路答之。死漢更有一般道、只這麻三斤便是仏。且得没交渉。你若恁麼去洞山句下尋討、参到弥勒仏下生、也未夢見在。

【評唱】這箇の公案、多少の人錯って会す。直是に咬嚼し難く、你が口を下す処無し。何故ぞ。淡くして味無し。古人に多少、仏について答うる話有り。或は云く、「殿裏底」。或は云く、「三十二相」。或は云く、「杖林山下の竹筋鞭」と。洞山に至るに及んで却って道う、「麻三斤」と。不妨る古人の舌頭を截断す。人多く話会を作して道う、「洞山是の時庫下に在って麻を秤る。僧の問うもの有り、所以に此の如く答う」と。有る底は道う、「洞山は東を問われ西を答う」と。有る底は道う、「你は是れ仏なるに、更に去きて仏を問う、所以に洞山は遶路に之を答う」と。死漢に更に一般有って道う、「只だ這の麻三斤便ち是れ仏」と。且得没交渉。你若し恁麼に洞山の句下に去いて尋討せば、参じて弥勒仏下生に到るも、也た未だ夢にも見ざる在。

＊淡而無味　蜀本に無し。
一 食いつく。 二 趙州従諗(七七八―八九七)の語。 三 古代インドですぐれた人の相とされた諸特徴。仏の身体的特徴。 四 風穴延沼(八九六―九七三)の語(『伝灯録』一三)。ある婆羅門が丈六の竹杖で仏の身長を測ろうとして測れず、投げ出した杖が林となったという仏陀伐那山の杖林の故事(『大唐西域記』九)による。 五 寺院の台所。庫裏。 六 生気を失った朴念仁。 七 やから。連中。「一班」とも。 八 弥勒菩薩は、五十六億七千万年を経過すると、衆生済度のため人間界に下生するとされる。

何故。言語只是載道之器。殊不知古人意、只管去句中求、有什麼巴鼻。不見古人道、道本無言、因言顕道。見道即忘言。若到這裏、還我第一機来始得。只這麻三斤、一似長安大路一条相似。挙足下足、無有不是。這箇話与雲門餬餅話是一般。不妨難会。五祖先師頌云、賤売担板漢、貼秤麻三斤、千百年滞貨、無処著渾身。你但打畳得情塵・意想・計較・得失・是非、一時浄尽、自然会去。

何故ぞ。言語は只だ是れ載道の器なり。殊に知らず、古人の意は只管に句中に去いて求むれば、什麼の巴鼻か有るを。見ずや古人道く、「道は本より言無きも、言に因って道を顕す」と。道を見れば即ち言を忘る。若し這裏に到らば、我に第一機を還し来たりて始めて得し。只だ這の「麻三斤」、一に長安の大路の一条なるが似くに相似たり。足を挙げ足を下ろすに、不是なること有ること無し。這箇の話と雲門の餬餅の話と是れ一般なり。不妨に会し難し。五祖先師の頌に云く、「賤売の担板漢、麻三斤を貼秤するも、千百年と滞貨、渾身を著く処も無し」と。你但だ情塵・意想・計較・

得失・是非を打畳得して、一時に浄尽れば、自然に会し去らん。

一 周敦頤（一〇一七―七三）『通書』文辞に「文所以載道也」と。二『種電鈔』によれば、澄観の『大方広華厳経疏』に見える、と。三 第一機を自己の本分としてとりもどす。「還」は、それが本来あるべきところにとりもどす。原点にたちかえる。四 どのように歩こうと。五 第七七則に見える。六 圜悟の師、五祖法演（?―一一〇四）。七 はかりに上乗せする。八 この世に身の置き所も無い。九「打畳」は始末する、かたづける。

【頌】金烏急、〔左眼半斤。快鷂趕不及。火焔裏横身。〕玉兎速。〔右眼八両。姮娥宮裏作窠窟。〕善応何曾有軽触。〔如鐘在扣、如谷受響。〕展事投機見洞山、〔錯認定盤星。自是闍黎恁麼見〕跛鼈盲亀入空谷。〔自領出去。同坑無異土。阿誰打你鷂子死。〕花簇簇、錦簇簇、〔両重公案、一状領過。依旧一般。〕南地竹兮北地木。〔三重、也有四重公案。頭上

【頌】金烏急く、〔左眼は半斤。快鷂も趕い及ばず。火焔の裏に身を横う。〕玉兎速し。〔右眼は八両。姮娥宮の裏に窠窟を作す。〕善く応ず何ぞ曾て軽触有らん。〔鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し。〕展事投機に洞山を見る、〔定盤星を錯り認む。自より是れ闍黎の恁麼に見るのみ。〕跛鼈盲亀は空谷に入る。〔自ら領して出で去れ。同じ坑に異なる土無し。阿誰か你が鷂子を打ち死す。〕花簇簇、錦簇簇、〔両重の公案、一状に領過す。依旧に一般なり。〕南地の竹、北地の木。〔三重なり。也た四重の公案も有り。頭の

安頭。〕因思[一二]長慶・[一三]陸大夫、[一四]〔癩児牽伴。山僧也恁麼、雪竇也恁麼。〕****解[一五]道合笑不合哭。[一六]〔呵呵。蒼天。夜半*****更添冤苦。〕咦。[一七]〔咄。是什麼。便打。〕

上に頭を安く。〕因って思う、長慶と陸大夫、〔癩児伴を牽く。山僧も也た恁麼、雪竇も也た恁麼。〕解くぞ道えり、「笑う合し、哭く合からず」と。〔呵呵。蒼天。夜半更に冤苦を添う。〕咦。〔咄。是れ什麼ぞ。便ち打つ。〕

＊受響　福本は「応声」。＊＊一状領過依旧一般　福本に無し。＊＊＊三重～安頭〔一二字〕　福本は「依旧一般、一状領過」。＊＊＊＊雪竇也恁麼　福本はこの句の下に「遂呵呵大咲」の五字有り。＊＊＊＊＊夜半　蜀本は「中」。

一「金烏」は日、「玉兎」は月の異称。「金烏急、玉兎速」は日月の過ぎ行く速さ。洞山の答えの俊敏さの喩え。二「斤」「両」は重さの単位で、一斤は一六両。「左眼半斤、右眼八両」は同じ目方を違うと錯覚すること。ぴたりと真実をとらえることの難しさの喩え。三 ここでの「火焔」は太陽を指し、次の「姮娥宮」(月世界の宮殿)と対をなす。火焔の中にとり残されて焼け死ぬのが関の山。四 洞山の見事な応じかたは、問いの核心をいささかも傷つけずに受けとめている。五 機微をついた開示の仕方に洞山の洞山たるところが見える。六 秤の目盛りを見誤っている。洞山評価がまちがっているぞ。七 足の悪いスッポンや目の見えぬ亀があてど無い谷間に迷いこんだようなものだ。八 そなたも同じ穴のムジナ。九 ハヤブサ気取りのお前を打ち殺す者はたれかおらぬか。一〇 どこもみな燦爛たる花盛り。洞山の答えが創り出した世界のめでたさ。一一 麻どころか、南には竹林が、北には樹林がびっしり。もとは双泉師寛の語(『伝灯録』二二)。一二 長慶大安(七九三―八八三)。一三 陸亘(七六四―八三四)。一四 同類は誘い合う。一五 あとの評唱を参照。その出典は『伝灯録』一〇・

西禅和尚の条。　一六　以下は笑(呵呵)と哭(蒼天)の両刀使い。哭の方は雪竇に当てつけている。　一七　人を叱ったり注意を促すときに発する大声。また笑うさま。

【評唱】　雪竇見得透、所以劈頭便道、金烏急、玉兎速。与洞山答麻三斤、更無両般。日出月没、日日如是。人多情解、只管道、金烏是左眼、玉兎是右眼。纔問著、便瞠眼云、在這裏。有什麼交渉。若恁麼会、達磨一宗掃地而尽。所以道、垂鉤四海、只釣獰龍。格外玄機、為尋知己。雪竇是出陰界底人、豈作這般見解。雪竇軽軽去敲関撃節処、略露些子教你見。便下箇注脚道、善応何曾有軽触。洞山不軽酬這僧、如鐘在扣、如谷受響。大小随応、不敢軽触。雪竇一時突出心肝五臓、呈似你諸人了也。雪竇有静而善応頌云、覿面相呈、不在多端。

【評唱】　雪竇見得透す、所以に劈頭に便ち道う、「金烏急く、玉兎速し」と。洞山の「麻三斤」と答うると、更に両般無し。日出で月没す、日日是の如し。人多く情解して、只管に道う、「金烏は是れ左眼、玉兎は是れ右眼」と。問著るや纔や、便ち瞠眼いて云く、「這裏に在り」と。什麼の交渉か有らん。若し恁麼に会せば、達磨の一宗、地を掃って尽きん。所以に道う、「鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る。格外の玄機は、知己を尋ねんが為なり」と。雪竇は是れ陰界を出づる底の人、豈に這般る見解を作さんや。雪竇は軽軽く敲関撃節の処に去いて、略些子を露し你をして見しむ。便ち箇の注脚を下して道う、「善く応ず何ぞ曾て軽触有らん」と。洞山　軽しく這の僧に酬えず。鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し。大小に随い応じて、敢て軽触かず。雪竇は一時に心肝五臓を突出して、

龍蛇易辨、衲子難瞞。金鎚影動、宝剣光寒。直下来也、急著眼看。

你諸人に呈似し了れり。雪竇に静而善応の頌有り云く、「覿面に相呈して、多端に在らず。龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞し難し。金鎚の影動き、宝剣の光寒し。直下に来たれり、急と眼を著けて看よ」と。

＊敲　福本は「扣」。

一 梁山縁観の上堂の語(『会元』一四)。第三則・頌の評唱に既出。二 常識を超えた玄妙な機句。三 「陰」は五蘊。迷いの世界。四 「金烏是左眼」の類の情解。五 肝要のところ。六 示す。「似」は動作の方向を示す接尾語。七 『祖英集』上に見える。ただし、「相呈」を「相見」に、「金鎚」を「金槌」に作る。八 多方面。まぎらわしいあれこれ。

[一]洞山初参雲門、門問、近離甚処。山云、渣渡[二]。門云、夏在甚麽処。山云、湖南報慈。門云、幾時離彼中。山云、八月二十五。門云、放你三頓[三]棒、参堂去。師晩間入室、親近問云、某甲過在什麽処。門云、飯袋子[四]、江西湖南、便恁麽去。洞山於言下、豁然大悟、遂云、某甲他日向無人煙処、

洞山初め雲門に参ずるや、門問う、「近ごろ甚処を離れしや」。山云く、「渣渡」。門云く、「夏のとき甚麽処にか在りし」。山云く、「湖南の報慈」。門云く、「幾時か彼中を離る」。山云く、「八月二十五(日)」。門云く、「你に三頓の棒を放す、参堂に去け」と。師、晩間入室し、親近づきて問うて云く、「某甲が過什麽処にか在る」。門云く、「飯袋子め、江西と湖南と便ち恁麽に去くや」と。洞山、言下に豁然大悟して遂に云く、

卓箇庵子、不蓄一粒米、不種一茎菜、常接待往来十方大善知識、尽与伊抽却釘、抜却楔、拈却[五]膱脂帽子、脱却[六]鶻臭布衫、各令灑灑落落地、作箇無事人去。門云、身如椰子大、開得許[七]大口。洞山便辞去。他当時悟処、直[八]下穎脱。豈同小見。

「某甲他日人煙無き処に向いて、箇の庵子を卓て、一粒の米も蓄えず、一茎の菜も種えず、常に十方に往来する大善知識を接待して、尽く伊が与に釘を抽却き、楔を抜却り、膱脂帽子を拈却り、鶻臭布衫を脱却して、各を灑灑落落地にして、箇の無事の人と作し去らしめん」と。門云く、「身は椰子の如き大きさにして、許の大口を開き得たり」と。洞山便ち辞し去る。他、当時の悟処、直下に穎脱せり。豈に小見に同じからんや。

一『無門関』第一五「洞山三頓」にも見える。　二 渣津の渡し。江西省修水県の西南。　三 三度の棒たたき。　四 はるばる渣渡(江西)や報慈寺(湖南)にまで、そんなふうに行って来たのか。　五 あぶらじみた帽子。「膱」を「膩」とするテクストもある。　六 わきがで臭い肌着(禅臭プンプン)。　七 こんなでっかい。　八 錐の先端が袋から突き出るように、一発で突き抜ける。

[一]後来出世応機。麻三斤語、諸方只*作答仏話会**。如何是仏***、杖林山下竹筋鞭、丙丁童子来求火。只管於仏上作道理****。雪竇云、若恁麽作展事与投

後来に出世して機に応ず。「麻三斤」の語、諸方只だ「仏」に答うる話会と作す。「如何なるか是れ仏」(と問えば)、「杖林山下の竹筋鞭」、「丙丁童子来たりて火を求む」と(答え)、只管に「仏」の上に道理を作

機会、正似跛鼈盲亀入空谷。何年日月、尋得出路去。花簇簇、錦簇簇、此是僧問[二]智門和尚、洞山道麻三斤、意旨如何。智門云、花簇簇、錦簇簇。会麼。僧云、不会。智門云、南地竹兮北地木。僧回挙似洞山。山云、我不為汝説、我為大衆説。遂上堂云、言無展事、語不投機。[三]承言者喪、滞句者迷。雪竇破人情見、故意引[四]作一串頌出。後人却転生情見道、麻是孝服、竹是孝杖、所以道、南地竹兮北地木。花簇簇、錦簇簇、是棺材頭辺画底花草。還識羞麼。殊不知、南地竹兮北地木与麻三斤、只是[五]阿爺与阿爹相似。古人答一転語、決是意不恁麼。正似雪竇道金烏急玉兎速、自是一般[六]寛曠。只是金鍮難辨、魚魯参差。

す。雪竇云く、「若し恁麼に展事と投機との会を作さば、正に跛鼈盲亀の空谷に入るに似たり」。何年日月にか、出路を尋得し去らん。「花簇簇、錦簇簇」とは、此れは是れ僧、智門和尚に問う、「洞山の麻三斤と道う意旨如何」。智門云く、「花簇簇、錦簇簇。会すや」。僧云く、「会せず」。智門云く、「南地の竹、北地の木」と。僧回って洞山に挙似す。山云く、「我は汝の為に説かず。我は大衆の為に説かん」と。遂に上堂して云く、「言は事を展ぶる無く、語は機に投ぜず。言を承くる者は喪び、句に滞る者は迷う」と。雪竇は人の情見を破らんと故意に引いて一串と作して頌出す。後人却ってますます情見を生じて道う、「麻は是れ孝服、竹は是れ孝杖。所以に道う、『南地の竹、北地の木』と。『花簇簇、錦簇簇』とは、是れ棺材の頭辺に画ける底の花草なり」と。還た羞を識るや。殊に知らず「南地の竹、北地の木」と「麻三斤」とは、只だ是れ「阿爺」と「阿爹」と相似たることを。古人一転語

にて答えしは、決して是れ意恁麼ならず。正に雪竇の「金烏急く、玉兎速し」と道うに似て、自より是れ一般く寛曠なり。只だ是れ金と鍮と辨じ難く、「魚」と「魯」と参差しきがごとし。

＊只　福本は「多」。　＊＊話会　福本は「語」。　＊＊＊如何〜求火(一八字)　福本に無し。
＊＊＊＊作道理　福本は「作道理会」。

一 法門を開いて学人を教導する。 二 智門光祚。雪竇の師。 三 ことばを鵜呑みにする者。 四 「孝服・孝杖」は喪に服するときの麻服と竹杖。 五 ともに父をいう俗語。 六 おおどか。枠にはまらぬのびやかさ。

雪竇老婆心切、要破你疑情、更引箇死漢。因思長慶・陸大夫、解道合笑不合哭。若論他頌、只頭上三句、一時頌了。我且問你都[一]盧只是箇麻三斤、雪竇却有許多葛藤。只是慈悲忒煞、所以如此。陸亘大夫、作宣州観察使、参南[二]泉。泉遷化、亘聞喪入寺下[三]祭、却呵呵大笑。院主云、先師与

雪竇は老婆心切にして、你が疑情を破らんと要して、更に箇の死漢を引く。「因って思う、長慶と陸大夫、解くぞ道えり『笑う合し哭く合からず』と」と。若し他の頌を論ぜば、只だ頭上の三句にて一時に頌し了れり。我且く你に問わん、都盧只だ是れ箇の「麻三斤」なるに、雪竇却って許多の葛藤有り。只だ是れ慈悲忒だ煞し、所以に此の如し。陸亘大夫は宣州の観察使と作って、南泉に参ず。泉の遷化するや亘は喪を聞いて寺

大夫有師資之義[四]、何不哭。大夫云、[五]道得即哭。院主無語。亘大哭云、蒼天蒼天、先師去世遠矣。後来長慶聞云、大夫合笑不合哭。雪竇借此意大綱道、你若作這般情解、正好笑、莫哭。[六]是即是、末後有一箇[七]字、不妨聱訛。更道、咦。雪竇還洗得脱麼。

に入って下祭し、却って呵呵大笑す。院主云く、「先師と大夫とは師資の義有り。何ぞ哭かざる」。大夫云く、「道い得ば即ち哭かん」と。院主無語。亘大いに哭いて云く、「蒼天蒼天、先師世を去ること遠し」と。後来に長慶聞いて云く、「大夫は笑う合し哭く合からず」と。雪竇此の意の大綱を借りて道う、「你若し這般る情解を作さば、正に好し笑え、哭くこと莫れ」と。是なることは即ち是なるも、末後に一箇の字有りて不妨に聱訛なり。更に道う、「咦」と。雪竇還た洗得脱るや。

一 すっかり、すべて。二 南泉普願(七四八—八三四)。三 弔(礼)をする。四 師弟。五 この事の勘どころを一言で言いとめる。六 それでいいにはいいが、さりながら。「是則是」に同じ。七 (その一字の感歎詞に籠められた複雑な思いを)きれいさっぱりと整理しきれているだろうか。

第一三則　巴陵銀椀裏

垂示云、雲凝大野、徧界不蔵[一]。雪覆蘆花、難分朕迹[二]。冷処冷如氷雪、細処細如米末。深深処仏眼難窺、密密処[三]魔外莫測。挙一明三即且止、坐断天下人舌頭、作麼生道。且道、是什麼人分上事。試挙看。

一 全世界にかくれるものがない。石霜慶諸(八〇七—八八八)の語に「徧界不曾蔵」(『伝灯録』一五)と。 二 形跡、すがたかたち。 三 天魔や外道。

【本則】挙。僧問巴陵[一]、如何是提婆宗[二]。〔白馬入蘆花。道什麼。点。〕巴陵云、銀椀裏盛雪[三]。〔塞断你咽喉。七花八裂。〕

第一三則　巴陵の銀椀裏

垂示に云く、雲大野に凝れば、徧界蔵れず。雪蘆花を覆えば、朕迹を分け難し。冷たき処は氷雪よりも冷たく、細かき処は米末よりも細かなり。深深たる処は仏眼も窺い難く、密密たる処は魔外も測ること莫し。挙一明三は即ち且く止く、天下の人の舌頭を坐断して、作麼生か道わん。且く道え、是れ什麼人の分上の事ぞ。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、巴陵に問う、「如何なるか是れ提婆宗」。〔白馬、蘆花に入る。什麼と道うぞ。点。〕巴陵云く、「銀椀裏に雪を盛る」。〔你が咽喉を塞断ぐ。七花八裂。〕

一 巴陵顥鑑。雲門文偃(八六四—九四九)の法嗣。 二 迦那提婆 Kāṇadeva の宗旨学説。 三 「それ、

そこだ」と指さす。 四 見分けがつかぬが、全くちがう。洞山良价（八〇七―八六九）の『宝鏡三昧歌』に、「銀盌に雪を盛り、明月に鷺を蔵す。類すれども斉しからず、混ずれば則ち処を知る」と。

〔評唱〕這箇公案、人多錯会道、此是外道宗。有什麼交渉。第十五祖提婆尊者、亦是外道中一数。因見第十四祖龍樹尊者、以針投鉢。龍樹深器之、伝仏心宗。継為第十五祖。

〔評唱〕 這箇の公案、人多く錯り会して道う、「此れは是れ外道宗」と。什麼の交渉か有らん。第十五祖提婆尊者は、亦た是れ外道中の一数なり。因に第十四祖龍樹尊者に見えて、針を以て鉢に投ず。龍樹深く之を器として、仏心宗を伝う。継いで第十五祖と為る。

一 ナーガールジュナ Nāgārjuna（一五〇―二五〇頃）。初期大乗仏教の確立者。禅宗では西天第十四祖とする。 二 針を鉢に投げ入れた。『伝灯録』二・迦那提婆の章に「後謁龍樹大士。将及門、龍樹知是智人、先遣侍者以満鉢水置於座前。尊者覩之、即以一針投而進之。欣然契会。龍樹即為説法」と。

楞伽経云、仏語心為宗、無門為法門。馬祖云、凡有言句是提婆宗。只以此箇為主。諸人尽是衲僧門下客、還曾体究得提婆宗麼。若体究得、西天九十六種外道、被汝一時降伏。若体究不得、未免著返披袈裟去在。且道、是作麼生。若道言句是、也没交

『楞伽経』に云く、「仏語心を宗と為し、無門を法門と為す」と。馬祖云く、「凡そ言句有るは是れ提婆宗なり。只だ此箇を以て主と為す」と。諸人尽く是れ衲僧門下の客なり、還た曾て提婆宗を体究し得たるや。若し体究し得たらば、西天の九十六種の外道も汝に一時に降伏せられん。若し体究し得ざれば、未だ返披しの袈裟を著け去るを免れざる在。且く道え、是れ作麼

渉。若道言句不是、也没交渉。且道、馬大師意在什麼処。後来雲門道、[四]馬大師好言語、只是無人問。有僧便問、如何是提婆宗。門云、九十六種。汝是最下一種。

昔有僧辞大隋。[五]隋云、什麼処去。僧云、礼拝普賢去。大隋竪起払子云、[六]文殊・普賢、尽在這裏。僧画一円相、以手托呈師、[七]又抛向背後。隋云、侍者将一貼茶来、与這僧去。雲門別云、[八]西天斬頭截臂、這裏自領出去。又云、赤旛在我手裏。西天論議勝者手執赤旛、負堕者返披袈裟、従偏門出入。[九]

＊未免著返披袈裟去在　福本は「返披袈裟去」。

生。若し言句是なりと道わば、也た没交渉。若し言句是ならずと道わば、也た没交渉。且く道え、馬大師の意什麼処にか在る。後来に雲門道く、「馬大師の好言語、只だ是れ人の問う無し」と。僧有り便ち問う、「如何なるか是れ提婆宗」。門云く、「九十六種。汝は是れ最下の一種」と。

昔、僧有り、大隋を辞す。隋云く、「什麼処にか去く」。僧云く、「普賢を礼拝に去かん」と。大隋、払子を竪起てて云く、「文殊・普賢、尽く這裏に在り」と。僧一円相を画いて、手を以て師に托呈し、又た背後に抛向つ。隋云く、「侍者一貼の茶を将ち来たりて、這の僧に与え去れ」と。雲門別して云く、「西天にては頭を斬り臂を截るも、這裏にては自ら領して出で去れ」。又た云く、「赤旛我が手の裏に在り」と。西天にては論議に勝つ者は、手に赤旛を執り、負堕くる者は袈裟を返しに披て、偏門より出入するなり。

一『祖堂集』一四・馬祖の章などにも引かれるが、『楞伽経』にこの文は見えない。入矢義高編『馬祖の語録』(禅文化研究所、一九八四)を参照。　二 仏によって説かれた心。　三『雲門広録』中に引く。　四 雲門文偃(八六四―九四九)。　五 大隋法真(八三四―九一九)。　六 真如・仏性・実相などのシンボルとされる。　七 一服分のお茶。　八 別語(独自のコメント)をつける。　九 わき門。

西天欲論議、須[一]得奉王勅、於大寺中、声鐘撃鼓、然後論議。於是外道於僧寺中、封禁鐘鼓、為之[二]沙汰。時迦那提婆尊者、知仏法有難、遂運神通、登楼撞鐘、欲擯外道。外道遂問、楼上声鐘者誰。提婆云、天[三]。外道云、天是誰。婆云、我。外道云、我是誰。婆云、我是你。外道云、*你是誰。婆云、你是狗。外道云、狗是誰。婆云、**狗是你。如是七返、外道自知負堕、伏義遂自開門。提婆於是従楼上持赤旛下来。外道云、汝何不後。婆云、汝何不前。外道云、汝是賤人。婆云、

西天にては論議せんと欲せば、須得らく王勅を奉じ、大寺の中に於て鐘を声し鼓を撃って、然る後に論議す。是に於て外道は僧寺の中に於て鐘鼓を封禁し、之が為に沙汰す。時に迦那提婆尊者、仏法に難有るを知り、遂に神通を運し、楼に登り鐘を撞いて、外道を擯けんと欲す。外道遂に問う、「楼上に鐘を声す者は誰ぞ」。提婆云く、「天なり」。外道云く、「天とは是れ誰ぞ」。婆云く、「我なり」。外道云く、「我とは是れ誰ぞ」。婆云く、「我は是れ你なり」。外道云く、「你とは是れ誰ぞ」。婆云く、「你は是れ狗なり」。外道云く、「狗とは是れ誰ぞ」。婆云く、「狗は是れ你なり」。是の如くすること七返、外道自ら負堕たるを知って、義に伏して遂に自ら門を開く。提婆、是に於て楼上より赤旛を持

汝是良人。如是展転酬問、提婆折以無礙之辯、由是帰伏。時提婆尊者、手持赤旛。義堕者旛下立。外道皆斬首謝過。時提婆止之、但化令削髪人道。於是提婆宗大興。雪竇後用此事而頌之。

ちて下り来たる。外道云く、「汝何ぞ後かざる」。婆云く、「汝何ぞ前まざる」。外道云く、「汝は是れ賤人」。婆云く、「汝は是れ良人」。是の如く展転酬問し、提婆折くに無礙の辯を以てし、是に由って帰伏す。時に提婆尊者、手に赤旛を持つ。義堕つる者は旛下に立つ。外道皆な首を斬って過を謝せんとす。時に提婆之を止めて、但だ化して髪を削って道に入らしむ。是に於て提婆宗大いに興る。雪竇後に此の事を用て之を頌す。

＊你是　蜀本に無し。　＊＊狗是你　蜀本は「你外道云你是誰、婆云天」。

一「須得a然後b」で、aしてはじめてbする。　二 淘汰。ここは、仏僧を排斥すること。　三 提婆 deva の漢訳は「天」。　四 教化する。

巴陵衆中謂之鑑多口。常縫坐具行脚。深得他雲門脚跟下大事、所以奇特。後出世法嗣雲門。先住岳州巴陵、更不作法嗣書、只将三転語上雲門。如何是道、明眼人落井。如何是吹毛剣、珊瑚枝枝撐著月。如何是提婆宗、

巴陵をば衆中に之を「鑑多口」と謂う。常に坐具を縫いつけて行脚す。深く他の雲門の脚跟下の大事を得、所以に奇特たり。後に出世して法を雲門より嗣ぐ。先に岳州の巴陵に住するも、更に法嗣の書を作らず、只だ三転語を将て雲門に上る。「如何なるか是れ道、明眼の人井に落つ」。「如何なるか是れ吹毛の剣、珊瑚は

銀椀裏盛雪。雲門云、他日老僧忌辰、只挙此三転語、報恩足矣。自後果不作忌辰斎、依雲門之嘱、只挙此三転語。

一　おしゃべり顢鑑。　二　湖南省北部。

然諸方答此話、多就事上答。唯有巴陵恁麽道。極是孤峻、不妨難会。亦不露些子鋒鋩、八面受敵、著著有出身之路、有陥虎之機、脱人情見。若論一色辺事、到這裏、須是自家透脱了、却須是遇人始得。所以道、道吾舞笏同人会、石鞏彎弓作者諳。此理若無師印授、擬将何法語玄談。雪竇随後拈提為人、所以頌出。

枝枝に月を撐著う」。「如何なるか是れ提婆宗、銀椀裏に雪を盛る」と。雲門云く、「他日、老僧の忌辰に、只だ此の三転語を挙せば、恩に報ゆること足れり」と。自後に果して忌辰の斎を作さず、雲門の嘱に依って、只だ此の三転語を挙するのみ。

三　「吹毛剣」は名剣の名。第一〇〇則を参照。

然るに諸方は此の話に答うるに、多く事上に就きて答う。唯だ巴陵のみ恁麽に道う有り。極めて是れ孤峻にして不妨に会し難し。亦た些子の鋒鋩をも露さずして、八面に敵を受くるも著著に出身の路有り、陥虎の機有って、人の情見を脱す。若し一色辺の事を論ぜば、這裏に到って須是らく自家ら透脱し了るべきも、却って須是らく人に遇いて始めて得し。所以に道う、「道吾笏を舞わせば同人会し、石鞏弓を彎けば作者諳んず。此の理若し師の印授無ければ、何の法を将てか玄談を語らんと擬す」と。雪竇は随後に拈提して人の為にす、所以に頌出す。

一（碁の）一手一手。相手の攻撃ごとに。二 虎を陥しいれるほどのすぐれた機用（第一〇則・本則の著語に既出）。三 差別を超えた絶対平等の世界。四 しかるべき師に出会う。五 以下、雲頂山の僧徳敷の七言律詩「古今大意」の後半。ただし『伝灯録』二九では、末句を「欲将何見後玄談」に作る。六 石鞏慧蔵（馬祖の法嗣）は弓に矢を関南道吾は「祖師西来意」の問に対して笏でその意を示した。つがえて人をためした。

【頌】老新開、〔千兵易得、一将難求。多口阿師。〕端的別、〔是什麼端的。頂門上一著、夢見也未。〕解道銀椀裏盛雪。〔蝦跳不出斗。両重公案。多少人喪身失命。〕九十六箇応自知、〔兼身在内。闍黎還知麼。一坑埋却。〕不知却問天辺月。〔遠之遠矣。自領出去、望空啓告。〕提婆宗、提婆宗、〔道什麼。山僧在這裏、満口含霜。〕赤旛之下起清風。〔百雑砕。打云、已著[*10]了也。你且去斬頭截臂来、与你道一句。〕

【頌】老新開、〔千兵は得易きも、一将は求め難し。多口の阿師。〕端的に別なり、〔是れ什麼の端的ぞ。頂門上の一著、夢にも見る也未。〕解くぞ道えり、銀椀裏に雪を盛ると。〔蝦は斗を跳び出でず。両重の公案なり。多少の人喪身失命す。〕九十六箇応に自知すべし、〔身を兼て内に在り。闍黎還た知るや。一坑に埋め却まん。〕知らずんば却って天辺の月に問え。〔遠くして遠し。自ら領して出で去り、空を望んで啓告せよ。〕提婆宗、提婆宗、〔什麼と道うぞ。山僧、這裏に在りて、満口に霜を含む。〕赤旛の下清風を起す。〔百雑砕。打って云く、已に著し了れり。你且く去きて頭を斬り臂を截り来たらば、你の与に一句を道わん。〕

*已　福本は「打」。
一「老」は敬愛の意を示す。「新開」は巴陵の居所、新開院。巴陵おやじ。二「端的」は、まさしく、ずばり。また名詞として読むことも可能。「別」は、格別。三 脳天をグサリとやられても、わかるまい(そんな男が「端的」とは笑止の至り)。四 第六則・本則の著語に既出。五 九十六種の外道は思い知ったに違いない。六 そう言うあなた自身もその仲間。七 第一則・頌の著語に既出。八 第二則・頌の著語に既出。九 赤旛をこなごなに打ちこわしてしまえ。一〇 もう急所の一手を打ちおわった。

〔評唱〕老新開、新開乃院名也。端的別、[一]雪竇讃歎有分。且道、什麼処是別処。[二]一切語言、皆是仏法。山僧如此説話、成什麼道理去。雪竇微露些子意道、只是端的別。後面打開云、解道銀椀裏盛雪。更与你下箇注脚、九十六箇応自知負堕始得。你若不知、問取天辺月。[三]古人曾答此話云、問取天辺月。雪竇頌了、末後須有活路、有[四]獅子返擲之句。更提起与你道、提

〔評唱〕「老新開」、新開は乃ち院の名なり。「端的別なり」とは、雪竇讃歎するに分有り。且く道え、什麼の処か是れ別なる処。一切の語言は、皆な是れ仏法。山僧此の如く説話するも、什麼の道理をか成し去らん。雪竇微かに些子の意を露して道う、「只だ是れ端的に別なり」と。後面に打開して云く、「解くぞ道えり、銀椀裏に雪を盛ると」と。更に你の与に箇の注脚を下す、「九十六箇応に自ら負堕たるを知りて始めて得し。你若し知らずんば、天辺の月に問取え」と。古人曾て此の話に答えて云く、「天辺の月に問取え」と。雪竇

婆宗、提婆宗、赤旛之下起清風。巴陵道、銀椀裏盛雪。為什麼雪竇却道、赤旛之下起清風。還知雪竇殺人不用刀麼。

頌し了って、末後に須らく活路有り、獅子返擲の句有るべし。更に提起して你の与に道う、「提婆宗、提婆宗、赤旛の下に清風を起す」と。巴陵道く、「銀椀裏に雪を盛る」と。為什麼に雪竇は却って道う、「赤旛の下に清風を起す」と。還た雪竇は人を殺すに刀を用いざることを知るや。

一 雪竇ならではの讃嘆ぶり。 二 『維摩経』観衆生品に「言説文字、皆解脱相」と。 三 未詳。 四 獅子がもんどりうって逆襲するような一句。

第一四則　雲門対一説

【本則】挙。僧問雲門[一]、如何是一代[二]時教。〔直至如今不了。〕座主[三]不会、葛藤窠裏。〕雲門云、[四]対一説。〔[五]無孔鉄鎚、七花八裂。[六]老鼠咬生薑。〕

第一四則　雲門の対一説

【本則】挙す。僧、雲門に問う、「如何なるか是れ一代時教」。〔直に如今に至るも了らず。〕座主は会せずして、葛藤窠裏にあり。〕雲門云く、「対一説」。〔無孔の鉄鎚、七花八裂。老鼠、生薑を咬む。〕

一　雲門文偃（八六四―九四九）。二　ブッダの一生涯における教説。第六則・頌の評唱に既出。三　講僧。文字言句に仏法を求める僧。四　一つずつ答える。目前の機に応じ、方便に徹する立場。五　柄を通す穴のない鉄鎚。ここは、どうにも扱いきれない代物、頑物。六　呑むことも吐くこともできない。どうにも言いようがない。

〔評唱〕禅家流、[一]欲知仏性義、当観時節因縁。謂之教外別伝、単伝心印、直指人心、見性成仏。釈迦老子、四十九年住世、三百六十会、開談頓漸権実。謂之一代時教。這僧拈来問云、如何是一代時教。雲門何不与他紛紛

〔評唱〕禅家流、仏性の義を知らんと欲せば、当に時節因縁を観ずべし。之を教外別伝、単伝心印、直指人心、見性成仏と謂う。釈迦老子、四十九年の住世、三百六十会に、頓漸権実を開談す。之を一代時教と謂う。這の僧拈じ来たり問うて云く、「如何なるか是れ一代時教」と。雲門何ぞ他の与に紛紛と解説せずして、

解説、却向他道箇対一説。雲門尋常一句中、須具三句。謂之函蓋乾坤句、随波逐浪句、截断衆流句。放去収来、自然奇特、如斬釘截鉄、教人義解卜度他底不得。

却って他に向って箇の「対一説」と道う。雲門は尋常一句の中に、須ず三句を具す。之を函蓋乾坤の句、随波逐浪の句、截断衆流の句と謂う。放去収来、自然に奇特、釘を斬り鉄を截るが如く、人をして他底を義解卜度し得ざらしむ。

一　仏性を見て取るには、そのための時機が熟したことを感得できねばならない。『伝灯録』九・潙山章に、百丈が経の言葉として引く。　二　字義を詮索し忖度する。

一大蔵教、只消三箇字、四方八面、無你穿鑿処。人多錯会却道、対一時機宜之事故説。又道、森羅及万象、皆是一法之所印、謂之対一説。更有道、只是説那箇一法。有什麼交渉。非唯不会、更入地獄如箭。殊不知、古人意不如此。所以道、粉骨砕身未足酬、一句了然超百億。不妨奇特。如何是一代時教、只消道箇対一説。若当頭薦得、便可帰家穏坐。若薦不

一大蔵経も、只だ三箇の字を消うるのみにして、四方八面、你が穿鑿する処無し。人多く錯り会して却って道う、「一時の機宜の事に対するが故に説く」と。又た道う、「森羅及び万象、皆な是れ一法の所印なり、之を対一説と謂う」と。更に道うもの有り、「只だ是れ那箇の一法を説く」と。什麼の交渉か有らん。唯だ会せざるのみに非ず、更に地獄に入ること箭の如し。殊に知らず、古人の意、此の如くならざることを。所以に道う、「粉骨砕身するも未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億に超る」と。不妨に奇特たり。「如

得、且伏聴処分。

一 偽経『仏説法句経』の句。 二 永嘉玄覚（六七五―七一三）述とされる『証道歌』の句。第一則・本則の評唱に既出。 三 すっかり会得して、わがものとする。第七則・頌の評唱に既出。

【頌】 対一説、〔活鱍鱍。[一]言猶在耳。不妨孤峻。〕太孤絶。〔[二]傍観有分。何止壁立千仞。豈有恁麼事。〕[三]無孔鉄鎚重下楔。〔[四]錯会名言也。雲門老漢、也是[五]泥裏洗土塊、雪竇也是粧飾。〕[六]閻浮樹下笑呵呵、〔[七]四州八県、不曾見箇漢。同道者方知、能有幾人知。〕昨夜驪龍拗角折。〔[八]非止驪龍拗折、有誰見来、還有証明麼。[九]啞。〕[一〇]別、別。〔[一一]讃歎有分。須是雪竇始得。有什麼別処。〕[一二]韶陽老人得一[一三]橛。〔在什

何なるか是れ一代時教」というに、只だ箇の「対一説」と道うを消うるのみ。若し当頭に薦得せば、便ち帰家穏坐すべし。若し薦得せずんば、且く伏して処分に聴え。

【頌】 対一説、〔活鱍鱍。言猶お耳に在り。不妨に孤峻なり。〕太だ孤絶。〔傍観するに分有り。何ぞ止だ壁立千仞のみならん。豈に恁麼の事有らんや。〕無孔の鉄鎚重ねて楔を下す。〔名言を錯会す。雲門老漢也是れ泥裏に土塊を洗い、雪竇也是れ粧飾す。〕閻浮樹下笑うこと呵呵、〔四州八県、曾て箇の漢を見ず。同道の者にして方めて知る、能く幾人か知るもの有らん。〕昨夜驪龍角を拗し折らる。〔止だ驪龍の拗し折らるるのみに非ず、誰か見来たるもの有りや、還た証明するもの有りや。啞。〕別なり、別なり。〔讃歎するに分有り。須是らく雪竇にして始めて得し。什麼の別な

麼処。更有一橛、分付阿誰。徳山・臨済、也須退倒三千。那一橛又作麼生。便打。」

一 この一言は今も私の耳に鳴り響いている。 二 (その峻険な孤峰を)とっくり拝見させていただけた。 三 無孔の鉄鎚に柄を打ちこもうとする。「楔」は長い一本の棒状の物。 四 便宜的な名称、概念。 五 無意味なことをする。 六 閻浮提の木陰でカラカラと大笑いするものがいる。 七 全世界のどこにも。 八 あごの下に珠玉をもつ黒い龍。ここは、ブッダを暗喩。 九 声が出ない。 一〇 格別だ。 一一 よくぞ讃嘆させてもらいました。 一二 「韶陽」は、広東省北部の地名。ここは、雲門文偃のこと。 一三 一本の棒きれ。ここは、驪龍の角。 一四 手渡す。

る処か有らん。」韶陽老人一橛を得たり。〔什麼処にか在る。更に一橛有り、阿誰にか分付せん。徳山・臨済も也た須らく退倒三千すべし。那の一橛、又た作麼生。便ち打つ。」

【評唱】対一説、太孤絶、雪竇讃之不及。此語独脱孤危、光前絶後。如万丈懸崖相似、亦如百万軍陣、無你入処、只是忒煞孤危。古人道、欲得親切、莫将問来問。問在答処、答在問端。直是孤峻。且道、什麼処是孤峻処。天下人奈何不得。這僧也是箇

【評唱】「対一説、太だ孤絶」とは、雪竇之を讃え及ばず。此の語独脱孤危にして、光前絶後なり。万丈の懸崖の如くに相似、亦た百万の軍陣の如く、你が入処無く、只だ是れ忒煞だ孤危なり。古人道く、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たって問うこと莫れ。問は答処に在り、答は問端に在り」と。直是に孤峻なり。且く道え、什麼の処か是れ孤峻の処ぞ。天下の人奈何

作家、所以如此問、雲門又恁麼答。大似無孔鉄鎚重下楔相似。雪竇使文言用得甚巧。閻浮樹下笑呵呵、起世*経中説。須弥南畔吠琉璃樹、映閻浮洲、中皆青色。此洲乃大樹為名、名閻浮提。其樹縦広七千由旬、下有閻浮壇金聚、高二十由旬。以金従樹下出生、故号閻浮樹。所以雪竇自説、他在閻浮樹下笑呵呵。且道、他笑箇什麼、笑昨夜驪龍拗角折。只得瞻之仰之、讃嘆雲門有分。雲門道、対一説。似箇什麼。如拗折驪龍一角相似。到這裏、若無恁麼事、焉能恁麼説話。雪竇一時頌了、末後却道、別別、韶陽老人得一橛。何不道全得、如何只得一橛。且道、那一橛在什麼処。直**得穿過第二人。

ともなし得ず。這の僧也た是れ箇の作家、所以に此の如く問い、雲門又た恁麼に答う。大いに「無孔の鉄鎚重ねて楔を下す」が似くに相似たり。雪竇文言を使うに、用い得て甚だ巧なり。「閻浮樹下笑うこと呵呵」とは、『起世経』の中に説く。須弥南畔の吠琉璃樹、閻浮洲に映じて、中は皆な青色なり。此の洲は乃ち大樹を名と為て、閻浮提と名づく。其の樹の縦広七千由旬、下に閻浮壇金の聚まれる有り、高さ二十由旬。金の樹下より出生するを以て、故に閻浮樹と号す。所以に雪竇自ら説く、「他閻浮樹下に在って呵呵と笑う」と。且く道え、他箇の什麼をか笑う。昨夜驪龍の角を拗じ折られしことを笑うか。只だ之を瞻げ之を仰いで、雲門を讃嘆するに分有るを得るのみ。雲門道う「対一説」と。箇の什麼にか似たる。驪龍の一角を拗じ折るが如くに相似たり。這裏に到って、若し恁麼の事無くんば、焉ぞ能く恁麼に説話せん。雪竇一時に頌し了って、末後に却って道う、「別なり、別なり。韶陽老人

一橛を得たり」と。何ぞ「全て得たり」と道(い)わざる、如何ぞ只だ一橛をのみ得たる。且(しばら)く道(い)え、那(そ)の一橛は什麼処(いずこ)にか在る。直に得たり第二人を穿過することを。

＊起世経〜吠琉璃樹(一三字)　福本は「須弥南畔閻浮樹」。＊＊直得穿過第二人　蜀本に無し。

一 さきにもあとにも無い。二 首山省念(九二六―九九三)。三「須弥」は宇宙の中心にあるという須弥山。「吠瑠璃」は宝玉の名。四 須弥山の四方にあるとされる四大洲のうちの南方。人間界。五『起世経』一では「七由旬」に作る。由旬は約七キロメートル。六 閻浮樹林を流れる川に産するという砂金。七 ただくするばかり。八 第二機に堕ちこんだ人を突き刺す。

第一五則　雲門倒一説

垂示云、殺人刀[一]、活人剣、乃上古之風規、是今時之枢要。且道、如今那箇是殺人刀、活人剣。試挙看。

一 第一二則の垂示に既出。

【本則】挙。僧問雲門、不是目前機[一]、亦非目前事時如何。〔踍跳作什麼。〕門云、倒一説[二]。〔平出[三]。[四]款出囚人口。也不得放過。荒草[五]裏横身。〕

第一五則　雲門の倒一説

垂示に云く、殺人刀、活人剣は乃ち上古の風規にして、是れ今時の枢要なり。且く道え、如今那箇か是れ殺人刀、活人剣。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、雲門に問う、「是れ目前の機にあらず、亦た目前の事にも非ざる時は如何」。〔踍跳て什麼をか作す。〕門云く、「倒一説」。〔平出。款は囚人の口より出づ。也た放過すこと不得。荒草の裏に身を横たう。〕

一『雲門広録』上は「問、不是玄機、亦非目撃時如何。師云、倒一説」とし、『荘子』田子方の「目撃而道存矣、亦不可以容声矣（一目見れば道の顕現していることがわかり、ことばをさしはさむ余地はない）」を超えた次元が問われる。 二 一つずつ反転する。 三「平」は「倒」の反。さらりと出てきた。平常のありようだ。 四「款」は款状、ありていの白状。 五 汚濁

の世界の現実に腰をすえたしたたかさ。

〔評唱〕　這僧不妨是箇作家、解恁麼問。頭辺謂之請益。此是呈解問、亦謂之蔵鋒問。若不是雲門、也不奈他何。雲門有這般手脚、他既将問来、不得已而応之。何故。作家宗師、如明鏡臨台、胡来胡現、漢来漢現。古人道、欲得親切、莫将問来問。何故。問在答処、答在問処。従上諸聖、何曾有一法与人。那裏有禅道与你来。你若不造地獄業、自然不招地獄果。你若不造天堂因、自然不受天堂果。一切業縁、皆是自作自受。古人分明向你道、若論此事、不在言句上。若在言句上、三乗十二分教、豈是無言句、更何用祖師西来。

〔評唱〕　這の僧は不妨に是れ箇の作家にして、解く恁麼に問う。頭辺は之を請益と謂う。此れは是れ呈解問、亦た之を蔵鋒問と謂う。若し是れ雲門にあらずんば、也た他を奈何ともせじ。雲門には這般る手脚有り、他既に問を将ち来たれば已むを得ず之に応ず。何故ぞ。作家の宗師は明鏡の台に臨んで、胡来たれば胡を現し、漢来たれば漢を現すが如くなればなり。古人道く、「親切ならんと欲せば、問を将ち来たって問うこと莫れ」と。何故ぞ。「問は答処に在り、答は問処に在」ればなり。従上の諸聖、何ぞ曾て一法の人に与えしもの有らん。那裏にか禅道の你に与え来たるもの有らん。你若し地獄の業を造さずんば、自然と地獄の果を招かず。你若し天堂の因を造さずんば、自然と天堂の果を受けず。一切の業縁は、皆な是れ自作自受なり。古人分明と你に向って道う、「若し此の事を論ぜば、言句

の上に在らず。若し言句の上に在らば、三乗十二分教、豈に是れ言句無からんや、更に何ぞ祖師の西来を用いん」と。

一 第一四則に見える僧のはじめの問い「如何是一代時教」を指す。二 雪峰義存(八二二―九〇八)の語。三 首山省念(九二六―九九三)。語は第一四則・頌の評唱に既出。四 雲門文偃。語は第九則・本則の評唱に既出。

前頭道対一説、這裏却道倒一説。一只争一字、為什麼却有千差万別。且道、聱訛在什麼処。所以道、法随法行、法幢随処建立。不是目前機、亦非目前事時如何。二只消当頭一点。若是具眼漢、一点也謾他不得。問処既聱訛、答処須得恁麼。其実雲門騎賊馬趕賊。有者錯会道、本是主家話、却是賓家道。所以雲門云、倒一説。三有什麼死急。這僧問得好、不是目前機、亦非目前事時如何。雲門何不答

前頭には「対一説」と道い、這裏には却って「倒一説」と道う。只だ一字を争うのみなるに、為什麼にか却って千差万別有る。且く道え、聱訛什麼処にか在る。所以に道う、「法は法に随って行じ、法幢は処に随って建立す」と。「是れ目前の機にあらず、亦た目前の事にも非ざる時は如何」。只だ当頭の一点を消う。若し是具眼の漢ならば、一点也他を謾ることを得ず。問処既に聱訛なれば、答処須得らく恁麼なるべし。其の実、雲門は賊の馬に騎って賊を趕う。有る者は錯り会して道う、「本と是れ主家の話なるに、却って是れ賓家道う。所以に雲門は『倒一説』と云う」と。什麼の死急

他別語言、却只向他道倒一説。雲門一時打破他底、到這裏道倒一説、也是好肉上剜瘡。何故。四言迹之興、白*雲万里、異途之所由生也。設使一時無言無句、五露柱灯籠、何曾有言句。還会麼。若不会、到這裏也須是転動、六始知落処。

か有らん。這の僧問い得て好し。「是れ目前の機にあらず、亦た目前の事にも非ざる時は如何」と。雲門何ぞ他に別の語言をもって答えずして、却って只だ他に向って「倒一説」とのみ道う。雲門一時に他底を打破せんと、這裏に到って「倒一説」と道うも、也た是れ好肉上に瘡を剜る。何故ぞ。言迹の興るや、白雲万里、異途の由って生ずる所なればなり。設使一時に言無く句無きも、露柱灯籠、何ぞ曾て言句有らん。還た会すや。若し会せざれば、這裏に到って也た須是らく転動して、始めて落処を知らん。

＊白雲万里　蜀本に無し。

一 差異がある。二 いきなり相手を指さすだけで済むことだ。「当頭」は、いきなり、即座に。三 何をそうムキになるのか。四 僧肇(三八四―四一四?)の「答劉遺民書」に「言迹之興、異途之所由生也」と。五「露柱」は僧堂か法堂の前庭に立つ柱。夜間の照明のための柱であるらしい。露柱・灯籠・牆壁などは、禅録ではそのものがそのものとしてあるがままに現成していることの例示に用いる。六 座標軸を転換する、立脚点を変える。

【頌】倒一説、一放不下。七花八裂。

【頌】倒一説、放不下。七花八裂。須弥南畔に、巻

須弥南畔、巻尽五千四十八。〕分一節。〔在你辺、在我辺。半河南、半河北。把手共行。〕同死同生為君訣。〔泥裏洗土塊。著甚来由。放你不得。〕八万四千非鳳毛、〔羽毛相似。太煞滅人威光。漆桶如麻如粟。〕三十三人入虎穴。〔唯我能知。一将難求。野狐精一隊。〕別、別。〔有什麼別処。少売弄。一任踔跳。〕擾擾怱怱水裏月。〔青天白日、迷頭認影。著忙作什麼。〕

尽す五千四十八。〕分一節。〔你が辺にも在り、我が辺にも在り。半は河南、半は河北。手を把って共に行かん。〕同死同生君が為に訣す。〔泥裏に土塊を洗う。甚の来由にか著る。你を放し得ざればなり。〕八万四千は鳳毛に非ず、〔羽毛相似たり。太煞だ人の威光を滅ず。漆桶麻の如く粟の如し。〕三十三人虎穴に入る。〔唯だ我のみ能く知る。一将は求め難し。野狐精の一隊。〕別なり、別なり。〔什麼の別の処か有らん。売弄う少れ。一に踔跳るに任す。〕擾擾怱怱たり水裏の月。〔青天白日なるに頭に迷うて影を認む。著忙して什麼をか作す。〕

一 もてあましている。二 唐の『開元釈教録』に見える大蔵経の巻数。三 ひとくぎりのものを分けた。無限定のものを限定してみせた。第八則・頌の著語に既出。四 一方に決められぬ。どちらもどちら。第六則・本則の著語に既出。五 雲門は君と一心同体となって言いきってくれた。六 どういうわけなのか。七 評唱を参照。「八万四千」は、極めて大きな数の形容。八 無知蒙昧の連中はゴマンといる。九 摩訶迦葉より慧能に至る祖師たち。一〇 まあ好きなように跳ねとぶがいい。一一 「擾擾怱怱」は、ゆれ動くさま。「水裏月」は、『金光明経』の「仏真法身、猶若虚空、応物現形、如水中月」による。一二 水に映った頭の影を自分の頭と取り違える。本末顛倒。一三 あわてふためく。

〔評唱〕雪竇亦不妨作家、於一句下、便道分一節。分明放過一著、与他把手共行。他従来有放行手段、敢与你入泥入水、同死同生。所以雪竇恁麼頌。其実無他、只要与你解粘去縛、抽釘抜楔。如今却因言句、転生情解。只如巌頭道、雪峰雖与我同条生、不与我同条死、若非全機透脱、得大自在底人、焉能与你同死同生。何故。為他無許多得失是非滲漏処。故洞山云、若要辨認向上之人真偽者、有三種滲漏。情滲漏・見滲漏・語滲漏。見滲漏、機不離位、堕在毒海。情滲漏、智常向背、見処偏枯。語滲漏、体妙失宗、機昧終始。此三滲漏、宜己知之。又有三玄。体中玄・句中玄・玄中玄。古人到這境界、全機大

〔評唱〕雪竇も亦た不妨の作家にして、一句の下に便ち「分一節」と道う。分明に一著を放過めて、他と手を把って共に行く。他には従来放行の手段有り、敢て你が与に泥に入り水に入って、同死同生す。所以に雪竇は恁麼に頌す。其の実は他無し、只だ你が与に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を抜かんと要するのみ。如今却って言句に因って、転ます情解を生ず。只だ巌頭の、「雪峰は我と同じ条に生ると雖も、我と同じ条に死せず」と道うが如く、若し全機透脱して、大自在を得る底の人に非ずんば、焉ぞ能く你と同死同生せん。何故ぞ。他には許多の得失是非の滲漏の処無きが為なり。故に洞山云く、「若し向上の人の真偽を辨認けんと要せば、三種の滲漏有り。情滲漏・見滲漏・語滲漏なり。見滲漏とは、機、位を離れずして、毒海に堕在つ。情滲漏とは、智、常に向背して、見処偏枯る。語滲漏とは、妙を体するに宗を失し、機、終始に昧し。此の三滲漏、宜しく己より之を知るべし」と。又た三

用。遇生与你同生、遇死与你同死。向虎口裏横身、放得手脚、千里万里、随你銜去。何故。還[一〇]他得這一著子始得。

玄有り。体中玄・句中玄・玄中玄なり。古人這の境界に到って、全機大用す。生に遇いては你と同生し、死に遇いては你と同死す。虎口裏に身を横たえ、手脚を放得して、千里万里、你が銜え去くに随す。何故ぞ。他に這の一著子を還して始めて得し。

一 巌頭全豁（八二八—八八七）。語は第五一則・本則に見える。二 雪峰義存（八二二—九〇八）。三 じわじわ漏れ出るようなもの。妄想、執着。四 洞山良价（八〇七—八六九）。五 機用（はたらき）が自らの依って立つ座標を超え出ていなければ。六『洞山録』では「帯在向背」に作る。相対の世界にとらわれること。七『洞山録』では「究妙失宗」に作る。八『洞山録』では「子」に作り、洞山が曹山に与えた語とする。九 臨済義玄（?—八六六）の用いた指導法。その禅法の核心を三点に収斂させた暗示であろう。臨済の三玄三要。『臨済録』上堂（岩波文庫二八頁）参照。一〇 究極の一手は本人に打たせよ。

八万四千非鳳毛者、霊[一]山八万四千聖衆、非鳳毛也。南史[二]云、宋時謝超宗、陳[三]郡陽夏人、謝鳳之子。博学文才傑俊、朝中無比、当世為之独歩。善為文為[四]王府常侍。王母殷[五]淑儀薨、超宗作誄[六]奏之。武[七]帝見其文、大加嘆

「八万四千は鳳毛に非ず」とは、霊山八万四千の聖衆は鳳毛に非ざるをいうなり。『南史』に云く、「宋の時、謝超宗は、陳郡陽夏の人にして、謝鳳の子なり。博学にして文才傑俊、朝中に比無く、当世之が為に独歩す。善く文を為りて王府の常侍と為る。王母の殷淑儀薨ずるや、超宗誄を作って之を奏す。武帝其の文

賞曰、超宗殊有鳳毛。古詩云、朝罷香煙携満袖、詩成珠玉在揮毫。欲知世掌糸綸美、池上如今有鳳毛。昔日霊山会上、四衆雲集。世尊拈花、唯迦葉独破顔微笑、餘者不知是何宗旨。雪竇所以道、八万四千非鳳毛。三十三人入虎穴、阿難問迦葉云、世尊伝金襴袈裟外、別伝何法。迦葉召阿難。阿難応喏。迦葉云、倒却門前刹竿著。*阿難遂悟。已後祖祖相伝、西天此土三十三人、有入虎穴底手脚。古人道、不入虎穴、争得虎子。

を見て、大いに嘆賞を加えて曰く、『超宗は殊に鳳毛有り』と」と。古詩に云く、「朝し罷りて香煙満袖に携え、詩成って珠玉毫を揮うに在り。世糸綸を掌るの美を知らんと欲せば、池上に如今鳳毛有り」と。昔日霊山会上に四衆雲のごとくに集る。世尊花を拈ずるに、唯だ迦葉のみ独り破顔微笑し、餘の者は是れ何の宗旨なるかを知らず。雪竇所以に道う、「八万四千は鳳毛に非ず」と。「三十三人虎穴に入る」とは、阿難、迦葉に問うて云く、「世尊は金襴の袈裟を伝うる外、別に何の法を伝えしや」と。迦葉、「阿難」と召ぶ。阿難応喏す。迦葉云く、「門前の刹竿を倒却著」と。阿難遂に悟る。已後祖祖相伝して、西天と此土の三十三人、虎穴に入る底の手脚有り。古人道く、「虎穴に入らずんば、争か虎子を得ん」と。

＊阿難遂悟　蜀本に無し。

一 霊鷲山。 二 『南史』一九に謝超宗の伝があるが、文に異同がある。なお謝超宗は、謝霊運（三八五―四三三）の孫。 三 河南省太康県。 四 六朝・宋の孝武帝（四三〇―四六四）の第八子である新安王・

子鸞の側用人となった。五 子鸞の生母。大明六年(四六二)没。六 死者をとむらう文。七 孝武帝のこと。八『南史』によれば、謝荘(四二一—四六六)に言ったことばで、「超宗殊有鳳毛、霊運復出」と。九 杜甫(七一二—七七〇)の七言律詩「和賈至舎人早朝大明宮」の後半。一〇 四種の信徒。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。一一 釈尊。一二 カーシャパ。Mahākāśyapa 摩訶迦葉。十大弟子のひとり。禅宗で西天の第一祖。一三 アーナンダ。Ānanda 阿難。釈尊のいとこで十大弟子のひとり。第二祖。この話は『伝心法要』や『無門関』にも見える。入矢義高『伝心法要・宛陵録』(八九頁)参照。一四 ここは、命令を表す助詞。一五 班超(三二—一〇二)の語。『後漢書』班超伝に「不入虎穴、不得虎子」と。

雲門是這般人、善能同死同生。宗師為人、須至如此。拠曲彔木牀上坐、捨得教你打破、容你捋虎鬚、也須是到這般田地始得。具七事随身、可以同生同死。高者抑之、下者挙之、不足者与之、在孤峰者、救令入荒草、落荒草者、救令処孤峰。你若入鑊湯炉炭、我也入鑊湯炉炭。其実無他、只要与你解粘去縛、抽釘抜楔、脱却籠頭、卸却角駄。平田和尚、有一頌

雲門は是れ這般(かか)る人にして、善(よ)能く同死同生す。宗師は人の為にすること須(すべか)らく此(かく)の如くなるに至るべし。曲彔木牀上(きょくろくもくしょうじょう)に拠りて坐し、捨得(おしみな)く你をして打破せしめ、你が虎鬚(こしゅ)を捋(ひ)くことを容(ゆる)さんには、也た須是らく這般(かか)る田地(きょうち)に到って始めて得(よ)し。七事を具し身に随えてこそ、以て同生同死すべし。高き者は之を抑え、下(ひく)き者は之を挙げ、足らざる者には之に与え、孤峰に在る者は、救いて荒草に入らしめ、荒草に落つる者は、救いて孤峰に処(お)らしむ。你若し鑊湯炉炭(かくとうろたん)に入らば、我も也た鑊湯炉炭に入らん。其の実は他(た)無し、只だ你の

最好。霊[9]光不昧、万古徽猷。入此門来、莫存知解。別、別。擾擾忽忽水裏月。不妨有出[10]身之路、亦有活[11]人之機。雪竇拈了、教人自去明悟生機、莫随他語句。你若[12]随他、正是擾擾忽忽水裏月。如今作麼生得平穏去。放過一著。

与に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を抜き、籠頭を脱却し、角駄を卸却さんと要するのみ。平田和尚に一頌有り、最も好し。「霊光不昧、万古の徽猷。此の門に入り来たらば、知解を存すること莫れ」と。「別なり別なり。擾擾忽忽たり水裏の月」とは、不妨に出身の路有り、亦た活人の機有り。雪竇拈じ了って、人をして自ら去きて生機を明悟し、他の語句に随うこと莫らしむ。你若し他に随わば、正に是れ「擾擾忽忽たる水裏の月」なり。如今作麼生か平穏にし去くを得ん。一著を放過さん。

一 肘かけと背もたれが曲りくねった椅子。説法や法要のときに用いる。二 思い切りよく〜する。〜するを惜しまない。三 僧侶が携えるべき七つ道具を身につける。四『老子』七七に「高者抑之、下者挙之、有餘者損之、不足者補之」と。五 第六則・頌の評唱に既出。六 第一則・頌の評唱に既出。七 第一七則・頌の句。八 平田普岸（七七〇―八四三）。九『伝灯録』九には「神光不昧」に作る。「霊光」も「神光」も霊妙な心のはたらき。「不昧」は、明々白々、歴然として明確、明澄の意。一〇 第八則・本則の評唱に既出。一一 生まれながらのはたらき。一二 どのようにゆるぎないものとできよう。「平穏」は、たしかさ、ゆるぎなさ。

第一六則　鏡清草裏漢

垂示云、道無横径、立者孤危。法非見聞、言思迥絶。若能透過荊棘林、解開仏祖縛、得箇穏密田地、諸天捧花無路、外道潜窺無門。終日行而未嘗行、終日説而未嘗説、便可以自由自在、展啐啄之機、用殺活之剣。直饒恁麼、更須知有建化門中、一手擡、一手搦、猶較些子。若是本分事上、且得没交渉。作麼生是本分事。試挙看。

第一六則　鏡清草裏の漢

垂示に云く、道に横径無ければ、立つ者は孤危なり。法は見聞に非ず、言思迥かに絶つ。若し能く荊棘の林を透過し、仏祖の縛を解開ちて、箇の穏密の田地を得ば、諸天も花を捧ぐるに路無く、外道も潜かに窺うに門無けん。終日行じて未だ嘗て行ぜず、終日説いて未だ嘗て説かずして、便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の剣を用うべし。直饒恁麼なるも、更に須らく建化門中、一手擡、一手搦有ることを知るも、猶お些子く較えり。若是本分事の上ならば、且得没交渉。作麼生か是れ本分事。試みに挙し看ん。

一　横路(岐路)のない大道を行く者は危い。迷い路のない坦々たる一本道を進む者は修行者としての命を失いかねない。夾山善会(八〇五―八八一)の語に「道無横径、立者皆危」(『祖堂集』七)と。二　雲門文偃(八六四―九四九)の語に「平地上死人無数、過得荊棘林是好手」(『雲門広録』中)と。三　仏祖の教義・言説についてのとらわれ。四　堅実で、しかもその痕跡をとどめない境地。安定した確か

な境地。五 天神たちも祝福の天華を降らせようもなく、外道も隙を窺おうにも付け入りようはあるまい。「聖」や「凡」をつきぬけているから。この二句は羅山和尚の語(大慧『正法眼蔵』上)の応用。六 修行しても説法しても、その痕跡をとどめない。七 孵化の時、中の雛が殻をつつき(啐)、外の母鶏が相応じて殻をつつき破る(啄)こと。八 方便による教化。九 一方でもちあげ、一方で抑える。一〇 自己本来の事。自己に賦与された本来的なパワー。自由無礙な指導ぶり。

【本則】挙。僧問鏡清[一]、学人啐、請師啄。〔無風起浪作什麼。你用許多見解作什麼。〕清云、還得活也無。〔[二]劄。[三]買帽相頭。将錯就錯。[四]不可総恁麼。〕僧云、若不活、遭人怪笑[五]。〔相帯累。[六]撐天拄地。担板漢。〕清云、也是草裏漢[七]。〔果然。[八]自領出去。放過即不可。〕

【本則】挙す。僧、鏡清に問う、「学人啐す、請う師啄せよ」。〔風無きに浪を起して什麼か作ん。你許多の見解を用て什麼か作ん。〕清云く、「還た活くるを得る也無」。〔劄。帽を買うに頭を相る。錯を将て錯を就す。総も恁麼なるべからず。〕僧云く、「若し活きずんば、人に怪笑われん」。〔相帯累す。天を撐え地を拄う。担板漢。〕清云く、「也た是れ草裏の漢」。〔果然して。自ら領して出で去れ。放過するは即ち不可。〕

一 鏡清道怤(八六八—九三七)。二 (こんな奴は)グサリと一突きだ。三 帽子を買うのに頭のサイズを計る。相手にふさわしい対応をする。四 いつもこの手は通じない。五 あざ笑う。六 大したいきがりようだ。七 落ちこぼれ野郎。八 自分に縄を打って退廷せよ。

【評唱】鏡清承嗣雪峰[一]、与本仁[二]・玄[三]

【評唱】鏡清は雪峰より承け嗣ぎ、本仁・玄沙・疎

沙・[四]疎山・[五]太原孚輩同時。初見雪峰、得旨。後常以啐啄之機、開示後学、善能応機説法。

山・太原孚の輩と同時なり。初め雪峰に見えて旨を得たり。後に常に啐啄の機を以て、後学に開示し、善く応機説法す。

一 雪峰義存(八二二―九〇八)。 二 白水本仁。洞山良价(八〇七―八六九)の法嗣。 三 玄沙師備(八三五―九〇八)。 四 疎山匡仁(八三七―九〇九)。 五 孚上座。雪峰義存の法嗣。

示衆云、大凡行脚人、須具啐啄同時眼、有啐啄同時用、方称衲僧。如母欲啄而子不得不啐、子欲啐而母不得不啄。有僧便出問、母啄子啐。於和尚分上、成得箇什麼辺事。清云、好箇消息。僧云、子啐母啄。於学人分上、成得箇什麼辺事。清云、露箇[一]面目。所以鏡清門下、有啐啄之機。

一 本来面目。

這僧亦是他門下客、会他家裏事。所以如此問、学人啐、請師啄。此問

衆に示して云く、「大凡そ行脚する人は、須らく啐啄同時の眼を具し、啐啄同時の用有って、方めて衲僧と称すべし。母啄せんと欲すれば子啐せざるを得ず、子啐せんと欲すれば母啄せざるを得ざるが如し」と。僧有り便ち出でて問う、「母啄し子啐す。和尚の分上に於て、箇の什麼辺の事を成し得るや」。清云く、「好箇消息なり」。僧云く、「子啐し母啄す。学人の分上に於て、箇の什麼辺の事を成し得るや」。清云く、「箇の面目を露す」と。所以て鏡清の門下に啐啄の機有り。

這の僧も亦た是れ他の門下の客にして、他の家裏の事を会す。所以に此の如く問う、「学人啐す、請う師

[一]洞下謂之[二]借事明機。那裏如此、子啐而母啄、自然恰好同時。鏡清也好。可謂[三]拳踢相応、心眼相照。便答道、還得活也無。其僧也好。亦知[四]機変、[五]一句下有賓有主、有照有用、有殺有活。僧云、若不活、遭人怪笑。清云、也是草裏漢。一等是[六]入泥入水、鏡清不妨悪脚手。這僧既会恁麼問、為什麼却道、也是草裏漢。所以作家眼目、須是恁麼。[七]如撃石火、似閃電光、[八]搆得搆不得、未免喪身失命。若恁麼便見、鏡清道草裏漢。

「啄せよ」と。此の問、洞下に之を借事明機と謂う。那裏にか此の如く、子啐し母啄すること、自然に恰好同時なるあらん。鏡清も也た好し。拳踢相応じ、心眼相照すと謂うべし。便ち答えて道う、「還た活くるを得る也無」と。其の僧も也た好し。亦た機変を知って、一句の下に賓有り主有り、照有り用有り、殺有り活有り。僧云く、「若し活きずんば、人に怪笑われん」。清云く、「也た是れ草裏の漢」と。一等じく是れ泥に入り水に入るも、鏡清は不妨に悪脚手なり。這の僧既に会して恁麼に問うに、為什麼にか却って道う、「也た是れ草裏の漢」と。所以に作家の眼目は須是らく恁麼なるべし。撃石火の如く、閃電光に似て、搆り得るも搆り得ざるも未だ喪身失命を免れず、と。若し恁麼ならば、便ち鏡清の「草裏の漢」と道えるを見ん。

一　洞山の門下。　二　日常の事柄を通じて仏機を明かす。　三　（拳法の名人のように）拳打と足蹴が瞬時に相応ずる。　四　問答の機微の変通自在なところ。　五　たった一句で、賓主・照用・殺活の妙機を喝破した。　六　老婆心切をいう。　七　保福従展（?—九二八）の上堂の語（『会元』七）に見える。　八　鏡清

の境地に達しなければそれまで、達しても喪身失命を免れない。

所以南院示衆云、諸方只具啐啄同時眼、不具啐啄同時用。有僧出問、如何是啐啄同時用。南院云、作家不啐啄、啐啄同時失。僧云、猶是学人疑処。南院云、作麼生是你疑処。僧云、失。南院便打。其僧不肯、院便趕出。僧後到雲門会裏、挙前話。有一僧云、南院棒折那。其僧豁然有省。且道、意在什麼処。其僧却回見南院、院適已遷化。却見風穴、纔礼拝、穴云、莫是当時問先師啐啄同時底僧麼。僧云、是。穴云、你当時作麼生会。僧云、某甲当初時、如灯影裏行相似。穴云、你会也。且道、是箇什麼道理。這僧都来只道、某甲当初時、如灯影裏行相似、因甚麼風穴便向他道、你

所以に南院、衆に示して云く、「諸方は只だ啐啄同時の眼を具するも、啐啄同時の用を具せず」と。僧有り出でて問う、「如何なるか是れ啐啄同時の用」。南院云く、「作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す」。僧云く、「猶お是れ学人が疑処」。南院云く、「作麼生か是れ你が疑処」。僧云く、「失せり」と。南院便ち打つ。其の僧肯ぜず、院便ち趕い出す。僧後に雲門の会裏に到って前話を挙す。一僧有りて云く、「南院の捧折れたるか」。其の僧豁然として省る有り。且く道え、意什麼処にか在る。其の僧却回りて南院に見えんとするも、院適に已に遷化す。却に風穴に見え、礼拝するや纔や、穴云く、「是れ当時先師に啐啄同時を問いし底の僧ならずや」。僧云く、「是」。穴云く、「你当時作麼生か会す」。僧云く、「某甲当初時は灯影の裏を行くが如くに相似たり」。穴云く、「你会せり」と。且く道え、是れ箇の什麼の道理ぞ。這の僧都来は只だ「某甲当

会也。

初時は灯影の裏を行くが如くに相似たり」と道うのみなるに、甚麼に因ってか風穴便ち他に向って道う、「你会せり」と。

一 南院慧顒(八六〇―九三〇?)。二 風穴延沼(八九六―九七三)。南院の法嗣。三 ちらちらといわくあり気に見える火影。四 すべて、ひっくるめて。

後来翠巌拈云、南院雖然運籌帷幄*、争奈土曠人稀、知音者少。風穴拈云、**南院当時待他開口、劈脊便打、看他作麼生。若見此公案、便見這僧与鏡清相見処。諸人作麼生免得他道草裏漢。所以雪竇愛他道草裏漢、便頌出。

後来に翠巌拈じて云く、「南院は、籌を帷幄に運すと雖然も、争奈せん土曠く人稀にして、知音の者少なし」と。風穴拈じて云く、「南院当時他の口を開くを待って、劈脊に便ち打ち、他の作麼生するかを看んとす」と。若し此の公案が見れば、便ち這の僧と鏡清との相見の処も見らん。諸人作麼生か、他に「草裏の漢」と道わるるを免れ得ん。所以に雪竇は他の「草裏の漢」と道えるを愛でて、便ち頌出す。

＊運籌帷幄　福本はこの下に「決勝千里」と有り。＊＊南院　福本に無し。

一 翠巌(大愚)守芝。汾陽善昭(九四七―一〇二四)の法嗣。二 背中めがけて打ちかかる。三 さあそれでどうなったか。

【頌】古仏有家風、〔言猶在耳。千

【頌】古仏に家風有り、〔言猶お耳に在り。千古の榜

古榜様。莫謗釈迦老子好。〕[一]対揚遭貶剝。〔鼻孔為什麼却在山僧手裏。[二]八棒対十三。你作麼生。放過一著。便打。〕子母不相知、〔既不相知、為什麼却有啐啄。天然。〕是誰同啐啄。[三]〔百雑砕。老婆心切。且莫錯認。〕啄、覚、〔道什麼。落在第[四]二頭。〕猶在殻、〔何不出頭来。〕重遭撲。〔錯。便打。両重公案、三重四重了也。〕天下衲僧徒名邈。[五]〔放過了也。不須挙起。還有名邈得底麼。若名邈得、也是草裏漢。[六]千古万古黒漫漫、[七]塡溝塞壑無人会。〕

様。釈迦老子を謗ること莫くんば好し。〕対揚するや貶剝に遭う。〔鼻孔は為什麼にか却って山僧の手の裏に在る。八棒もて十三に対す。你作麼生。一著を放過す。便ち打つ。〕子と母と相知らず、〔既に相知らざれば、為什麼にか却って啐啄有る。天然。〕是れ誰か同じく啐啄す。〔百雑砕。老婆心切。且く錯認うこと莫れ。〕啄されて、覚くも、〔什麼と道うぞ。第二頭に落在す。〕猶お殻に在り、〔何ぞ出頭し来たらざる。〕重ねて撲に遭う。〔錯てり。便ち打つ。両重の公案、三重四重し了れり。〕天下の衲僧徒に名邈す。〔放過し了れり。挙起するを須いず。還た名邈し得る底有りや。若し名邈し得るも也た是れ草裏の漢。千古万古に黒漫漫、溝に塡ち壑を塞ぐも人の会する無し。〕

一「対揚」は、相手に向って話しかける。「貶剝」は、やっつける。二 十三棒打つべきところを八棒ですませることか。十三が最少の棒たたき（『宋史』刑法志一）。三 こなごなだ。四 鏡清に「也是草裏漢」と言われたこと。五 物や人に名称を付け、形象化すること。名を付け形を与えること。第一則・頌の評唱に既出。六 昔からずっと闇の中。悟る者無し。七 谷間を埋めつくすほどに死人ばか

りは無数だが。（戦争や飢饉の後の累々たる死体のイメージ。）

【評唱】古仏有家風、雪竇一句頌了也。凡是出頭来、直是近傍不得。若近傍著、則万里崖州。纔出頭来、便是落草。直饒七縦八横、不消一捏。雪竇道、古仏有家風。不是如今恁麼也、釈迦老子、初生下来、一手指天、一手指地、目顧四方云、天上天下、唯我独尊。雲門道、我当時若見、一棒打殺、与狗子喫却、貴要天下太平。如此方酬得恰好。所以啐啄之機、皆是古仏家風。若達此道者、便可一拳拳倒黄鶴楼、一踢踢翻鸚鵡洲。如大火聚、近之則燎却面門。如太阿剣、擬之則喪身失命。此箇唯是透脱得大解脱者、方能如此。苟或迷源滞句、

【評唱】「古仏に家風有り」と、雪竇一句に頌し了れり。凡是そ出頭し来たるも、直是に近傍き得ず。若し近傍著けば、則ち万里崖州。出頭し来たるや纔や、便ち是れ落草。直饒七縦八横なるも、一捏すら消いず。雪竇道く、「古仏に家風有り」と。是れ如今恁麼なるのみにあらず、釈迦老子、初め生下来たりて、一手は天を指し、一手は地を指して、四方を目顧して云く、「天上天下、唯我独尊」と。雲門道く、「我当時若し見ば、一棒に打殺し、狗子に与えて喫却しめ、貴に天下の太平を要めん」と。此の如くにして方めて酬し得ること恰好なり。所以に啐啄の機は皆な是れ古仏の家風なり。若し此の道に達せば、便ち一拳に黄鶴楼を拳倒し、一踢に鸚鵡洲を踢翻すべし。大火聚の如く、之に近づけば則ち面門を燎却す。太阿の剣の如く、之を擬すれば則ち喪身失命す。此箇は唯だ是れ透脱して、

決定搆這般説話不得。対揚遭貶剝、則是一賓一主、一問一答、於問答処、便有貶剝。謂之対揚遭貶剝。雪竇深知此事、所以只向両句下頌了。

大解脱を得る者にして方めて能く此の如し。苟或源に迷い句に滞らば、決定や這般る説話に搆り得ず。「対揚するも貶剝に遭う」とは、則ち是れ一賓一主、一問一答、問答の処に於て、便ち貶剝有り。之を「対揚するや貶剝に遭う」と謂う。雪竇深く此の事を知る、所以に只だ両句の下に向いて頌し了る。

＊黄鶴楼　福本は「須弥山」。　＊＊鸚鵡洲　福本は「大海水」。
一 はるか彼方に遠ざかる。「崖州」は海南島の北部、僻遠の地。二 縦横自在。三 一ひねりするまでもない。四 もっぱら。五 ぴったりの応答ぶりだ。六 「黄鶴楼」は湖北省武昌県の南西に在った名所で、揚子江に臨むたかどのの名。「鸚鵡洲」はそれに直面して在った中洲で、対をなす景勝。

末後只是落草、為你注破。子母不相知、是誰同啐啄。母雖啄、不能致子之啐。子雖啐、不能致母之啄。各不相知、当啐啄之時、是誰同啐啄。若恁麼会、也出雪竇末後句不得在。何故。不見香厳道、子啐母啄、子覚無殼。子母倶忘、応縁不錯。同道唱

末後は只だ是れ落草して、你が為に注破す。「子と母と相知らず、是れ誰か同じく啐啄す」と。母啄すと雖も、子の啐を致す能わず。子啐すと雖も、母の啄を致す能わず。各相知らず、啐啄の時に当って、是れ誰か同じく啐啄する。若し恁麼に会するも、也た雪竇の末後の句を出で得ざる在。何故ぞ。見ずや、香厳道く、「子啐し母啄す、子覚して殼無し。子と母と倶に

和、妙云独脚。

応ず、縁に応じて錯らず。同道に唱和し、妙云独脚なり」と。

一 香厳智閑(?―八九八)の頌十九首(『伝灯録』二九)の一首。 ニ 玉峰刊本では「妙玄独脚」。

雪竇不妨落草、打葛藤道、啄。此一字頌鏡清答道、還得活也無。覚、頌這僧道、若不活遭人怪笑。為什麼雪竇却便道、猶在殼。雪竇向石火光中別緇素、閃電機裏辨端倪。

雪竇不妨に落草し、葛藤を打して道く、「啄」と。此の一字、鏡清の答えて「還た活くるを得る也無」と道うを頌す。「覚」とは、這の僧の「若し活きずんば、人に怪笑われん」と道うを頌す。(しかるに)為什麼にか雪竇却って便ち道う、「猶お殻に在り」と。雪竇は石火光中に緇素を別ち、閃電機裏に端倪を辨ず。

一 方便の場に降り立つ。

鏡清道、也是草裏漢。雪竇道、重遭撲。者難処些子是。鏡清道、也是草裏漢。喚作鏡清換人眼睛得麼。這句莫是猶在殼麼。且得没交渉。那裏如此。若会得、繞天下行脚、報恩有分。山僧恁麼説話、也是草裏漢。

鏡清道く、「也た是れ草裏の漢」と。雪竇道く、「重ねて撲に遭う」と。者の難処は些子か是なり。鏡清道く、「也た是れ草裏の漢」と。喚んで鏡清は人の眼睛を換うと作すこと得きや。這の句是れ猶お殻に在るに莫ずや。且得没交渉。那裏ぞ此の如くならん。若し会得せば、天下を繞って行脚し、恩に報ゆるに分有らん。山僧の恁麼に説話するは、也た是れ草裏の漢なり。

一 この句未詳。「者」を「この」の意に用いる例は本書の評唱にはないから、上文に続けて「〜とは」と読んでも、やはり文意不明。 二 目の付けどころを百八十度転換させる。 三 仏恩に報いるだけの力量がある。

天下衲僧徒名邈、誰不是名邈者。到這裏、雪竇自名邈不出、却更累他天下衲僧。且道、鏡清作麼生是為這僧処。天下衲僧跳*不出。

「天下の衲僧徒に名邈す」と、誰か是れ名邈せざる者ぞ。這裏に到って、雪竇自ら名邈し出さず、却って更に他の天下の衲僧を累す。且く道え、鏡清作麼生か是れ這の僧の為にする処なる。天下の衲僧跳け出せず。

*跳不出　福本は「徒名邈」。

第一七則　香林西来意

垂示云、斬釘截鉄、始可為本分宗師。避箭隈刀、焉能為通方作者。針箚不入処則且置、白浪滔天時如何。試挙看。

【本則】　挙。僧問香林、如何是祖師西来意。〔大有人疑著。猶有這箇消息在。〕林云、坐久成労。〔魚行水濁、鳥飛落毛。合取狗口好。作家眼目。鋸解称鎚。〕

第一七則　香林の西来意

垂示に云く、釘を斬り鉄を截って、始めて本分の宗師たるべし。箭を避け刀を隈るれば、焉んぞ能く通方の作者たらん。針箚不入の処は則ち且く置く、白浪滔天の時如何。試みに挙し看ん。

【本則】　挙す。僧、香林に問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。〔大いに人の疑著する有り。猶お這箇の消息の在る有り。〕林云く、「坐久成労」。〔魚行げば水濁り、鳥飛べば毛落つ。狗の口を合取せば好し。作家の眼目。称鎚を鋸解す。〕

一　事に当ってたじろぎ退くこと。「隈」は「畏」に通ずる。　二　針をさしこむ余地も無いところ。価値判断を撥無した絶対の場。　三　大きな浪が天をうつとき。全力量を活溌溌に発揮するとき。

一　香林澄遠(九〇八―九八七)。　二　達磨がインドから来た意図。第一則を参照。　三　何かがありそうだと思う。　四　まだ「聖」なるものへの意識が残存しているぞ。　五　(君は達磨が西から来るのを待って)長く坐っていてくたびれたな。　六　むやみに吠えたてるその口をふさぐがよい。「取」は接尾語で、

動作を意図的かつ積極的に行う気分を示す。七「称鎚」は、衡の分銅。「解」は、鋸で挽く。超人的な手練のわざの喩え。

〔評唱〕香林道、坐久成労。還会麼。若会得、百草頭上、罷却干戈。若也不会、伏聴処分。古人行脚、結交択友、為同行道伴、撥草瞻風。是時雲門旺化広南。香林得得出蜀。与鵝湖・鏡清同時。先参湖南報慈、後方至雲門会下、作侍者十八年。在雲門処、親得親聞。他悟時雖晩、不妨是大根器。居雲門左右十八年、雲門常只喚遠侍者。纔応喏、門云、是什麼。香林当時、也下語呈見解、弄精魂、終不相契。一日忽云、我会也。門云、何不向上道将来。又住三年、雲門室中垂大機辯、多半為他遠侍者随処入作。雲門凡有一言一句、都収在遠侍

〔評唱〕香林道く、「坐久成労」と。還た会すや。若し会得せば、百草頭上に干戈を罷却ん。若也会せずんば、伏して処分に聴え。古人の行脚、交を結び友を択んで、同行道伴と為り、撥草瞻風す。是の時、雲門化を広南に旺にす。香林得得と蜀を出づ。鵝湖・鏡清と同時なり。先に湖南の報慈に参じ、後方めて雲門の会下に至って、侍者と作ること十八年。雲門の処に在って、親しく得、親しく聞く。他悟る時晩しと雖も、不妨に是れ大根器なり。雲門の左右に居ること十八年、雲門常に只だ「遠侍者」と喚ぶ。応喏するや纔や、門云く、「是れ什麼ぞ」と。香林は当時、也た下語して見解を呈し、精魂を弄するも終に相契わず。一日忽ち云く、「我会せり」。門云く、「何ぞ向上にて道い将ち来たらざる」と。又た住すること三年、雲門は室中に大機辯を垂るるも、多半は他の遠侍者に随処に入作せ

者処。

らる。雲門に凡そ一言一句有れば、都て遠侍者の処に収在る。

一「百草頭」は、もろもろの草の葉先のすべて。「干戈」とは、祖師の意についての議論をいう。「百草頭上祖師意」(『龐居士語録』参照)を逆にひねった言い方。二 草をはらい、風向きを見る。修行の旅に出て、名師を訪うこと。三 雲門文偃(八六四—九四九)。四 鵝湖智孚。五 鏡清道怤(八六八—九三七)。六 報慈蔵嶼。龍牙居遁(八三五—九二三)の法嗣。七 考えを述べる、コメントする。八 物の怪に憑かれたように振舞う。九 師の室内。親しく法を承けるところ。一〇 悟境へ導く巧みな弁舌。一一 とり込んで、自己のものとしてはたらかせる、おのれの力量にする。

香林後帰蜀。初住導江水晶宮、後住青城香林。智門祚和尚、本浙人。盛聞香林道化、特来入蜀参礼。祚乃雪竇師也。雲門雖接人無数、当代道行者、只香林一派最盛。帰川住院四十年、八十歳方遷化。嘗云、我四十年、方打成一片。

香林、後に蜀に帰る。初め導江の水晶宮に住し、後に青城の香林に住す。智門の祚和尚は本と浙の人なり。盛んに香林の道化するを聞いて、特に来たりて蜀に入り、参礼す。祚は乃ち雪竇の師なり。雲門は人を接すること無数なりと雖も、当代に道行わるる者、只だ香林の一派最も盛んなり。川に帰って住院すること四十年、八十歳にして方に遷化す。嘗て云く、「我四十年にして方めて打成一片なり」と。

一 導江県(四川省)の迎祥寺天王院。二 青城山(四川省成都府灌県)の香林院。三 智門光祚。四 教化し導く。五 挨拶する。六 四川省のこと。七 寺の住職となる。

凡示衆云、大凡行脚、(一)参尋知識、(二)要帯眼行。須分緇素、看浅深始得。先須立志。而釈迦老子、(三)在因地時、発一言一念、皆是立志。後来僧問、如何是室内一盞灯。林云、(四)三人証亀成鼈。又問、如何是(五)衲衣下事。林云、(六)臘月火焼山。

凡そ衆に示して云く、「大凡そ行脚して、知識を参尋せんには、眼を帯びて行かんことを要す。須らく緇素を分ち、浅深を看て始めて得し。先ず須らく志を立つべし。釈迦老子、因地に在りし時、一言一念を発するに、皆な是れ志を立つ」と。後来に僧問う、「如何なるか是れ室内一盞の灯」。林云く、「三人亀を証して鼈と成す」。又た問う、「如何なるか是れ衲衣下の事」。林云く、「臘月に火もて山を焼く」と。

一 善知識を尋ねて教えをうける。二 しかと眼力をつけて。三 修行中の時。四 口がそろうとウソが本当になる。ほんものは自ら見て取れ。五 僧衣の下の事。僧として本来あるべき生き方。六 年の終りの山の丸焼き。生涯の総決算(ができる覚悟)。

古来答祖師意甚多、唯香林(一)此一則、坐断天下人舌頭。無你計較作道理処。僧問、如何是祖師西来意。林云、坐久成労。可謂言無味、句無味。(二)無味之談、塞断人口。無你出気処。要見便見。若不見、切忌作解会。香林曾

古来「祖師意」に答うるもの甚だ多きも、唯だ香林の此の一則、天下の人の舌頭を坐断す。你が計較して道理を作す処無し。僧問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。林云く、「坐久成労」と。言無味、句無味と謂うべし。無味の談、人の口を塞断ぐ。你が気を出だす処無し。見めんと要せば便ち見かなり。若し見かなら

遇作家来。所以有雲門手段、有三句[三]体調。人多錯会道、祖師西来、九年面壁、豈不是坐久成労。有什麼巴鼻。不見他古人得大自在処。他是脚踏実地、無許多仏法知見道理[四]、臨時応用。所謂法随法行[五]、法幢随処建立。雪竇因[六]風吹火、傍[*七]指出一箇半箇。

ざるも、切に忌む解会を作すことを。香林曾て作家に遇い来たる。所以に雲門の手段有って、三句の体調有り。人多く錯り会して道う、「祖師西来して、九年面壁す、豈に是れ『坐久成労』にあらずや」と。什麼の巴鼻か有らん。見ずや、他の古人の大自在を得る処を。他は是れ脚実地を踏み、許多しき仏法の知見道理無く、時に臨んで応用す。所謂「法は法に随って行じ、法幢は処に随って建立す」なり。雪竇は風に因って火を吹いて、傍に一箇半箇を指出す。

＊傍指出一箇半箇　福本は「傍瞥指出」(チラリと横目使いで(次の頌を)呈示する)。
一 あれこれと「道理」だてをする。後出の「作解会」と同義。 二 思量分別を超えたことばはそれについてのいかなる発言をも拒否する。第五八則・頌の句。「無味」は『老子』三五の「道之出口、淡乎其無味」による。 三 「三句」は雲門三句(第六則・本則の評唱参照)。「体調」は表現のスタイル。 四 観念上の分別や理屈づけ。 五 第一五則・本則の評唱に既出。 六 幸便に乗ずること。 七 文脈が通じ難い。テクストに乱れがあるか。

【頌】 一箇両箇千万箇、〔何不依而行之。如[一]麻似粟、成群作隊作什麼。〕

【頌】 一箇両箇千万箇、〔何ぞ依って之を行わざる。麻の如く粟の似く、群を成し隊を作して什麼か作せ

脱却籠頭卸角駄。〔従今日去、応須灑灑落落。還休得也未。〕左転右転随後来、〔猶自放不下。〕影影響響、便打。〕紫胡要打劉鉄磨。〔山僧拗折拄杖子、更不行此令。賊過後張弓。便打。嶮。〕

ん。〕籠頭を脱却し角駄を卸す。〔今日より去、応須らく灑灑落落たるべし。還た休得む也未。〕左転右転するも随後に来たり、〔猶自放不下。影影響響、便ち打たん。〕紫胡は劉鉄磨を打たんと要す。〔山僧は拄杖子を拗折り、更して此の令を行わず。賊過ぎし後に弓を張る。便ち打つ。嶮うし。〕

一 むやみに多いさま。二 おもがい、くつばみ。三 なにものにもとらわれない、さっぱりしたさま。第一則・本則の評唱に既出。四 これで十分として話のけりをつける。五 後出の劉鉄磨の話による。左へ行っても右へ行っても、ぴたりと付いて来る。また、ことばにひきずられてうろうろする、とも解せる。六 受け身の姿勢のままでいること。七「紫胡」は紫胡利蹤（八〇〇―八八〇）。子湖とも。「劉鉄磨」は潙山・仰山に参じた尼僧。「鉄磨」は鉄臼のようなしたたかな風格に対するあだ名。ただし、この一句は本則とどう関わるのか不明。

〔評唱〕雪竇直下如撃石火、似閃電光、拶出放教你見。聊聞挙著便会始得。也不妨是他屋裏児孫、方能恁麼道。若能直下便恁麼会去、不妨奇特。一箇両箇千万箇、脱却籠頭卸角駄。

〔評唱〕雪竇は直下と撃石火の如く、閃電光の似く、拶出して你に見るままにせしむ。聊か挙著するを聞くや、便ち会して始めて得し。也た不妨に是れ他の屋裏の児孫にして、方めて能く恁麼に道う。若し能く直下に便ち恁麼に会し去らば、不妨に奇特たり。「一箇両

灑灑落落、不被生死所染、不被聖凡情解所縛。上無攀仰、下絶己躬。一如他香林・雪竇相似、何止只是千万箇。直得尽大地人、悉皆如此、前仏後仏、也悉皆如此。

箇千万箇、籠頭を脱却し角駄を卸す」と。灑灑落落として、生死に染せられず、聖凡の情解に縛せられず。上攀仰ぐもの無く、下己躬を絶す。一に他の香林・雪竇の如くに相似たらば、何ぞ止だ千万箇なる只是ならん。直得は尽大地の人、悉く皆な此の如く、前仏後仏も、也た悉く皆な此の如くならん。

一 (相手のしたがるままに)させる。「放令」とも。 二 するやいなや。(これは、めずらしい用法。) 三 提示する、提起する。ここは頌をさす。 四 生死の観念にとらわれない。 五 「聖」か「凡」かの分別。 六 上に仏無く、下に己れ無し。

苟或於言句中作解会、便似紫胡要打劉鉄磨相似。其実纔挙、和声便打。紫胡参南泉、与趙州・岑大虫同参。

時劉鉄磨在潙山下卓庵。諸方皆不奈何他。一日紫胡得得去訪云、莫便是劉鉄磨否。磨云、不敢。胡云、左転、右転。磨云、和尚莫顛倒。胡和声便打。香林答這僧問、如何是祖師

苟或言句の中に於て解会を作さば、便ち紫胡の劉鉄磨を打たんと要するが似くに相似たり。其の実、挙するや纔や、声和に便ち打つ。紫胡は南泉に参じ、趙州・岑大虫と同参なり。

時に劉鉄磨は潙山の下に庵を卓つ。諸方皆な他を奈何ともせず。一日紫胡得得と去き訪ねて云く、「便ち是れ劉鉄磨ならずや」。磨云く、「不敢」。胡云く、「左転するか右転するか」。磨云く、「和尚顛倒すること莫

西来意、却云、坐久成労。若恁麼会得、左転右転随後来也。且道、雪竇如此頌出、意作麼生。*無事好。試請挙看。

れ」と。胡、声和に便ち打つ。香林は這の僧の「如何なるか是れ祖師西来意」と問うに答えて、却って云う、「坐久成労」と。若し恁麼に会得せば、「左転右転するも随後に来たる」なり。且く道え、雪竇此の如く頌出する意作麼生。無事にして好し。試みに請う挙し看よ。

*無事好試請挙看　『種電鈔』は錯簡として削る。

一　南泉普願(七四八―八三四)。　二　趙州従諗(七七八―八九七)。　三　長沙景岑。「大虫」は虎の意のあだ名。　四　どういたしまして。ここは、自信を含んだ謙遜の語。

第一八則　粛宗請塔様

【本則】挙。粛宗皇帝〈本是代宗、此誤。〉問忠国師、百年後所須何物。〔預搔待痒。果然起模画様。老老大大、作這去就。不可指東作西。〕国師云、与老僧作箇無縫塔。〔把不住。〕帝曰、請師塔様。〔好与一劄。〕国師良久云、会麼。〔停囚長智、直得指東劃西、将南作北。直得口似扁担。〕帝云、不会。〔頼値不会。当時更与一拶、教伊満口含霜、却較些子。〕国師云、吾有付法弟子耽源、却諳此事。請詔問之。〔頼値不撥倒禅床。何不与佗本分草料。莫搽胡人好。放過一著。〕国師遷化後、〔可惜。

第一八則　粛宗、塔様を請う

【本則】挙す。粛宗皇帝〈本と是れ代宗、此れは誤り。〉忠国師に問う、「百年の後、須むる所は何物ぞ」。〔預め搔いて痒を待つ。果然して模を起し様を画く。老老大大にして這の去就を作す。東を指して西と作すべからず。〕国師云く、「老僧の与に箇の無縫塔を作れ」。〔把不住。〕帝曰く、「師の塔様を請う」。〔好し一劄を与えん。〕国師良久して云く、「会すや」。〔囚に停まって智を長じ、直得に東を指して西を劃し、南を将って北と作す。直得は口扁担の似し。〕帝云く「会せず」。〔頼に会せざるに値う。当時更に一拶を与えて伊をして満口に霜を含ましめば、却って些子く較えり〕。国師云く、「吾に付法の弟子の耽源なるものあり、却って此の事を諳る。請う詔して之に問え」。〔頼に禅床を撅倒されざるに値う。何ぞ佗に本分の草料を与えざ

果然錯認定盤星。〕帝詔耽源問、此意如何。〔[二六]子承父業去。也落在第[二七]二頭第三頭。〕源云、[二八]湘之南、潭之北。〔也是把不住。[二九]両両三三、作什麼。[三〇]半開半合。〕雪竇著語云、[三一]独掌不浪鳴。〔[三二]一盲引衆盲。果然随語生解。随邪逐悪、作什麼。〕[三三]中有黄金充一国。〔上是天、下是地、無這箇消息。是誰分上事。〕雪竇著語云、[三四]山形拄杖子。〔拗折了也。也是起模画様。〕[三五]無影樹下合同船。〔祖師喪了也。闍黎道什麼。〕雪竇著語云、海晏河清。〔洪波浩渺、白浪滔天、猶較些子。〕[三六]瑠璃殿上無知識。〔咄。〕雪竇著語云、[三七]拈了也。〔賊過後張弓。言猶在耳。〕

る。人を搽胡すこと莫くんば好し。一著を放過す。〕国師遷化の後、〔惜しむべし。果然して定盤星を錯り認む。〕帝、耽源を詔して、「此意如何」と問う。〔子は父の業を承け去る。也た第二頭第三頭に落在す。〕源云く、「湘の南、潭の北」。〔也た是れ把不住。両両三三と什麼をか作す。半開半合。〕雪竇著語して云く、『独掌浪りに鳴らず』。〔一盲、衆盲を引く。果然して語に随せて解を生す。邪に随い悪を逐って什麼か作ん。〕「中に黄金有って一国に充つ」。〔上は是れ天より下は是れ地まで這箇の消息無し。是れ誰が分上の事ぞ。〕雪竇著語して云く、『山形の拄杖子』。〔拗折了也。也た是れ模を起し様を画く。〕「無影樹下の合同船」。〔祖師喪し了れり。闍黎什麼と道うぞ。〕雪竇著語して云く、『海は晏やか河は清む』。〔洪波浩渺、白浪滔天なるも、猶お些子く較えり。〕「瑠璃殿上に知識無し」。〔咄。〕雪竇著語して云く、『拈じ了れり』。〔賊過ぎし後に弓を張る。言猶お耳に在り。〕

一 唐の第七代皇帝。二 粛宗の長子、第八代皇帝。三 南陽慧忠(?―七七五)。四 死後をいう。五 無用なお先走り。六 おきまりのものまね。七 いいお年の方が、ばかげた質問をするものだ。八 すじをはぐらかす。九 継ぎ目の無い石塔。一〇 しばらく無言のままでいること。第四則の垂示に既出。一一 長く獄舎にいる間にずる賢くなる。一二 いいかげんにその場をごまかす。一三 口を「へ」の字に結んだまま何も言えない。「匾担」は天秤棒で、物をかつげば「へ」の字にたわむ。一四 仏法をゆだねた。一五 「本分」はその人の本質、本領。「草料」は、かいば。粛宗皇帝に本来ふさわしい対応をする。一六 帝の愚直さは親譲りだ。一七 後手後手に回った。一八 「湘・潭」は湘州・潭州(いずれも湖南省の茫々たる水郷地帯)。中原とは異質の伝説に富む。位置づけようもない所。一九 何人出てきて教えても無駄だ。二〇 ちらりとほのめかしている。二一 片手の手のひらだけでは、おいそれとは音を立てぬ。二二 一人の迷いが多くの人を迷わす。二三 異次元の極楽世界のイメージ。二四 握りが山の形をした杖。おれはこの杖で十分、黄金の国など用はない。二五 不詳。あとの「評唱」でも自らの解説を巧みに避けている。二六 その極楽世界の瑠璃の御殿には、だれ一人そなたの知り合いはおるまい。二七 話題としてはもう済んだ。これでおしまい。

【評唱】粛宗・代宗、皆玄宗之子孫。一 為太子時、常愛参禅。為国有巨盗、二 玄宗遂幸蜀。唐本都長安。為安禄山僭*拠、後都洛陽、粛宗摂政。

【評唱】粛宗・代宗は、皆な玄宗の子孫なり。太子為りし時、常に参禅を愛す。国に巨盗有るが為に、玄宗遂に蜀に幸す。唐は本と長安に都す。安禄山の為に僭拠せられて、後に洛陽に都し、粛宗摂政す。

＊僭拠　蜀本は「所逐」。

一 唐の第六代皇帝。二 安史の乱を指す。

是時忠国師、在[一]鄧州白崖山住庵。[二]今香厳道場是也。四十餘年不下山、[三]道行聞于帝里。上元二年、勅[四]中使詔入内。待以師礼、甚敬重之。嘗与帝演[五]無上道。師退朝、帝自[六]攀車而送之。朝臣皆有慍色、欲奏其不便。国師具[七]他心通。而先見聖奏曰、我在[八]天帝釈前、見[九]粟散天子、如閃電光相似。帝愈加敬重。

一 河南省鄧県。 二 香厳智閑(?—八九八)。 三 仏道の修行ぶり。 四 天子直派の使者。 五 最上の教え、仏道のこと。 六 別れを惜しむさま。 七 他人の心を測知する神通力。六神通の一。 八 帝釈天。 九 小国小主の喩え。ここは暗に粛宗を指す。

是の時忠国師、鄧州の白崖山に住庵す。今の香厳の道場是れなり。四十餘年山を下りず、道行、帝里に聞こゆ。上元二年(七六一)、中使に勅して詔して入内せしむ。待するに師の礼を以てし、甚だ之を敬重す。嘗て帝の与に無上道を演ぶ。師、朝より退くに、帝自ら車に攀りて之を送る。朝臣皆な慍む色有り、其の不便あるを奏せんと欲す。国師は他心通を具す。而して先ず聖に見えて奏して曰く、「我天帝釈の前に在って、粟散天子を見るに、閃電光の如くに相似たり」と。帝いよいよ敬重を加う。

及代宗臨御、復延止[一]光宅寺。十有六載、随機説法。至大暦十年遷化。

一 長安の光宅坊に建立された。

代宗の臨御に及んで、復た延いて光宅寺に止めしむ。十有六載、機に随って説法す。大暦十年(七七五)に至って遷化す。

山南府青銼山和尚[一]、昔与国師同行。国師嘗奏帝令詔他。三詔不起。常罵国師、耽名愛利、恋著人間。

山南府の青銼山和尚は、昔国師と同行たり。国師嘗て帝に奏して他を詔さしめんとす。三たび詔せども起たず。常に国師を「名に耽り利を愛し、人間に恋著す」と罵る。

一 湖北省襄陽県。　二 六祖の法嗣。

国師於他父子三朝[一]中為国師。他家父子、一時参禅。拠伝灯録[二]所考、此乃是代宗設問。若是問国師如何是十身[三]調御、此却是粛宗問也。

国師は他の父子三朝の中に国師と為る。他家の父子、一時に参禅す。『伝灯録』に考する所に拠れば、此れは乃ち是れ代宗の設けたる問なり。国師に「如何なるか是れ十身調御」と問うが若是きは、此れ却は是れ粛宗の問なり。

一 粛宗・代宗の二朝の誤り。　二 『伝灯録』五・光宅慧忠章に「師以化縁将畢、涅槃時至、乃辞代宗。代宗曰、師滅度後、弟子将何所記……」と。　三 十身をそなえて衆生をみちびく仏。第九九則を参照。

国師縁終、将入涅槃、乃辞代宗。代宗問曰、国師百年後、所須何物。也只是平常一箇問端。這老漢無風起浪、却道、与老僧造箇無縫塔。且[一]道、白日青天、如此作什麼。做箇塔便了。

国師縁終って、将に涅槃に入らんとし、乃ち代宗に辞す。代宗問うて曰く、「国師百年の後、須むる所は何物ぞ」と。也た只だ是れ平常たる一箇の問端なり。這の老漢風無きに浪を起して却って道う、「老僧が与に箇の無縫塔を造れ」と。且く道え、白日青天なるに、

為什麽却道、做箇無縫塔。代宗也不妨作家。与你一拶道、請師塔様。国師良久云、会麽。奇怪這些子、最是難参。大小大国師、被佗一拶、直得口似匾担。然雖如此、若不是這老漢、幾乎弄倒了。多少人道、国師不言処、便是塔様。若恁麽会、達磨一宗掃地而尽。若謂良久便是、唖子也合会禅。

此の如くにして什麽をか作さん。箇の塔を倣らば便ち了らん。為什麽にか却って道う、「箇の無縫塔を倣れ」と。代宗也た不妨の作家なり。你に一拶を与えて道う、「師の塔様を請う」と。国師良久して云く、「会すや」と。奇怪なり這の些子、最も是れ参じ難し。大小大の国師も、佗に一拶されて、直得に口匾担の似し。然雖も、若し是れ這の老漢にあらずんば、幾乎ど弄倒され了らん。多少の人道う、「国師の言わざる処、便ち是れ塔様」と。若し恁麽に会せば、達磨の一宗は地を掃って尽きん。若し「良久便ち是なり」と謂わば、唖子も也た禅を会す合し。

一 普通の塔を建立してもらえばそれでこと足りるのに。　二 微妙なポイント。　三 国師ともあろう人が。

豈不見、外道問仏、不問有言、不問無言。世尊良久。外道礼拝、賛嘆曰、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入。及外道去後、阿難問仏、外道

豈に見ずや、「外道、仏に問う、『有言を問わず、無言を問わず』と。世尊良久す。外道礼拝し、賛嘆して曰く、『世尊大慈大悲なり、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ』と。外道去るに及んで後に阿難、仏

有何所証而言得入。世尊云、如世良馬見鞭影而行。人多向良久処会、有什麼巴鼻。

[一]五祖先師拈云、前面是珍珠瑪瑙、後面是瑪瑙珍珠。東辺是観音勢至、西辺是文殊普賢。中間有箇旛子、被風吹著、道胡盧胡盧。国師云、会麼。帝曰、不会。却較些子。且道、這箇不会、与武[二]帝不識。是同是別。雖然似則似、是則未是。

国師云、吾有付法弟子耽源、却諳此事。請詔問之。雪竇拈云、独掌不浪鳴。代宗不会則且置、耽源還会麼。

に問う、『外道何の所証有ってか、得入と言う』。世尊云く、『世の良馬の鞭影を見て行くが如し』とあるを。人多く良久の処に向いて会す、什麼の巴鼻か有らん。

五祖先師拈じて云く、「前面は是れ珍珠瑪瑙、後面は是れ瑪瑙珍珠。東辺は是れ観音勢至、西辺は是れ文殊普賢。中間に箇の旛子有って、風に吹著れて、胡盧胡盧と道る」と。国師云く、「会すや」。帝曰く、「会せず」と。却って些子く較えり。且く道え、這箇の「会せず」と武帝の「識らず」と、是れ同じか是れ別か。似たることは則ち似たりと雖然も、是なることは則ち未だ是ならず。

国師云く、「吾に付法の弟子の耽源なるもの有り、却って此の事を諳る。請う詔して之に問え」と。雪竇拈じて云く、「独掌浪りに鳴らず。代宗の会せざるこ

一　「外道」はブッダ時代の異教の修行者。以下、第六五則・本則に見える。

一　圜悟の師、五祖法演(?―一一〇四)。　二　第一則を参照。

只消道箇請師塔様、尽大地人不奈何。五祖先師拈云、你是一国之師、為箇什麼不道、却推与弟子。国師遷化後、帝詔耽源、問此意如何。源便来為国師、胡言漢語説道理、自然会他国師説話、只消一頌、〈祖庭事苑出斉時〉湘之南、潭之北、中有黄金充一国。無影樹下合同船、瑠璃殿上無知識。

とは則ち且く置く、耽源還た会すや。只だ箇の『師の塔様を請う』と道うを消うるのみにして、尽大地の人奈何ともせざらん」と。五祖先師拈じて云く、「你は是れ一国の師なるに、為箇什麼にか道えずして、却って弟子に推与く」と。国師遷化の後、帝は耽源を詔して、「此の意如何」と問う、源便ち来たりて国師に為わって胡言漢語もて道理を説くに、自然に他の国師の説話を会して、只だ一頌を消う、〈祖庭事苑出斉時〉「湘の南、潭の北、中に黄金有って一国に充つ。無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し」と。

＊独掌不浪鳴　蜀本に無し。

一 耽源の頌に対する著語で、これは衍文。二 この文は『雪竇後録』に見える。三 外国人がしゃべるような怪しげな中国語。四『祖庭事苑』は睦菴善卿の著（一一五四刊）。その巻二に「相、去声呼」（「湘之南」の「湘」を「相」に作り、色相の意とする）とあるのを後人が引き、「去声呼」を「出斉時」と訛ったものか。『不二鈔』参照。

耽源名応真、在国師処作侍者。後住吉州耽源寺。時仰山来参耽源。源

耽源名は応真、国師の処に在って侍者と作る。後に吉州の耽源寺に住す。時に仰山来たりて耽源に参ず。

言重性悪不可犯、住不得。仰山先去参性空禅師。有僧問性空、如何是祖師西来意。空云、如人在千尺井中。不仮寸縄、出得此人、即答汝西来意。僧云、近日湖南暢和尚、亦為人東語西話。空乃喚沙弥、拽出這死屍著。〈沙弥仰山。〉山後挙問耽源、如何出得井中人。耽源曰、咄。痴漢。誰在井中。仰山不契、後問潙山。山乃呼慧寂。山応諾。潙云、出了也。仰山因此大悟云、我在耽源処得体、潙山処得用也。

源は言重く性悪くして犯すべからざれば、住まり得ず。仰山先に去きて性空禅師に参ず。僧有り、性空に問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。空云く、「人の千尺の井中に在るが如し。寸縄を仮らずして、此の人を出し得ば、即ち汝に西来意を答えん」。僧云く、「近日湖南の暢和尚も亦た人の為に東語西話す」と。空乃ち沙弥に、「這の死屍を拽き出著」と喚ぶ。〈沙弥とは仰山なり。〉山後に挙して耽源に問う、「如何にして井中の人を出し得ん」。耽源曰く、「咄。痴漢。誰か井中に在る」と。仰山契らず。後に潙山に問う。山乃ち「慧寂」と呼ぶ。山応諾す。潙云く、「出で了れり」と。仰山此れに因って大悟して云く、「我は耽源の処に在って体を得、潙山の処にて用を得たり」と。

一 江西省吉安県。二 仰山慧寂(八〇七―八八三)。潙山の法嗣。三 口べたで性格があらっぽく、近寄り難いということか。四 石霜性空。百丈懐海(七四九―八一四)の法嗣。五 五祖弘忍(六〇一―六七四)の傍出三世の湖州暢か、馬祖道一(七〇九―七八八)の法嗣の龍牙円暢か、不明。六 あれこれと語ってやる。七 句末にそえて命令を表す。八 潙山霊祐(七七一―八五三)。九 そら、井戸か

ら出られたぞ。10『会元』四・石霜性空章では「得体」を「得名」、「得用」を「得地」に作る。蜀本も『会元』に同じ。

只是這一箇頌子、引人邪解不少。人多錯会道、相是相見、譚是譚論、中間有箇無縫塔。所以道、中有黄金充一国。帝与国師対答、便是無影樹下合同船。帝不会、遂道、瑠璃殿上無知識。又有底道、相是相州之南、潭是潭州之北。中有黄金充一国、頌*官家、一眨眼二顧視云、這箇是無縫塔。若恁麼会、不出情見。

只だ是れ這の一箇の頌子は、人の邪解を引くこと少なからず。人多く錯り会して道う、「『相』は是れ相見、『譚』は是れ譚論、中間に箇の無縫塔有り。所以に道う、『中に黄金有って一国に充つ』と。(また道う)帝、国師と対答するは、便ち是れ『無影樹下の合同船』。帝会せず、遂に『瑠璃殿上に知識無し』と道えるなり」と。又た有る底は道う、「『相』は是れ相州の南、『潭』は是れ潭州の北。『中に黄金有って一国に充つ』とは、官家を頌し、眨眼顧視して、這箇は是れ無縫塔と云えるなり」と。若し恁麼に会せば、情見を出でず。

＊頌官家　蜀本は「只管」。
一 朝廷、お上。　二 目をまたたく。

只如雪竇下四転語、又作麼生会。今人殊不知古人意。且道、湘之南、

只だ雪竇の四転語を下すが如きは、又た作麼生か会せん。今の人、殊に古人の意を知らず。且く道え、

潭之北、你作麼生会。中有黄金充一国、你作麼生会。無影樹下合同船、你作麼生会。瑠璃殿上無知識、你作麼生会。若恁麼見得、不妨慶快平生。

「湘の南、潭の北」とは你作麼生か会せん。「中に黄金有って一国に充つ」とは你作麼生か会せん。「無影樹下の合同船」とは你作麼生か会せん。「瑠璃殿上に知識無し」とは你作麼生か会せん。若し恁麼に見得せば、不妨に平生を慶快にせん。

一　一生の本望を果たす。

湘之南、潭之北、雪竇道、独掌不浪鳴、不得已与你説。中有黄金充一国、雪竇道、山形拄杖子、古人道、識得拄杖子、一生参学事畢。無影樹下合同船、雪竇道、海晏河清、一時豁開戸牖、八面玲瓏。瑠璃殿上無知識、雪竇道、拈了也、一時与你説了也。不妨難見。見得也好、只是有些子錯認処、随語生解。至末後道、拈了也。却較些子。雪竇分明一時下語了、後面単頌箇無縫塔子。

「湘の南、潭の北」につき、雪竇の「独掌浪りに鳴らず」と道うは、已むを得ず你が与に説きしなり。「中に黄金有って一国に充つ」につき、雪竇の「山形の拄杖子」と道うは、古人の道う「拄杖子を識得せば、一生参学の事畢れり」なり。「無影樹下の合同船」につき、雪竇の「海は晏やか河は清む」と道うは、一時に戸牖を豁開いて、八面玲瓏たるなり。「瑠璃殿上に知識無し」につき、雪竇の「拈じ了れり」と道うは、一時に你が与に説き了りしなり。不妨見難し。見得せば也た好きも、只だ是れ些子の錯って認むる処有らば、語に随せて解を生さん。末後に至って道う、「拈じ了

れり」と。却って些子く較えり。雪竇分明と一時に下語し了って、後面に単だ箇の無縫塔子を頌す。

一 長慶慧稜（八五四―九三二）。 二（天下太平で）どの家も戸口を開け放ったまま。 三「子」は接尾語。

【頌】無縫塔、〔這[一]一縫大小大*、道什麼。〕見還難。〔非眼可見。瞎。〕澄潭不許蒼龍蟠。〔見麼**。洪波浩渺、蒼龍向什処蟠。這裏直得摸索不著。〕[二]層落落、〔莫眼花***[三]。眼花作什麼。〕影[四]団団。〔通身是眼。落七落八[五]。両両[六]三三旧路行、左転[七]右転随後来。〕千[八]古万古与人看。〔見麼。瞎漢作麼生看。〕闍黎[九]覰得見麼。〕

【頌】無縫塔、〔這の一縫の大小大なるに、什麼と道わん。〕見ること還って難し。〔眼もて見るべきに非ず。瞎。〕澄潭は許さず蒼龍の蟠るを。〔見るや。洪波浩渺、蒼龍什処にか蟠る。這裏にては直得に摸索不著。〕層落落、〔眼花すること莫れ。眼花して什麼か作ん。〕影団団。〔通身是れ眼。七に落ち八に落つ。両両三三旧路を行く、左転右転するも随後に来たる。〕千古万古人の与に看せしむ。〔見るや。瞎漢、作麼生か看ん。〕闍黎は覰得見うるや。〕

* 大小大　福本は「多少大」。　** 見麼　福本に無し。　*** 莫眼花　福本に無し。

一 この「無縫」というその縫こそは。 二「無縫塔」(本来は層が無い)の一層一層がすかっと高い。 三 眼病や老衰などで目がかすむこと。また、目がちらちらして、あるものが見えなかったり、ないものが見えたりすること。 四「影」は光彩。「団団」は光彩が丸く輝くさま(満月の光のイメージ)。 五

(光彩が)ちらちらと拡散して見える。　六 第七三則・頌の一句。　七 第一七則・頌の一句。　八 千年万年の昔から人目にさらされている。　九 雪竇に対する皮肉。

〔評唱〕雪竇当頭道、無縫塔見還難。雖然独露無私、則是要見時還難。雪竇忒煞慈悲、更向你道、澄潭不許蒼龍蟠。五祖先師道、雪竇頌古一冊、我只愛他澄潭不許蒼龍蟠一句。猶較些子。多少人去他国師良久処作活計。若恁麼会、一時錯了也。不見道、臥龍不鑑止水、無処有月波澄、有処無風浪起。又道、臥龍長怖碧潭清。若是這箇漢、直饒洪波浩渺、白浪滔天、亦不在裏許蟠。雪竇到此頌了。後頭著些子眼目、琢出一箇無縫塔、随後説道、層落落、影団団、千古万古与人看。你作麼生看。即今在什麼処。直饒你見得分明、也莫錯認定盤星。

〔評唱〕雪竇当頭道う、「無縫塔見ること還って難し」と。独露して私無しと雖然も、則ち是れ見んと要する時は還って難し。雪竇忒煞だ慈悲にして更に你に向って道う、「澄潭は許さず蒼龍の蟠るを」と。五祖先師道く、「雪竇の『頌古』一冊、我は只だ他の『澄潭は許さず蒼龍の蟠るを』の一句を愛す」と。猶お些子く較えり。多少の人は他の国師良久の処に去いて活計を作す。若し恁麼に会せば、一時に錯り了れり。道うことを見ずや、「臥龍は止水を鑑とせず。無き処には月有って波澄み、有る処には風無くして浪起る」と。又た道く、「臥龍は長に怖る碧潭の清きことを」と。若し是這箇の漢ならば、直饒洪波浩渺、白浪滔天なるも、亦た裏許に蟠らず。雪竇此に到って頌し了る。後頭に些子の眼目を著けて、一箇の無縫塔を琢出し、随後に説いて道う、「層落落、影団団。千古万古、人の与

に看せしむ」と。你作麼生か看ん。即今什麼処にか在る。直饒你見得て分明なるも、也た錯って定盤星を認むること莫れ。

一 (無縫塔は)作意なく独りすかっとそびえている。二 只是。ただしかし。三『五祖法演禅師語録』に見える。四 第九五則・頌の句。潜龍は静まりかえった湖面に姿を現さない。「止水」は一つの境地に収まりかえることの象徴。五 水清ければ魚棲まず。龍牙居遁(八三五―九二三)の頌(『禅門諸祖師偈頌』一)。六 なか、うちがわ。

第一九則　倶胝指頭禅

垂示云、一塵挙、大地収、一花開、世界起。只如塵未挙花未開時、如何著眼。所以道、如斬一綟糸、一斬一切斬。如染一綟糸、一染一切染。只如今便将葛藤截断、運出自己家珍、高低普応、前後無差、各各現成。儻或未然、看取下文。

＊垂示〜　福本にこの垂示の文無し。

一　微小な一塵・一花の中に、無限の大地・世界が含まれている。　二　一綟の生糸。　三　〜を。目的語を動詞の前にひきだす語。　四　本来面目を発揮する。

【本則】挙。倶胝和尚、凡有所問、〔有什麼消息、鈍根阿師。〕只竪一指。〔這老漢、也要坐断天下人舌頭。熱

第一九則　倶胝の指頭禅

垂示に云く、一塵挙って大地収まり、一花開いて世界起る。只だ塵未だ挙らず、花未だ開かざる時の如きは、如何か眼を著けん。所以に道う、「一綟糸を斬るが如し、一斬すれば一切斬。一綟糸を染むるが如し、一染すれば一切染」と。只だ如今便ち葛藤を截断して、自己の家珍を運出せば、高低普く応じ、前後差うこと無く、各各現成せん。儻或未だ然らずんば、下文を看取よ。

【本則】挙す。倶胝和尚、凡そ所問あれば、〔什麼の消息か有る、鈍根い阿師め。〕只だ一指を竪つ。〔這の老漢也た天下の人の舌頭を坐断せんと要す。熱きとき

則普天普地熱、寒則普天普地寒。換**却天下人舌頭。〕

は則ち普天普地熱く、寒きときは則ち普天普地寒きに、天下の人の舌頭を換却せんとす。〕

＊根　福本は「置」。すると、「（質問者は）阿師をコケにしておる」という意になる。　＊＊換却天下人舌頭　福本に無し。

一　俗姓不明。常に『七倶胝仏母所説准提陀羅尼経』を誦したことにより、倶胝と称す。二　どんな問いに対しても。三　「阿」は人を親しんで呼ぶときの接頭語。四　評唱に引く円明の語と同じ。あるいは衍文か。

〔評唱〕　若向指頭上会、則辜負倶胝。若不向指頭上会、則生[一]鉄鋳就相似。会也恁麼去、不会也恁麼去。高也恁麼去、低也恁麼去。是也恁麼去、非也恁麼去。所以道、一[二]塵纔起、大地全収。一花欲開、世[三]界便起。一毛頭獅子、百億毛頭現。円明道、寒則普天普地寒、熱則普天普地熱。山河大地、下徹黄泉、万象森羅、上通霄漢。且道、是什麼物得[四]恁麼奇怪。若也識

〔評唱〕　若し指頭上に向いて会せば、則ち倶胝に辜負かん。若し指頭上に向いて会ぜずんば、則ち生鉄鋳就すに相似ん。会するにも也た恁麼にし去り、会せざるにも也た恁麼にし去り、高きにも也た恁麼にし去り、低きにも也た恁麼にし去り、是なるにも也た恁麼にし去り、非なるにも也た恁麼にし去る。所以に道う、「一塵起るや纔や、大地全く収まる。一花開かんと欲して、世界便ち起る。一毛頭の獅子、百億毛頭に現ず」と。円明道く、「寒きときは則ち普天普地寒く、熱きときは則ち普天普地熱し」と。山河大地、下黄泉

得、不消一捏。若識不得、[五]凝塞殺人。

に徹り、万象森羅、上霄漢に通ず。且く道え、是れ什麼物か得恁麼奇怪なる。若也識り得ば、一捏すら消いず。若し識り得ざれば、人を凝塞殺せん。

一 鉄の鋳物のように堅固・頑固なことをいう。 二 楽普（洛浦、落浦とも）元安（八三四―八九八）の語に「一塵纔挙、大地全収。一毛頭獅子、全身総是」（『伝灯録』一九・雲門文偃章）と。 三 徳山縁密。円明大師の号を賜る。 四 「得恁麼」は、よくもそのようにすることができたものだ、の意。 五 自分自身を窒息させる。「殺」は動詞の後に付き、意味を強める。

倶胝和尚、乃[一]婺州金華人。初住庵時、有一尼名実際。到庵直入、更不下笠、持錫遶禅牀三匝云、道得即下笠。如是三問、倶胝無対。尼便去。倶胝曰、天勢稍晩、且留一宿。尼曰、道得即宿。胝又無対。尼便行。胝嘆曰、我雖処丈夫之形、而無丈夫之気。遂発憤、要[二]明此事、擬棄庵往諸方参請、[三]打畳行脚。其夜、山神告曰、[四]不須離此。来日有肉身菩薩来、為和尚

倶胝和尚は、乃ち婺州金華の人なり。初め住庵せし時、一の尼有り、名は実際。庵に到るや直に入り、更に笠を下さず、錫を持して禅牀を遶ること三匝して云く、「道い得ば即ち笠を下さん」と。是の如く三たび問うに、倶胝無対。尼便ち去る。倶胝曰く、「天勢稍く晩れぬ。且く留って一宿せよ」。尼曰く、「道い得ば即ち宿せん」と。胝又た無対。尼便ち行く。胝嘆じて曰く、「我丈夫の形を処つと雖も、丈夫の気無し」と。遂に発憤して此の事を明らめんと要す。庵を棄て諸方に往きて参請せんと擬し、打畳して行脚す。其の夜、

説法。不須去。果是次日、天龍和尚[五]到庵。胝乃迎礼、具陳前事。天龍只竪一指而示之。倶胝忽然大悟。是他当時鄭重専注、所以桶底易脱。後来凡有所問、只竪一指。

山神告げて曰く、「此を離るるには須ばず。来日肉身の菩薩有りて来たり、和尚の為に説法せん。去くに須ばず」と。果是して次の日、天龍和尚、庵に到る。胝乃ち迎え礼して、具に前事を陳ぶ。天龍只だ一指を竪てて之に示す。倶胝忽然と大悟す。是れ他当時鄭重に専注す、所以に桶底脱し易し。後来凡そ所問有れば、只だ一指を竪つ。

一 浙江省金華県。 二 仏法の真理。直接には、仏法者として後れをとったこと。 三 旅支度を整える。
四 〜しなくてもいい。（ゆるやかな禁止。） 五 生卒年不詳。大梅法常（七五二—八三九）の法嗣。

*[一]長慶道、美食[二]不中飽人喫。玄沙道、[三]我当時若見、拗折指頭。玄覚[四]云、玄沙恁麼道、意作麼生。雲居[五]錫云、只如玄沙恁麼道、是肯伊、是不肯伊。若肯伊、何言拗折指頭。若不肯伊、倶胝過在什麼処。先曹山[六]云、倶胝承[七]当処莽鹵[八]。只認得一機[九]一境[一〇]。一等是拍手撫掌、見他西園奇怪。玄覚又云、

長慶道く、「美食も飽人の喫するには中らず」と。玄沙道く、「我当時若し見わば、指頭を拗折らんに」と。玄覚云く、「玄沙恁麼に道う、意作麼生」と。雲居の錫云く、「只だ玄沙の恁麼に道うが如きは、是れ伊を肯むるか、是れ伊を肯めざるか、若し伊を肯むれば、何ぞ『指頭を拗折らん』と言う。若し伊を肯めずんば、倶胝の過什麼処にか在る」と。先曹山云く、「倶胝承当の処は莽鹵なり。只だ一機一境を認得するのみ。一

且道、倶胝還悟也未。為什麼承当処莽鹵。若是不悟、又道平生只用一指頭禅不尽。且道、曹山意在什麼処。

等じく是れ手を拍ち掌を撫くも、他の西園を見るに奇怪なり」と。玄覚又た云く、「且く道え、倶胝還た悟る也未。為什麼にか承当の処莽鹵なる。若是悟らずんば、又た『平生只だ一指頭の禅を用い尽さず』と道わんや。且く道え、曹山の意什麼処にか在る」と。

＊長慶道～若是不悟(一二七字)　福本ではこの評唱の冒頭に在り。さらに「倶胝和尚凡有所問、只竪一指」と有って、「若向指頭上会、則……」と続く。一方、ここに「長慶云、美食不中飽人喫。曹山云、他承当処莽鹵、只認得一機一境。玄沙云、我当時若見、与伊拗折指。看佗作什麼伎倆。且道、玄沙是肯伊不肯伊」の五六字有って、「又道平生……」と続く。

一 長慶慧稜(八五四―九三二)。この一段は『伝灯録』一一・倶胝章の注に見える。 二 どんなご馳走も満腹の人にとっては食欲の対象とならない。猫に小判。 三 玄沙師備(八三五―九〇八)。 四 法眼文益(八八五―九五八)の法嗣。 五 雲居清錫(法眼の法嗣)か。 六 曹山本寂(八四〇―九〇一)。「先」は開山第一世の意。以下の文、『会元』三・西園曇蔵章には「一等是拍手撫掌、就中西園奇怪、倶胝一指頭禅、蓋為承当処不諦当」と。 七 その思い入れ自体がでたらめ、いいかげんだ。 八 手のひらをうつ。「撫」は「拊」(うつ、たたく)に同じ。 九 西園曇蔵。 一〇 ただものでない。 一一 倶胝の語(後出)。「用～不尽」は、使い切れぬ。

当時倶胝、実然不会。及乎到他悟後、凡有所問、只竪一指。因什麼、

当時倶胝実然とは会せず。他の悟後に到るに及んで、凡そ所問有れば、只だ一指を竪つ。什麼に因ってか千

千[二]人万人羅籠不住、撲他不破。你若用作指頭会、決定不見古人意。這般禅易参、只是難会。如今人纔問著、也竪指竪拳。只是弄精魂。也須是徹骨徹髄見透始得。

人万人なるも羅籠し住れず、他を撲ち破れざる。你若し用て指頭の会を作さば、決定や古人の意を見ず。這般る禅は参じ易きも只だ是れ会し難し。如今の人問著るるや纔や、也た指を竪て拳を竪つ。只だ是れ精魂を弄するのみなり。也た須是らく徹骨徹髄まで見透して始めて得し。

一 真実のところ、内実まで。 二 だれも倶胝をやりこめることができない。「～不住」は、その動作の確実性・安定性がえられない、の意。

倶胝庵中有一童子。於外被人詰曰、和尚尋常以何法示人。童子竪起指頭。帰而挙似師、倶胝以刀断其指。童子叫喚走出。倶胝召一声、童子回首。倶胝却竪起指頭。童子豁然領解。且道、見箇什麽道理。

倶胝の庵中に一の童子有り。外に於て人に詰られて曰く、「和尚は尋常何なる法を以てか人に示す」と。童子指頭を竪起つ。帰って師に挙似すに、倶胝刀を以て其の指を断つ。童子叫喚びて走り出づ。倶胝召すこと一声、童子首を回らす。倶胝却って指頭を竪起つ。童子豁然として領解す。且く道え、箇の什麽の道理をか見たる。

及至遷化、謂衆曰、吾得天龍一指

遷化に及至んで、衆に謂って曰く、「吾、天龍一指

頭禅、平生用不尽。要会麼。竪起指頭便脱去。後来明招独眼龍問国泰深師叔云、古人道、倶胝只念三行呪、便得名超一切人。作麼生与他拈却三行呪。深亦竪起一指頭。招云、不因今日、争識得這瓜州客。且道、意作麼生。

一　ぬけがらを脱ぐように、そのままの姿で遷化する。　二　明招徳謙。「独眼龍」は左眼を失ったことによる。　三　『伝灯録』二三・明招徳謙章は「国泰瑫和尚」とする。一説に、国泰道深のこととする。
四　「瓜州」は甘粛省敦煌県内の地名。玉門関の西。

秘魔平生、只用一扠。打地和尚凡有所問、只打地一下。後被人蔵却佗棒、却問如何是仏、他只張口。亦是一生用不尽。無業云、祖師観此土有大乗根器、唯単伝心印、指示迷塗。得之者、不揀愚之与智、凡之与聖。

頭の禅を得て、平生用い尽さず。会せんと要するや」。指頭を竪起てて便ち脱去す。後来に明招の独眼龍、国泰の深師叔に問うて云く、「古人道く、『倶胝只だ三行の呪を念じて、便ち名は一切の人に超ゆることを得たり』と。作麼生か他の与に三行の呪を拈却せん」と。深亦た一指頭を竪起つ。招云く、「今日に因らずんば、争か這の瓜州の客を識り得ん」と。且く道え、意作麼生。

秘魔は平生只だ一扠を用う。打地和尚は、凡そ所問有れば、只だ地を打つこと一下す。後、人に佗の棒を蔵却され、却に「如何なるか是れ仏」と問われ、他只だ口を張るのみ。亦た是れ一生用い尽さず。無業云く、「祖師此土に大乗の根器有るを観て、唯だ心印を単伝して、迷塗に指示す。之を得る者は、愚と智と、凡と

且多虚不如少実。大丈夫漢、即今直下休歇去、頓息万縁去、超生死流、迥出常格。縦有眷属荘厳、不求自得。無業一生凡有所問、只道、莫妄想。所以道、一処透、千処万処一時透。一機明、千機万機一時明。

如今人総不恁麼、只管恣意情解、不会他古人省要処。他豈不是無機関転換処。為什麼只用一指頭。須知俱胝到這裏、有深密為人処。要会得省力麼。還他円明道、寒則普天普地寒、熱則普天普地熱。山河大地、通上孤危。万象森羅、徹下嶮峻。什麼処得一指頭禅来。

聖とを揀ばず。且つ多き虚は少なき実に如かず。大丈夫の漢、即今直下に休歇し去って、頓に万縁を息め去らば、生死の流れを超えて、迥かに常格を出でん。縦い眷属の荘厳有るも、求めずして自ら得」と。無業は一生凡そ所問有れば、只だ道う「妄想する莫れ」と。所以に道う、「一処透れば千処万処一時に透る。一機明らかなれば千機万機一時に明らかなり」と。

如今の人総じて恁麼ならず、只管に恣意に情解して、他の古人の省要の処を会せず。他豈に是れ機関転換の処無からざらんや。為什麼にか只だ一指頭を用う。須らく知るべし、俱胝這裏に到って、深密に為人する処有ることを。省力を会得せんと要するや。他の円明の「寒きときは則ち普天普地寒く、熱きときは則ち普天普地熱し」と道うに還せ。山河大地、上に通じて孤危。万象森羅、下に徹して嶮峻なり。什麼処よりか一指頭

一 名は常遇(八一七―八八八)。文殊降龍の地とされる秘魔巌に住す。 二 さすまた。 三 本名不詳。馬祖の法嗣。 四 汾州無業(七五九―八二〇)。 五 仏が従者をたくさん従えているさま。

＊無　福本に無し。

の禅を得来たらん。

一 枝葉末節を除き去った肝要のところ。悟りのポイント。 二 思考の座標ががらりと変わるところ。 三 言句などの無駄な労力を省く。 四 「一指頭」を円明の「寒則……」という世界へ戻して捉えなおしてみよ。 五 どこから(そんな下らぬものを)仕入れてきたのか。

【頌】 対揚深愛老倶胝、〔癩児牽伴、同道方知。不免是一機一境。〕宇宙空来更有誰。〔両箇三箇、更有一箇。也須打殺。〕曾向滄溟下浮木、〔全是這箇。是則是、太孤峻生。破草鞋有什麼用処。〕夜濤相共接盲亀。〔撈天摸地、有什麼了期。接得堪作何用。抝令而行、趕向無仏世界、接得闍黎一箇瞎漢。＊〕

＊瞎漢　福本に無し。

【頌】 対揚深く愛す老倶胝、〔癩児伴を牽き、同道して方めて知る。是れ一機一境を免れず。〕宇宙空じ来たって更に誰か有る。〔両箇三箇、更に一箇有り。也た須らく打殺すべし。〕曾て滄溟に浮木を下して、〔全て是れ這箇。是なることは則ち是なるも、太だ孤峻生。破草鞋、什麼の用処か有らん。〕夜濤相共に盲亀を接す。〔天を撈り地を摸りて、什麼の了期か有らん。接得して何の用を作すにか堪えん。令に抝って行い、無仏世界に趕向るも、闍黎一箇の瞎漢を接得せるのみ。〕

一 「対揚」は応対。倶胝の老練な応対ぶりをほめる。「深愛」の主語は雪竇。「老」は親しみをこめる。 二 一つの方便の応用にすぎぬ。 三 例のその「一指」。 四 そうだとしても。「是即是」に同じ。 五

「接」は大海の浮木が盲亀に出会い迎え取ること。倶胝の指に迎え取られた人は幸運な盲亀よりも稀だ、という含み。六 倶胝の指が迎え取ったとして、それが何の役に立つというのか。七 たとい彼の方式通りにやってみても。八 雪竇を指す。

【評唱】雪竇会四六[一]文章、七通八達。凡是諸訛[二]奇特公案、偏愛去頌[三]。対揚深愛老倶胝、宇宙空来更有誰。今時学者、抑揚古人、或賓或主、一問一答、当面提持[四]、有如此為人処。所以道、対揚深愛老倶胝。且道、雪竇愛他作什麼。自天地開闢以来、更有誰人。只是老倶胝一箇。若是別人須参[五]雑。唯是倶胝老、只用一指頭、直至老死。時人多邪解道、山河大地也空、人也空、法也空。直饒宇宙一時空来、只是倶胝老一箇。且得没交渉。

【評唱】雪竇は四六の文章を会して、七通八達。凡是そ諸訛奇特の公案あれば、偏に去きて頌するを愛む。「対揚深く愛す老倶胝、宇宙空じ来たるも更に誰か有る」と。今時の学者、古人を抑揚するに、或は賓、或は主となり、一問一答、当面に提持して、此の如く為人の処有り。所以に道う、「対揚深く愛す老倶胝」と。且く道え、雪竇他を愛して什麼か作ん。天地開闢より以来、更に誰人か有らん。只だ是れ老倶胝一箇なり。若是別人ならば須ずや参雑ならん。唯だ是れ倶胝老のみ、只だ一指頭を用いて、直に老死に至る。時の人多く邪解して道う、「山河大地も也た空じ、人も也た空じ、法も也た空ず。直饒宇宙一時に空じ来たるも、只だ是れ倶胝老一箇のみ」と。且得没交渉。

一 四六駢儷体。装飾性の強い文章様式の一。二 ことさらに難解に仕立てられた公案。三 積極的に

しする、の気分。四 真向から提示して。五 余分なもの不純なものを混ぜこむ。

曾向滄溟下浮木、如今謂之生死海。衆生在業海之中、頭出頭没、不明自己、無有出期。倶胝老垂慈接物、於生死海中、用一指頭接人、似下浮木接盲亀相似。令諸衆生得到彼岸。夜濤相共接盲亀、法華経[一]云、如一眼之亀、値浮木孔。無没溺之患。大善知識、接得一箇如龍似虎底漢、教他向有仏世界、互為賓主、無仏世界、坐断要津[二]。接得箇盲亀、堪作何用。

「曾て滄溟に浮木を下す」とは、如今之を「生死海」と謂う。衆生は業海の中に在って、頭出頭没して自己を明らめず、出期有ること無し。倶胝老の慈を垂れて物を接し、生死海の中において一指頭を用いて人を接すること、浮木を下して盲亀を接するが似くに相似たり。諸の衆生をして彼岸に到ることを得しむ。「夜濤相共に盲亀を接す」とは、『法華経』に云く、「一眼の亀の、浮木の孔に値うが如し」と。没溺の患無きなり。大善知識は、一箇の龍の如く虎の似き漢を接得して、他をして有仏世界に向いては互に賓主と為り、無仏世界においては要津を坐断せしむ。箇の盲亀を接得して、何の用を作すにか堪えん。

一『法華経』妙荘厳王本事品。　二 要衝の渡し場。参禅学道の要訣。

第二〇則　龍牙西来意

垂示云、堆山積嶽、撞墻磕壁、佇思停機、一場苦屈。或有箇漢出来、掀翻大海、踢倒須弥、喝散白雲、打破虚空、直下向一機一境、坐断天下人舌頭、無你近傍処。且道、従上来是什麼人曾恁麼。試挙看。

一 山のような疑問をかかえこむ。 二 やみくもに問題にぶち当たる。 三 心のはたらきが止まる。 四 さても酸苦な一幕。なんともやりきれない。

【本則】 挙。龍牙問翠微、如何是祖師西来意。〔諸方旧話、也要勘過。〕微云、与我過禅板来。〔用禅板作什麼。泊合放過。嶮。〕牙過禅板与翠微。〔也是把不住。駕与青龍不解騎。可惜許、当面不承当。〕微接得便打。

第二〇則　龍牙の西来意

垂示に云く、堆山積嶽、撞墻磕壁、佇思停機するは、一場の苦屈なり。或は箇の漢有って出で来たり、大海を掀翻し、須弥を踢倒し、白雲を喝散し、虚空を打破して、直下に一機一境に向いて、天下の人の舌頭を坐断せば、你が近傍る処無からん。且く道え、従上来是れ什麼人か曾て恁麼なる。試みに挙し看ん。

【本則】 挙す。龍牙、翠微に問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。〔諸方の旧話も、也た勘過を要す。〕微云く、「我が与に禅板を過ち来たれ」。〔禅板を用て什麼か作ん。泊合ど放過す。嶮うし。〕牙、禅板を過して翠微に与う。〔也た是れ把不住。青龍に駕与するも騎る解わず。可惜許、当面に承当せず。〕微、接得り

〔著。打得箇死漢、済甚事。也落在第二頭了也。〕牙云、打即任打、要且無祖師西来意。〔這漢話在第二頭。賊過後張弓。〕牙又問臨済、如何是祖師西来意。〔諸方旧公案、再問将来。不直半文銭。〕済云、与我過蒲団来。〔曹渓波浪如相似、無限平人被陸沈。一状領過、一坑埋却。〕牙取蒲団、過与臨済。〔依前把不住、依前不伶俐。依俙越国、髣髴楊州。〕済接得便打。〔著。可惜、打這般死漢。一模脱出。〕牙云、打即任打、要且無祖師西来意。〔灼然在鬼窟裏作活計。将謂得便宜、賊過後張弓。〕

て便ち打つ。〔著れり。箇の死漢を打ち得て甚事をか済さん。也た第二頭に落在し了れり。〕牙云く、「打つことは即ち打つに任すも要且つ祖師西来意無し」。〔這の漢第二頭に話在す。賊過ぎし後に弓を張る。〕牙、又た臨済に問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。〔諸方の旧公案、再び問い将ち来たる。半文銭にも直いせず。〕済云く、「我が与に蒲団を過ち来たれ」。〔曹渓の波浪、如し相似たらば、限り無き平人、陸沈せられん。一状に領過して、一坑に埋め却まん。〕牙、蒲団を取って臨済に過与す。〔依前として把不住、依前として伶俐ならず。越国に依俙たり、楊州に髣髴たり。〕済、接得りて便ち打つ。〔著れり。惜むべし、這般る死漢を打つことを。一模より脱出す。〕牙云く、「打つことは即ち打つに任すも要且つ祖師西来意無し」。〔灼然に鬼窟裏に在りて活計を作す。便宜を得たりと将謂えるに、賊過ぎし後に弓を張る。〕

＊漢　福本は「般」。すると、「這般る話は」の意になる。　＊＊第二頭　蜀本に無し。すると、

「這漢はまだ言い分があるのだ(しかしすでに先手を取られている)」の意。

一 龍牙居遁(八三五—九二三)。二 翠微無学。三 言い古された文句(公案)。四 吟味する。五 「過」は手渡す。「禅板」は坐禅のとき背をよせる道具。「来」は命令の語気。六 すんでのところで、あやうく。洎乎、幾乎。七 青龍(天の東方をつかさどる神獣)に車をつけることはできるが、青龍そのものを乗りこなすことはできない。あとの第一の頌の評唱を見よ。八 目の前にそれがありながら、受けとめていない。九 つまりは、要するに、結局。一〇 第二義の話に堕する。但し「話在」は正しくは「まだ私は言いたいことがある」という意だから、この原文は誤っている。一一 臨済義玄(?—八六六)。一二 「曹渓波浪」は、六祖慧能(六三八—七一三)に始まる中国禅の流れ。ここは、翠微と臨済とを指す。この両人が似たようなことをしているならば。次の句とともに第九三則・頌に見える。一三 まともなふつうの修行者たち。一四 生きながら滅びる。一五 (この両人の風光は)越国のようでもあり、揚州のようでもある。越国と揚州とは同一地の別名。表向きは替わったようでも、その実なんの替わり映えもしない。一六 ～ということは明々白々だ。一七 してやったり。第四則・頌の評唱に既出。

【評唱】翠巌芝和尚云、当時如是。今時衲子、皮下還有血麽。潙山喆云、翠微・臨済、可謂本分宗師。龍牙一等是撥草瞻風、不妨与後人作亀鑑。住院後有僧問、和尚当時還肯二尊宿麽。牙云、肯即肯、只是無祖師西来

【評唱】翠巌の芝和尚云く、「当時是の如し。今時の衲子、皮下に還た血有りや」と。潙山の喆云く、「翠微・臨済は本分の宗師と謂うべし。龍牙は一等じく是れ撥草瞻風するも、不妨に後人の与に亀鑑と作る。住院の後、僧の問う有り、『和尚は当時還た二尊宿を肯むるや』。牙云く、『肯むることは即ち肯むるも、只だ

意。龍牙瞻前顧後、応病与薬、大潙則不然。待伊問和尚当時還肯二尊宿麼、明不明、劈脊便打。非惟扶竪翠微・臨済、亦不辜負来問。

是れ祖師西来意無し』と。龍牙は前を瞻み後を顧みて、病に応じて薬を与うるも、大潙は則ち然らず。伊の『和尚は当時還た二尊宿を肯むるや』と問うを待って、明なるも不明なるも、劈脊に便ち打つ。惟だ翠微・臨済を扶竪するのみに非ず、亦た来問にも辜負かず」と。

一 大愚守芝。大愚山興教院に住し、また翠巌に移る。汾陽善昭(九四七—一〇二四)の法嗣。 二 大潙慕喆(?—一〇九五)。大潙山に住す。 三 ここは、懇切な教導をいう。

石門聡云、龍牙無人拶著猶可、被箇衲子挨著、失却一隻眼。雪竇云、臨済・翠微、只解把住、不解放開。我当時如作龍牙、待伊索蒲団禅板、拈起劈面便擲。五祖戒云、和尚得恁麼面長。或云、祖師土宿臨頭。黄龍新云、龍牙駆耕夫之牛、奪飢人之食。既明則明矣、因什麼却無祖師西来意。会麼。棒頭有眼明如日、要識真金火裏看。大凡激揚要妙、提唱宗乗、向

石門の聡云く、「龍牙は人の拶著むこと無くんば猶お可なるも、箇の衲子に挨著られて、一隻眼を失却う」と。雪竇云く、「臨済・翠微は、只だ把住することを解して、放開することを解せず。我当時如し龍牙と作らば、伊が蒲団・禅板を索めんを待って、拈起げて劈面に便ち擲たん」と。五祖の戒云く、「和尚得恁麼面長ならんとは」と。或は云く、「祖師、土宿頭に臨む」と。黄龍の新云く、「龍牙は耕夫の牛を駆り、飢人の食を奪う。既に明らかなることは則ち明らかなるに、什麼に因ってか却って祖師西来意無き。会すや。

第一機下明得、可以坐断天下人舌頭。儻或躊躇、落在第二。這二老漢、雖然打風打雨、驚天動地、要且不曾打[六]著箇明眼漢。

棒頭に眼有って明らかなること日の如し、真金を識らんと要せば火裏に看よ」と。大凡そ要妙を激揚し、宗乗を提唱せんには、第一機の下に明得してこそ、天下の人の舌頭を可以く坐断せん。儻或躊躇せば、第二に落在せん。這の二老漢、風を打し雨を打し、天を驚かし地を動かすと雖然も、要且つ曾て箇の明眼の漢を打著せず。

一 大陽慧堅の法嗣か。 二 五祖師戒。 三 まぬけづら。 四 土曜星。兇星とされる。 五 黄龍悟新(一〇四三—一一一四)。 六 かたをつける。始末する。

古人参禅、多少辛苦。立大丈夫志気、経歴山川、参見尊宿。龍[一]牙先参翠微・臨済、後参[二]徳山。遂問、学人仗[三]鏌鎁剣、擬取師頭時如何。徳山引頸云、囫[四]。牙云、師頭落也。山微笑便休去。次到[五]洞山。洞山問、近離甚処。牙云、徳山来。洞山云、徳山有何言句。牙遂挙前話。洞山云、他道

古人の参禅、多少と辛苦なる。大丈夫の志気を立て、山川を経歴し、尊宿に参見す。龍牙先ず翠微・臨済に参じ、後に徳山に参ず。遂に問う、「学人鏌鎁の剣に仗って、師の頭を取らんと擬する時如何」。徳山頸を引べて云く、「囫」。牙云く、「師の頭落ちたり」と。山微笑して便ち休去む。次に洞山に到る。洞山問う、「近ごろ甚処を離れしや」。牙云く、「徳山より来たる」。洞山云く、「徳山に何の言句か有りし」。牙遂に

什麼。牙云、他無語。洞山云、莫道無語。且試将徳山落底頭、呈似老僧看。牙於此有省。遂焚香遥望徳山、礼拝懺悔。徳山聞云、洞山老漢、不識好悪。這漢死[六]来多少時、救得有什麼用処。従他担老僧頭、遶天下走。

一 この一段、第六六則・本則の評唱にも見える。二 徳山宣鑑(七八二―八六五)。三 名剣の名。「莫邪」とも。転じて、般若の智見をいう。第九則の垂示に既出。四 本来は無機的な擬音。ここは、首が落ちた音を口で発する。ストン。五 洞山良价(八〇七―八六九)。六 とっくに死んでいる。

龍牙根性聡敏、担[一]一肚皮禅行脚。直向長安翠微、便問、如何是祖師西来意。微云、与我過禅板来。牙取禅板与微。微接得便打。牙云、打即任打、要且無祖師西来意。*又問臨済、如何是祖師西来意。済云、与我過蒲

前話を挙す。洞山云く、「他什麼とか道いし」。牙云く、「他語無し」。洞山云く、「道うこと莫れ語無しと。且く試みに徳山の落つる底の頭を老僧に呈似し看よ」と。牙此に於て省有り、遂に香を焚いて遥かに徳山を望み、礼拝懺悔す。徳山聞いて云く、「洞山老漢、好悪を識らず。這の漢死し来たりて多少時ぞ、救い得るも什麼の用処か有らん。他に老僧の頭を担いて天下を遶って走るに従す」と。

龍牙は根性聡敏にして、一肚皮の禅を担いて行脚す。直に長安の翠微に向って便ち問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。微云く、「我が与に禅板を過ち来たれ」と。牙禅板を取って微に与う。微接得りて便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任すも、要且つ祖師西来意無し」。又た臨済に問う、「如何なるか是れ

団来。牙取蒲団与臨済。済接得便打。牙云、打即任打、要且無祖師西来意。他致箇問端、不妨要見他曲彔木床上老漢、亦要明自己一段大事。可謂言不虚設、機不乱発、出在做工夫処。

＊又問臨済～無祖師西来意〔四六字〕　福本・蜀本に無し。

一 全身これ禅。 二 第一五則・頌の評唱の「曲彔木牀」に同じ。 三 自己の本来の面目を明らかにするという根本問題。 四 「在」は動詞の後に付き、その動作が行われる場所を示す。「做工夫」は悟りを得るための修行をする。

不見五洩参石頭、先自約曰、若一言相契即住、不然即去。石頭拠座、洩払袖而出、石頭知是法器、即垂開示。洩不領其旨、告辞而出至門。石頭呼之云、闍黎。洩回顧。石頭云、従生至死、只是這箇。回頭転脳、更

祖師西来意」。済云く、「我が与に蒲団を過ち来たれ」と。牙蒲団を取って臨済に与う。済接得りて便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任すも、要且つ祖師西来意無し」。他箇の問端を致すは、不妨も他の曲彔木床上の老漢を見んと要し、亦た自己一段の大事を明らめんと要せり。言虚しくは設けず、機乱りには発せず、做工夫の処に出づと謂うべし。

見ずや、五洩、石頭に参じ、先ず自ら約して曰く、「若し一言にして相契わば即ち住らん。然らずんば即ち去らん」と。石頭、座に拠り、洩、袖を払って出でんとするに、石頭是れ法器なりと知って、即ち開示を垂る。洩其の旨を領せず、告辞して出でて門に至る。石頭之を呼んで云く、「闍黎」。洩回顧く。石頭云く、

莫別求。洟於言下大悟。

一 五洩霊黙(七四七―八一八)。 二 石頭希遷(七〇〇―七九〇)。

又麻谷[一]持錫到章敬[二]。遶禅床三匝、振錫一下、卓然而立。敬云、是、是。又到南泉[三]。依前遶床振錫而立。南泉云、不是、不是。此是風力所転[四]、終成敗壊。谷云、章敬道是、和尚為什[五]麼道不是。南泉云、章敬即是、是汝不是。古人也不妨要提持透脱此[六]一件事。如今人纔問著、全無些子用工夫処。今日也只是恁麼、明日也只是恁麼。你若只恁麼、尽未来際[七]也未有了日。須是抖擻精神、始得有少分相応。

「生より死に至るまで、只だ是れ這箇。頭を回し脳を転して、更に別に求むること莫れ」と。洟、言下に大悟す。

又た麻谷、錫を持して章敬に到る。禅床を遶ること三匝、錫を振うこと一下し、卓然として立つ。敬云く、「是なり、是なり」と。又た南泉に到る。依前く床を遶り錫を振って立つ。南泉云く、「不是、不是。此れは是れ風力の転ずる所、終に敗壊を成すなり」と。谷云く、「章敬は是と道えり。和尚は為什麼にか不是と道う」。南泉云く、「章敬は即ち是、是れ汝は不是」と。古人也た不妨に提持して此の一件の事を透脱けんと要す。如今の人問著るるや纔や、全く些子も工夫を用いる処無し。今日も也た只だ是れ恁麼、明日も也た只だ是れ恁麼。你若し只だ恁麼ならば、尽未来際にも也た未だ了日有らず。須是らく精神を抖擻して、始めて少分の相応有ることを得ん。

一 麻谷山(山西省河東県南)の僧。くわしくは不明。以下、第三一則・本則に見える。 二 章敬懐惲(七五七―八一八)。 三 南泉普願(七四八―八三四)。 四『維摩経』方便品の句による。 五 いけないのはほかでもない君自身だという語気。「是〜」は主格に立つ体言に冠し、その体言を強く規定して提起する。 六「此事」「這箇」に同じ。 七 少しは深奥の消息と通じ合えるだろう。

你看龍牙発一問道、如何是祖師西来意。翠微云、与我過禅板来。牙過与微、微接得便打。牙当時取禅板時、豈不知翠微要打他。也不得便道他不会。為什麼却過禅板与他。且道、当機承当得時、合作麼生。他不向活水処用、自去死水裏作活計、一向作主宰、便道、打即任打、要且無祖師西来意。又走去河北、参臨済。依前恁麼問。済云、与我過蒲団来。牙過与済、済接得便打。牙云、打即任打、要且無祖師西来意。且道二尊宿、又不同法嗣、為什麼答処相似、用処一

你看よ、龍牙一問を発して道く、「如何なるか是れ祖師西来意」。翠微云く、「我が与に禅板を過ち来たれ」と。牙、微に過与す。微接得りて便ち打つ。牙、当時禅板を取る時、豈に翠微が他を打たんと要するを知らざらんや。也た便ち「他会せず」と道うことを得ず。為什麼にか却って禅板を過して他に与う。且く道え、当機に承当し得る時、合に作麼生かすべき。他活水の処に向いて用いず、自ら死水裏に去いて活計を作し、一向に主宰を作して、便ち道う、「打つことは即ち打つに任すも、要且つ祖師西来意無し」と。又た河北に走去きて臨済に参ず。依前く恁麼に問う。済云く、「我が与に蒲団を過ち来たれ」と。牙、済に過与す。済接得りて便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち

般。須知古人一言一句、不乱施為。

打つに任すも、要且つ祖師西来意無し」と。且く道え、二尊宿、又た法嗣を同じくせざるに、為什麼にか答うる処相似て用うる処一般なる。須らく知るべし、古人の一言一句は乱りに施為さざることを。

一 自己の主体性を発揮する。

他後来住院、有僧問云、和尚当時見二尊宿。是肯他不肯他。牙云、肯則肯、要且無祖師西来意。爛泥裏有刺。放過与人、已落第二。這老漢把得定、只做得洞下尊宿。若是徳山・臨済門下、須知別有生涯。若是山僧則不然、只向他道、肯即未肯、要且無祖師西来意。

他後来に住院するに、僧有り問うて云く、「和尚当時二尊宿に見ゆ。是れ他を肯むるか、他を肯めざるか」。牙云く、「肯むることは則ち肯むるも、要且つ祖師西来意無し」と。爛泥裏に刺有り。放ちて人に過与せば、已に第二に落つ。這の老漢把得定りて、只だ洞下の尊宿と做り得たり。若是徳山・臨済の門下ならば、須らく別に生涯有ることを知るべし。若是山僧ならば則ち然らず、只だ他に向って道わん、「肯むることは即ち未だ肯めざるも、要且つ祖師西来意無し」と。

一 さえないことばの中に鋭い機鋒が潜んでいる。二 「無し」(という刺)を人にほうり渡してしまったら。三 (「無し」を)しかとつかみとる。四 洞山門下。五 僧の謙遜の自称。ここは圜悟。

不見僧問大梅、如何是祖師西来意。

見ずや、僧、大梅に問う、「如何なるか是れ祖師西

梅云、西来無意。塩官[2]聞云、一箇棺材、両箇死漢。玄沙[3]聞云、塩官是作家。雪竇道、三箇也有。只如這僧問祖師西来意、却向他道、西来無意、你若恁麼会、堕在[4]無事界裏。所以道、[5]須参活句、莫参死句。活句下薦得、永劫不忘。死句下薦得、[6]自救不了。

来意」。梅云く、「西来に意無し」と。塩官聞いて云く、「一箇の棺材、両箇の死漢」と。玄沙聞いて云く、「塩官は是れ作家」と。雪竇道く、「三箇も也た有り」と。只如這の僧の「祖師西来意」を問うに、却って他に向って「西来に意無し」と道う、你若し恁麼に会せば、無事界裏に堕在ん。所以に道く、「須らく活句に参ずべし、死句に参ずること莫れ。活句下に薦得せば、永劫にも忘れず。死句下に薦得せば、自らをも救い了せず」と。

一 大梅法常(七五二—八三九)。以下の問答は『伝灯録』七・塩官章に見える。 二 塩官斉安(?—八四二)。 三 玄沙師備(八三五—九〇八)。 四 「無事」こそ悟りとして収まりかえった境地。第九則・本則の評唱に既出。 五 意のある所をつかみとれ、言葉づらについてまわってはならない。徳山縁密の上堂の語に「但参活句、莫参死句。活句下薦得、永劫無滞」(『会元』一五)と。 六 自分を救うこともできない。第二則の垂示に既出。

龍牙恁麼道、不妨尽善。[1]古人道、相続也大難。他古人、一言一句、不乱施為。前後相照、[2]有権有実、有照

龍牙恁麼に道うは、不妨に善を尽せり。古人道く、「相続するは也た大いに難し」と。他の古人は一言一句も乱りに施為さず。前後相照して、権有り実有り、

有用、賓[三]主歴然、[四]互換縦横。若要辨[五]其親切、龍牙雖不[六]昧宗乗、争奈落在第二頭。当時二尊宿、索禅板蒲団。牙不可不知他意。是他要用他胸襟裏事。雖然如是、不妨用得太峻。龍牙恁麼問、二老恁麼答。為什麼却無祖師西来意。到這裏、須知別有箇奇特処。雪竇拈出令人看。

照有り用有り、賓主歴然、互換縦横たり。若し其の親切を辨ぜんと要せば、龍牙は宗乗に不昧なりと雖も、争奈せん第二頭に落在することを。当時二尊宿、禅板蒲団を索む。牙、他の意を知らずんばあるべからず。是れ他は他の胸襟裏の事を用いんと要せしなり。是の如くなりと雖然も、不妨に用い得て太だ峻なり。龍牙恁麼に問い、二老恁麼に答う。為什麼にか却って祖師西来意無き。這裏に到って、須らく別に箇の奇特たる処有ることを知るべし。雪竇拈出し人をして看しむ。

一 洞山良价(八〇七―八六九)。語は第四則・頌の評唱に既出。 二 「権」「実」は方便と真実。「照」は相手の内実を見て取るはたらき、「用」は相手に仕向ける行動的なはたらき。 三 主客の区別は明白である。 四 縦横自在に互いに主客となる。 五 勘所を見抜く。 六 通暁する。「暗くない」という消極的な語ではなく、逆に明確さを強く表明する言い方。

【頌】 龍牙山裏龍無眼、〔瞎。謾[一]別人即得。泥裏洗土塊。天下人総知。〕死[二]水何曾振古風。〔忽然活時、無奈何。累及天下人、出頭不得。〕禅板

【頌】 龍牙山裏、龍に眼無し、〔瞎。別人を謾くことは即ち得し。泥裏に土塊を洗う。天下の人総て知る。〕死水何ぞ曾て古風を振わん。〔忽然として活する時は奈何ともすること無けん。累天下の人に及んで

蒲団不能用、〔教阿誰説。你要禅板蒲団作什麼。莫是分付闍黎麼。〕只応分付与盧公。〔也則分付不著。漆桶。莫作這般見解。〕

出頭し得ず。〕禅板蒲団用うること能わず、〔阿誰にか説かしめん。你禅板蒲団を要めて什麼か作ん。是れ闍黎に分付するものに莫ずや。〕只だ応に分付して盧公に与うべし。〔也則分付し著せず。漆桶。這般る見解を作すこと莫れ。〕

一 他の奴はだませても、この圜悟だけはだまされぬぞ。 二 よどんだ水には龍が活躍するような祖師伝来の活風が湧き起こるはずがない。 三 雪竇を指す。 四 「莫是〜麼」は、〜ではあるまいか。〜なのか。「闍黎」は雪竇を指す。 五 一般には六祖慧能をいうが、あとの評唱では雪竇の自称とする。
六 やはり、また。 七 動詞の後に付き、動作が目的に達しないことを示す。

〔評唱〕雪竇拠款結案。他雖恁麼頌、且道、意在什麼処。甚処是無眼、甚処是死水裏。到這裏、須是有変通始得。所以道、澄潭不許蒼龍蟠、死水何曾有獰龍。不見道、死水不蔵龍。若是活底龍、須向洪波浩渺、白浪滔天処去。此言龍牙走入死水中去被人打。他却道、打即任打、要且無祖師

〔評唱〕雪竇は款に拠って案を結す。他恁麼に頌すと雖も、且く道え、意什麼処にか在る。甚処か是れ眼無き、甚処か是れ死水裏。這裏に到らば、須是らく変通有って始めて得し。所以に道う、「澄潭は許さず蒼龍の蟠るを、死水何ぞ曾て獰龍有らん」と。見道ずや、「死水は龍を蔵さず」と。若是活底龍ならば、須らく洪波浩渺、白浪滔天の処を去かん。此れ龍牙の走って死水の中に入り去きて人に打たるるを言う。他却って

西来意。招得雪竇道死水何曾振古風。雖然如此、且道、雪竇是扶持伊、是滅他威光。

道う、「打つことは即ち打つに任すも、要且つ祖師西来意無し」と。雪竇の「死水何ぞ曾て古風を振わん」と道うを招き得たり。此の如くなりと雖然も、且く道え、雪竇は是れ伊を扶持るか、是れ他の威光を滅ずるか。

一 臨機応変の対処。　二 第一八則・頌の句。　三 首山省念(九二六―九九三)の語。　四 「是〜是〜」で、〜なのか〜なのか。

人多錯会道、為什麼只応分付与盧公。殊不知、却是龍牙分付与人。大凡参請、須是向機上辨別、方見他古人相見処。禅板蒲団不能用、翠微云、与我過禅板来。牙過与他、豈不是死水裏作活計。分明是駕与青龍、只是他不解騎。是不能用也。只応分付与盧公、往往喚作六祖、非也。不曾分付与人。若道分付与人要用打人、却成箇什麼去。昔雪竇自呼為盧公。他

人多く錯り会して道う、「為什麼にか『只だ応に分付して盧公に与うべき』なる」と。殊に知らず、却って是れ龍牙分付して人に与うることを。大凡そ参請は、須是らく機上に向いて辨別して、方めて他の古人相見の処を見るべし。「禅板蒲団用うること能わず」とは、翠微の「我が与に禅板を過ち来たれ」と云うに、牙、他に過与す、豈に是れ死水裏に活計を作すにあらずや。分明に是れ青龍に駕与するも、只だ是れ他騎る解わざるなり。是れ「用うること能わず」なり。「只だ応に分付して盧公に与うべし」につき、往往喚んで六祖と

題晦迹自貽云、[三]図画当年愛洞庭、波[四]心七十二峰青。而今高臥思前事、添得盧公倚石屏。雪竇[五]要去龍牙頭上行、又恐人錯会。所以別頌要翦人疑解。雪竇復拈云、

作すは非なり。曾て分付して人に与えず。若し分付して人に与えて用て人を打たんと要すと道わば、却って箇の什麼をか成し去らん。昔、雪竇自ら呼んで盧公と為す。他「迹を晦まして自ら貽す」と題して云く、「画に図きて当年洞庭を愛す、波心に七十二峰青し。而今高臥して前事を思うに、添え得たり盧公の石屏に倚れるを」と。雪竇は龍牙の頭上に行かんと要するも、又た人の錯り会せんことを恐る。所以に別に頌して人の疑解を翦らんと要す。雪竇復た拈じて云く、

＊要用　福本は「便」。

一 以下「什麼去」まで二二字、文脈が通じ難い。錯簡か。 二『祖英集』上に見える。 三 自分(雪竇)がまだ洞庭(浙江省蘇州の洞庭山)の翠峰に住せぬ時、画に描いてまで愛した。 四 太湖に映る洞庭の峰。 五 〜に。「在」と同じ。

【頌】這老漢、也未得勦絶、復成一頌。〔灼然、能有幾人知。自知較一半。頼有末後句。〕
[一]盧公付了亦何憑、〔尽大地討恁麼

【頌】「這の老漢を也た未だ勦絶し得ず」と、復た一頌を成す。〔灼然たり、能く幾人か知る有らん。自ら知る較えたること一半なるを。頼に末後の句有り。〕
盧公に付し了るも亦た何ぞ憑らん、〔尽大地恁麼の

人也難得。[二]教誰領話。〕[三]坐倚休将継祖灯。〔草裏漢、[四]打[五]入黒山下坐、落在鬼窟裏去也。〕[六]堪対暮雲帰未合、〔一箇半箇、挙著即錯。果然出不得。〕遠山無限碧層層。〔塞却你眼、塞却你耳、[七]没溺深坑。更参三十年。〕

人は討ぬるも也た得難し。誰にか話を領らしめん。〕坐倚して将て祖灯を継ぐことを休めよ。〔草裏の漢、黒山下に打入して坐し、鬼窟裏に落在し去れり。〕対するに堪す、暮雲の帰って未だ合せず、〔一箇半箇も、挙著せば即ち錯らん。果然して出不得。〕遠山限り無く碧層層たり。〔你が眼を塞却ぎ、你が耳を塞却がば、深坑に没溺せん。更に参ぜよ三十年。〕

一 盧公に禅板や蒲団をわたしたからとて、それで「西来意」がどうなるものでもあるまい。二 わかるものなどいない。三 蒲団に坐し禅板によりかかって祖師の印可を得ようなどと考えるな。四 「打」は、動詞の接頭語。五 鬼窟裏に同じ。六 みごとなのは、夕べの雲が西の山にもどって、まだ一かたまりにならぬときだ。次の句とともに龍牙が呈示した深遠な消息を喩える。七 「無心」に惑溺して生機を失う。

〔評唱〕盧公付了亦何憑、有何憑拠。直須向這裏[一]恁麼会去。更莫守株待兎。[二]髑髏前一時打破、無一点事在胸中、放教[三]灑灑落落地、又何必要憑。或坐或倚、不消作仏法道理。所以道、坐

〔評唱〕「盧公に付し了るも亦た何ぞ憑らん」とは、何の憑拠か有らんとなり。直に須らく這裏に向いて恁麼に会し去るべし。更に株を守って兎を待つこと莫れ。髑髏の前に一時に打破して、一点の事の胸中に在ること無く、放って灑灑落落地ならしめば、又た何ぞ必ず

倚休将継祖灯。雪竇一時拈了也。他有箇転身処、末後自露箇消息。有些子好処道、堪対暮雲帰未合。且道、雪竇意在什麼処。暮雲帰欲合未合之時、你道作麼生。遠山無限碧層層、依旧打入鬼窟裏去。到這裏、得失是非、一時坐断、灑灑落落、始較些子。遠山無限碧層層、且道、是文殊境界耶、是普賢境界耶、是観音境界耶。到此且道、是什麼人分上事。

しも憑ることを要せん。或は坐し或は倚って、仏法の道理を作すことを消いざれ。所以に道う、「坐倚して将て祖灯を継ぐことを休めよ」と。雪竇一時に拈じ了れり。他箇の転身の処有って、末後に自ら箇の消息を露す。些子く好処有り、道く、「対するに堪す、暮雲の帰って未だ合せず」と。且く道え、雪竇の意什麼処にか在る。暮雲帰って合せんと欲て未だ合せざる時、你道え作麼生。「遠山限り無く碧層層たり」とは、依旧として鬼窟裏に打入し去る。這裏に到って得失是非、一時に坐断し、灑灑落落として始めて些子に較えり。「遠山限り無く碧層層たり」とは、且く道え、是れ文殊の境界か、是れ普賢の境界か、是れ観音の境界か。此に到って且く道え、是れ什麼人の分上の事ぞ。

＊到這裏～始較些子（一九字）　福本は文末「是什麼人分上事」の下に在り。かつ「灑灑落落」の下に「無一星事」の四字有り。　＊＊遠山無限碧層層　福本に無し。

一 憑るべきものなしと見て取る。 二 一切の知覚・意識を消し去ったところ。 三 わざわざ仏法らしい意味づけなどしてみせるには及ばない。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第二

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第二

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第三

第二一則　智門蓮花荷葉

*垂示云、建法幢、立宗旨、錦上舖花。脱籠頭、卸角駄、太平時節。或若辨得格外句、挙一明三。其或未然、依旧伏聴処分。

*垂示～　福本は、第二一則の垂示と第二二則の垂示とが入れ替っている。
一『証道歌』の句。旗幟を鮮明にし、仏法を宣布する。二　第一七則・頌の句。

【本則】挙。僧問智門、蓮花未出水時如何。〔鉤在不疑之地。泥裏洗土塊。那裏得這消息来。〕智門云、蓮花。〔一二三四五六七。疑殺天下人。〕僧云、出水後如何。〔莫向鬼窟裏作活計。又恁麼去也。〕門云、荷

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第三

第二一則　智門の蓮花荷葉

垂示に云く、法幢を建て宗旨を立つるは、錦上に花を舗く。籠頭を脱し角駄を卸すは、太平の時節。或若格外の句を辨得せば、挙一明三。其れ或は未だ然らずんば、依旧伏して処分に聴え。

【本則】挙す。僧、智門に問う、「蓮花未だ水を出でざる時如何」。〔不疑の地に鉤在す。泥裏に土塊を洗う。那裏よりか這の消息を得来たる。〕智門云く、「蓮花」。〔一二三四五六七。天下の人を疑殺せしむ。〕僧云く、「水を出でて後如何」。〔鬼窟裏に向いて活計を作す莫れ。又た恁麼になし去れり。〕門云く、「荷葉」。〔幽州

葉。〔[七]幽州猶自可、最苦是江南。両[八]頭三面、笑殺天下人。〕

は猶自可なり、最も苦なるは是れ江南。両頭三面、天下の人を笑殺せしむ。〕

一 智門光祚。雪竇重顕の師。二「未出水」は無仏世界、「出水」は有仏世界。三 わかりきったことにひっかかっている。四 ここは、蓮花を数えている。五「殺」は動詞の後に付き、意味を強める。六 花どころか葉まで水面に広がっている、という含み。七 幽州ならまだしも、最も暮らし難いのは江南だ。「幽」は「憂」に通じ、また水中に隠れている蓮のイメージもある。江南は当時の繁栄地であり、これは江南が住みよいという常識を手玉にした表現。恵まれた環境はかえって人を損なう。八 どれが正面かわからぬ、ひねた面構え。ああも言い、こうも言いしてはぐらかす。

〔評唱〕智門若是応機接物、猶較些[一]子。若是截断衆流、千里万里。且道、這蓮花、出水与未出水、是一是二。若恁麼見得、許你有箇入処。雖然如是、若道是一、顢頇[二]仏性、儱侗[三]真如。若道是二、心境未忘。落在解路上走、有什麼歇期。且道、古人意作麼生。其実無[四]許多事。所以投子[五]道、你但莫著名言数句。若了諸事、自然不著、

〔評唱〕智門若し機に応じて物を接するには、猶お些し較えり。若し衆流を截断するには、千里万里ならん。且く道え、這の蓮花、水を出づると未だ水を出でざると、是れ一か是れ二か。若し恁麼に見得せば、你に箇の入処有ることを許む。是の如くなりと雖然も、若し是れ一と道わば、仏性を顢頇し、真如を儱侗す。若し是れ二と道わば、心境未だ忘ぜず。解路上に落在して走かば、什麼の歇期か有らん。且く道え、古人の意作麼生。其の実は許多の事無し。所以に投子道う、

即無許多位次[六]不同。你摂一切法、一切法摂你不得。本無得失夢幻、如許多名目、不可強与[七]佗安立名字。誑謼你諸人、得麼。你諸人問故、所以有言。你若不問、教我向你道什麼即得。一切事皆是[八]你将得来、都不干我事。

「你但だ名言数句に著する莫れ。若し諸事を了せば、自然に著せず。即ち許多の位次の不同無けん。你こそは一切の法を摂む、一切の法は你を摂め得ず。本と得失夢幻、如許多の名目無し、強いて佗の与に名字を安立すべからず。你諸人を誑謼すこと得きや。你諸人問うが故に、所以て言有り。你若し問わずんば、我をして你に向って什麼と道わしむれば即ち得からん」と。一切の事は皆な是れ你将ち得来たる、都て我が事に干らず。

一 とても及びもつかぬ。二 仏性・真如に曖昧模糊となる。三 分別による解釈。四 格別に深妙な意味があるわけではない。五 投子大同(八一九—九一四)。翠微の法嗣。六 等級。段階的差異。七 名を付けることで概念規定する。八「将得来」は、もって来る。お前の持ち出したことだ。

[一]古人道、欲識仏性義、当観時節因縁。不見[二]雲門挙、僧問[三]霊雲云、仏未出世時如何。雲竪起払子。僧云、出世後如何。雲亦竪起払子。雲門云、[四]前頭[五]打著、後頭打不著。又云、不説

古人道く、「仏性の義を識らんと欲せば、当に時節因縁を観るべし」と。見ずや、雲門挙す、「僧、霊雲に問うて云く、『仏未だ出世せざる時如何』と。雲、払子を竪起つ。僧云く、『出世して後如何』と。雲、亦た払子を竪起つ」と。雲門云く、「前頭は打著、後

出与不出、何処有伊問時節也。古人一問一答、応時応節、無許多事。你若尋言逐句、了無交渉。你若能言中透得言、意中透得意、機中透得機、放令閑閑地、方見智門答話処。問仏未出世時如何、牛頭未見四祖時如何、斑石内混沌未分時如何、父母未生時如何。雲門道、従古至今、只是一段事、無是無非、無得無失、無生与未生。古人到這裏、放一綫道、有出有入。若是未了底人、扶籬摸壁、依草附木。或教他放下、又打入莽莽蕩蕩荒然処去。若是得底人、二六時中、不依倚一物。雖不依倚一物、若露一機一境、作麼生摸索他。

頭は打不著」と。又た云く、「出と不出とを説かずんば、何処にか伊が問う時節有らん」と。古人の一問一答、時に応じ節に応じて、許多の事無し。你若し言を尋ね句を逐わば、了に交渉無からん。你若し能く言中に言を透得し、意中に意を透得し、機中に機を透得して、放って閑閑地ならしめば、方めて智門の答話の処を見ん。問う、仏未だ出世せざる時如何、牛頭未だ四祖に見えざる時如何、斑石の内混沌未分の時如何、父母未生の時如何。雲門道く、「古より今に至るまで、只だ是れ一段の事、是無く非無く、得無く失無く、生と未生と無し」と。古人這裏に到って、一綫道を放って、出有り入有り。若是未了底人ならば、扶籬摸壁、依草附木するのみ。或し他をして放下せしむれば、又た莽莽蕩蕩荒然たる処に打入し去らん。若是得底人ならば、二六時中、一物に依倚らず。一物に依倚らずと雖も、若し一機一境を露さば、作麼生か他を摸索せん。

＊問仏〜父母未生時如何〔三四字〕　蜀本に無し。

一 百丈懐海（七四九―八一四）。潙山霊祐（七七一―八五三）を教導した時の語。第一四則・本則の評唱に既出。二 雲門文偃（八六四―九四九）。三 霊雲志勤。潙山の法嗣。四「頭」は接尾語。五 うち当てた。「著」は、動作が目的に達したことを示す助詞。「不著」はその否定。六 すこしも〜ない。七「放教」と同じ。ここは、（意のままに）させる。八 相対を超越して無事な状態。九 一線道。ひとすじのヒント。一〇 籬にもたれ壁を手さぐりする。自主性を失った他者依存のたとえ。第七則・頌の著語に既出。一一 物の怪が草木をすみかとする。これも依存性のたとえ。「依草附葉」とも。一二 依りかかりをとっぱらう。一三「打」は強意の助字。一四 涯もない虚無の荒野。

這僧問道、蓮花未出水時如何。智門云、蓮花。便只攔問一答、不妨奇特。諸方皆謂之顛倒語。那裏如此。不見巌頭道、常貴未開口已前、猶較些子。古人露機処、已是漏逗了也。如今学者、不省古人意、只管去理論出水与未出水。有什麼交渉。不見僧問智門、如何是般若体。門云、蚌含明月。僧云、如何是般若用。門云、兎子懐胎。看他如此対答、天下人討

這の僧問道う、「蓮花未だ水を出でざる時如何」。智門云く、「蓮花」と。便ち只だ攔問の一答、不妨に奇特たり。諸方皆な之を顛倒の語と謂う。那裏にか此の如くならん。見ずや巌頭道く、「常に貴ぶらくは未だ口を開かざる已前、猶お些子く較えることを」と。古人、機を露す処、已に是れ漏逗し了れり。如今の学者、古人の意を省らず、只管に去きて、出水と未出水とを理論う。什麼の交渉か有らん。見ずや僧、智門に問う、「如何なるか是れ般若の体」。門云く、「蚌、明月を含む」。僧云く、「如何なるか是れ般若の用」。門云く、

他語脈不得。

「兎子懐胎す」と。看よ他は此の如く対答うるに、天下の人他の語脈を討ね得ず。

一「攔」は遮攔、さえぎる。僧の問いを断ち切る。　二 巌頭全豁(八二八―八八七)。　三 この一段、第九〇則・本則に見える。

或有人問夾山道、蓮花未出水時如何、只対他道、露柱灯籠。且道、与蓮花是同是別。出水後如何、対他道、杖頭挑日月、脚下太泥深。你且道、是不是、且莫錯認定盤星。雪竇忒煞慈悲、打破人情解、所以頌出。

或人有って夾山に問うて、「蓮花未だ水を出でざる時如何」と道わば、只だ他に対して道わん、「露柱灯籠」と。且く道え、蓮花と是れ同か是れ別か。「水を出でて後如何」と(問わるれば)、他に対して道わん、「杖頭に日月を挑げ、脚下太だ泥深し」と。你且く道え、是か不是か、且く定盤星を錯り認むること莫れ。雪竇忒煞だ慈悲にして、人の情解を打破す、所以に頌出す。

一 圜悟の自称。　二 第一五則・本則の評唱に既出。

【頌】　蓮花荷葉報君知、〔老婆心切。見成公案、文彩已彰。〕出水何如未出時。〔泥裏洗土塊。分開也好、不

【頌】　蓮花、荷葉と、君に報じて知らしむ、〔老婆心切。見成公案、文彩已に彰らか。〕水を出づるは未だ出でざる時に何如。〔泥裏に土塊を洗う。分開するも

可備個去也[四]。」江北江南問王老[五]、〔主[六]
人公在什麼処。問王老師作什麼。你
自[七]踏破草鞋。〕一[八]狐疑了一狐疑。〔一
坑埋却。自是你疑、不免疑情未息。
打云、会麼。〕

也た好し、備個し去るべからず。」江北江南、王老に
問うて、〔主人公什麼処にか在る。王老師に問うて什
麼か作ん。你自ら草鞋を踏破す。〕一狐疑い了って一
狐疑う。〔一坑に埋め却まん。自是より你疑って、疑
情未だ息まざるを免れず。打って云く、会すや。〕

一 すでに痕跡が表に出ている。 二 くらべてどうか。あとの方がすぐれているという含意を帯びる。
三 (出水と未出水の)二つに分けるのもよかろうが。 四 いい加減な分けかたをする。 五 ひろく師家を指す。もと南泉普願(俗姓王氏)の呼び名にはじまる。 六 それを問う者自身。 七 (探しまわって)わらじをすりへらすのが落ち。 八 狐は疑い深いとされる。疑い続け師に問う者が絶えない。

〔評唱〕智門本是浙人[一]。得得入川参[二]
香林[三]。既徹却回、住隋州[四]智門。雪竇
是他的子[五]。見得好窮玄極妙。直道、
蓮花荷葉報君知、出水何如未出時。
這裏要人直下便会。山僧道、未出水
時如何、露柱灯籠。出水後如何、杖
頭挑日月、脚下太泥深。你且莫錯認
定盤星。如今人咬人言句者、有甚麼

〔評唱〕智門は本と是れ浙の人なり。得得と川に入り、
香林に参ず。既に徹して却回り、隋州の智門に住す。
雪竇は是れ他の的子なり。見得して好く玄を窮め妙を
極む。直に道う、「蓮花、荷葉と君に報じて知らしむ、
水を出づるは未だ出でざる時に何如」と。這裏、人の
直下と便ち会せんことを要す。山僧は道う、「『未だ水
を出でざる時如何』は、露柱灯籠。『水を出でて後如
何』は、杖頭に日月を挑げ、脚下太だ泥深し。你且く

限。你且道、出水時是什麽時節、未出水時是什麽時節。若向這裏見得、許你親見智門。

雪竇道、你若不見、江北江南問王老。雪竇意道、你只管去江北江南、問尊宿出水与未出水、江南添得両句、江北添得両句、一重添一重、展転生疑。且道、何時得不疑去。如野狐多疑、氷凌上行、以聴水声、若不鳴方可過河。参学人若一狐疑了一狐疑、幾時得平穏去。

定盤星を錯り認むること莫れ」と。如今の人、人の言句を咬る者、甚麽の限りか有らん。你且く道え、水を出づる時は是れ什麽の時節ぞ、未だ水を出でざる時は是れ什麽の時節ぞ。若し這裏に向いて見得せば、你に許む親しく智門に見えたることを。

雪竇道く、「你若し見ずんば、江北江南、王老に問え」と。雪竇の意に道く、「你只管に江北江南に去きて、尊宿に水を出づると未だ水を出でざるとを問うて、江南にて両句を添え得、江北にて両句を添え得、一重に一重を添うれば、展転して疑いを生ぜん」と。且く道え、何時か疑わざることを得去らん。野狐の疑多くして、氷凌の上を行くに、以て水声を聴き、若し鳴らざれば方めて河を過るべしとするが如し。参学の人、若し一狐疑い了って一狐疑わば、幾時か平穏を得去らん。

一 いまの浙江省。 二 いまの四川省。 三 香林澄遠（九〇八―九八七）。 四 湖北省隋県。 五 嫡嗣、あとつぎ。

第二二則　雪峰鼈鼻蛇

垂示*云、[一]大方無外、細若隣虚。[二]擒縦非他、巻舒在我。必欲解粘去縛、直須[三]削迹呑声、人人[四]坐断要津、箇箇[五]壁立千仞。且道、是什麼人境界。試挙看。

第二二則　雪峰の鼈鼻蛇

垂示に云く、大方外無く、細なること隣虚の若し。擒縦他に非ず、巻舒我に在り。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り声を呑み、人人、要津を坐断し、箇箇、壁立千仞なるべし。且く道え、是れ什麼人の境界ぞ。試みに挙し看ん。

＊垂示～　福本では、第二一則の垂示と入れ替っている。

一（仏法は）広大無辺であり、微細さも無限である。「隣虚」は極微をいう。　二　捉えることと放つこと。　三　文字やことばの痕迹を無くす。　四　第一九則・頌の評唱に既出。　五　第八則の垂示に既出。

【本則】挙。[一]雪峰示衆云、南山有一条[二]鼈鼻蛇。〔見怪不怪、其怪自壊。大小大怪事、不妨令人疑著。〕汝等諸人、切須好看。〔*囮。一場漏逗。〕長慶云、今日堂中、[三]大有人喪身失命。〔[四]普州人送賊。[五]以己方人。〕僧挙似玄

【本則】挙す。雪峰、衆に示して云く、「南山に一条の鼈鼻蛇あり。〔怪を見て怪とせざれば其の怪自ら壊る。大小大なる怪事、不妨に人をして疑著せしむ。〕汝等諸人、切に須らく好く看るべし」。〔囮。一場の漏逗。〕長慶云く、「今日、堂中にて大に人の喪身失命する有り」。〔普州の人賊を送る。己を以て人に方ぶ。〕

沙。〔同坑無異土。奴[六]見婢殷勤。同病相憐。〕玄沙云、須是稜[七]兄始得。雖然如此、我即不恁麼。〔不免作野狐精見解。是什麼消息。毒気傷人。〕僧云、和尚作麼生。〔也好摎著這老漢。〕玄沙云、用南山作什麼。〔**[八]釣魚船上謝三郎。只這野狐精、猶較些子。喪身失命也不知。〕雲門以[九]拄杖攛向雪峰面前、作怕勢。〔怕他作什麼。[一〇]一子親得。一等是弄精魂。諸人試辨看。〕

僧、玄沙に挙似す。〔同坑に異土無し。奴は婢を見て殷勤。同病相憐む。〕玄沙云く、「須是らく稜兄にして始めて得し。此の如くなりと雖然も、我は即ち恁麼にせず」。〔野狐精の見解を作すことを免れず。是れ什麼たる消息ぞ。毒気人を傷る。〕僧云く、「和尚作麼生」。〔也た好し這の老漢に摎著むに。〕玄沙云く、「南山を用て什麼か作ん」。〔釣魚船上の謝三郎。只だ這の野狐精、猶お些子く較えり。喪身失命するも也た知らず。〕雲門、拄杖を以て雪峰の面前に攛向けて、怕るる勢を作す。〔他を怕れて什麼か作ん。一子のみ親しく得たり。一等じく是れ精魂を弄す。諸人試みに辨じて看よ。〕

*団　福本に無し。　**釣魚船上謝三郎　福本では「喪身失命」の上に在り。

一　雪峰義存（八二二—九〇八）。　二　鼻のひしゃげた毒蛇。第五則・本則の評唱に既出。　三　「大」は多くの意ではなく、たしかに、きっとの意。　四　普州は賊の多い所とされる。賊が賊を送る。長慶のおべんちゃらを皮肉る。　五　自分を基準にして他人を推し量る。下司の勘ぐり。　六　下男は下女と睦まじい。同じ穴のむじな。　七　長慶慧稜（八五四—九三二）のこと。「兄」は敬愛して呼ぶことば。　八　「謝三郎」は謝氏の三男で、玄沙師備（八三五—九〇八）のこと。玄沙は釣りを好んだという。　九　そ

の蛇を杖にひっかけ(た様をし)て、彼の面前に突き出した。一〇 わがものにしているのはこの一人の子だけだ。しかし〜。

【評唱】你若平展、一任平展。你若打破、一任打破。雪峰与巌頭・欽山同行。凡三到投子、九上洞山。後参徳山、方打破漆桶。一日率巌頭訪欽山。至鰲山店上阻雪。巌頭毎日只是打睡。雪峰一向坐禅。巌頭喝云、噇眠去。毎日床上、恰似七村裏土地相似。佗時後日、魔魅人家男女去在。峰自点胸云、某甲這裏未穏在、不敢自瞞。頭云、我将謂你已後向孤峰頂上、盤結草庵、播揚大教、猶作這箇語話。峰云、某甲実未穏在。頭云、你若実如此、拠你見処、一一通来。是処我与你証明、不是処与你剗却。峰遂挙、見塩官上堂、挙色空義、得

【評唱】你若し平展せば、一に平展するに任す。你若し打破せば、一に打破するに任す。雪峰は巌頭・欽山と同行なり。凡そ三たび投子に到り、九たび洞山に上る。後、徳山に参じて、方めて漆桶を打破す。一日巌頭を率いて欽山を訪わんとす。鰲山の店上に至って雪に阻まる。巌頭は毎日只だ是れ打睡す。雪峰は一向に坐禅す。巌頭喝して云く、「噇眠し去れ。毎日床上にあるは、恰も七村裏の土地の似くに相似たり。佗時後日、人家の男女を魔魅し去らん在」と。峰自ら点胸して云く、「某甲這裏未だ穏やかならず、敢て自ら瞞かず」。頭云く、「我、你は已後孤峰頂上に向いて草庵を盤結して、大教を播揚めんと将謂えるに、猶お這箇の語話を作すか」と。峰云く、「某甲実に未だ穏やかならず」。頭云く、「你若し実に此の如くならば、你が見処に拠って、一一に通じ来たれ。是処は我你が与に証

箇入処。頭云、此去三十年[4]、切忌挙著。峰又挙、見洞山過水頌[5]、得箇入処。頭云、若与麼、自救不了。後到[6]徳山問、従上宗乗中事、学人還有分也無。山打一棒、道什麼。我当時如桶底脱相似。頭遂喝云、你不聞道[7]、従門入者、不是家珍。峰云、他後如何即是。頭云、他日若欲播揚大教、一一従自己胸襟流出将来、与我蓋天蓋地去。峰於言下大悟、便礼拝起来、連声叫云、今日始是鰲山成道、今日始是鰲山成道。

明し、不是処は你が与に剗却せん」。峰遂に挙す、「塩官の上堂に色空の義を挙するを見て、箇の入処を得たり」。頭云く、「此去三十年、切に忌む挙著することを」。峰又た挙す、「洞山の過水の頌を見て、箇の入処を得たり」。頭云く、「若し与麼ならば、自らをも救い了せず」。（雪峰云く）「後徳山に到って、『従上の宗乗中の事につき、学人還た分有り也無』と問うに、山打つこと一棒して、『什麼を道うぞ』と。我、当時桶底の脱するが如くに相似たり」。頭、遂に喝して云く、「你聞道かずや、『門より入る者は、是れ家珍にあらず』」と。峰云く、「他後如何にせば即ち是ならん」。頭云く、「他日若し大教を播揚めんと欲せば、一一自己の胸襟より流出し将ち来たりて、我が与に蓋天蓋地にし去れ」と。峰、言下に大悟し、便ち礼拝し起来るや連声し叫んで云く、「今日始めて是れ鰲山にて道を成ず、今日始めて是れ鰲山にて道を成ず」と。

一　平常のままに提示する。　二　巌頭全奯（八二八―八八七）。　三　欽山文邃。洞山良价の法嗣。　四　投

子大同(八一九—九一四)。翠微無学の法嗣。五 洞山良价(八〇七—八六九)。六 徳山宣鑑(七八二—八六五)。七 眠りこけておれ。八 坐禅をする所。九 七村合祀の土地神。一〇 第八則・頌の著語に既出。一一 胸を指さす。一二 どの一つもすべて。一三 塩官斉安(?—八四二)。馬祖道一の法嗣。一四 これから以後。一五 洞山が水に映る自分の姿を見て悟ったときの頌。「切忌従他覓、迢迢与我疎。我今独自往、処処得逢渠。渠今正是我、我今不是渠。応須恁麼会、方得契如如」。一六 第五則・本則の評唱を参照。一七 以後。こののち。

後[一]回閩中住[二]象骨山。自貽作頌云、
[三]人生倏忽暫須臾、浮世那能得久居。
[四]出嶺纔登三十二、[五]入閩早是四旬餘。
他非不用頻頻挙、己過応須旋旋除。
奉報満朝[六]朱紫貴、[七]閻王不怕佩金魚。
*凡上堂示衆云、一一蓋天蓋地。更不説玄説妙、亦不説心説性。突然独露、[八]如大火聚、近之則燎却面門。似太阿剣、擬之則喪身失命。若也佇思停機、則没干渉。

後に閩中に回って、象骨山に住す。自ら貽すに頌を作って云く、「人生倏忽たり暫くにして須臾、浮世那ぞ能く久しく居るを得ん。嶺を出づるとき纔に三十二に登とするも、閩に入れば早くも是れ四旬餘。他の非は頻頻と挙することを用いず、己が過は応に須らく旋と除くべし。満朝朱紫の貴きに報じ奉る、閻王は怕れず金魚を佩ぶるものを」と。凡そ上堂するや、衆に示して云く、「一一蓋天蓋地せよ」と。更に玄を説き妙を説くということをせず、亦た心を説き性を説くということをせず。突然として独露すること大火聚の如く、之に近づけば則ち面門を燎却す。太阿の剣に似て、之を擬すれば則ち喪身失命す。若也佇思停機せば、則

ち干渉なし。

＊凡上堂云衆云　福本は「凡上堂説法」。

一 福建省の古名。 二 雪峰山の別名。 三 人の一生はたちまちに過ぎ去るほんの一瞬でしかない。 四 飛猿嶺を踰え、諸方行脚に出たこと。 五 閩に帰ってみれば四十餘歳になっていた。 六 朝廷に居並ぶ高位高官の人びとよ。 七 高官の服装など閻魔大王の眼中にはないぞ。「金魚」は金魚袋、高官が帯につけるもの。 八 第一六則・頌の評唱に既出。

只如百丈問黄檗、甚処去来。檗云、大雄山下採菌去来。丈云、還見大虫麼。檗便作虎声。丈便拈斧作斫勢。檗遂打百丈一摑。丈吟吟而笑。便帰陞座、謂衆云、大雄山有一大虫。汝等諸人、切須好看。老僧今日、親遭一口。趙州凡見僧便問、曾到此間麼。云、曾到。或云、不曾到。州総云、喫茶去。院主云、和尚尋常問僧、曾到与不曾到、総道喫茶去。意旨如何。州云、院主。主応諾。州云、喫茶去。

只だ百丈の如きは、黄檗に問う、「甚処へか去き来たる」。檗云く、「大雄山下に菌を採りに去き来たる」。丈云く、「還た大虫を見るや」。檗便ち虎の声を作す。丈便ち斧を拈りて斫る勢を作す。檗遂に百丈を打つこと一摑。丈吟吟として笑う。便ち帰って座に陞り衆に謂って云く、「大雄山に一の大虫有り。汝等諸人、切に須らく好く看るべし。老僧今日、親ら一口に遭えり」と。趙州凡そ僧を見ては便ち問う、「曾て此間に到るや」。云く、「曾て到る」。或は云く、「曾て到らず」と。州総じて云く、「喫茶去」と。院主云く、「和尚尋常、僧に問うに、『曾て到る』と『曾て到らざ

一〇紫胡門下立一牌。牌上書云、紫胡有一狗。上取人頭、中取人腰、下取人脚。擬議則喪身失命。或新到纔相看、師便喝云、看狗。僧纔回首、師便帰方丈。

る』と(答うるに)、総じて道う『喫茶去』と。意旨如何」。州云く、「院主」と。主応諾す。州云く、「喫茶去」と。紫胡門下に一つの牌を立つ。牌の上に書して云く、「紫胡に一ぴきの狗有り。上人の頭を取り、中人の腰を取り、下人の脚を取る。擬議わば則ち喪身失命す」と。或は新到の相看えんとするや纔や、師便ち喝して云く、「狗を看よ」と。僧、回首くや纔や、師便ち方丈に帰る。

一 百丈懐海(七四九—八一四)。 二 黄檗希運、百丈の法嗣。 三 百丈山の別名。 四 虎。怜悧俊抜な僧の喩え。 五 〜に拳骨を一発くらわす。 六 声をおし殺して笑うさま。 七 趙州従諗(七七八—八九七)。 八 茶を飲みに行け(目を覚ましてこい)。 九 寺の執事、事務長。 一〇 紫胡利蹤(八〇〇—八八〇)。一に子湖に作る。

正如雪峰道南山有一条鼈鼻蛇、汝等諸人、切須好看、正当恁麼時、你作麼生祇対。不躡前蹤。試請道看。到這裏、也須是会格外句始得。一切公案語言、挙得将来、便知落処。看

正に雪峰の「南山に一条の鼈鼻蛇有り、汝等諸人切に須らく好く看るべし」と道うが如きは、正当恁麼の時、你作麼生か祇対えん。前蹤を躡まざれ。試みに請う道い看よ。這裏に到って、也た須是らく格外の句を会して始めて得し。一切の公案語言、挙し得将ち来た

他恁麼示衆。且不与你説行説解、還将情識測度得麼。是他家児孫、自然道得恰好。所以古人道、承言須会宗、勿自立規矩。言須有格外、句須要透関。若是語不離窠窟、堕在毒海中也。雪峰恁麼示衆、可謂無味之談、塞断人口。

長慶玄沙、皆是他家屋裏人、方会他恁麼説話。只如雪峰道南山有一条鼈鼻蛇、諸人還知落処麼。到這裏、須是具通方眼始得。不見真浄有頌云、打鼓弄琵琶、相逢両会家。雲門能唱和、長慶解随邪。古曲無音韻、南山

一　まさにこういう発問に直面した時。　二　雪峰門下の長慶・玄沙・雲門を指す。　三　石頭希遷（七〇〇—七九〇）『参同契』の句。　四　第一七則・本則の評唱に既出。

れば、便ち落処を知らん。看よ他の恁麼に衆に示すを。且らく你が与に行を説き解を説くことをせず、還た情識を将て測度りて得しきや。是れ他の家の児孫、自然に道い得て恰好なり。所以に古人道う、「言を承けては須らく宗を会すべし、自ら規矩を立つること勿れ」と。言は須らく格外有るべく、句は須らく透関を要すべし。若是語、窠窟を離れざれば、毒海の中に堕在ん。雪峰恁麼に衆に示すは「無味の談、人の口を塞断ぐ」と謂うべし。

長慶・玄沙は皆に是れ他家の屋裏の人にして、方めて他の恁麼の説話を会す。只だ雪峰の「南山に一条の鼈鼻蛇有り」と道うが如きは、諸人還た落処を知るや。這裏に到らば、須是らく通方の眼を具して始めて得し。見ずや、真浄に頌有り、云く、「鼓を打ち琵琶を弄し、相逢う両会家。雲門能く唱和し、長慶解く邪に随う。

鼈鼻蛇。何人知此意、端的是玄沙。

古曲に音韻無し、南山の鼈鼻蛇。何人か此の意を知らん、端的是れ玄沙」と。

一 十方通達、無碍の見識。二 真浄克文（一〇二五―一一〇二）。三 名手。その道の通人。四 悪乗りして調子を合わせる。

只如長慶恁麼祇対、且道、意作麼生。到這裏、如撃石火、似閃電光、方可搆得。若有纖毫去不尽、便搆他底不得。可惜許、人多向長慶言下、生情解道、堂中纔有聞処、便是喪身失命。有者道、元無一星事、平白地[一]上説這般話疑人。[二]人聞他道南山有一条鼈鼻蛇、你便疑著。若恁麼会、且得没交渉。只去他言語上作活計。既不恁麼会、又作麼生会。

只だ長慶恁麼に祇対うるが如きは、且く道え、意作麼生。這裏に到らば、撃石火の如く、閃電光の似くして方めて搆り得べし。若し纖毫も去り尽さざること有らば、便ち他底には搆り得ざらん。可惜許、人多く長慶の言下に向いて、情解を生じて道う、「堂中纔に聞く処有らば、便是ち喪身失命せん」と。有る者は道う、「元一星事も無きに、平白地上に這般る話を説いて人を疑わしむ。人他の『南山に一条の鼈鼻蛇有り』と道うを聞いて、你便ち疑著す」と。若し恁麼に会せば、且得没交渉。只だ他の言語の上に去いて活計を作すのみ。既に恁麼に会せずんば、又た作麼生か会せん。

一 何でもない、あたりまえのところに。二 この「人」、あるいは下文の「你」は衍字か。

後来有僧、挙似玄沙。玄沙云、須

後来に僧有り、玄沙に挙似す。玄沙云く、「須是ら

是稜兄始得。雖然如是、我即不恁麼。僧云、和尚又作麼生。沙云、用南山作什麼。但看玄沙語中、便有出身処。[一] 便云、用南山作什麼。若不是玄沙、也大難酬対。只如他恁麼道南山有一条鼈鼻蛇、且道、在什麼処。到這裏、須是向上人、方会恁麼説話。古人道、釣魚船上謝三郎、不愛南山鼈鼻蛇。[二]

く稜兄にして始めて得し。是の如くなりと雖然も、我は即ち恁麼にいわず」。僧云く、「和尚又た作麼生」。沙云く、「南山を用て什麼か作ん」と。但だ看よ玄沙の語中に便ち出身の処有ることを。便ち云く、「南山を用て什麼か作ん」と。若し是れ玄沙にあらずんば、也た大いに酬対し難からん。只だ他恁麼に「南山に一条の鼈鼻蛇有り」と道うが如きは、且く道え、什麼処にか在る。這裏に到らば、須是らく向上の人にして、方めて恁麼に説話を会すべし。古人道う、「釣魚船上の謝三郎、南山の鼈鼻蛇を愛せず」と。

一　一切の分別・束縛を脱したところ。第八則・本則の評唱に既出。　二　雪竇の上堂語には「不愛南山鼈鼻」とあり、これは圜悟の改作か。

却到雲門、以拄杖攛向雪峰面前作怕勢。雲門有弄蛇手脚、[一] 不犯鋒鋩。[二] 明頭也打著、暗頭也打著。他尋常為人、如舞太阿剣相似。有時飛向人眉毛眼睫上、有時飛向三千里外取人頭。

却に雲門に到るや、拄杖を雪峰の面前に攛向けて怕るる勢を作す。雲門は蛇を弄する手脚有って、鋒鋩を犯さず。明頭も也た打著、暗頭も也た打著。他の尋常人の為にすること、太阿の剣を舞すが如くに相似たり。有る時は人の眉毛眼睫の上に飛向び、有る時は三千里

雲門攛拄杖作怕勢、且不是弄精魂。他莫也是喪身失命麽。作家宗師、終不去一言一句上作活計。雪竇只為愛雲門契証得雪峰意、所以頌出。

外に飛向んで人の頭を取る。雲門、拄杖を攛して怕るる勢を作すは、且く是れ精魂を弄するにあらずや。他也た是れ喪身失命すること莫きや。作家の宗師は終に一言一句の上に去いて活計を作さず。雪竇は只だ雲門の、雪峰の意を契証し得たることを愛するが為に、所以に頌出す。

【頌】象骨巌高人不到、〔千箇万箇、摸索不著。非公境界。〕到者須是弄蛇手。〔是精識精、是賊識賊。成群作隊、作什麽。也須是同火始得。〕稜師備師不奈何、〔一状領過。放過一著。〕喪身失命有多少。〔罪不重科。帯累平人。〕韶陽知、〔猶較些子。這老漢只具一隻眼。老漢不免作伎倆。〕重撥草、〔落草漢有什麽用処。

【頌】象骨は巌高くして人到らず、〔千箇万箇なるも、摸索不著。公の境界に非ず。〕到る者は須是らく弄蛇手なるべし。〔是れ精、精を識り、是れ賊、賊を識る。群を成し隊を作して什麽か作ん。也た須是らく同火にして始めて得し。〕稜師・備師、奈何ともせず、〔一状に領過す。一著を放過す。〕喪身失命するもの多少か有る。〔罪重ねて科せず。平人を帯累す。〕韶陽は知り、〔猶お些子く較えり。這の老漢只だ一隻眼を具す。老漢伎倆を作すことを免れず。〕重ねて草を撥う、

一　蛇使いの本領。　二　「明頭」は、個々のものの在りようが明らかな状態。ことばで言えるところ。「暗頭」は、一切が未分化の状態。ことばの届かぬところ。　三　ぴったりと会得する。

果然。在*什麼処。便打。〕南北東西無処討。〔有麼、有麼。闍黎眼瞎。〕忽然突出拄杖頭、〔看。高**著眼。便打。〕抛対雪峰大張口。〔自作自受。呑却千箇万箇、済什麼事。天下人摸索不著。〕大張口兮同閃電、〔両重公案。果然。頼有末後句。〕剔起眉毛還不見。〔蹉過了也。五湖四海覓恁麼人、也難得。如今在什麼処。〕如今蔵在乳峰前、〔向什麼処去也。大小雪竇、也作這去就。山僧今日、也遭一口。〕来者一一看方便。〔瞎。***莫向脚跟下看。看取上座脚跟下。著一箭了也。〕師高声喝云、看脚下。〔賊過後張弓。第二頭、第三頭。重言不当吃。〕

〔落草の漢什麼の用処か有らん。果然して。什麼処にか在る。便ち打つ。〕南北東西討ぬるに処無し。〔有りや、有りや。闍黎は眼瞎せり。〕忽然と拄杖頭を突き出し、〔看よ。高く眼を著けよ。便ち打つ。〕雪峰に抛対げて大いに口を張く。〔自ら作して自ら受く。千箇万箇を呑却むも什麼事をか済さん。天下の人摸索不著。〕大いに口を張くや閃電に同じ、〔両重の公案。果然して。頼に末後の句有り。〕眉毛を剔起するも還た見えず。〔蹉過い了れり。五湖四海に恁麼の人を覓むるも也た得難し。如今什麼処にか在る。〕如今、乳峰の前に蔵在す、〔什麼処に向ってか去く。大小の雪竇も也た這の去就を作す。山僧も今日也た一口に遭う。〕来たる者は一一方便するを看よ。〔瞎。脚跟下を看ること莫れ。上座の脚跟下を看取よ。一箭を著け了れり。〕師、高声に喝して云く、「脚下を看よ」。〔賊過ぎし後に弓を張る。第二頭、第三頭。重言は吃に当らず。〕

* 在什麼処便打　福本に無し。
** 看高著眼便打　福本は「高著眼看」。
*** 瞎〜了也〔一九

字〕 福本は「瞎漢向脚跟下看、看取闍梨脚跟下、著了也」。

一 象骨山、すなわち雪峰(山)。二 同伙。仲間。三 長慶慧稜と玄沙師備。四 どれほどの男が死んだことか。大勢が毒にあてられた。五 雲門文偃のこと。六 長慶と玄沙が落ちこんだ荒れ草をあわせて払いのける。七 (その毒蛇は)まともに雪峰に投げつけられて。八 かっと眼を見ひらく。第二五則・頌にも。九 津々浦々、世界中。一〇 雲門の杖は乳峰すなわち雪竇山にかくされている。一一 これは、前の句の著語か。一二 用心せよ。一三 それ、矢に当ってしまったぞ。一四 足もとの蛇に気をつけよ。一五 くり返すのはどもりのせいではない。人の話をちゃんと聞け。

〔評唱〕 象骨巌高人不到、到者須是弄蛇手。雪峰山下有象骨巌。雪峰機鋒高峻、罕有人到他処。[一]雪竇是他屋裏人、毛羽相似、同声相応、同気相求。也須是通方作者、共相証明。只這鼈鼻蛇、也不妨難弄、須是解弄始得。[二]若不解弄、反被蛇傷。五祖先師道、此鼈鼻蛇、[三]須是有不傷犯手脚底機、於他七寸上、一捏捏住、便与老僧把手共行。長慶玄沙有這般手脚。

〔評唱〕「象骨は巌高くして人到らず、到る者は須是らく弄蛇手なるべし」。雪峰山下に象骨巌有り。雪峰は機鋒高峻にして、人の他の処に到るもの有ること罕なり。雪竇は是れ他の屋裏の人なれば、毛羽相似て、同声相応じ、同気相求む。也た須是らく通方の作者にして、共に相証明すべし。只だ這の鼈鼻蛇、也た不妨に弄し難し。須是らく解く弄して始めて得し。若し解く弄せずんば、反って蛇に傷つけられん。五祖先師道く、「此の鼈鼻蛇、須是らく手脚を傷犯ざる底の機有りて、他の七寸上を一捏に捏住まば、便ち老僧と手を

雪竇道、稜師備師不奈何。人多道、長慶玄沙不奈何、所以雪竇独美雲門。且得没交渉。殊不知三人中、機無得失、只是有親疎。且問諸人、什麼処是稜師備師不奈何処。喪身失命有多少、此頌長慶道、今日堂中、大有人喪身失命。四到這裏、須是有弄蛇手、子細始得。

把って共に行くべし」と。長慶・玄沙には這般る手脚有り。雪竇道く、「稜師・備師奈何ともせず」と。人多く道う、「長慶・玄沙は奈何ともせず、所以に雪竇は独り雲門を美む」と。且得没交渉。殊に知らず三人の中、機に得失無く、只だ是れ親疎のみ有ることを。且く諸人に問う、什麼処か是れ稜師・備師奈何ともせざる処ぞ。「喪身失命するもの多少か有る」とは、此れは長慶の「今日、堂中にて大に人の喪身失命する有り」と道うを頌す。這裏に到らば、須是らく弄蛇手有って、子細にして始めて得し。

一『周易』乾卦文言伝の句。　二 圜悟克勤の師、五祖法演(?—一一〇四)。　三 蛇の頸から七寸の間。急所。　四 以下、テクストに乱れがあるか。

雪竇出他雲門。所以一時撥却、独存雲門一箇道、韶陽知重撥草。蓋為雲門知他雪峰道、南山有一条鼈鼻蛇落処、所以重撥草。雪竇頌到這裏、更有妙処云、南北東西無処討。你道、

雪竇は他の雲門より出づ。所以に一時に撥却けて、独り雲門一箇を存して道く、「韶陽は知り、重ねて草を撥う」と。蓋し雲門は他の雪峰の「南山に一条の鼈鼻蛇有り」と道う落処を知るが為に、所以に重ねて草を撥う。雪竇頌して這裏に到って、更に妙処有りて云

在什麼処。忽然突出拄杖頭、元来只在這裏。你不可便向[二]拄杖頭上作活計去也。雲門以拄杖攛向雪峰面前、作怕勢。雲門便以拄杖作鼈鼻蛇用。有時却云、[三]拄杖子化為龍、呑却乾坤了也。山河大地甚処得来。只是一条拄杖子、有時作龍、有時作蛇。為什麼如此。到這裏方知、古人道、[四]心随万境転、転処実能幽。

く、「南北東西討ぬるに処無し」と。你道え、什麼処にか在る。「忽然と拄杖頭を突き出す」と、元来只だ這裏に在り。你便ち拄杖頭上に向いて活計を作し去くべからず。雲門、拄杖を雪峰の面前に攛向けて怕るる勢を作す。雲門は便ち拄杖を以て鼈鼻蛇と作して用う。有る時は却って云う、「拄杖子化して龍と為り、乾坤を呑却し了れり。山河大地甚処よりか得来たる」と。只だ是れ一条の拄杖子、有る時は龍と作り、有る時は蛇と作る。為什麼にか此の如くなる。這裏に到って方めて知る、古人の「心は万境に随って転じ、転ずる処実に能く幽なり」と道えるを。

頌道、拋対雪峰大張口、大張口兮同閃電。雪竇有餘才、拈出雲門毒蛇云、只這大張口兮同於閃電相似。你若擬議、則喪身失命。剔起眉毛還不

頌して道く、「雪峰に拋対げて大いに口を張く、大いに口を張くや閃電に同じ」と。雪竇は餘才有り、雲門の毒蛇を拈出して云く、「只だ這の大いに口を張くや閃電に同じく相似たり」と。你若し擬議わば、則ち

一 (長慶・玄沙を)はじき出す。　二 杖という道具を修行の指針にする。　三 第六〇則・本則に見える。
四 インドの第二二祖・摩拏羅尊者の伝法偈。『臨済録』示衆(岩波文庫一〇三頁)にも。

見、向什麼処去也。雪竇頌了、須去活処為人。将雪峰蛇自拈自弄、不妨殺活臨時。要見麼。云、如今蔵在乳峰前、乳峰乃雪竇山名也。雪竇有頌云、石牕四顧滄溟窄、寥寥不許白雲白。長慶・玄沙・雲門、雖弄得了不見。却云、如今蔵在乳峰前、来者一一看方便、雪竇猶渉廉纖在。不言便用、却高声喝云、看脚下。従上来有多少人拈弄。且道、還曾傷著人、不曾傷著人。師便打。

喪身失命せん。「眉毛を剔起するも還た見えず」とは、什麼処に向ってか去く。雪竇頌し了って、須らく活処に去いて人の為にすべし。雪峰の蛇を将て自ら拈じ自ら弄するは、不妨に殺活時に臨む。見んと要するや。云く、「如今、乳峰の前に蔵在す」とは、乳峰は乃ち雪竇山の名なり。雪竇に頌有り云く、「石牕より四顧すれば滄溟も窄し、寥寥として許さず白雲の白きことを」と。長慶・玄沙・雲門、弄し得たりと雖も了に見ず。却って云く、「如今乳峰の前に蔵在す、来たる者は一一に方便するを看よ」とは、雪竇猶お廉纖に渉る在。「便ち用いよ」と言わずして、却って高声に喝して云く、「脚下を看よ」と。従上来多少の人の拈弄する有らん。且く道え、還た曾て人を傷著けたるか、曾て人を傷著けざるか。師便ち打つ。

＊師便打　福本は「拈拄杖便打」。

一『祖英集』上に見える。二「牕」は「窓」の異体字。三 山頂からの景色は広遠で雲さえもたなびかせぬ。四 微に入り細をうがつ。

第二三則　保福妙峰頂

垂示云、玉将火試、金将石試、剣将毛試、水将杖試。至於衲僧門下、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、要見深浅、要見向背。且道、将什麼試。請挙看。

【本則】挙。保福長慶遊山次、〔這両箇落草漢。〕福以手指云、只這裏便是妙峰頂。〔平地上起骨堆。切忌道著。掘地深埋。〕慶云、是則是、可惜許。〔若不是鉄眼銅睛、幾被惑了。同病相憐。両箇一坑埋却。〕雪竇著語云、今日共這漢遊山、図箇什麼。〔不妨減入斤両、猶較些子。傍

第二三則　保福の妙峰頂

垂示に云く、玉は火を将て試み、金は石を将て試み、剣は毛を将て試み、水は杖を将て試む。衲僧門下に至っては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶に深浅を見んことを要し、向背を見んことを要す。且く道え、什麼を将てか試みん。請う挙し看ん。

【本則】挙す。保福と長慶と、山に遊びし次、〔這の両箇の落草の漢。〕福、手を以て指して云く、「只だ這裏こそは便ち是れ妙峰頂」。〔平地上に骨堆を起す。切に忌む道著ことを。地を掘って深く埋めん。〕慶云く、「是なることは則ち是なるも、可惜許」。〔若し是れ鉄眼銅睛にあらずんば幾んど惑了されん。同病相憐む。両箇とも一坑に埋め却まん。〕雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に山に遊ばば、箇の什麼をか図らん」。

人按剣。〕復云、百千年後不道無、只是少。〔少売弄。也是雲居羅漢。〕清云、若後挙似鏡清。〔有好有悪。〕清云、若不是孫公、便見髑髏遍野。〔同道者方知。大地茫茫愁殺人。奴見婢慇懃。設使臨済・徳山出来、也須喫棒。〕

〔不妨に人の斤両を減ずるも、猶お些子く較えり。傍人剣を按ず。〕復た云く、「百千年後も無しとは道わず、只だ是れ少なり」。〔少売弄。也た是れ雲居の羅漢。〕後に鏡清に挙似す。〔好有り悪有り。〕清云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏の野に遍きを見ん」。〔同道の者にして方めて知る。大地茫茫として人を愁殺えしむ。奴は婢を見て慇懃。設使臨済・徳山出で来たらば、也た須らく棒を喫すべし。〕

＊有好有悪　福本に無し。

一 保福従展（？―九二八）。雪峰の法嗣。二 長慶慧稜（八五四―九三二）。雪峰の法嗣。三『華厳経』入法界品で、善財童子が最初に訪ねる徳雲比丘の住する山。四 余計なことをする。言わずもがなのことを言う。「骨堆」は、土を盛りあげた小山。孤堆。五 そうにはちがいないが、すこしちがうのが惜しい。六（保福も長慶も）ともに似たりよったりダメな奴。七 二人とも一つ穴に埋めてしまえ。八 人（保福・長慶）の値打ちを下げた。「減人声価」（第四九則・本則の著語および評唱）とも。九 剣の柄に手をかけている者がわきにいるぞ。側面に敵あり。一〇 鏡清道怤（八六八？―九三七）。保福・長慶と同じく雪峰の法嗣。一一 孫公（長慶）のおかげで、死人の続出を免れた。「孫」は長慶の俗姓。一二 そのドクロに蔽われた荒涼たる大地。一三 臨済義玄（？―八六六）と徳山宣鑑（七八二―八六五）。機鋒峻烈な禅風によって並称される。

〔評唱〕保福・長慶・鏡清、総承嗣雪峰。他三人同得同証、同見同聞、同拈同用、一出一入、遞相挨拶。蓋為他是同条生底人、挙著便知落処。在雪峰会裏、居常問答、只是他三人。古人行住坐臥、以此道為念。所以挙著便知落処。一日遊山次、保福以手指云、只這裏便是妙峰頂。如今禅和子、恁麼問著、便只口似匾担。頼値問著長慶。你道、保福恁麼道、図箇什麼。古人如此、要験他有眼無眼。是他家裏人、自然知他落処、便対他道、是即是、可惜許。且道、長慶恁麼道、意旨如何。不可一向恁麼去也。似則似、罕有等閑無一星事。頼是長慶識破他。

〔評唱〕保福・長慶・鏡清、総て雪峰を承嗣ぐ。他の三人は同得同証、同見同聞、同拈同用、一出一入、遞相に挨拶す。蓋し他は是れ同条に生ずる底の人なるが為に、挙著すれば便ち落処を知る。雪峰の会裏に在って、居常問答するは、只だ是れ他の三人なり。古人の行住坐臥、此の道を以て念と為す。所以に挙著すれば便ち落処を知る。一日、山に遊びし次、保福手を以て指して云く、「只だ這裏こそは便ち是れ妙峰頂」と。如今の禅和子、恁麼に問著わるれば、便ち只だ口匾担に似たらん。頼に長慶に問著うに値う。你道え、保福恁麼に道うは、箇の什麼をか図る。古人此の如く、他の有眼か無眼かを験せんと要す。是れ他の家裏の人は、自然に他の落処を知って、便ち他に対えて道う、「是なることは即ち是なるも、可惜許」と。且く道え、長慶恁麼に道う意旨如何。一向に恁麼にし去るべからず。似たることは則ち似たるも、等閑と一星事も無しということ有るは罕なり。頼是に長慶は他を識破す。

一 相手に切りこむ。鋭く迫り、問い詰める。二 同じ教脈の人。三 悠々閑々として何ごとも無い。

雪竇著語云、今日共這漢遊山、図箇什麼。且道、落在什麼処。復云、百千年後不道無、只是少。雪竇解点胸[一]。正似黄檗[二]道、不道無禅、只是無師。雪竇恁麼道、也不妨険峻。若不是同声相応[三]、争得如此孤危奇怪[四]。此謂之著語、落在両辺[五]。雖落在両辺、却不住両辺。

雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に山に遊びて、箇の什麼をか図る」と。且く道え、什麼処にか落在す。復た云く、「百千年後も無しとは道わず、只だ是れ少なり」と。雪竇解く点胸す。正に黄檗の「禅無しとは道わず、只だ是れ師無し」と道うに似たり。雪竇恁麼に道うは、也た不妨に険峻なり。若し是れ同声相応ずるにあらずんば、争か此の如く孤危奇怪なることを得ん。此れ之を著語と謂い、両辺に落在つ。両辺に落在つと雖も、却って両辺に住まらず。

一 自分の胸を指でトンと突く。自信たっぷりのしぐさ。二 黄檗希運。第一一則・本則を参照。三 『周易』乾卦文言伝の句。ここは以心伝心の仲をいう。四 険峻で特異。五 ここでは、自ら敢えて相対化する立場を取ること。

後挙似鏡清。清云、若不是孫公、便見髑髏偏野。孫公乃長慶俗姓也。不見僧問趙州、如何是妙峰孤頂。州云、老僧不答你這話。僧云、為什麼

後に鏡清に挙似す。清云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏の野に偏きを見ん」と。「孫公」は乃ち長慶の俗姓なり。見ずや僧、趙州に問う、「如何なるか是れ妙峰孤頂」。州云く、「老僧、你に這の話を答

不答這話。州云、我若答你、恐落在平地上。

えず」。僧云く、「為什麼にか這の話を答えざる」。州云く、「我若し你に答うれば、恐らくは平地上に落在ちん」と。

教中説、妙峰孤頂徳雲比丘、従来不下山。善財去参、七日不逢。一日却在別峰相見。及乎見了、却与他説一念三世、一切諸仏、智慧光明、普見法門。徳雲既不下山、因什麼、却在別峰相見。若道他下山、教中道、徳雲比丘、従来不曾下山、常在妙峰孤頂。到這裏、徳雲与善財、的的在那裏。

教中に説く、「妙峰孤頂の徳雲比丘、従来山を下りず。善財去きて参ずるも、七日逢わず。一日却って別峰に在いて相見ゆ。見え了るに及んで、却って他の与に一念三世の一切諸仏、智慧の光明と普見の法門とを説く」と。徳雲既に山を下りず、什麼に因ってか、却って別峰に在いて相見ゆ。若し他山を下ると道わば、教中に道う、「徳雲比丘、従来曾て山を下りず、常に妙峰孤頂に在り」と。這裏に到って、徳雲と善財と、的的しく那裏にか在る。

自後李長者、打葛藤。打得好。道、妙峰孤頂、是一味平等法門。一一皆

自後に李長者、葛藤を打す。打し得て好し。道く、「妙峰孤頂は、是れ一味平等の法門。一一皆な真、一

一 趙州従諗(七七八—八九七)。二 安穏としたところにはまりこんでしまうだろう。

一『華厳経』入法界品に見える。二 善財童子が歴参した五三人の善知識の一人。三 善財童子。『華厳経』入法界品の主人公。四「一念」は一瞬間、「三世」は過去・現在・未来。

真、一一皆全、向無得無失、無是無非処独露。所以善財不見。

到称性処、如眼不自見、耳不自聞、指不自触、如刀不自割、火不自焼、水不自洗。到這裏、教中大有老婆相為処。所以放一線道、於第二義門、立賓立主、立機境、立問答。所以道、諸仏不出世、亦無有涅槃。方便度衆生、故現如斯事。且道、畢竟作麼生免得鏡清・雪竇恁麼道去。当時不能拍拍相応、所以尽大地人髑髏徧野。鏡清恁麼証将来、那両箇恁麼用将来。雪竇後面頌出更顕煥。頌云、

一皆な全し、得無く失無く是無く非無き処に向(お)いて独露す。所以(ゆえ)に善財見(まみ)えず」と。

称性(しょうしょう)の処に到らば、眼自ら見ず、耳自ら聞かず、指自ら触れざるが如く、刀自ら割かず、火自ら焼かず、水自ら洗わざるが如し。這裏(ここ)に到って、教中大いに老婆相為にする処有り。所以(ゆえ)に一線道を放(はな)ち、第二義門に於て、賓を立て主を立て、機境を立て、問答を立つ。所以に道(い)う、「諸仏出世せず、亦た涅槃有ること無(な)し。方便もて衆生を度す、故に斯の如き事を現ず」と。且(しばら)く道(い)え、畢竟作麼生(そもさん)か鏡清・雪竇の恁麼(いんも)に道(い)うを免れ得去らん。当時拍拍相応ずること能わず、所以に尽大地の人の髑髏、野に徧きなり。鏡清恁麼(いんも)に証し将(も)ち来たり、那(か)の両箇(ふたり)も恁麼(いんも)に用い将(も)ち来たる。雪竇後面に頌出して更に顕煥(あきらか)なり。頌に云く、

一 李通玄(六三五—七三〇。一説に六四六—七四〇)。在俗の華厳経研究者で『新華厳経論』四〇巻を著す。

一 真実そのものと一体化した境地。 二 『華厳経』に見える金剛幢菩薩の偈による。 三 拍子(ひょうし)の一節

一節に唄が乗っていく。互いの呼吸が合う。

【頌】　妙峰孤頂草離離、〔和身没却。脚下已深数丈也。〕拈得分明付与誰。〔用作什麼。大地没人知。乾屎橛、堪作何用。拈得鼻孔失却口。〕不是孫公辨端的、〔錯。看箭。著賊了、也不知。〕髑髏著地幾人知。〔更不再活。如麻似粟。闍黎拈得鼻孔失却口。〕

【頌】　妙峰孤頂、草離離たり、〔身　和に没却す。脚下已に深きこと数丈。〕拈得して分明に誰にか付与えん。〔用て什麼か作ん。大地に人の知る没し。乾屎橛、何の用を作すにか堪えん。鼻孔を拈得えられ口を失却う。〕是れ孫公の端的を辨ずるにあらずんば、〔錯てり。箭を看よ。賊に著り了るも也た知らず。〕髑髏の地に著くを幾人か知らん。〔更に再活せず。麻の如く粟の似し。闍黎鼻孔を拈得えられ口を失却う。〕

一「離離」は詩語で、草木が美しく茂るさま。二 乾いた棒状の糞。三 鼻をつまみあげられ、口までなくなっている。第二八則・頌の句。四 ずばりとポイントを明示する。五 飛んでくる矢に気をつけろ。六 それ見ろ、賊(長慶)にしてやられたのに気づいておらぬ。七 自分のされこうべがごろりと地面に横たわるのをどれほどの人が予知できよう。

【評唱】　妙峰孤頂草離離、草裏輥有什麼了期。拈得分明付与誰、什麼処是分明処。頌保福道只這裏便是妙峰

【評唱】「妙峰孤頂、草離離たり」と、草裏に輥って什麼の了期か有らん。「拈得して分明に誰にか付与えん」と、什麼処か是れ分明の処。(この二句は)保福の

頂。不是孫公辨端的、孫公見什麼道理便云、是則是、可惜許。只如髑髏著地幾人知、汝等諸人還知麼。瞎。

「只だ這裏こそは便ち是れ妙峰頂」と道うを頌す。「是れ孫公の端的を辨ずるにあらずんば」とは、孫公什麼の道理を見てか便ち云う、「是なることは則ち是なるも、可惜許」と。只だ「髑髏の地に著くを幾人か知らん」というが如きは、汝等諸人還た知るや。瞎。

第二四則　劉鉄磨台山

垂示云、高高峰頂立、魔外莫能知。深深海底行、仏眼覷不見。直饒眼似流星、機如掣電、未免霊亀曳尾。到這裏、合作麽生。試挙看。

第二四則　劉鉄磨、台山

垂示に云く、高高たる峰頂に立てば、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行けば、仏眼も覷れども見えず。直饒眼は流星の似く、機は掣電の如くなるも、未だ免れず霊亀尾を曳くことを。這裏に到って、合に作麽生なるべき。試みに挙し看ん。

一　薬山惟儼(七四五―八二八)の語に「直須向高高山頂坐、深深海底行」(『伝灯録』一四)と。二　霊験をあらわす亀も、泥に残した尾の跡から居場所が見つかって捕えられ占い用に灼かれてしまう。達人の言行も、その痕跡がふっ切れていないと、こういうハメになる。また、敢えて方便として自ら痕跡を残すやり方をもいう(第二七則・頌の評唱)。第四則・本則の著語にも。

【本則】挙。劉鉄磨到潙山。〔不妨難湊泊。這老婆不守本分。〕山云、老牸牛、汝来也。〔点。探竿影草。向什麽処見聱訛。〕磨云、来日台山大会斎、和尚還去麽。〔箭不虚発。

【本則】挙す。劉鉄磨、潙山に到る。〔不妨に湊泊し難し。這の老婆、本分を守らず。〕山云く、「老牸牛、汝来たれり」。〔点。探竿影草。什麽処にか聱訛を見る。〕磨云く、「来日、台山に大会斎あり、和尚還た去くや」。〔箭虚しくは発せず。大唐に鼓を打ち、新羅に

大唐打鼓新羅舞。放去太速、収来太遅。〕潙山放身臥。〔中也。伱向什麼処見潙山。誰知遠煙浪、別有好思量。〕磨便出去。〔過也。見機而作。〕

舞う。放去は太だ速かに、収来は太だ遅し。〕潙山身を放って臥す。〔中れり。伱什麼処に向いてか潙山を見る。誰か知る遠き煙浪に、別に好思量有ること を。〕磨便ち出で去る。〔過ぎたり。機を見て作す。〕

一 第一七則・頌に既出。二 潙山霊祐。三「老」とはしたたかな、年季を積んだ。また、親しみをこめる。「牸牛」は、牝牛。四 そこだ。そこに気をつけろ。五 五台山。山西省の東北部にある。六 大勢の僧衆を集めて供養する法会。大供養。七 的をはずす矢(発言)は射ない。八 みごとに呼吸の合った対応だ。九 斉己の詩「看水」(『白蓮集』六)の句。彼方のもやたちこめる水面に、この世ならぬ絶妙の思いがこめられていることを誰が想像できよう。潙山の境界の喩え。一〇 ておくれ。

〔評唱〕劉鉄磨〈尼也〉如撃石火、似閃電光、擬議則喪身失命。禅道若到緊要処、那裏有許多事。他作家相見、如隔墻見角便知是牛、隔山見煙便知是火。拶著便動、捺著便転。潙山道、老僧百年後、向山下檀越家作一頭水牯牛、左脇下書五字云、潙山僧某甲。

〔評唱〕劉鉄磨〈尼なり〉は撃石火の如く、閃電光に似て、擬議すれば則ち喪身失命す。禅道若し緊要の処に到らば、那裏にか許多しき事有らん。他の作家相見は、墻を隔てて角を見て、便ち是れ牛なりと知り、山を隔てて煙を見て、便ち是れ火なりと知るが如し。拶著めば便ち動じ、捺著くれば便ち転ず。潙山道く、「老僧百年後、山下の檀越家に向いて、一頭の水牯牛と作っ

且正当恁麼時、喚作潙山僧即是、喚作水牯牛即是。如今人問著、管取[五]分疎不下。[六]

[一] 第一則の垂示に既出。[二] 死後をいう。[三] 檀家。[四] 去勢された水牛。[五] たしかに、まちがいなく。当時の口語。[六] 釈明しきれない。第二則・本則の評唱に既出。

劉鉄磨久参、機鋒峭峻。人号為劉鉄磨。去潙山十里卓庵。一日去訪潙山。山見来便云、老牸牛、汝来也。磨云、来日台山大会斎、和尚還去麼。潙山放身便臥。磨便出去。你看他一如説話相似。且不是禅、又不是道。喚[一]作無事会得麼。潙山去台山自隔数千里。劉鉄磨因什麼却令潙山去斎。且道、意旨如何。這老婆会他潙山説話、糸[二]来線去、一放一収、互相酬唱。如両鏡相照、無影像可観。機機相副、

て、左脇下に五字を書して云わん、『潙山僧某甲』と」と。且く正当恁麼の時、喚んで潙山僧と作さば即ち是なるか、喚んで水牯牛と作さば即ち是なるか。如今の人問著るれば、管取や分疎不下ならん。

劉鉄磨は久参にして、機鋒峭峻なり。人号して劉鉄磨と為す。潙山を去ること十里に庵を卓つ。一日去きて潙山を訪う。山、来たるを見て便ち云く、「老牸牛、汝来たれり」。磨云く、「来日、台山に大会斎あり、和尚還た去くや」と。潙山身を放って便ち臥す。磨便ち出で去る。你看よ、他一に説話が如くに相似たり。且つ是れ禅にあらず、又た是れ道にあらず。喚んで無事の会と作すは得しきや。潙山は台山を去ること自より数千里を隔つ。劉鉄磨什麼に因ってか却って潙山をして斎に去かしめんとする。且く道え、意旨如何。這の老婆他の潙山の説話を会して、糸来線去、一放一収、

句句相投。如今人三搭不廻頭。這老婆一点也瞞他不得。這箇却不是世諦情見。如明鏡当台、明珠在掌。胡来胡現、漢来漢現。是他知有向上事、所以如此。如今只管做無事会。

互相いに酬唱す。両鏡相照して、影像の観るべき無きが如し。機機相副い、句句相投ず。如今の人三搭すれども頭を廻さず。這の老婆一点也他を瞞り得ず。這箇却って是れ世諦の情見にあらず。明鏡の台に当り、明珠の掌に在るが如し。胡来たれば胡現り、漢来たれば漢現る。是れ他向上の事有るを知る、所以に此の如し。如今(の人は)只管無事の会を做すのみ。

一 仏法とは何もなすべきことなしとして収まりかえった境地。二 相手の出方に応じて巧みに対処して、手綱をゆるめたりしぼったりする。三 何度も肩に手をかけられたのに気づかず、ふりむかない。
四 世俗的な妄情分別の見解。

四祖演和尚道、莫将有事為無事、往往事従無事生。你若参得透去、見他恁麼如尋常人説話一般。多被言語隔碍、所以不会。唯是知音、方会他底。只如乾峰示衆云、挙一不得挙二、放過一著、落在第二。雲門出衆云、昨日有一僧従天台来、却往南岳去。

四祖演和尚道く、「有事を将て無事と為すこと莫れ、往往事は無事より生ず」と。你若し参得透し去らば、他の恁麼に尋常の人の説話が如くと一般なるを見ん。多くは言語に隔碍てられ、所以に会せず。唯だ是れ知音にして、方めて他底を会せん。只だ乾峰の如きは衆に示して云く、「一を挙して二を挙することを得ず、一著を放過すれば、第二に落在す」と。雲門、衆より

乾峰云、典[三]座[四]今日不得普請。看他両人、放則双放、収則双収。潙仰[五]下謂之境致。風[六]塵草動、悉[七]究端倪。亦謂之隔身句。意通而語隔。到這裏、須是[八]左撥右転、方是作家。

出でて云く、「昨日一僧有り、天台より来たりて、却って南岳に往き去る」。乾峰云く、「典座今日普請すること不得れ」と。看よ他の両人、放つときは則ち双放、収むるときは則ち双収。潙仰下に之を境致と謂う。風塵草動するにも、悉く端倪を究むればなり。亦た之を隔身の句と謂う。意通じて語隔つればなり。這裏に到っては、須是らく左撥右転して、方めて是れ作家なるべし。

一 蘄州(湖北省)四祖山の法演。黄龍慧南(一〇〇二―一〇六九)の法嗣。　二 越州乾峰。洞山良价(八〇七―八六九)の法嗣。　三 修行僧の食事を司る役職。六知事(禅院の運営に当る六人の役職位)の一。　四 今日は仕事を休んで、その僧の消息を偲ぶことにしよう。　五 五家七宗の一、潙山霊祐と仰山慧寂を祖とする潙仰宗では。　六 風が吹いて塵がたち、草がゆれ動く。作用の微妙なこと。李白詩(流夜郎贈辛判官)に「寧知草動風塵起」と。　七 一端を見てその本質を捉える。　八 自由自在であること。

【頌】　曾騎[一]鉄馬入重城[二]、〔慣戦作家。〕勅[三]下伝聞六[四]国清。〔狗銜赦書。寰中天子、争奈海晏河清。〕猶握金鞭問帰客、〔是什

【頌】　曾て鉄馬に騎って重城に入るも、〔戦に慣れたる作家。〕勅下って伝聞し六国清し。〔狗、赦書を銜む。寰中の天子も、争奈せん海晏河清なることを。〕猶お金鞭を握って帰客

麼消息。[五]一条拄杖両人扶。相招同往、又同来。〕[六]夜深誰共御街行。〔[七]君向瀟湘我向秦。且道、行作什麼。〕

に問う、〔是れ什麼たる消息ぞ。一条の拄杖を両人扶く。相招いて同に往き、又た同に来る。〕夜深けて誰と共に御街を行かん、と。〔君は瀟湘に向かい、我は秦に向かう。且く道え、行きて什麼か作ん。〕

〔評唱〕雪竇頌、諸方以為極則。一百頌中、這一頌最具理路、就中極妙、貼体分明頌出。曾騎鉄馬入重城、頌劉鉄磨恁麼来。勅下伝聞六国清、頌潙山恁麼問。猶握金鞭問帰客、頌磨云来日台山大会斎、和尚還去麼。夜深誰共御街行、頌潙山放身便臥、磨便出去。雪竇有這般才調、急切処向

〔評唱〕雪竇の頌、諸方以て極則と為す。一百の頌の中、這の一頌最も理路を具し、就中極妙、貼体分明と頌出す。「曾て鉄馬に騎って重城に入る」とは、劉鉄磨恁麼に来たるを頌す。「勅下って伝聞し六国清し」とは、潙山の恁麼に問うを頌す。「猶お金鞭を握って帰客に問う」とは、磨の「来日、台山に大会斎あり、和尚還た去くや」と云うを頌す。「夜深けて誰と共に御街を行かん」とは、潙山の身を放って便ち臥し、磨

一 鉄甲で武装した馬。 二 堅固な城。 三 秦の始皇帝の勅令で韓・魏・趙・燕・斉・楚の六国が治まった。 四 犬が天子の赦書をくわえて歩くと諸侯も道を避ける。 五 「同声相応ずる」喩え。 六 御街は皇城の南正門に通ずる道、天子のお成り道。そこを、しかも夜禁を犯して誰と連れだって行くのか。 七 鄭谷(?―八九六?)の詩「淮上与友人別」(『全唐詩』六七五)の句。「瀟湘」は瀟水と湘水、湖南省洞庭湖の南。南と北とに泣き別れ。

急切処頌、緩緩処向緩緩処頌。風穴[三]亦曾拈、同雪竇意。此頌諸方皆美之。[四]高高峰頂立、魔外莫能知、深深海底行、仏眼覷不見。看他一箇放身臥、一箇便出去。若更周遮、[五]一時求路不見。雪竇頌意最好。*是曾騎鉄馬入重城。若不是同得同証、焉能恁麼。且道、得箇什麼意。

便ち出で去るを頌す。雪竇這般る才調有って、急切の処をば急切の処に向いて頌し、緩緩の処をば緩緩の処に向いて頌す。風穴も亦た曾て拈ずるに、雪竇の意に同じ。此の頌、諸方皆な之を美む。高高たる峰頂に立てば、魔外も能く知ること莫く、深深たる海底に行けば、仏眼も覷れども見えず。看よ他の一箇は身を放って臥し、一箇は便ち出で去る。若し更に周遮せば、一時に路を求むるも見えじ。雪竇の頌意最も好し。是れ曾て鉄馬に騎って重城に入る。若し是れ同得同証にあらずんば、焉ぞ能く恁麼ならん。且く道え、箇の什麼意をか得たる。

＊是曾騎鉄馬入重城　蜀本に無し。

一 本質そのものを。核心をまるごと。 二 才知風格。 三 風穴延沼(八九六―九七三)。 四 垂示に見える。 五 まわりくどいやりかたをする。

不見僧問風穴、潙山道、老牸牛汝来也、意旨如何。穴云、白雲深処金龍躍。僧云、只如劉鉄磨道、来日台

見ずや、僧、風穴に問う、「潙山の『老牸牛、汝来たれり』と道うは、意旨如何」。穴云く、「白雲深き処に金龍躍る」。僧云く、「只だ劉鉄磨の『来日、台山に

山大会斎、和尚還去麼、意旨如何。穴云、碧波心裏玉兎驚。僧云、潙山便作臥勢、意旨如何。穴云、老倒[1]疎[2]慵無事日、[3]閑眠高臥対青山。此意亦与雪竇同也。

大会斎あり、和尚還た去くや』と道うが如きは、意旨如何」。穴云く、「碧波心裏に玉兎驚く」。僧云く、「潙山便ち臥す勢を作す、意旨如何」。穴云く、「老倒疎慵無事の日、閑眠高臥青山に対す」と。此の意も亦た雪竇と同じ。

一 頽落してだらしのないさま。 二 懶惰。 三 世俗にわずらわされずに暮らすこと。

第二五則　蓮華庵主不住

垂示云、[一]機不離位、堕在毒海。語不驚群、陥於流俗。[二]忽若撃石火裏別緇素、閃電光中辨殺活、可以坐断十方、壁立千仞。還知有恁麼時節麼。試挙看。

【本則】挙。[一]蓮華峰庵主、拈拄杖示衆云、〔看。頂門上具一隻眼。[*]也是時人窠窟。〕古人到這裏、為什麼不肯住。〔[二]不可向虚空裏釘橛。権立[三]化城。〕衆無語。〔千箇万箇、如麻似粟、[四]却較些子。可惜許、[五]一棚俊鶻。〕自代云、[六]為他途路不得力。〔若向途中

第二五則　蓮華庵主住せず

垂示に云く、機、位を離れざれば、毒海に堕在つ。語、群を驚かさずんば、流俗に陥る。忽若撃石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨ぜば、以て十方を坐断して、壁立千仞なるべし。還た恁麼の時節有ることを知るや。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。蓮華峰庵主、拄杖を拈じて衆に示して云く、〔看よ。頂門上に一隻眼を具す。也た是れ時人の窠窟。〕「古人這裏に到って、為什麼にか住することを肯ぜざる」。〔虚空裏に釘橛すべからず。権に化城を立つ。〕衆、無語。〔千箇万箇、麻の如く粟に似たるも却って些子く較えり。可惜許、一棚の俊鶻。〕自ら代って云く、「他の途路に力を得ざりしが為なり」。〔若

一　洞山三滲漏のうちの見滲漏の句。第一五則・頌の評唱に既出。　二　もしも。仮定を表す副詞。

辨、猶争半月程。設使得力、堪作什麼。豈可全無一箇。〕復云、畢竟如何。〔千人万人、只向箇裏坐却。千人万人中、一箇両箇会。〕又自代云、柳栗横担不顧人、直入千峰万峰去。〔也好与三十棒。只為他担板。脳後見腮、莫与往来。〕

し途中に向いて辨ぜば、猶お半月程を争わん。設使力を得るも什麼を作すにか堪えん。豈に全く一箇も無かるべけんや。〕復た云く、「畢竟如何」。〔千人万人只だ箇裏に向いて坐却す。千人万人の中一箇両箇会す。〕又た自ら代って云く、「柳栗横に担って人を顧みず、直に千峰万峰に入り去る」。〔也た好し三十棒を与うるに。只だ他の担板なるが為なり。脳後に腮を見れば与に往来すること莫れ。〕

＊也是時人窠窟　福本は「脳後見腮」。　＊＊脳後〜往来〔八字〕　福本は「也是時人窠窟」。

一 雲門文偃(八六四―九四九)の法孫。蓮華峰祥庵主。蓮華峰は明州(浙江省)天台山の別峰。以下は示寂の日の示衆(『会元』一五)。 二 虚空にクギを打つようなことはするな。『臨済録』上堂(岩波文庫一六頁)。 三 悟りに導くための方便。 四 もう一息のところでダメだ。 五 檻の内のハヤブサ。折角のハヤブサが本領を発揮できない。 六 古人は杖を使いこなせなかったからだ。 七 半月の道のりほども違う。「争」は「較」と同じ用法。 八 「箇裏」は「這裏」に同じ。「坐却」は「坐断」に同じ。 九 杖に用いる木。杖のこと。 一〇 『会元』ではこの句のあとに「言い畢って逝く」とある。 一一 頭の後ろに顔のあるような怪け物とはつきあうな。

【評唱】諸人還裁辨得蓮華峰庵主麼。脚跟也未点地在。国初時、在天台蓮

【評唱】諸人還た蓮華峰庵主を裁辨得するや。脚跟也た未だ地に点けざる在。国初の時、天台の蓮華峰に庵を

華峰卓庵。古人既得道之後、茅茨石室中、折脚鐺児内、煮野菜根、喫過日。且不求名利、放曠随縁。垂一転語、且要報仏祖恩、伝仏心印。纔見僧来、便拈拄杖云、古人到這裏、為什麼不肯住。前後二十餘年、終無一人答得。只這一問、也有権有実、有照有用。若也知他圏繢、不消一捏。你且道、因什麼二十年如此問。既是宗師所為、何故只守一橛。若向箇裏見得、自然不向情塵上走。凡二十年中、有多少人、与他平展下語呈見解、做尽伎倆。設有箇道得、也不到他極則処。況此事雖不在言句中、非言句即不能辨。不見道、道本無言、因言顕道。所以験人端的処、下口便知音。古人垂一言半句亦無他、只要見你知

卓つ。古人既に得道の後、茅茨石室の中、折脚の鐺児の内に野菜根を煮て喫い日を過す。且つ名利を求めず、放曠として縁に随う。一転語を垂れて、且つ仏祖の恩に報じ、仏心印を伝えんと要す。僧の来たるを見るや纔や便ち拄杖を拈じて云く、「古人這裏に到って、為什麼にか住することを肯ぜざる」と。前後二十餘年、終に一人も答え得るもの無し。只だ這の一問、也た権有り実有り、照有り用有り。若也他の圏繢を知らば、一捏も消いず。你且く道え、什麼に因ってか、二十年此の如く問う。既に是れ宗師の為す所、何故ぞ只だ一橛を守る。若し箇裏に向いて見得せば、自然に情塵上を走かず。凡そ二十年中、多少の人有って、他の与に平展し下語して見解を呈し、伎倆を做し尽せるや。設い箇の道い得るもの有るも、也た他の極則の処には到らず。況や此の事は言句の中に在らずと雖も、言句に非ざれば即ち辨ずること能わず。道うことを見ずや、「道は本より言無きも、言に因って道を顕す」と。所

有不知有。他見人不会、所以自代云、為他途路不得力。看他道得自然契理契機。機[7]曾失却宗旨。古人云、承[8]言須会宗、勿自立規矩。如今人只管撞[9]将去便[10]了。得則得、争奈顢[11]頇儱侗。若到作家面前、将三[12]要語、印空印泥、印水験他、便見方[13]木逗円孔、無下[14]落処。到這裏、討一箇同得同証、臨時向什麼処求。若是知有底人、開懐通箇消息、有何不可。若不遇人、且巻[15]而懐之。且問你諸人、拄杖子是衲僧尋常用底。因什麼却道、途路不得力。古人到此不肯住。其実金[16]屑雖貴、落眼成翳。

以に人を験する端的の処、口を下せば便ち知音。古人一言半句を垂るること亦た他無し、只だ你の有ることを知るか、有ることを知らざるかを見んと要す。他、人の会せざるを見て、所以に自ら代って云く、「他の途路に力を得ざりしが為なり」と。看よ、他道い得て自然に理に契い機に契うことを。幾ぞ曾て宗旨を失却せん。古人云く、「言を承けては須らく宗を会すべし、自ら規矩を立つること勿れ」と。如今の人は只管に撞き将ち去って便ち了す。得しきことは則ち得しきも、争奈せん顢頇儱侗なることを。若し作家の面前に到って、三要の語を将て、空に印し、泥に印し、水に印して他を験すれば、便ち見ん方木の円孔に逗まりて、下落処無きことを。這裏に到って、一箇の同得同証を討ぬるも、時に臨んで什麼処に向ってか求めん。若是有ることを知る底の人ならば、懐を開いて箇の消息を通ずるに、何の不可か有らん。若し人に遇わずんば、且く巻いて之を懐にせん。且く你諸人に問う、拄杖子は

是れ衲僧の尋常用うる底なり。什麼に因ってか却って道う、「途路に力を得ず」と。古人此に到って住することを肯ぜず。其の実は金屑貴しと雖も、眼に落つれば翳を成せばなり。

一 裁定する、見極める。二 宋の太祖(在位九六〇—九七六)のとき。三 極めて質素なくらしぶり。四 しかけ、からくり。五 第一二則・本則の評唱に既出。六 南泉普願(七四八—八三四)の語に、「狸奴白牯却知有、三世諸仏不知有」(『伝灯録』一〇・長沙景岑章)と。七 どうして〜することがあろうか。「何曾」「何嘗」。八 石頭希遷(七〇〇—七九〇)『参同契』の句。第二二則・本則の評唱に既出。九「撞」は突く、打つ。やたらにあちこちつきまくるばかり。一〇 それだけのことだ。それでおしまい。一一 ぼんやりして要領を得ない。一二 臨済の禅法の核心を三点に収斂させた命題。『臨済録』上堂(岩波文庫二八頁)参照。一三 四角い木を円い孔にはめこもうとする。見当ちがい。一四 そのときになって。一五 それ(「消息」)をかくしておく。『論語』衛霊公の句。一六 黄金の細片は貴重だが眼に入ったら眼病をおこす。『臨済録』勘弁(岩波文庫一六五頁)。

[一]石室善道和尚、当時遭[二]沙汰。常以拄杖示衆云、過去諸仏也恁麼、未来諸仏也恁麼、現前諸仏也恁麼。雪峰一日僧堂前拈拄杖示衆云、這箇只為中下根人。時有僧出問云、忽遇上上

石室の善道和尚、当時沙汰に遭う。常に拄杖を衆に示して云く、「過去の諸仏も也た恁麼、未来の諸仏も也た恁麼、現前の諸仏も也た恁麼」と。雪峰、一日、僧堂の前にて拄杖を拈り衆に示して云く、「這箇は只だ中下根の人の為にす」と。時に僧有り出でて問うて

人来時如何。峰拈拄杖便去。雲門云、我即不似雪峰打破狼藉。僧問、未審和尚如何。雲門便打。大凡参問也無許多事。為你外見有山河大地、内見有見聞覚知、上見有諸仏可求、下見有衆生可度。直須一時吐却、然後十二時中、行住坐臥、打成一片。雖在一毛頭上、寛若大千沙界、雖居鑊湯炉炭中、如在安楽国土、雖居七珍八宝中、如在茅茨蓬蒿下。這般事若是通方作者、到古人実処、自然不費力。他見無人搆得他底、復自徴云、畢竟如何。又奈何不得。自云、榔標横担不顧人、直入千峰万峰去。這箇意又作麼生。且道、指什麼処為地頭。不妨句中有眼、言外有意、自起自倒、自放自収。

云く、「忽上上の人の来たるに遇わん時は如何」。峰、拄杖を拈りて便ち去る。雲門云く、「我は即ち雪峰の打破して狼藉なるに似ず」と。僧問う、「未審、和尚如何」。雲門便ち打つ。大凡そ参問は、也た許多しき事無し。你の外に山河大地有るを見、内に見聞覚知有るを見、上に諸仏の求むべき有るを見、下に衆生の度すべき有るを見るが為なり。直に須らく一時に吐却して、然る後十二時中、行住坐臥、打成一片なるべし。一毛頭上に在りと雖も、寛きこと大千沙界の若く、鑊湯炉炭の中に居ると雖も、安楽国土に在るが如く、七珍八宝の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下に在るが如し。這般る事若是通方の作者ならば、古人の実処に到って、自然に力を費さず。他、人の他底に搆り得ること無きを見て、復た自ら徴めて云く、「畢竟如何」と。又た奈何ともなし得ず。自ら云く、「榔標横に担って人を顧みず、直に千峰万峰に入り去る」と。這箇の意又た作麼生。且く道え、什麼処を指してか地頭と為さん。

不妨に句中に眼有り、言外に意有って、自ら起き自ら倒れ、自ら放ち自ら収む。

一 石頭希遷（七〇〇―七九〇）の法嗣の長髭曠の法嗣。 二 会昌五年（八四五）の唐・武宗の排仏を指す。 三 めちゃくちゃなぶち壊し方をする。 四 三千大千世界。全宇宙。「沙界」は恒河の沙のように無数に多くの世界。 五 真実究極の境地。

豈不見[一]厳陽尊者、路逢一僧、拈起拄杖云、是什麼。僧云、不識。厳云、一条拄杖也不識。厳復以拄杖、地上劄一下云、還識麼。僧云、不識。厳云、土窟子也不識。厳復以拄杖担云、会麼。僧云、不会。厳云、榔標横担不顧人、直入千峰万峰去。古人到這裏、為什麼不肯住。雪竇有頌[二]云、誰当機。挙不賺、亦還希。摧残峭峻、[三]銷鑠玄微。重関曾巨闢、作者未同帰。玉兎乍円乍欠、[四]金烏似飛不飛。[五]盧老不知何処去、白雲流水[六]共依依。因什

豈に見ずや、厳陽尊者、路に一僧に逢い、拄杖を拈り起げて云く、「是れ什麼ぞ」。僧云く、「識らず」。厳云く、「一条の拄杖すら也識らざるか」。厳、復た拄杖を以て、地上に劄くこと一下して云く、「還た識るや」。僧云く、「識らず」。厳云く、「土窟子すら也識らざるか」。厳、復た拄杖を担って云く、「会すや」。僧云く、「会せず」。厳云く、「榔標横に担って人を顧みず、直に千峰万峰に入り去る」と。古人這裏に到って、為什麼にか住することを肯ぜざる。雪竇に頌有り、云く、「誰か機に当る。挙するに賺さざるは亦た還って希なり。峭峻を摧残き、玄微を銷鑠さん。重関曾て巨いに闢け、作者未だ帰を同じくせず。玉兎乍ち円く乍ち欠

麼山僧道、脳後見腮、莫与往来。纔作計較、便是黒山鬼窟裏作活計。若見得徹、信得及、千人万人、自然羅籠不住、奈何不得。動著拶著、自然有殺有活。雪竇会他意道、直入千峰万峰去、方始成頌。要知落処、看取雪竇頌。云、

け、金烏飛ぶに似て飛ばず。盧老は知らず何処にか去く、白雲流水共に依依たり」と。什麼に因ってか山僧は道う、「脳後に腮を見れば、与に往来すること莫れ」と。計較を作すや纔や便ち是れ黒山鬼窟裏に活計を作さん。若し見得徹し、信得及れば、千人万人もてするも自然に羅籠し住れず、奈何ともなし得ず。動著拶著するに、自然に殺有り活有り。雪竇、他の意に「直に千峰万峰に入り去る」と道うを会して、方始めて頌を成す。落処を知らんと要せば、雪竇の頌を看取よ。云く、

一 名は善信。趙州従諗(七七八—八九七)の法嗣。 二 「至人不器」と題する頌(『祖英集』上)。 三 月。 四 日。 五 第二〇則では圜悟は「盧公」を雪竇の自称とするが、ここは六祖慧能を指すか。 六 たなびき流れるさま。 七 幽鬼の住みかで暮らす。情識にとらわれた境界のたとえ。 八 とらえこむ。思いどおりに統御する。第一九則・本則の評唱に既出。 九 一挙一動、一挨一拶。

【頌】眼裏塵沙耳裏土、〔懞憧三百担。鶻鶻突突、有什麼限。更有恁麼漢。〕千峰万峰不肯住。〔你向什麼処

【頌】眼裏の塵沙、耳裏の土、〔懞憧三百担。鶻鶻突突、什麼の限りか有らん。更に恁麼の漢有り。〕千峰万峰住することを肯ぜず。〔你什麼処に向ってか去く。

去。且道、是什麼消息。〕落花流水太茫茫、〔四好箇消息。閃電之機、徒労佇思。左顧千生、右顧万劫。〕五剔起眉毛何処去。〔脚跟下更贈*一対眼。六元来只在這裏。還截得庵主脚跟麼。雖然如是、也須是到這田地始得。打云、為什麼只在這裏。〕

且く道え、是れ什麼たる消息ぞ。〕落花流水太だ茫茫たり、〔好箇の消息。閃電の機に、徒労に佇思す。左顧千生、右顧万劫。〕眉毛を剔起して何処にか去く。〔脚跟下に更に一対の眼を贈らん。元来只だ這裏に在りしものを。還た庵主の脚跟を截ち得るや。是の如しと雖然も、也た須是らく這の田地に到って始めて得し。打って云く、為什麼に只だ這裏に在る。〕

*贈　福本は「増」。

一 眼には埃、耳には泥で、情識を絶し、煩悩を尽した境地。二「懞憧」は愚鈍なさま。「担」はてんびん棒ひとかつぎ、または百斤(約五〇キログラム)の重さ。三百担もの重荷を背負いこんだ鈍重ぶり。三 うすぼんやり、のろま。糊糊塗塗。四 よいニュースだ。第一六則・本則の評唱に既出。五 第二二則・頌に「剔起眉毛還不見」と。六 なんだ、もともとどこへも行ってはいない。そんな足なら切断してもいい、誰かやれるか。

【評唱】雪竇頌得甚好。有転身処、不守一隅。便道、眼裏塵沙耳裏土。此一句頌蓮華峰庵主。衲僧家到這裏、上無攀仰、下絶己躬。於一切時中、

【評唱】雪竇頌し得て甚だ好し。転身の処有って、一隅を守らず。便ち道う、「眼裏の塵沙、耳裏の土」と。此の一句、蓮華峰庵主を頌す。衲僧家這裏に到って、上攀仰無く、下己躬を絶す。一切時中に於て、痴の

如痴似兀。不見南泉道、学道之人、如痴鈍者也難得。禅月詩云、常憶南泉好言語、如斯痴鈍者還希。法灯云、誰人知此意、令我憶南泉。南泉又道、七百高僧、尽是会仏法底人。唯有盧行者、不会仏法、只会道。所以得他衣鉢。且道、仏法与道、相去多少。雪竇拈云、眼裏著沙不得、耳裏著水不得。或若有箇漢、信得及、把得住、不受人瞞、祖仏言教、是什麼熱碗鳴声。便請高掛鉢嚢、拗折拄杖、管取一員無事道人。又云、眼裏著得須弥山、耳裏著得大海水。有一般漢、受人商量、祖仏言教、如龍得水、似虎靠山。却須挑起鉢嚢、横担拄杖、亦是一員無事道人。復云、恁麼也不得、不恁麼也不得、然後没交渉。三員無

如く兀に似たり。見ずや南泉道く、「学道の人、痴鈍の如くなる者は也た得難し」と。禅月の詩に云く、「常に憶う南泉の好言語、斯の如く痴鈍なる者は還た希なり」と。法灯云く、「誰人か此の意を知らん、我をして南泉を憶わしむ」と。南泉又た道く、「七百の高僧、尽く是れ仏法を会する底の人なり。唯だ盧行者のみ有って、仏法を会せず、只だ道を会す。所以に他の衣鉢を得たり」と。且く道え、仏法と道と相去ること多少ぞ。雪竇拈じて云く、「眼裏に沙を著くることを得ず、耳裏に水を著くることを得ず。或若箇の漢の信得及り、把得住りて、人の瞞を受けざるもの有らば、祖仏の言教も是れ什麼と熱碗鳴声ならん。便ち請う高く鉢嚢を掛け、拄杖を拗折れば、一員の無事の道人なることを管取わん」と。又た云く、「眼裏に須弥山を著得け、耳裏に大海水を著得く。一般る漢有って人の商量するを受くれば、祖仏の言教は龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。却って須らく鉢嚢を挑

事道人中、要選一人為師。正是這般生鉄鋳就底漢。何故。或遇悪境界、或遇奇特境界、到他面前、悉皆如夢相似。不知有六根、亦不知有旦暮。直饒到這般田地、切忌守寒灰死火、打入黒漫漫処去。也須是有転身一路始得。

起ぎ横に拄杖を担うべし。亦た是れ一員の無事の道人ならん」と。復た云く、「恁麼も也た得からず、不恁麼も也た得からず、然る後は没交渉。(これら)三員の無事の道人の中より、一人を選んで師と為す要し」と。正に是れ這般る生鉄鋳就す底の漢なり。何故ぞ。或は悪境界に遇い、或は奇特の境界に遇うも、他の面前に到らば悉く皆な夢の如くに相似たり。六根有ることを知らず、亦た旦暮有ることも知らず。直饒這般る田地に到るも、切に忌む寒灰死火を守って、黒漫漫の処に打入し去ることを。也た須是らく転身の一路有って始めて得し。

＊拈云　福本は「拈古云」。

一 一段上の次元へ歩を進めた境地。二 南泉普願(七四八―八三四)。『伝灯録』二八に「近日禅師太多、覓箇痴鈍人不可得」と。三 貫休(八三二―九一二)の『禅月集』一一、山居詩の句。四 法灯泰欽(?―九七四)。五 五祖弘忍(六〇一―六七四)門下の僧を指す。六 六祖慧能(六三八―七一三)のこと。七 プップッと湯気を吹き出して鳴る碗の音のように無意味なことば。「什麼」は不定詞で、蔑みの気分。八 行脚をやめる。九 気儘に行脚に出る。一〇 ああでもない、こうでもないという選択から縁を切った立場。

不見古人道、莫守寒巌異草青、坐却白雲宗不妙。所以蓮華峰庵主道、為他途路不得力。直須是千峰万峰去始得。且道、喚什麼作千峰万峰。雪竇只愛他道楖栗横担不顧人、直入千峰万峰去、所以頌出。且道、向什麼処去。還有知得去処者麼。落花流水太茫茫、落花紛紛、流水茫茫。閃電之機、眼前是什麼。剔起眉毛何処去、雪竇為什麼也不知他去処。只如山僧適来挙払子、且道、即今在什麼処。你諸人若見得、与蓮華峰庵主同参。其或未然、三条椽下、七尺単前、試去参詳看。

見ずや古人道く、「寒巌異草の青きを守ること莫れ、白雲を坐却するも宗は妙ならず」と。所以に蓮華峰庵主道く、「他の途路に力を得ざるが為なり」と。直に須是らく千峰万峰に去きて始めて得し。且く道え、什麼を喚んでか千峰万峰と作す。雪竇只だ他の「楖栗横に担って人を顧みず、直に千峰万峰に入り去る」と道うを愛して、所以に頌出す。且く道え、什麼処に向ってか去く。還た去く処を知得る者有りや。「落花流水太だ茫茫」とは、落花紛紛、流水茫茫たり。閃電の機、眼前是れ什麼ぞ。「眉毛を剔起して何処にか去く」と、雪竇為什麼に也た他の去く処を知らざる。只だ山僧が適来払子を挙ぐるが如きは、且く道え、即今什麼処にか在る。你諸人若し見得せば、蓮華峰庵主と同参なり。其れ或は未だ然らずんば、三条椽下、七尺単前に、試みに去きて参詳し看よ。

一　大陽警玄（九四三―一〇二七）の五位頌・兼中到の句。『会元』一四。　二　僧堂内の一人分の坐床。

第二六則　百丈奇特事

【本則】挙。僧問百丈[一]、如何是奇特[二]事。〔言中有響[三]、句裏呈機。驚殺人。有眼不曾見。〕丈云、独坐大雄峰[四]。〔凜凜威風四百州[五]。坐者立者[六]、二俱敗欠。〕僧礼拝。〔伶俐衲僧。也有恁麼人、要見恁麼事。〕丈便打。〔作家宗師。何故来言不豊[七]。令不虚行。〕

第二六則　百丈の奇特の事

【本則】挙す。僧、百丈に問う、「如何なるか是れ奇特の事」。〔言中に響有り、句裏に機を呈す。人を驚殺す。眼有るも曾て見ず。〕丈云く、「独り大雄峰に坐す」。〔凜凜たる威風四百州。坐者立者二つながら倶に敗欠。〕僧、礼拝す。〔伶俐の衲僧。也た恁麼の人有りて恁麼の事を見んと要す。〕丈、便ち打つ。〔作家の宗師。何故ぞ来言豊かならざる。令は虚しくは行われず。〕

一 百丈懐海(七四九―八一四)。 二 すばらしいこと。 三 一句に全人格が投入されている。 四 百丈山のこと。 五 第五四則・頌の一句。「四百州」は天下の総称。宋代に始まる。 六 坐仏も立仏も、この活仏を前にしては降参するばかり。 七 (百丈ともあろう人に向けて)なんと貧しい問いかたをしたものだ。保福従展(?―九二八)の語(『伝灯録』一九)。

〔評唱〕臨機具眼、不顧危亡。所以道、不入虎穴、争得虎子。百丈尋常、如虎挿翅相似。這僧也不避死生、敢

〔評唱〕機に臨んで眼を具して、危亡を顧みず。所以に道う、「虎穴に入らずんば、争か虎子を得ん」と。百丈は尋常、虎に翅を挿すが如くに相似たり。這の

捋虎鬚、便問、如何是奇特事。這僧也具眼。百丈便与他担荷云、独坐大雄峰。其僧便礼拝。衲僧家須是別未問已前意始得。這僧礼拝、与尋常不同。也須是具眼始得。莫教平生心胆向人傾。相識還如不相識。只這僧問、如何是奇特事。百丈云、独坐大雄峰。僧礼拝、丈便打。看他放去則一時俱是、収来則掃蹤滅跡。且道、他便礼拝、意旨如何。若*道是好、因甚百丈便打他作什麼。若道是不好、他礼拝有什麼不得処。到這裏、須是識休咎別緇素、立向千峰頂上始得。這僧便礼拝、似捋虎鬚相似、只争転身処。頼値百丈頂門有眼、肘後有符、照破四天下、深辨来風。所以便打。若是別人、無奈他何。這僧以機投機、以

僧も也た死生を避けず、敢て虎鬚を捋きて便ち問う、「如何なるか是れ奇特の事」と。這の僧も也た眼を具す。百丈便ち他の与に担荷して云く、「独り大雄峰に坐す」と。其の僧便ち礼拝す。衲僧家須是らく未問已前の意を別って始めて得し。這の僧の礼拝、尋常と同じからず。也た須是らく具眼にして始めて得し。平生の心胆を人に傾けしむること莫れ。相識るは還って相識らざるが如し。只だ這の僧問う、「如何なるか是れ奇特の事」と。百丈云く、「独り大雄峰に坐す」と。僧礼拝するや、丈便ち打つ。看よ他放去するときは則ち一時に俱に是、収来するときは則ち蹤を掃い跡を滅す。且く道え、他便ち礼拝せし意旨は如何。若し「是れ好し」と道わば、甚に因ってか百丈便ち他を打って什麼か作ん。若し「是れ好からず」と道わば、他の礼拝什麼の得からざる処か有る。這裏に到っては、須是らく休咎を識り緇素を別ち、千峰頂上に立ちて始めて得し。這の僧の便ち礼拝せしは虎鬚を捋くが似くに相

意遺意。他所以礼拝。

似たるも、只だ転身の処を争う。頼に百丈の頂門に眼有り、肘後に符有って、四天下を照破し、深く来風を辨ずるに値う。所以に便ち打つ。若是別人ならば、他を奈何ともすること無けん。這の僧、機を以て機に投じ、意を以て意を遣る。他、所以に礼拝す。

＊若道是好～不得処〔二八字〕　福本は「若道是、百丈又打他什麼。若道不是、他礼拝有甚不得処」。

一　本来面目を明辨する。「別」は明らかにする。二　善悪黒白を識別する。三　ズレがある。四　護符。古い医方の「肘後方」に因んで道家が作った呪符。ここでは神助の喩え。五　相手の出かた。

如南泉云、文殊普賢、昨夜三更、起仏見法見。各与二十棒、貶向二鉄囲山去也。時趙州出衆云、和尚棒教誰喫。泉云、王老師有什麼過。州礼拝。宗師家等閑不見他受用処、纔到当機拈弄処、自然活鱍鱍地。五祖先師常説、如馬前相撲相似。你但常教見聞声色、一時坐断、把得定、作得主、始見他百丈。且道、放過時作麼

南泉の如きは云く、「文殊と普賢と、昨夜三更に仏見法見を起す。各二十棒を与えて、二鉄囲山に貶向し去れり」と。時に趙州、衆より出でて云く、「和尚の棒、誰にか喫せしめん」。泉云く、「王老師に什麼の過か有る」。州、礼拝す。宗師家等閑に他の受用の処を見ずして、当機拈弄の処に到るや纔や自然に活鱍鱍地なり。五祖先師常に説く、「馬前の相撲の如くに相似たり。你但だ常に見聞声色をして一時に坐断せしめ、把得定り、主と作得りて、始めて他の百丈を見ん」と。

生。看取雪竇頌出。云、

且く道え、放過す時作麼生。雪竇の頌出するを看取よ。云く、

【頌】 祖域交馳天馬駒、〔五百年一間生。千人万人中、有一箇半箇。子承父業。〕化門舒巻不同途。〔已在言前。渠儂得自由。還他作家手段。〕電光石火存機変、〔劈面来也。左転右転。還見百丈為人処也無。〕堪笑人来捋虎鬚。〔好与三十棒。重賞之下、必有勇夫。不免喪身失命。放過闍黎一著。〕

【頌】 祖域交馳す天馬の駒、〔五百年に一たび間生す。千人万人の中に一箇半箇有り。子は父の業を承く。〕化門舒巻して途を同じくせず。〔已に言前に在り。渠儂自由を得たり。他に作家の手段を還せ。〕電光石火、機変を存す。〔劈面に来たる。左転右転す。還た百丈の為人の処を見る也無。〕笑うに堪えたり人の来たりて虎鬚を捋くは。〔好し三十棒を与えん。重賞の下には必ず勇夫有り。喪身失命を免れず。闍黎の一著を放過す。〕

一 南泉普願(七四八—八三四)。二 『諸仏要集経』に見える話による。三 仏や法に対する執着の観念。四 流謫する。五 須弥山を中心とする九重の山の第九。世界の果ての鉄の山。六 趙州従諗(七七八—八九七)。南泉の法嗣。七 南泉の俗姓による自称。八 分別心を起さずに。のほほんと。九 核心に直面してそれに対応する際。一〇 魚のぴちぴちはねる形容。一一 圜悟の師、法演(?—一一〇四)。一二 早く決着をつけないと危い局面、ということか。一三 相手の自由なままにさせる。「過」は経過を示す語助。

一「祖」域と天「馬」とに、馬祖の名を含ませる。馬祖の牧場をかけめぐる千里の駒、つまり百丈をいう。二 五百年の間隔をおいてしか生まれない偉人。三 百丈の教化の自在さ。四 ことば以前の以心伝心の自得。とっくにわかっている。五 あちらさん(三人称代名詞)。六 彼に練達した禅匠としての力量を発揮させよ。七 あっという間に、はたらきを変化させる。八 真正面から来た。機鋒の鋭さをいう。九『黄石公三略』上に「軍讖曰、香餌之下、必有懸魚。重賞之下、必有死夫」と。

〔評唱〕雪竇見得透、方乃[一]頌出。天馬駒日行千里、横行竪走、奔驟如飛、方名天馬駒。雪竇頌、百丈於祖域之中、東走向西、西走向東、一来一往、七縦八横、殊無少礙、如天馬駒相似、善能交馳、方見自由処。這箇自是得他馬祖大機大用。不見僧問馬祖、如何是仏法大意。祖便打云、我若不打你、天下人笑我去在。又問、如何是祖師西来意。祖云、近前来向你道。僧近前。祖劈[二]耳便掌云、六耳[三]不同謀。看他恁麼得大自在。於建化門中、或

〔評唱〕雪竇見得透して、方めて頌出す。天馬駒は、日に行くこと千里、横行竪走し、奔驟すること飛ぶが如くして方めて天馬駒と名づく。雪竇は頌す、百丈の祖域の中を東に走り西に向かい、西に走り東に向かい、一来一往、七縦八横、殊に少しの礙も無きこと、天馬駒の如くに相似て、善能く交馳して方めて自由の処を見るを。這箇自是より他の馬祖の大機大用を得たるなり。見ずや僧、馬祖に問う、「如何なるか是れ仏法の大意」。祖便ち打って云く、「我若し你を打たずんば、天下の人我を笑い去在」。又た問う、「如何なるか是れ祖師西来意」。祖云く、「近前づき来たれ、你に道わん」。僧近前づく。祖、劈耳に便ち掌して云く、「六

巻或舒。有時舒不在巻処、有時巻不在舒処、有時巻舒倶不在。所以道、同塗不同轍。此頌百丈有這般手脚。

耳、謀を同じくせず」と。看よ他、恁麼に大自在を得たり。建化門中に於て、或は巻、或は舒。有る時は舒、巻処に在らず、有る時は巻、舒処に在らず、有る時は巻舒倶に在らず。所以に道う、塗を同じくするも轍を同じくせずと。此れ、百丈に這般る手脚有るを頌す。

一 そこではじめて。二 耳をめがけて。三 重要なことは当事者二人(四耳)だけの秘密とし、第三者には漏らすな。

雪竇道、電光石火存機変、頌這僧如撃石火、似閃電光、只在些子機変処。巌頭道、却物為上、逐物為下。若論戦也、箇箇立在転処。雪竇道、機輪曾未転、転必両頭走。若転不得、有什麼用処。大丈夫漢、也須是識些子機変始得。如今人只管供他款、被他穿却鼻孔。有什麼了期。這僧於電光石火中、能存機変、便礼拝。雪竇道、堪笑人来捋虎鬚。百丈似一箇大

雪竇道く、「電光石火、機変を存す」と。這の僧の撃石火の如く、閃電光に似て、只だ些子の機変の処に在ることを頌す。巌頭道く、「物を却くるを上と為し、物を逐うを下と為す。若し論戦せば、箇箇転処に立在たん」と。雪竇道く、「機輪曾て未だ転ぜず、転ずれば必ず両頭に走る」と。若し転じ得ざれば、什麼の用処か有らん。大丈夫の漢、也た須是らく些子の機変を識って始めて得し。如今の人只管に他に款を供して、他に鼻孔を穿却せらる。什麼の了期か有らん。這の僧、電光石火の中に能く機変を存して便ち礼拝す。雪竇道

虫相似。堪笑這僧去捋虎鬚。

く、「笑うに堪えたり人の来たりて虎鬚を捋くは」と。
百丈は一箇の大虫の似くに相似たり。笑うに堪えたり
這の僧去きて虎鬚を捋くは。

一 巌頭全豁(八二八―八八七)。二 第六五則・頌の句。「機輪」は、俊敏なはたらき(言動)を輪に喩える。「両頭」は有と無の二極。三 自供する。供述する。第一則・本則の評唱に既出。

第二七則　雲門体露金風

垂示云、問一答十、挙一明三、見兎放鷹、因風吹火。不惜眉毛則且置。只如入虎穴時如何。試挙看。

一 眉毛が抜け落ちるのも厭わず、人のために説法すること。

【本則】挙。僧問雲門、樹凋葉落時如何。〔是什麼時節。家破人亡、人亡家破。〕雲門云、体露金風。〔撐天拄地。斬釘截鉄。浄裸裸、赤洒洒。平歩青霄。〕

第二七則　雲門の体露金風

垂示に云く、一を問えば十を答え、一を挙すれば三を明らめ、兎を見ては鷹を放ち、風に因って火を吹く。眉毛を惜しまざることは則ち且く置く。只だ虎穴に入る時の如きは如何。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、雲門に問う、「樹凋み葉落つる時、如何」。〔是れ什麼の時節ぞ。家破れて人亡び、人亡びて家破る。〕雲門云く、「体露金風」。〔天を撐え地を拄う。釘を斬り鉄を截る。浄裸裸、赤洒洒。青霄に平歩す。〕

一 雲門文偃(八六四―九四九)。 二 沙羅樹の一本が枯れ朽ちて樹皮も枝葉もみな脱け落ち、唯だ真実のみが残った、という『大般涅槃経』に見える喩えを踏まえる。 三 「体露」は、真実ありのままに打ち出す。「金風」は秋風。 四 造作も無く空高くまで登ることの喩え。「平歩青雲」とも。

〔評唱〕　若向箇裏薦得、始見雲門為人処。其或未然、依旧只是指鹿為馬[一]、眼瞎耳聾。誰人到這境界。且道、雲門為復[二]是答他話、為復是与他酬唱。若道答他話、錯認定盤星。若道与他唱和、且得没交渉。既不恁麼、畢竟作麼生。你若見得透、衲僧鼻孔、不消一揑。其或未然、依旧打入鬼窟裏去。

〔評唱〕　若し箇裏に向いて薦得せば、始めて雲門の為人の処を見ん。其れ或は未だ然らずんば、依旧として只だ是れ鹿を指して馬と為し、眼瞎し耳聾すなり。誰人か這の境界に到らん。且く道え、雲門為復是れ他の話に答うるや、為復是れ他に酬唱するや。若し他の話に答うと道わば、定盤星を錯り認む。若し他に唱和すと道わば、且得没交渉。既に恁麼ならず、畢竟作麼生。你若し見得透せば、衲僧の鼻孔、一揑すら消いず。其れ或は未だ然らずんば、依旧として鬼窟裏に打入し去らん。

大凡扶竪宗乗、也須是全身担荷、不惜眉毛、向虎口横身、任他横拖倒拽。若不如此、争能為得人。這僧致箇問端、也不妨嶮峻。若以尋常事看他、只似箇管[一]閑事底僧。若拠[二]衲僧門

大凡そ宗乗を扶竪せんには、也た須是らく全身もて担荷して、眉毛を惜まず、虎口に身を横たえ、他の横に拖き倒に拽くに任すべし。若し此の如くならずんば、争か能く人の為にし得ん。這の僧箇の問端を致す、也た不妨に嶮峻なり。若し尋常の事を以て他を看ば、只

一　秦の趙高の故事。分別明らかなものを分別しない喩え。　二「為復a、為復b」で、いったいaなのかbなのか。「為是a、為是b」「為当a、為当b」とも。

下、去命脈裏覰時、不妨有妙処。且道、樹凋葉落、是什麼人境界。十八問中、此謂之辨主問、亦謂之借事問。雲門不移易一糸毫、只向他道、体露金風。答得甚妙、亦不敢辜負他問頭。蓋為他問処有眼、答処亦端的。

だ箇の閑事に管する底の僧に似ん。若し衲僧の門下に拠って、命脈裏に去いて覰る時は、不妨に妙処有らん。且く道え、「樹凋み葉落つ」とは、是れ什麼人の境界ぞ。十八問の中、此れ之を辨主問と謂い、亦た之を借事問と謂う。雲門一糸毫も移易ず、只だ他に向って道う、「体露金風」と。答え得て甚だ妙なり、亦た敢て他の問頭に辜負かず。蓋し他の問処に眼有るが為に、答処も亦た端的なり。

一 よけいな世話をやく、出しゃばったことをする。 二 禅僧としての本来的な立場。 三 仏法の神髄。 四 汾陽の十八問。第九則・本則の評唱に既出。 五 主人を勘辨する問難。学人が師家の力量を試験するもの。ただし、これは十八問中には見えない。探抜問のことであろう。 六 事物に借りて宗要を問うもの。

古人道、欲得親切、莫将問来問。若是知音底、挙著便知落処。你若向雲門語脈裏討、便錯了也。只是雲門句中、多愛惹人情解。若作情解会、未免喪我児孫。雲門愛恁麼騎賊馬趁

古人道く、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たって問うこと莫れ」と。若是知音の底ならば、挙著せば便ち落処を知らん。你若し雲門の語脈裏に討むれば、便ち錯り了れり。只だ是れ雲門の句中、多く人の情解を惹き愛し。若し情解の会を作さば、未だ我が児孫を

賊。不見僧問、如何是非思量処。[六]門云、識情難測。這僧問、樹凋葉落時如何。門云、体露金風。句中不妨把[七]断要津、[八]不通凡聖。須会他挙一明三、挙三明一。你若去他三句中求、則脳[九]後抜箭。他一句中須具三句、函蓋乾坤句・随波逐浪句・截断衆流句、自然恰好。雲門三句中、且道、用那句接人。試辨看。頌曰、

喪うを免れず。雲門恁麼に賊の馬に騎って賊を趁うことを愛む。見ずや、僧問う、「如何なるか是れ非思量の処」。門云く、「識情もて測り難し」と。這の僧問う、「樹凋み葉落つる時、如何」。門云く、「体露金風」と。句中不妨に要津を把断して、凡聖を通ぜず。須らく他の一を挙すれば三を明らめ、三を挙すれば一を明らむるを会すべし。你若し他の三句の中に求むれば、則ち脳後に箭を抜かん。他の一句の中には須ず三句——函蓋乾坤の句・随波逐浪の句・截断衆流の句——を具して、自然に恰好なり。雲門三句の中、且く道え、那の句を用てか人を接す。試みに辨じ看ん。頌に曰く、

一 首山省念(九二六—九九三)。語は第一四則・頌の評唱に既出。 二 問いが出されたとたんに勘どころが分る。 三 とかく〜しがちだ。 四 法脈が断絶する。 五 漢の李広の故事。相手のものを奪いとって攻撃する。第一五則・本則の評唱に既出。 六 『信心銘』に「非思量処、識情難測」と。 七 急所をつかみとる。「断」は動詞の後につく強めの語助。 八 第六則・本則の評唱に既出。 九 第六則・頌の著語に既出。

【頌】 [一]問既有宗、〔[*二]深辨来風。箭不

【頌】 問に既に宗有り、〔深く来風を辨ず。箭虚しく

虚発**。〕答亦攸同。〔豈有両般。如鐘待扣。功不浪施。〕三句可辨、〔上中下、如今是第幾句。須是向三句外薦取始得。〕一鏃遼空。〔中***。過也。埿著磕著、箭過新羅。〕

大野兮涼飇颯颯、〔普天匝地。還覚骨毛卓竪麼。放行去也。〕長天兮疎雨濛濛。〔風浩浩、水漫漫。頭上漫漫、脚下漫漫。〕君不見、少林久坐未帰客、〔更有不喞嗋漢、帯累殺人。黄河頭上、瀉将過来****。〕静依熊耳一叢叢。〔開眼也著、合眼也著。鬼窟裏作活計。眼睛耳聾。誰到這境界。不免打折伱版歯。〕

は発せず。〕答えも亦た同じき攸。〔豈に両般有らんや。鐘の扣を待つが如し。功浪りには施さず。〕三句辨ずべし、〔上中下、如今是れ第幾句ぞ。須是らく三句の外に向いて薦取して始めて得し。〕一鏃空に遼なり。〔中れり。過ぎたり。埿著磕著すれば、箭新羅を過ぐ。〕

大野は涼飇颯颯たり、〔天に普く地に匝し。還た骨毛卓竪するを覚ゆるや。放行し去れり。〕長天は疎雨濛濛たり。〔風浩浩、水漫漫。頭上漫漫、脚下漫漫。〕君見ずや、少林久坐未帰の客、〔更に不喞嗋漢有りて、人を帯累殺す。黄河の頭上にて瀉し将ち過ぎ来たれ。〕静かに依る熊耳の一叢叢。〔眼を開くも也た著り、眼を合るも也た著る。鬼窟裏に活計を作す。眼睛し耳聾す。誰か這の境界に到らん。不免伱の版歯を打折せん。〕

＊深辨来風　福本に無し。　＊＊発　福本はこの下に「言不虚施」の四字有り。　＊＊＊中過也　福本に無し。　＊＊＊＊瀉将過来　福本は「濁流」。

一 問い手も答え手も、問答の急所をおさえている。　二 相手の出かたをよく見抜いている。第四則・

本則の評唱に既出。三 雲門三句。四 主体的に打って出る。五 突いたり叩いたりして詮索していたら、もう後の祭りになる。「塹」は築で、突く意。「磕」は打ち合わす。六 さわやかな秋風がさっと吹きわたる。七 天地いっぱい。八 ぞっとして鳥肌が立つ。「寒毛卓竪」(第二則・頌の著語)とも。九 こぬか雨がもうもうと降りこめる。一〇 第二則・頌の著語に既出。一一 達磨のこと。「未帰」は西天に帰らない。一二 さえない男。第一則・本則の著語に既出。一三 黄河の水に流して来い(もう用は無い)。「将過来」は動作の空間的な経過を示す語助。一四 熊耳山。達磨が葬られたとされる所。一五 第一〇則・頌の評唱に既出。一六 ~するほかに手はない。さあ~してやろう。「免不得」とも。一七 前歯。「板歯」とも。達磨は異教徒に前歯を折られたという。

〔評唱〕古人道、承言須会宗、勿自立規矩。古人言不虚設。所以道、大凡問箇事、也須識些子好悪。若不識尊卑去就、不識浄触、信口乱道、有什麼利済。凡出言吐気、須是如鉗如鋏、有鉤有鑠。須是相続不断始得。這僧問処有宗旨、雲門答処亦然。雲門尋常以三句接人。此是極則也。雪竇頌這公案、与頌大龍公案相類。三句可辨、一句中具三句。若辨得、則

〔評唱〕古人道わく、「言を承けては須らく宗を会すべし、自ら規矩を立つること勿れ」と。古人は言虚しくは設けず。所以に道う、「大凡そ箇の事を問うには、也た須らく些子の好悪を識るべし。若し尊卑の去就を識らず、浄触を識らずして、口に信せて乱に道わば、什麼の利済か有らん。凡そ言を出し気を吐くには、須是らく鉗の如く鋏の如く、鉤有り鑠有るべし。須是らく相続不断にして始めて得し」と。這の僧の問処に宗旨有り、雲門の答処も亦た然り。雲門尋常三句を以て人を接す。此れは是れ極則なり。雪竇這の公案を頌す

透出三句外。一鏃遼空、鏃乃箭鏃也。射得太遠。須是急著眼看始得。若也見得分明、可以一句之下、開展大千沙界。到此頌了、雪竇有餘才、所以展開頌出道、大野兮涼飈颯颯、長天兮疎雨濛濛。且道、是心是境、是玄是妙。

るは、大龍の公案を頌すると相類す。「三句辨ずべし」とは、一句の中に三句を具す。若し辨得せば則ち三句の外に透出せん。「一鏃空に遼なり」、鏃は乃ち箭なり。射得て太だ遠し。須是らく急と眼を著けて看て始めて得し。若也見得分明ならば、以て一句の下に大千沙界を開展すべし。此に到って頌し了るも、雪竇餘才有り、所以に展開し頌出して道く、「大野は涼飈颯颯たり、長天は疎雨濛濛たり」と。且く道え、是れ心か是れ境か、是れ玄か是れ妙か。

[1]古人道、法法不隠蔵、古今常顕露。他問、樹凋葉落時如何。雲門道、体露金風。雪竇意只作一境。如今眼前、[2]風払払地、不是東南風、便是西北風。直須便恁麼会始得。[3]你若更作禅道会、

古人道く、「法法隠蔵せず、古今常に顕露す」と。他問う、「樹凋み葉落つる時、如何」。雲門道く、「体露金風」と。雪竇の意は只だ一境と作す。如今眼前、風払払地、是れ東南の風にあらずんば、便ち是れ西北の風ならん。直に須らく便ち恁麼に会して始めて得し。

一 石頭希遷(七〇〇—七九〇)『参同契』の句。第二二則・本則の評唱に既出。二 雲居道膺(?—九〇二)の上堂の語(『会元』一三)による。三 清濁。「触浄」とも。四 利生済度。衆生を解脱させる。五 鉗・鍬は、鍛冶用のかなばさみ。六 第八二則に見える。

便没交渉。君不見、少林久坐未帰客、達磨未帰西天時、九年面壁、静悄悄[四]地。且道、是樹凋葉落。且道、是体露金風。若向這裏、尽古今凡聖、乾坤大地、打成一片、方見雲門雪竇的的為人処。静依熊耳一叢叢、熊耳即西京嵩山少林也。前山也千叢万叢、後山也千叢万叢。諸人向什麼[五]処見。還見雪竇為人処麼。也是霊亀曳尾。

你若し更に禅道の会を作さば、便ち没交渉。「君見ずや、少林久坐未帰の客」とは、達磨未だ西天に帰らざる時、九年面壁して、静悄悄地なり。且く道え、是れ「樹凋み葉落つる」か。且く道え、是れ「体露金風」か。若し這裏に向いて、古今の凡聖を尽して、乾坤大地、打成一片にして、方めて雲門と雪竇との的的為人の処を見ん。「静かに依る熊耳の一叢叢」、「熊耳」は即ち西京嵩山の少林なり。前山も也た千叢万叢、後山も也た千叢万叢たり。諸人什麼処に向いてか見ん。還た雪竇の為人の処を見るや。也た是れ霊亀尾を曳く。

一 宏智正覚(一〇九一—一一五七)の語(『宏智広録』六)。あらゆる存在は常に顕在している。 二 風の動くさま。 三 いわゆる「禅」的な枠付けをする。 四 ひっそり静まったさま。 五 第四則・本則の著語、第二四則の垂示に既出。

第二八則　涅槃和尚諸聖

【本則】挙。南泉参百丈涅槃和尚。丈問、従上諸聖、還有不為人説底法麼。〔和尚合知。壁立万仞。還覚歯落麼。〕泉云、有。〔落草了也。孟八郎作什麼。便有恁麼事。〕丈云、作麼生是不為人説底法。〔看他作麼生。看他手忙脚乱。将錯就錯。但試問看。〕泉云、不是心、不是仏、不是物。〔果然納敗闕。果然漏逗不少。〕丈云、説了也。〔莫与他説破。従他錯一平生、不合与他恁麼道。〕泉云、某甲只恁麼、和尚作麼生。〔頼有転身処。与長即長、与短即短。理長則就。〕丈云、我又不是大善知識、争

第二八則　涅槃和尚諸聖

【本則】挙す。南泉、百丈の涅槃和尚に参ず。丈問う、「従上の諸聖、還た人の為に説かざる底の法ありや」。〔和尚合に知るべし。壁立万仞。還た歯の落つることを覚ゆるや。〕泉云く、「有り」。〔落草し了れり。孟八郎にして什麼か作ん。便ち恁麼の事有り。〕丈云く、「作麼生か是れ人の為に説かざる底の法」。〔看よ他作麼生。看よ他手忙しく脚乱るるを。錯を将て錯を就す。但だ試みに問い看よ。〕泉云く、「不是心、不是仏、不是物」。〔果然して敗闕を納る。果然して漏逗少なからず。〕丈云く、「説き了れり」。〔他に説破すること莫れ。従他一平生を錯るも、他に恁麼に道う合からず。〕泉云く、「某甲は只だ恁麼、和尚は作麼生」。〔頼に転身の処有り。長に与すれば即ち長、短に与すれば即ち短。理長ずれば則ち就く。〕丈云く、「我又た是れ大善知識

知有説不説。〔看他手忙脚乱。蔵身[九]露影。去死十分[一〇]****。爛泥裏有刺。恁麼那賺我。〕泉云、某甲不会。〔乍可恁[一一]麼。頼値不会、会即打你頭破。頼値[一二]這漢只恁麼。〕丈云、我太煞為你説[一三]了也。〔雪上加霜。龍頭蛇尾作什麼。〕

にあらず、争か説くと説かざると有るを知らん」。〔看よ他手忙しく脚乱るることを。身を蔵して影を露す。死を去ること十分。爛泥裏に刺有り。恁麼にして那ぞ我を賺す。〕泉云く、「某甲会せず」。〔乍可恁麼なるべし。頼に会せざるに値う、会せば即ち你の頭を打ち破らん。頼に這の漢の只だ恁麼なるに値う。〕丈云く、「我太煞だ你が為に説き了れり」。〔雪上に霜を加う。龍頭蛇尾にして什麼か作せん。〕

＊歯落　蜀本は「歯冷」。　＊＊他説　福本は「注」。　＊＊＊一平生　福本は「一生」。　＊＊＊＊十分　福本は「七分」。

一 南泉普願(七四八―八三四)。馬祖道一(七〇九―七八八)の法嗣。 二 馬祖の法嗣、百丈惟政。常に『涅槃経』を講誦したことから涅槃和尚と称された。ただし、別人とする説もある。 三 (その法は)とても嶮峻で取りつくしまもない。 四 蜀本の「歯冷」の方がよい。ヘマなことを言ってしまい、歯がジーンと冷えるような気まずさ。 五 ちゃらんぽらん。いいかげんなデタラメ野郎。 六 「即心即仏」の教条化を防ぐための反措定の語。『伝灯録』八・南泉章や『無門関』二七は、ここと同じく南泉の語とするが、『伝灯録』七・伏牛章、同二八・南泉語では馬祖の語とする。「物」は衆生のこと。 七 言ってしまった(ではないか)。 八 この方が筋が通っていると見れば、そちらに付く。 九 身をかくしても正体がちらちらほの見える。 一〇 「十分」は一寸。すぐに死ぬことうけあい。 一一 いっそ〱でありたい。「寧可」とも。 一二 わからなくてよかった。わかったらお前の頭は打ち割られるところ

だった。石霜慶諸（八〇七―八八八）の語に「頼汝不会、若会即打破你頭」（『伝灯録』一五）。三 〜
しすぎてしまった。

〔評唱〕到這裏、也不消即心不即心、不消非心不非心。直下従頂至足、眉毛一茎也無、猶較些子。即心非心、寿禅師謂之表詮遮詮。此是涅槃和尚、法正禅師也。昔時在百丈作西堂、開田説大義者。是時南泉已見馬祖了。只是往諸方決択。百丈致此一問、也大難酬。云、従上諸聖、還有不為人説底法麼。若是山僧掩耳而出、看這老漢一場懡儸。若是作家、見他恁麼問便識破得他。南泉只拠他所見、便道有。也是孟八郎。百丈便将錯就錯、随後道、作麼生是不為人説底法。泉云、不是心、不是仏、不是物。這漢貪観天上月、失却掌中珠。丈云、説

〔評唱〕這裏に到って、也た即心・不即心を消いず、非心・不非心を消いず。直下に頂より足に至るまで、眉毛一茎也無きも、猶お些子く較えり。即心・非心、寿禅師之を表詮・遮詮と謂う。此れは是れ涅槃和尚は法正禅師なり。昔時百丈に在って西堂と作り、田を開いて大義を説く者なり。是の時、南泉已に馬祖に見え了る。只だ是れ諸方に往きて決択す。百丈、此の一問を致す、也た大いに酬い難し。云く、「従上の諸聖、還た人の為に説かざる底の法有りや」と。若是山僧ならば、耳を掩いて出でて、這の老漢の一場の懡儸を看ん。若是作家ならば、他の恁麼に問うを見て、便ち他を識破得せん。南泉は只だ他の所見に拠って、便ち「有り」と道う。也た是れ孟八郎なり。百丈は便ち錯を将て錯を就し、随後に道く、「作麼生か是れ人の為に説かざる底の法」。泉云く、「不是心、不是仏、不是

了也。可惜許。与他注破。[6]当時但劈[7]脊便棒、教他知痛痒。

物」と。這の漢、天上の月を貪り観て、掌中の珠を失却えり。丈云く、「説き了れり」と。可惜許。他の与に注破す。当時但だ劈脊に便ち棒して、他をして痛痒を知らしむるのみなりしに。

一 永明延寿（九〇四—九七五）。『宗鏡録』を著す。「表詮」は肯定的な表現、「遮詮」は否定を用いた表現をいう。 二 当山の前住職を東堂と呼ぶのに対し、他山の前住職であった者が当山に現在居住しているときの尊称。 三 疑いを決し、理を明らかにする。 四 第一則・本則の著語に既出。 五 見ぬく。「得」は獲得を示す語助。 六 とことん説明し尽す。 七 ただ～しさえすればよかったのだ。

雖然如是、你且道、什麼処是説処。拠南泉見処、不是心、不是仏、不是物、不曾説著。且問你諸人、因什麼却道、説了也。他語下又無蹤迹。若道他不説、百丈為什麼却恁麼道。南泉是変通底人、便随後一拶云、某甲只恁麼、和尚又作麼生。若是別人、未免分疎不下。争奈百丈是作家、答処不妨奇特。便道、我又不是大善知

是の如くなりと雖然も、你且く道え、什麼の処か是れ説ける処。南泉の見処に拠らば、「不是心、不是仏、不是物」とは、曾て説著かず。且く你諸人に問う、什麼に因ってか却って道う、「説き了れり」と。他の語下に又た蹤迹無し。若し他説かずと道わば、百丈為什麼にか却って恁麼に道う。南泉は是れ変通底の人なれば、便ち随後に一拶して云く、「某甲は只だ恁麼、和尚又た作麼生」と。若是別人ならば、未だ免れず分疎不下なることを。争奈せん百丈は是れ作家なれば、答

識、争知有説不説。南泉便道箇不会、是渠果会来道不会、莫是真箇不会。百丈云、我太煞為你説了也。且道、什麼処是説処。若是弄泥団漢時、両箇淈淈㴇㴇。若是二倶作家時、如明鏡当台。其実前頭二倶作家、後頭二倶放過。若是具眼漢、分明験取。且道、作麼生験他。看雪竇頌出。云、

【頌】祖仏従来不為人、〔各自守疆界、有条攀条。記得箇元字脚在心、入地獄如箭。〕衲僧今古競頭走。〔踏破草鞋、拗折拄杖、高掛鉢嚢。〕明

処不妨に奇特たり。便ち道う、「我又た是れ大善知識にあらず、争か説くと説かざると有るを知らん」と。南泉便ち箇の「会せず」と道う、是の渠は果して会し来たりて「会せず」と道うや、是れ真箇に会せざることと莫きや。百丈云く、「我太煞だ你が為に説き了れり」と。且く道え、什麼の処か是れ説きし処。若是泥団を弄する漢なる時は、両箇とも淈淈㴇㴇ならん。若是二り倶に作家なる時は、明鏡の台に当るが如し。其の実は前頭は二り倶に作家なるも、後頭は二り倶に放過せり。若是具眼の漢ならば、分明に験取せん。且く道え、作麼生か他を験せん。雪竇の頌出するを看よ。云く、

【頌】祖仏は従来、人の為にせず、〔各自に疆界を守り、条有れば条に攀る。箇の元字脚を記得して心に在かば、地獄に入ること箭の如くならん。〕衲僧は今も古も、競頭に走る。〔草鞋を踏破せば、拄杖を拗折り、

一 臨機応変に対処する。 二 泥団子をこねくりまわす者。詮索好きを罵る語。 三 ぐちゃぐちゃ（泥をこねまわすさま）。

鏡当台列像殊、〔堕也、破也。[五]打破鏡来、与你相見。〕一一面南看北斗。[六]〔還見老僧騎仏殿出山門麼。[七]新羅国裏曾上堂、大唐国裏未打鼓。[八]〕斗柄垂、[九]〔落処也不知。在什麼処。〕無処討、〔瞎。可惜許。椀子落地、[一〇]楪子成七八片。[一二]〕拈得鼻孔失却口。[一一]〔那裏得這消息来。果然恁麼。便打。〕

高く鉢嚢を掛けよ。〕明鏡の台に当って列像殊なり、〔堕ちたり、破れたり。鏡を打破し来たれ、你と与に相見せん。〕一一南に面して北斗を看る。〔還た老僧の仏殿に騎って山門を出づるを見るや。新羅国裏曾て上堂するも、大唐国裏未だ鼓を打たず。〕斗柄垂るるも、〔落処も也た知らず。什麼処にか在る。〕討ぬるに処無し、〔瞎。可惜許。椀子地に落ち、楪子七八片と成る。〕鼻孔を拈得えられ口を失却う。〔那裏よりか這の消息を得来たれる。果然して恁麼。便ち打つ。〕

一　ことさらに人を教導しないのが禅の本領。二　祖仏はそれぞれに独自の世界を保持している（百丈も然り）。三　文字言句にこだわる。四　われ勝ちに「為人」してもらおうと駆け廻る。五　その鏡、落ちた、壊れた。六　「如何是仏法大意」の問いに対する雲門の語。ここは、見当違いの愚かさをいう。但しあとの評唱では勝義に解している。七　雲門の語。仏をも超出した達道者の自在力の顕示。八　時空を超えた阿吽の呼吸がまだ合っておらぬ。第八三則・頌の句。九　北斗七星のひしゃくの柄がお前に向けて語りかけているのに。一〇　碗を落としたら、皿までもばらばらに割れた。選び取ったもの（理念）が次々に瓦解してゆくこと。「心」でも「仏」でも「物」でもない何かを求めてゆくと、その端からワヤになる。一一　鼻をつまみ上げられ、口までうしなった。「鼻」は人の顔を成り立たせる核心、その人の存立基盤に喩える。核心をおさえこまれて、一言も発することができない。第二三

則・頌の著語に既出。三 なんと驚いた話だ！

〔評唱〕釈迦老子出世、四十九年、未曾説一字。始従光耀土、終至跋提河、於是二中間、未嘗説一字、恁麼道、且道、是説是不説。如今満龍宮、盈海蔵、且作麼生是不説。豈不見修山主道、諸仏不出世、四十九年説。達磨不西来、少林有妙訣。又道、諸仏不曾出世、亦無一法与人。但能観衆生心、随機応病、与薬施方、遂有三乗十二分教。其実祖仏、自古至今、不曾為人説。只這不為人、正好参詳。山僧常説、若是添一句、甜蜜蜜地、好好観来、正是毒薬。若是劈脊便棒、驀口便摑、推将出去、方始親切為人。衲僧今古競頭走、到処是也問、不是

〔評唱〕釈迦老子出世して四十九年、未だ曾て一字を説かず。始め光耀土より、終り跋提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ嘗て一字も説かずと、恁麼に道うは、且く道え、是れ説けるか是れ説かざるか。如今龍宮に満ち海蔵に盈つ、且て作麼生か是れ説かざる。豈に見ずや修山主道く、「諸仏出世せず、四十九年説く。達磨西来せず、少林に妙訣有り」と。又た道く、「諸仏曾て出世せず、亦た一法の人に与うる無し。但だ能く衆生の心を観て、機に随い病に応じ、薬を与え方を施し、遂に三乗十二分教有り」と。其の実、祖仏は古より今に至るまで、曾て人の為に説かず。只だ這の、人の為にせざること、正に好し参詳するに。山僧常に説く、「若是一句を添えて、甜蜜蜜地なるも、好好と観来たれば、正に是れ毒薬なり」と。若是劈脊に便ち棒し、驀口に便ち摑って推将出去せば、方始めて

也問、問仏問祖、問向上問向下。雖然如此、若未到這田地、也少不得。

親切の為人ならん。「衲僧は今も古も競頭に走る」とは、到る処に是も也た問い、不是も也た問い、仏を問い、祖を問い、向上を問い、向下を問うなり。此の如くなりと雖然も、若し未だ這の田地に到らずんば、也た少き得ず。

一 釈尊が『華厳経』を説いたとされるところ。二 釈尊の入滅地を流れていた河。三 大乗経典は龍宮や海蔵に蔵されたとされる。四 龍済紹修。「山主」は住持の意。五 汾州無業(七五九―八二〇)の語。『伝灯録』二八に「師曰、諸仏不曾出世、亦無一法与人。但随病施方、遂有十二分教」と。六 ことばが魅惑的なこと。七 口をめがけて、まっこうに。八 (そのように走り廻ら)ないわけにはいかない。「免不得」ともいう。

如明鏡当台列像殊、只消一句、可辨明白。古人道、万象及森羅、一法之所印。又道、森羅及万象、総在箇中円。神秀大師云、身是菩提樹、心如明鏡台。時時勤払拭、勿使惹塵埃。大満云、他只在門外。雪竇恁麼道、且道、在門内、在門外。你等諸人、

「明鏡の台に当って列像殊なる」が如きは、只だ一句を消うるのみにて、明白を辨ずべし。古人道く、「万象及び森羅は、一法の所印なり」と。又た道く、「森羅及び万象は総て箇中に在って円なり」と。神秀大師云く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡台の如し。時に勤めて払拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ」と。大満云く、「他は只だ門外に在り」と。雪竇恁麼に道い

各有一面古鏡、森羅万象、長短方円、一一於中顕現。你若去長短処会、卒摸索不著。所以雪竇道、明鏡当台列像殊。却須是一一面南看北斗。既是面南、為什麼却看北斗。若恁麼会得、方見百丈・南泉相見処。此両句頌百丈挨拶処。丈云、我又不是大善知識、争知有説不説。雪竇到此、頌得落在死水裏。恐人錯会、却自提起云、即今目前斗柄垂、你更去什麼処討。你纔拈得鼻孔失却口、拈得口失却鼻孔了也。

うは、且く道え、門内に在るか、門外に在るか。你等諸人、各一面の古鏡有り、森羅万象、長短方円、一一中に顕現す。你若し長短の処に去きて会せば、卒に摸索不著ならん。所以に雪竇道く、「明鏡の台に当って列像殊なる」と。却って須是らく「一一南に面して北斗を看る」べし。既是に南に面するに、為什麼に却って北斗を看る。若し恁麼に会得せば、方めて百丈と南泉との相見の処を見ん。此の両句は百丈の挨拶の処を頌す。丈云く、「我は又た是れ大善知識にあらず、争か説くと説かざると有るを知らん」と。雪竇此に到って、頌し得て死水裏に落在す。人の錯り会せんことを恐れて、却って自ら提起して云く、「即今目前に斗柄垂る、你更に什麼処に去きてか討ねん」と。你は「鼻孔を拈得えられ口を失却う」や纔や、口を拈得えられ鼻孔を失却い了れり。

一『法句経』に見える。　二 汾陽善昭(九四七―一〇二四)の頌。　三 神秀(?―七〇六)。北宗禅の祖。五祖弘忍(六〇一―六七四)に師事。その偈は、神秀悟道偈として北宗禅の漸漸修学の要旨を示すとさ

れる。 四 五祖弘忍の諡号。

第二九則　大隋劫火洞然

*垂示云、魚行水濁、鳥飛毛落。明辨主賓、洞分緇素。直似当台明鏡、掌内明珠。漢現胡来、声彰色顕。且道、為什麼如此。試挙看。

＊垂示〜　福本はこの垂示の文無し。

一「胡来胡現、漢来漢現」（第一五則・本則の評唱）の略。明鏡は、その前に漢人が立てば漢人を、胡人が立てば胡人を、それぞれ明白に写し分ける。趙州従諗（七七八―八九七）の示衆の語に「如明珠在掌、胡来胡現、漢来漢現」（『伝灯録』一〇）と。

【本則】挙。僧問大隋、劫火洞然、大千俱壊。未審這箇壊不壊。〔這箇是什麼物。這一句、天下衲僧摸索不著。預搔待痒。〕隋云、壊。〔無孔鉄鎚当面擲、没却鼻孔。未開口已前、

第二九則　大隋の劫火洞然

垂示に云く、魚行げば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明らかに主賓を辨じ、洞かに緇素を分つ。直に当台の明鏡、掌内の明珠に似たり。漢現り胡来たり、声に彰れ色に顕る。且く道え、為什麼にか此の如くなる。試みに挙し看ん。

【本則】挙す。僧、大隋に問う、「劫火洞然として、大千俱に壊す。未審、這箇は壊するか壊せざるか」。〔這箇とは是れ什麼物ぞ。這の一句、天下の衲僧摸索不著。預め搔いて痒を待つ。〕隋云く、「壊す」。〔無孔の鉄鎚当面に擲ち、鼻孔を没却す。未だ口を開かざる

勘破了也。」僧云、恁麼則随他去也。〔没量大人、語脈裏転却。果然錯認。*〕隋云、随他去。〔前箭猶軽後箭深。只這箇、多少人摸索不著。水長船高、泥多仏大。若道随他去、在什麼処。若道不随他去、又作麼生。便打。〕

已前に勘破き了せり。」僧云く、「恁麼ならば則ち他に随い去かん」。〔没量の大人、語脈裏に転却せらる。果然して錯って認む。〕隋云く、「他に随い去け」。〔前箭は猶お軽きも後箭は深し。只だ這箇こそは多少の人摸索不著。水長せば船高く、泥多ければ仏大なり。若し「他に随い去け」と道わば、什麼処にか在る。若し「他に随い去かざれ」と道わば、又た作麼生。便ち打つ。〕

＊錯認　福本は「錯認定盤星」。

一 大隋法真(八二四―九一九)。二 不空(七〇五―七七四)訳『仁王護国般若経』護国品第五の偈。「劫火」は世界を破滅させる終末の火災。「洞然」は烈しく燃え盛るさま。「大千」は三千大千世界。三 これ。このもの。大梅法常は「神性」と呼ぶ(『宗鏡録』二三)。四「他」は「這箇」。「也」は決断を示す助詞。五 並はずれた力量のある人物も、ことばにひきずり回されてしまった。六 前の矢傷は浅いが後の矢は命取り。七 水かさが増せば船は高く浮き、使う泥が多ければ大きな仏像ができる。拠り所が高大であれば、寄り掛るものも高大になる。

〔評唱〕大隋法真和尚、承嗣大安禅師。乃東川塩亭県人。参見六十餘員

〔評唱〕大隋の法真和尚は、大安禅師を承嗣ぐ。乃ち東川塩亭県の人なり。六十餘員の善知識に参見す。昔

善知識。昔時在潙山[三]会裏作火頭。[四]一日潙山問云、子在此数年、亦不解致箇問来看如何。隋云、令某甲問箇什麼即得。潙山云、子便不会、問如何是仏。隋以[五]手掩潙山口。山云、汝已後覓箇掃地人也無。後帰[六]川、先於[七]堋口山路次、煎茶接待往来凡三年、後方出世、開山住大隋。

有僧問、劫火洞然、大千俱壊。未審這箇壊不壊。這僧只拠[一]教意来問。[二]教中云、[三]成住壊空、[四]三災劫起、壊至[五]三禅天。這僧元来不知話頭落処。且道、這箇是什麼。人多作情解道、這

時、潙山の会裏に在って火頭と作る。一日、潙山問うて云く、「子此に在ること数年なるに、亦た箇の問を致し来たりて如何なるかと看ることを解せず」。隋云く、「某甲をして箇の什麼を問わしむれば即ち得きや」。潙山云く、「子便ち会せずんば、『如何なるか是れ仏』と問え」と。隋、手を以て潙山の口を掩う。山云く、「汝已後箇の掃地人を覓むるや」。後、川に帰って、先に堋口山の路次に於て、煎茶して往来するものを接待すること凡そ三年、後に方めて出世し、山を開いて大隋に住す。

僧有って問う、「劫火洞然として、大千俱に壊す。未審、這箇は壊するか壊せざるか」と。這の僧は只だ教意に拠り来たって問う。教中に云く、「成住壊空、三災劫起こり、壊して三禅天に至る」と。這の僧は元来話頭の落処を知らず。且く道え、「這箇」とは是れ

一 長慶大安(七九三—八八三)。 二 四川省中部。 三 潙山霊祐(七七一—八五三)。 四 炊事係。 五 一切の価値観念を払い去った人。 六 四川のこと。 七 四川省西部。

箇是衆生本性。隋云、壊。僧云、恁麼則随他去也。隋云、随他去。只這箇、多少人情解、摸索不著。若道随他去、在什麼処。若道不随他去、又作麼生。不見道、欲得親切、莫将問来問。

一 教学理論。 二『倶舎論』世間品に見える。 三 生成・存続・破壊・空無という、世界の生滅変化のサイクル。 四 仏教宇宙観で、周期的に起こるとされる宇宙的規模の災害。火災・水災・風災。 五 欲・色・無色の三界のうち、色界の四禅天(四つの段階的境地)の第三。 六 首山省念(九二六—九九三)の語。「欲得」は、欲する。第一四則・頌の評唱に既出。

後有僧問修山主、劫火洞然、大千倶壊。未審這箇壊不壊。山主云、不壊。僧云、為什麼不壊。主云、為同於大千。壊也碍塞殺人、不壊也碍塞殺人。

什麼ぞ。人多く情解を作して道う、「這箇は是れ衆生の本性なり」と。隋云く、「壊す」。僧云く、「恁麼ならば則ち他に随い去かん」。隋云く、「他に随い去け」と。只だ這箇こそは、多少の人情解して、摸索不著なり。若し「他に随い去け」と道わば、什麼処にか在る。若し「他に随い去かざれ」と道わば、又た作麼生。道うことを見ずや、「親切ならんと欲得せば、問を将ち来たって問うこと莫れ」と。

後に僧有り修山主に問う、「劫火洞然として、大千倶に壊す。未審、這箇は壊するか壊せざるか」。山主云く、「壊せず」。僧云く、「為什麼にか壊せざる」。主云く、「大千に同じきが為なり」と。「壊する」も也た人を碍塞殺し、「壊せざる」も也た人を碍塞殺す。

一 龍済紹修。二「碍塞」は、窒息させる。「殺」は、強意の助詞。第一九則・本則の評唱に既出。

其僧既不会大隋説話。是他也不妨以此事為念、却持此問、直往舒州投子山。投子問、近離甚処。僧云、西蜀大隋。投云、大隋有何言句。僧遂挙前話。投子焚香礼拝云、西蜀有古仏出世、汝且速回。其僧復回至大隋。隋已遷化。這僧一場懡儸。

其の僧既に大隋の説話を会せず。是れ他不妨に也た此の事を以て念と為し、却に此の問を持して、直に舒州の投子山に往く。投子問う、「近ごろ甚処を離れしや」。僧云く、「西蜀の大隋なり」。投云く、「大隋に何の言句か有りし」。僧遂に前話を挙す。投子、香を焚き礼拝して云く、「西蜀に古仏の出世する有り、汝且く速かに回れ」と。其の僧復た回りて大隋に至る。隋已に遷化す。這の僧一場の懡儸。

一 投子大同（八一九—九一四）。二 今の四川省。三 高僧が世に現れた。四 恥かき。第一則・本則の著語に既出。

後有唐僧景遵。題大隋云、了然無別法、誰道印南能。一句随他語、千山走衲僧。蛩寒鳴砌葉、鬼夜礼龕灯。吟罷孤窓外、徘徊恨不勝。所以雪竇後面引此両句頌出。如今也不得作壊会、也不得作不壊会。畢竟作麼生会。

後に唐の僧景遵というもの有り。大隋に題して云く、「了然として別法無し、誰か道う南能を印すと。一句『他に随う』の語、千山に衲僧を走らしむ。蛩は寒く砌葉に鳴き、鬼は夜に龕灯を礼す。吟じ罷む孤窓の外、徘徊して恨勝えず」と。所以に雪竇は後面に此の両句を引いて頌出す。如今也た「壊す」の会も作し得ず、

也た「壊せず」の会も作し得ず。畢竟作麽生か会せん。
急と眼を著けて看よ。

急著眼看。

＊鬼夜　福本は「夜静」。　＊＊外　福本は「月」。

一 五代後唐の詩僧。 二 大隋の塔を拝して詠んだ詩。 三 南宗禅の祖、六祖慧能（六三八―七一三）。
四 塔前のともしび。

【頌】 劫火光中に問端を立つ、〔什麽と道うぞ。已に是れ錯り了れり。〕 衲僧猶お両重の関に滞る。〔此の人を坐断するも如何ぞ救い得ん。〕 百匝千重なるも、也た脚頭脚底有り。〕 憐ずべし一句他に随うの語、〔天下の衲僧這般る計較を作す。〕 千句万句も也た消得いず。〔他の脚跟を截断するに什麽の難き処か有らん。〕 万里区区として独り往還す。〔業識茫茫。蹉過うも也た知かず。自是より他草鞋を踏破するのみ。〕

【頌】 劫火光中立問端、〔道什麽。已是錯了也。〕 衲僧猶滞両重関。〔坐断此人、如何救得。〕 百匝千重、也有脚頭脚底。〕 可憐一句随他語、〔天下衲僧作這般計較。〕 千句万句、也不消得。〔有什麽難截断他脚跟処。〕 万里区区独往還。〔業識茫茫。蹉過也不知。自是他踏破草鞋。〕

一 僧の質問をほめる。「問端」は、質問のテーマ。 二 劫火光中に問端を立てる衲僧すら、まだ「壊」と「不壊」との両重の関にひっかかっている。 三 「関」に百重千重にとり巻かれているが、まだ行脚の脚はある。 四 あっぱれ、みごと。 五 必要としない。 六 僧が「随他」の一句を担って歩き回ったこと。「区区」は、きまじめに、せっせと。 七 「業識」は宿業としての妄心。「茫茫」は

無限大の広がり。

〔評唱〕雪竇当機頌出、句裏有出身処[一]。劫火光中立問端、衲僧猶滞両重関。這僧問処、先懐壊与不壊、是両重関。若是得底人[二]、道壊也有出身処、道不壊也有出身処。可憐一句随他語、万里区区独往還。頌這僧持此問投子、又復回大隋。可謂万里区区也。

〔評唱〕雪竇は当機に頌出し、句裏に出身の処有り。「劫火光中に問端を立つ、衲僧猶お両重の関に滞る」とは、這の僧の問処、先ず壊すと壊せずとを懐く、是れ両重の関なり。若し是得底人ならば、「壊す」と道うも也た出身の処有り、「壊せず」と道うも也た出身の処有り。「憐ずべし一句他に随うの語、万里区区として独り往還す」とは、這の僧此れを持して投子に問い、又復大隋に回りしことを頌す。謂うべし「万里区区」たりと。

一　自由自在の境地。第八則・本則の評唱に既出。　二　第二一則・本則の評唱に既出。

第三〇則　趙州大蘿蔔

【本則】挙。僧問趙州、承聞、和尚親見南泉、是否。〔千聞不如一見。拶。眉分八字。〕州云、鎮州出大蘿蔔頭。〔撐天拄地。斬釘截鉄。箭過新羅。脳後見腮、莫与往来。〕

一 趙州従諗(七七八―八九七)。南泉の法嗣。二 南泉普願(七四八―八三四)。三 ガツン(とくるぞ)。擬態語。四 (尭のような)八の字眉。ただ者ではない。五 趙州の自己紹介。「鎮州は大大根の産地だでのう」という語気。鎮州は、河北省西部の正定県のあたり。六 第二五則・本則の著語に既出。

【評唱】這僧也是箇久参底、問中不妨有眼。争奈趙州是作家、便答他道、鎮州出大蘿蔔頭。可謂無味之談、塞断人口。這老漢大似箇白拈賊相似。你纔開口、便換却你眼睛。若是特達英霊底漢、直下向撃石火裏、閃電光

第三〇則　趙州の大蘿蔔

【本則】挙す。僧、趙州に問う、「承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや」。〔千聞は一見に如かず。拶。眉八字に分る。〕州云く、「鎮州に大蘿蔔頭を出だす」。〔天を撐え地を拄う。釘を斬り鉄を截る。箭新羅を過ぐ。脳後に腮を見れば、与に往来すること莫れ。〕

【評唱】這の僧也た是れ箇の久参底、問中不妨に眼有り。争奈せん趙州は是れ作家、便ち他に答えて道く、「鎮州に大蘿蔔頭を出だす」と。「無味の談、人の口を塞断ぐ」と謂うべし。這の老漢大いに箇の白拈賊の似くに相似たり。你、口を開くや纔や便ち你が眼睛を換却す。若是特達英霊底漢ならば、直下に撃石火裏、

中、纔聞挙著、剔起便行。苟或佇思停機、不免喪身失命。

閃電光中に向いて、挙著するを聞くや纔や剔起して便ち行かん。苟或佇思停機せば、喪身失命を免れず。

一 第一七則・本則の評唱に既出。 二 追剗、ひったくり。機知の霊妙さの喩え。 三 地を蹴って足を踏みだす。

江西澄散聖、判謂之東問西答、喚作不答話、不上他圏繢。若恁麽会争得。遠録公云、此是傍瞥語。収在九帯中。若恁麽会、夢也未夢見在。更帯累趙州去。有者道、鎮州従来出大蘿蔔頭、天下人皆知。趙州従来参見南泉、天下人皆知。這僧却更問道、承聞和尚親見南泉、是否。所以州向他道、鎮州出大蘿蔔頭。且得没交渉。都不恁麽会、畢竟作麽生会。他家自有通霄路。

江西の澄散聖、判じて之を「東問西答」と謂い、喚んで「答話せず、他の圏繢に上らず」と作す。若し恁麽に会せば争か得ん。遠録公云く、「此れは是れ傍瞥の語」と。「九帯」の中に収在めり。若し恁麽に会せば、夢にも也た未だ夢見ざる在。更に趙州を帯累し去る。有る者は道う、「鎮州は従来大蘿蔔頭を出だすこと、天下の人皆な知る。趙州の従来南泉に参見せしこと、天下の人皆な知る。這の僧却って更に問道う、『承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや』と。所以に州は他に向って道う、『鎮州に大蘿蔔頭を出だす』と」と。且得没交渉。都て恁麽に会せずんば、畢竟作麽生か会せん。他家自ら通霄の路有り。

一 㴲潭霊澄。「散聖」は、散誕(枠にはまらぬ)聖者の意。 二 老獪な応対。 三 浮山法遠(九九一―一

〇六七)。四 そばからちらと見ただけで分かったつもりのことば。五 法遠の著に『仏禅宗教義九帯集』(『禅海十珍』所収)があるが、そこに該当する語は見えない。六 趙州を指す。七 天(悟り)に通ずる道。

不見僧問[一]九峰、承聞、和尚親見延[二]寿来、是否。峰云、山前麦熟也未。正対得趙州答此僧話。渾似両箇無孔鉄鎚。趙州老漢、是箇無事底人、你軽軽問著、便換却你眼睛。若是知有底人、細嚼来嚥。若是不知有底人、一似渾崙呑箇棗。

見ずや、僧、九峰に問う、「承り聞く、和尚親しく延寿に見え来たると、是なりや」。峰云く、「山前に麦熟すや」と。正に趙州の此の僧に答えし話に対得る。渾く両箇の無孔の鉄鎚に似たり。趙州老漢は是れ箇の無事底の人、你軽軽しく問著わば、便ち你が眼睛を換却す。若是有を知る底の人ならば、細嚼み来たりて嚥。若是有を知らざる底の人ならば、一に渾崙に箇の棗を呑むに似ん。

一 九峰道詮(九三〇―九八五)。延寿慧輪の法嗣。二 延寿慧輪。

【頌】鎮州出大蘿蔔、〔天下人知。切忌道著。一回挙著一回新。〕天下衲僧[一]取則。〔争奈不恁麼。誰用這閑言長語。〕只知[二]自古自今、〔[三]半開半合。

【頌】鎮州に大蘿蔔を出だし、〔天下の人知る。切に忌む道著ることを。一回挙著すれば一回新たなり。〕天下の衲僧則を取る。〔争奈せん恁麼ならざることを。誰か這の閑言長語を用いん。〕只だ自古自今を知るの

如麻似粟。自古也不恁麼、如今也不恁麼。〕争辨鵠白烏黒。〔[四]全機穎脱。[五]長者自長、短者自短。識得者貴。也不消得辨。〕賊、賊、〔咄。[六]更不是別。[七]自是担枷過状。〕衲僧鼻孔曾拈得。〔[八]穿過了也。裂転。〕

一 手本とする。二 古今を通じて変わらぬもの。三 どっちつかず、中途半端。第一八則・本則の著語に既出。四 「穎脱」は、錐の先がふくろから突き出る。はたらきがまるまる現れる。五 『雲門広録』中に「長者天然長、短者天然短」。つまり『法華経』方便品の「是法住法位」の意。六 何の格別なこともない。七 趙州が僧の鼻をねじあげた。八 鼻づらに縄を通した。ねじりまわしてやれ。「裂」は捩に通ずる。

【評唱】　鎮州出大蘿蔔。你若取他為極則、早是錯了也。古人把手上高山、未免傍観者哂。人皆知道這箇是極則語、却畢竟不知極則処。所以雪竇道、天下納僧取則。只知自古自今、争辨

みならば、〔半開半合。麻の如く粟の似し。自古より也た恁麼ならず、如今も也た恁麼ならず。〕争か辨ぜん鵠は白く烏は黒きことを。〔全機穎脱す。長者は自ら長、短者は自ら短。識得する者は貴し。也た辨ずることを消得いず。〕賊、賊、〔咄。更に是れ別ならず。自是より枷を担て状を過す。〕衲僧の鼻孔曾て拈得す。〔穿過し了れり。裂転。〕

【評唱】「鎮州に大蘿蔔を出だす」。你若し他を取って極則と為さば、早是に錯り了れり。古人手を把って高山に上すも、未だ免れず傍観の者に哂わるるを。人皆な這箇は是れ極則の語たるを知道るも、却って畢竟に極則の処を知らず。所以に雪竇道く、「天下の衲僧則

鵠白烏黒。雖知今人也恁麼答、古人也恁麼答、何曾分得緇素来。雪竇道、也須是去他石火電光中、辨其鵠白烏黒始得。公案到此頌了也。雪竇自出意、向活潑潑処、更向你道、賊、賊、衲僧鼻孔曾拈得。三世諸仏也是賊、歴代祖師也是賊。善能作賊、換人眼睛、不犯手脚、独許趙州。且道、什麼処是趙州善做賊処。鎮州出大蘿蔔頭。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第三

を取る。只だ自古自今を知るのみならば、争か辨ぜん鵠は白く烏は黒きことを」と。今人も也た恁麼に答え、古人も也た恁麼に答うることを知ると雖も、何ぞ曾て緇素を分ち得来たらん。雪竇道く、「也た須是らく他の石火電光の中に去いて、其の鵠は白く烏は黒きことを辨じて始めて得し」と。公案此に到って頌し了れり。雪竇自ら意を出だして、活潑潑の処に向いて更に你に向って道う、「賊、賊、衲僧の鼻孔曾て拈得す」と。三世の諸仏も也た是れ賊、歴代の祖師も也た是れ賊。善能く賊と作って、人の眼睛を換うるに手脚を犯さざるもののみ、独り趙州を許む。且く道え、什麼の処か是れ趙州善く賊と做る処。鎮州に大蘿蔔頭を出だす。

仏果圜悟禅師碧巌録　巻第三

碧巌録（上）〔全3冊〕

1992年6月16日　第1刷発行
2000年1月25日　第7刷発行

訳注者　入矢義高　溝口雄三
末木文美士　伊藤文生

発行者　大塚信一

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・理想社　カバー・精興社　製本・中永製本

ISBN4-00-333111-7　　Printed in Japan